
the Zodiac Brave Story-FINAL FANTASY TACTICS-

湿婆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Zodiac Brave Story—FINAL
FANTASY TACTICS—

【Nコード】

N6049H

【作者名】

湿婆

【あらすじ】

はるか昔、大国イヴァリースを二分した「獅子戦争」。その歴史に、二人の若き騎士が登場する。ひとりの名はディリータ・ハイラル。のちに「英雄王」と呼ばれる平民階級出身の若者である。もうひとりの名はラムザ・ベオルブ。武門の棟梁・ベオルブ家の一族だというが、彼に関する記録は今やほとんど残されていない。ディリータは獅子戦争を終結させ、イヴァリースに平和をもたらした英雄として今に語り継がれている。しかし、グレバドス教会によって近

年公開されたある極秘文書の記述は、そうした従来の畏国史観を根底から覆すものであった――

『デュライ白書』を紐解くにあたって(前書き)

本作品は、SQUARE(現SQUARE ENIX)社から1997年に発売されたプレイステーション用ソフト『FINAL FANTASY TACTICS』のストーリーを基に、著者が独自の解釈を加えて執筆した二次創作です。

作品中には、公式設定にはないキャラクターやストーリー展開が多数含まれております。これらは全て、著者の勝手な想像によって描かれたものであり、ゲーム内容の解釈を歪めることを意図したものではありません。

また、連載を続けるにあたって、ストーリー構成上やむなく投稿済みの作品に加筆・修正を加える場合がありますので、ご了承ください。

拙い文章ですが、ゲームをプレイしたことのある人もない人も、ともに楽しんでいただけるよう、最大限の努力をしていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

『デュライ白書』を紐解くにあたって

イヴァリースには現在に至っても数多の神話や伝承が存在するが、中でも英雄王ディリータ・ハイラルに関する一連の記述に関しては、私の最も興味を抱くところである。彼の輝かしい業績の数々は、自叙伝『ハイラル公記』に詳しいが、その記述は彼が英雄王となったのちの記録が主であり、平民階級出身の彼が英雄王と呼ばれるようになるまでの軌跡に関しては、彼の死後に多くの脚色がなされており、『英雄王の生涯』といったほとんど神話的なものを始め、その多くが信憑性に乏しいものであった。

しかし、五年前、グレバドス教会が公開したある文書の登場によって、そうした状況は一変した。長らく畏国政府最重要機密文書としてオーボンヌ修道院の地下書庫に眠っていた『デュライ白書』である。私はこの文書の著者であるオーラン・デュライの子孫として幸運にも最初にこの文書に触れる機会を得た。私は五年の歳月をかけてこれを精読し、考察を重ね、その英雄王に関する記述が、獅子戦争の史実と照らし合わせてもなんら矛盾しないことを確認した。もともと、グレバドス教会が四百年の長きにわたってこの文書を隠蔽し続けてきたという事実からも、その真实性と政治的・教義的危険性は明白であるが。

あらためて、火刑の憂き目に遭いながらも、純白の真実を後世に伝えんとした我が祖、オーラン・デュライに敬意を表すとともに、全イヴァリース国民が、国史に重要な足跡を残した真の英雄を見極められんことを切に願ってやまない。

——畏国暦一四二五年金牛月五日 アラズラム・D・
J・デュライ記す

『デュライ白書』を紐解くにあたって（後書き）

作品に関するご意見・ご感想をお待ちしております。また、誤字脱字等ありましたら、ご指摘ねがいます。

序章

——我ら罪深きイヴァリースの子らが、神々の御力により救われんことを——

オーボンヌの古びた寺院の屋根には、折から滝のような雨がざあざあと叩きつけていた。

ここ三日ほど、際限なく降り続いている大雨である。南方の土地ならではの長い雨季ではあるが、続けて三日も陽の目を見ないというのは、陸央に比べて大分乾燥した気候帯に位置するイヴァリース半島では珍しいことであった。

ラムザ・ベオルブは、廊下の隅の柱に寄りかかって、その雨音にぼうつと聞き入っていた。

叩きつける風雨は、分厚い石壁越しにくぐもって聴こえる。

途切れることのないその音は、何故か彼に故郷のライナス河の流れを思い起こさせていた。彼岸が霞んで見えないほどの大河は、さながら海のように、その清く涼やかな浅瀬の流れのなかで、彼はよく親友のディリータ・ハイラルと泳ぎを競いあったものだった。

そして岸边には、その光景を微笑ましげに見守る父の姿があった。父は野駆けの装いに身を包んではいるが、その腰には、父がかつて「ガリオンヌの白獅子」の異名で畏れられ、金色の鎧兜こんじきを身につけていた頃と同じように、ベオルブ家秘伝の宝剣レオハルトを提げていた。

ラムザは、ふと、今は自分の腰に収まっているレオハルトに目をやった。刀身は北天騎士団のそのような、扱いやすい短いものではなく、彼の身の丈七分はゆうにあらうかと思われる大剣であった。

本来なら背に挿してもよさそうなものだが、彼は父がそうしていたように、この長物を腰に提げていた。

「ラムザ……とかいったな」

言われて彼は、はっとわれに返った。見ると、ルザリア聖近衛騎士団の女騎士、アグリアス・オークスであった。軽装の鎧に身を包み、聖騎士の証である白銀の聖剣を佩いている。その後ろに、彼女の部下とみえる二人の女騎士を連れている。

「なかなかよい得物だな。貴公の家に伝わるものか？」

「……そんなところですよ」

「そうか。そいつを抜くようなことが無ければ良いのだが」

一応の準備は怠らぬようにと、あとはそれだけを告げて、女騎士たちはつかつかと奥の礼拝堂に入ってしまった。

「けっ、ドレスでも着てひらひら踊ってりゃあ、かわいいもあるものを」

女騎士たちが去ると、そういつて不機嫌に罵る声がある。ラムザとは少し離れた石床に一群の男たちが座りこんでいた。彼らは統一感のない革製のキュイラスに身を包み、戦斧だの大鎚だの、各々の身の丈にあった武器を身につけている。

そのなかに、一対の牛角をあしらった革冑をかぶり、任務中であろうとお構いなしに、腰に提げた酒瓶のぶどう酒を豪快に呷っている鬚面がある。北天騎士団の傭兵部隊を率いている騎士で、名をガフガリオンといった。背には、見るからに恐ろしげな血吸の妖剣を挿している。

「面子はあらかた揃ったみてえだな。それじゃあ行くとするか」
本来荒っぽい気質に今日はよけいに機嫌が悪いものだから、いっそう手がつけられない。

神聖な場での狼藉を心中許しがたく思うラムザであったが、雇われの身であることを案じて、黙ってガフガリオンの後に続いた。

石造りの古い礼拝堂は冷え冷えとして薄暗く、天井は暗闇に吞まれていて、その高みを窺い知ることとはできない。正面の壁には、円

形に十二星宮を配した巨大なステンドグラスが嵌め込まれ、グロテスクな色彩を放っている。

中央に置かれた祭壇を前にして、アグリアスと部下の女騎士二人が膝を折って祈りを捧げていた。彼らの前にはさらに二人の人物があった。一人はゆったりとした法衣を身にまとった老司教で、名をシモンといった。もう一人はうら若い少女で、質素な修道衣をまとってはいるものの、それと見てすぐ貴家の息女とわかる気品を漂わせている——現国王、オムドリア三世の異母妹にして養女、オヴェリア・アトカーシャその人であった。ラムザたち傭兵部隊が雇われたのは、ほかならぬこのオヴェリア姫をイグーロスまで無事に送りとどけるためである。

「我らも聖アジョラに祈りを捧げましょう」

ラムザは小声でガフガリオンに言う、祭壇に向かって跪いた。傭兵たちは、ラムザの提案にあからさまに狼狽えた様子であったが、ガフガリオンがちつと舌打ちしながらも渋々膝を折ると、彼の子分たちもぎこちなくそれに倣った。

そもそも、もっぱら己が剣と盾のみを信ずる彼ら傭兵たちにとって、神に祈りを捧げるなどという行為は甚だ馬鹿馬鹿しいことであった。彼らの多くは、主君に見放され、味方に見放され、ついには今まで信じて疑わなかった神にさえも見放された者たちであった。

——そういう者たちの中であって、剣士ラムザはある意味特異な存在であった。彼はまだ若い、荒くれ者のガフガリオンでさえも、この青年には一目置いていた。それはラムザが、ガリオンヌ領の名門、ベオルブ家の出であるからではなかった。傭兵たちは暗黙のうちに、お互いの過去の詮索はしないことにしているし、もとより彼は自分の姓を偽り、そうとは知れないようにしていた。

知略に長け、剣の腕も立つが、それ以上に彼はベオルブ家の末弟であること、殊に天騎士の称号を与えられた亡き父、バルバネス・ベオルブの子であることに誇りを持っていた。今は理由^{わけ}あって姓を変えてこそいるものの、それによって彼の誇りが損なわれるような

ことはなかった。

そのあたりが、誇りも名誉も捨て、明日の生活のためだけに命を
鬻ぐ者たちとは違っていたのかもしれない。

さて、彼らの無言の祈りは尚も続いた。時折、地面の下で雷のゴ
ロゴロと鳴り響く音がする以外は、礼拝堂の中は静寂そのものであ
った。

——が、その時。

荒々しい物音とともに、突如として神聖な沈黙は破られた。

一同、何事かと振り向くと、満身創痍の騎士がひとり、礼拝堂に
転がり込んできた。その者は寺院の外で見張りについていた近衛騎
士団の剣士であった。総身に矢をうけ、血と泥にまみれている。

「敵が……！」

そこまで言って、剣士はこと切れてしまった。開け放たれた両開き
の櫓の扉の外から、嵐の音の他にも、ただならぬ騒音が礼拝堂の内
にも聴こえてくる。

「シモン殿、オヴェリア様をお願いします！」

真っ先に立ち上がったのは、聖騎士アグリマス・オークスら近衛騎
士たちであった。

「アリシア、ラヴィアン、いくぞ！」

言うが早いのか、アグリマスと部下の女騎士二人は礼拝堂を飛び出し
ていった。

「やっと仕事だ。俺たちも女どもに遅れをとるな！」

ガフガリオンら傭兵部隊も我先に発った。

後に残された王女オヴェリアと老司教シモンはというと、暫くは
事態の急変に茫然としていたが、やがて、王女は再び祭壇に向き直
ると、

「皆さまの勝利をお祈りしましょう」

シモンとともに再び祈りはじめるのであった。

寺院を出ると、そこはすでに百近い数の敵兵に囲まれており、そこかしこに、赤地に黒獅子の紋をあしらった軍旗が掲げられている。王家の紋章である双頭の獅子の片方、黒獅子の紋章を染め抜いた、南天騎士団の戦旗である。

「ゴルダーナ公の手のものか……」

アグリアスが黒獅子紋の旗を見て呟いた。

寺院の正門からは、敵が、重装騎兵を先頭に続々と侵入してくる。そのなかで、指揮官らしい騎兵が一步前に進み出て、

「無駄な抵抗はやめて、おとなしく王女の身をこちらに渡せ！」

と、聖堂に向かって大声で呼ばわった。騎士アグリアスがそれに応えて、

「畏れ多くも王室に剣をむけんとする者は、我らルザリア聖近衛騎士団が容赦なく切り捨ててくれる！ 覚悟せよっ！」

と、剣を抜くなり敵に向かって跳びかかっていった。そっちがその気なら、と敵もすかさず弓矢で迎え撃ってくる。

「なんのっ！」

アグリアスは剣で乱箭を払いのけ、敵の面前に躍り出ると、聖騎士剣の一閃を見舞った。剣先から稲妻かと思ふほどの閃光が迸ったかと思うと、派手な音をたてて数名の敵兵が一度に吹き飛ばされた。人間離れしたアグリアスの剣技を目の当たりにして、寄せ手はあからさまに怯んだ。

「女相手にびくついてどうする！ かかれッ、かかれッ！」

指揮官に叱咤されて、さらに数名の騎士がアグリアスにうちかかっていったが、彼女が一度、二度と剣を振るう度に敵は片っ端から打ち払われていく。

敵中に舞を舞うがとき女騎士たちの戦いぶりを見て、騎士ガフガリオンも、

「こっちも金がかかってるんだ！ ものども続け！」

と、戦いの真っ只中に雪崩れ込んでいった。

その傭兵部隊の活躍も、また目覚ましいものであった。ラムザも、ガフガリオンとともに先頭に立って戦った。異様な妖気をまとったガフガリオンの暗黒剣は、剣を受けた敵の生気を次々に奪い取っていく。ラムザのレオハルトも、うなりをあげて敵の鎧兜や盾を打ち碎いていったが、不思議と刃こぼれひとつしなかった。

近衛兵は王室の誇りをかけて、傭兵は報酬をかけて、と各々その目的は違えど、皆懸命に戦ったので、兵力の差はまったく問題にならなかった。鉄壁の守備部隊を前に恐れをなし、逃げ出す敵の数は知れなかった。

雨中、戦闘は小一時間に及んだ。

ラムザは正門の近くで戦っていたが、その最中、どさくさに紛れて寺院に近づこうとしている敵兵を見逃さなかった。

「おのれ、小癪こしゃくな！」

ラムザは一刀のもとに、その敵兵を切り伏せた。

——その時。

開け放たれた寺院の扉の内から、甲高い悲鳴があがった。

「しまった！」

彼は寺院のほうを見た。アグリアスも悲鳴を聞き逃さなかった。

「オヴェリア様！」

二人は一目散に寺院へ向かった。

「手を離しなさい！ 無礼者っ！」

二人が寺院に駆け込むと、礼拝堂の中で王女の声がする。また、

「ええい、おとなしくしないか！」

と、もうひとつ男の声もする。その声を聞いて、ラムザはなにか妙な感覚にとらわれたが、深く考えている暇はなかった。アグリアスとともに礼拝堂に飛び込み、見ると、シモン司教が祭壇の前に力なく倒れ伏している。護衛に残った手数も、ことごとく物言わぬ骸となり果てている。

そして、礼拝堂の奥にある裏口から、金色こんじきの鎧を身につけた騎士

が、ぐったりとした王女を抱きかかえて、今まさに逃げ出さんとしていた。

「待てっ！」

アグリアスが叫ぶと、騎士は、ちらと二人のほうを見た。

――刹那。

稲光に照らされて、男の半顔が浮かび上がった。

「！」

ラムザはその顔を見て驚愕した。

（ディリータ……？）

騎士はすぐに向き直って飛び出していった。

「おのれ……！」

アグリアスは騎士の後を追って裏口から飛び出した。

――が、時すでに遅し。

騎士の姿は、もうそこには無く、ただ、寺院の裏手にある森の中から、チヨコボの蹄の音が遠ざかっていくのが聞こえた。アグリアスは茫然と、その場に立ちつくした。

「オヴェリア様……」

――王女は奪われた。

アグリアスは、すぐさま部下を引き連れて騎士の後を追ったが、とうに彼の行方は知れなかった。

「むう……してやられたか」

寺院を包囲していた敵は、目標を果たしたとみるとすぐに撤退したらしい。戦いを終えた傭兵たちも礼拝堂に戻って来て、状況を察したガフガリオンが唸った。

「悔やんでも悔やみきれん」

シモン司教は後ろ頸を押さえながら言った。彼もまた姫を奪われまいと抗ったというが、例の騎士にしたたか打たれて気絶させられてしまい、今しがた目を覚ましたところであった。

「よもや……こうも易々と姫の御身をさらわれようとは」

「……申し開きの辞もございません」

アグリアスも口惜しげに唇を噛んだ。

「けっ、暢気に祈りなんて捧げてないでさっさと姫君をお連れすりやよかったんだ」

荒々しい北方訛りで、ガフガリオンがふてぶてしく言った。

「貴様……敬尚の志無き者に神の救いは無いと思え！」

その髭面をねめつけて、近衛騎士のラヴィアンが彼の不敬の言を咎めた。

「なら、せいぜい祈り続けるんだな。それで姫君が戻ってくるなら苦労はしねえ」

「貴様……！」

「なんだ？ 小娘風情がこのガフガリオンとやり合おうってか？」
ラヴィアンが剣の柄を握ったのを見て、ガフガリオンは威圧的に前へ進み出る。

「ラヴィアン！ 止さないか！」

アグリアスは、半ば剣を引き抜こうとしていた部下の手を抑えて、一喝した。

「聖地を血で汚す気か。それこそ不敬というものだぞ」

「……くっ」

アグリアスに諫められてラヴィアンが引き下がると、ガフガリオンは不機嫌に鼻を鳴らして、部下の者どもを引き連れて礼拝堂から出て行ってしまった。ラムザも、愛想がつきたとばかりに嘆息し、その後が続いた。

「ああいう連中の言うことをいちいち氣にとめることはない」

去っていくガフガリオンの背を、今にも切りつけてしまいそうな剣幕で睨みつけているアリシアとラヴィアンを見兼ねて、アグリアスが言った。

「あのような不敬の輩の力を借りる必要などありません。我ら近衛騎士団のみでオヴェリア様をお救いいたしましょう！」

アリシアも熱っぽく言う。

「できることならな。しかし、我らは南天騎士団を敵に廻してしまっているのだ。今は味方がひとりでも多いほうがよい。たとえそれが、ならずものの寄せ集めであってもな」

常は冷静に沈んでいるアグリアスの眸にも、今日ばかりは悔しさの色が滲み出ているのを見て、部下の二人もさすがに口を噤んだ。

寺院の外は、風は幾分収まったものの、相も変わらず海をひっくり返したかのようなどしゃ降りであった。傭兵たちは、寺院の裏手に林立する松の大木の枝に雨避けの布を張って、夜営の支度をしていた。

「これからどうするのです」

ラムザは松の木の根本にもたれ掛かって、酒に浸っているガフガリオンに問うた。

「どうもこうもねえ。俺たちの任務は姫君をイグーロスまでお連れすることだった。その姫君が敵に連れ去られたんだ。任務は失敗だ」ガフガリオンはそう言って酒瓶をひといきに飲み干した。報酬が望めないとなると、騎士ガフガリオンの不機嫌はまさに頂点に達していた。

「ここからは契約外だ。あとはお嬢様方の好きにさせればいい」
「……………」

ラムザは王女を連れ去った騎士のことを考えていた。

（あの男は間違いなくデイリータ・ハイラルだった……。しかし、どうして彼が南天騎士団に？）

ラムザは夜営の火を見つめた。

一年前の、あの夜。

しんしんと雪の降るなか、堅牢な石造りの砦は燃え盛る焰に包まれていた。

その光景が、今も彼の瞼の裏に焼き付いて離れない。

あの時、デイリータ・ハイラルはその火中にいた。そして、その場にいた誰もが、デイリータを死んだものとみなしていた。

——ところが、今日。

デイリータ・ハイラルは再び自分の前に姿を現した。かつて兄弟の契りを結んだ友は、あの業火の中を生き抜いていたのである。

「おい、ラムザ。どうかしたか？」

ガフガリオンが酒瓶の入った木箱をまさぐりながら言った。彼の周りには、空になった瓶がいくつも無造作に転がっている。

「あつ、いえ、なんともないです。ただ……」

ラムザは、つと目を横にそらした。

「ただ、オヴェリア様を連れ去った騎士のことを考えていたのです」

「なんだ、お前、心当たりがあるのか？」

「……ええ」

ラムザは口ごもった。

今日再びまみえた友の姿は、亡霊でも幻影でもなく、デイリータ・ハイラルそのものであった。しかしその姿は、ラムザのよく知っているそれでありながら、どこか違っていているような気もした。

彼は過去と決別したのであろうか。

それとも——

やがて夜は更け、酔いつぶれた傭兵たちは思い思いな場所に身を投げ出して、深い寝息を立てていた。

雨足はいったん遠のいたようである。

ラムザはひとり夜宮の残り火の前に屈み込んで、相も変わらず思案に暮れていた。

ラムザはガフガリオンの木箱から傭兵部隊御用達のランベリーを一本取り出すと、それをいっきに飲み干した。

赤葡萄の芳醇な香りが鼻腔を満たし、俄に肢体が火照ってきたが、ラムザは全く酔いを感じないどころか、かえってその頭は冴えるばかりであった。暫くじっとしていたが、様々な考え事が頭のなかを渦巻いて、一向に気分は晴れないので、ラムザはその場にどっと身

を横たえた。

そのまま目を閉じると、森の木々のざわめく音や、蛙の鳴く声などが、いやに大きく聞こえる。

（ディリータ……君は今、どこへ向かっているんだ？）

やがて、疲労の波に吞まれるようにして、ラムザはゆっくりと夢の中へ沈んでいった。

目の前に、一面に広がる草原が、晩秋の夕日に照らされて黄金に輝いている。

ラムザとディリータは、窪地の斜面に腰かけ、例えようもなく美しい夕焼に見とれていた。

「きれいだな。ティータもどこかでこの夕日を見てるのかな……」
ディリータが言った。

ラムザは暫く無言で夕日を眺めていたが、ディリータのほうを向くと、

「……大丈夫だよ、ディリータ。ティータは無事さ」

と、答えた。つかの間、二人の間に沈黙が流れた。やがて、ディリータが、おもむろに口を開いた。

「……違和感を感じていたさ。ずっと昔からな」

そう言って、ディリータは目を閉じた。

「どんなに頑張っても、くつがえせないものがるんだな……」

ラムザは答えに窮した。友の痛みは、誰よりもよく分かっているつもりだった。しかし、いざその苦痛を言葉にされると、現実是否応なく彼の前に立ちふさがるのであった。

「そんなこというなよ。努力すれば……」

そう言って、ラムザは目を逸らした。

——努力？ ディリータは、誰よりも努力してきたじゃないか。それこそ、血のにじむような努力を……。

再び、気まずい沈黙が流れた。

「努力すれば將軍になれる？」

ディリータは自らに問いかけるようにして言った。

「この手でディリータを助けたいのに、何もできやしない。僕は”持たざる者”なんだ……」

「……………」

ラムザには何も言えなかった。父上ならこんな時、何と言われるだろうか。

二人はそうして暫く、沈みゆく夕日を眺めていた。巢に帰る野鳥の群れが、夕日を背に、悠々と飛び去っていく。風は少し冷たく、冬の気配が、すぐそこにまで迫っているのが感じられる。この地方では、そろそろ初雪の降るころである。

「おぼえてるか？ 父上に教わった草笛を」

ディリータは、足元に生えている雑草の葉をひとつむしりとると、それを器用に丸めて、口元に押し当てた。ツー、と小気味よい音をたてて、草笛が鳴った。ラムザもそれに倣って、葉をむしりとると、草笛を作って鳴らした。ラムザの草笛は、少し上ずった音がした。

二人は笑みを交わすと、交互に草笛を吹き鳴らした。

ツー、チー、ツー……

さながら二羽の小鳥が互いを呼び合うように、二人の草笛はいつまでも鳴り止まなかった。

第一章 持たざる者 1. 骸の騎士（前書き）

第一章の主な登場人物

ラムザⅡベオルブ・・・名門ベオルブ家の三男。本作の主人公。

デイリータⅡハイラル・・・ラムザの親友。後の「英雄王」。

バルバネスⅡベオルブ・・・ベオルブ家の棟梁。天騎士の称号を持つ五十年戦争の英雄。

ザルバツグⅡベオルブ・・・ベオルブ家の二男。北天騎士団長。

ダイスダーグⅡベオルブ・・・ベオルブ家の長男。イグーロス執政官。

アルマⅡベオルブ・・・ベオルブ家の長女。ルザリア王立女学院に通う。

ティータⅡハイラル・・・デイリータの妹。アルマの親友。

ウィーグラフⅡフォルズ・・・「骸旅団」の首領。

ミルウーダⅡフォルズ・・・「骸旅団」の一員。ウィーグラフの妹。

ギユスタヴⅡマルゲリフ・・・「骸旅団」の参謀。

アルガスⅡサダルファス・・・ランベリー領出身の見習い騎士。

ウルフ・・・幻の聖竜を探して旅する放浪の騎士。

第一章 持たざる者 1. 骸の騎士

——オーボンヌの襲撃事件より時を遡ること約一年。

畏国歴一〇二〇年双児月四日、父バルバネスが病に倒れたとの知らせを受けて、ラムザ・ベオルブは、サドランダ街道を西へ向かっていた。

ベオルブ家の邸があるイグーロス城下までは、魔法都市ガリランドからチョコボ（チョコボというのは、屈強な足を持つ陸鳥のこと）の足で三日はかかる距離にあったが、ラムザは不眠不休で軍用の黒チョコボを駆り続け、一日にして、すでにマンダリアの丘にさしかかろうとしていた。

マンダリア平原は、ガリオンヌ領の南部に広がる大草原地帯で、街道はマンダリアの丘と呼ばれる小山の頂を通り、麓を流れるライナス河へと続いていた。さらに、大河に架かるカシェ大橋を渡れば、イグーロス城はもうすぐ目の前である。

マンダリアの丘の頂には古い砦の跡があり、その古井戸からは、まだ滾々と清水が湧き出っていて、街道を通る旅人たちの恰好の休憩場所となっていた。もともと、近頃では「骸旅団」をなめる盗賊の輩が国中のいたるところに出没し、暴虐の限りをつくしていたから、行商人などの姿もすっかり見られなくなっていた。

午後の日は、すでに西に傾きつつあった。街道は緩やかな上り坂となつて、頂につづいている。

頂に近づくにつれ、チョコボの歩みが少しずつ遅くなつていった。丸一日走らされていたせいで、持久力に優れた黒チョコボも、さすがに息が上がってきたとみえる。

（これ以上は無理か……）

ラムザは、例の古砦でチョコボに休息をとらせることにした。彼自身も、慣れない遠駆けだったので、だいたい疲労を覚えていた。ラムザは鞍から降り、手綱を引いて歩き出した。

しばらく行くと、砦の外壁が見えてきた。古い石作りの壁は、ところどころ崩れ落ちていて、周囲の岩とさして見分けがつかなくなっていた。

「む……？」

一瞬、ラムザは、その外壁のところで人影が動いたように見えたので、ふと歩みを止めた。

——その時。

ひゅん！

と、一本の矢がラムザのすぐ脇をかすめていった。

「!？」

続けざまに、二本、三本と、矢はうなりをあげて飛んでくる。と、そのうちの一本がチョコボの羽に刺さった。驚いたチョコボは、逃げ出そうとして、どこにそんな力が残されていたのか、とにかくもすごい力でラムザを引っばったので、ラムザは思わず手綱を離してしまった。

「あッ……」

という間に、チョコボは、ふもとの木立のほうへ駆けていってしまった。

なおも飛んでくる矢を避けつつ、ラムザは道端の岩に身を隠した。見ると、抜き身の剣を持った数人の男が出てきて

「北天騎士団か！」

「いや、ひとりきりだったから、ただの旅人かもしれん」

「しかし、あの黒いのは軍隊のやつだぞ」

などと口々に喚きながら、こちらに向かってくる。

「まずいな……」

多勢に無勢である。しかも相手は、かの悪名高き骸旅団かもしれない。隙をみて逃げ出すしかない。

ラムザは剣を抜き、片方の手に石礫いしごりを握った。

「やい、そこにいるのは分かってんだ！ おとなしく出てきやがれっ！」

男が岩を覗き込もうとしたところに、ラムザは

「えいっ！」

と石礫を見舞った。

「ぎゃっ！」

ラムザの石礫は見事に男の顔面をとらえていた。男は、鼻頭をおさえて屈みこんでしまった。相手が、ラムザの意外な反撃に気をとられている隙に、彼は一目散に丘を下っていった。

「あっ、しまった、逃げられたぞ！」と、盗賊どもは逃げるラムザを追ってくる。ラムザも、捕まるまい、と懸命に走った。

しかし、逃げることに夢中になるあまり、彼は足元がおろそかになっていた。次の瞬間、

どすん！

何かに足をとられて、派手にすっ転んでしまった。彼はそのまま、ごろんごろんと転がり落ちていって、木立の木にしたたか頭をぶつけた。

「痛ッ……！」

天が地に地が天に、ラムザの目はぐるぐると回った。彼は頭を左右にふってから、見ると、追っ手がすぐそこにまで迫ってきている。

（これまでか……）

と観念しかけたときだった。先ほど躓いたあたりの草むらから、何かがむくつと起きあがって、追っ手の前に立ちふさがった。なんとそれは、人間の男であった。

「なんだ、貴様は！」

賊が問うと、

「なんだとはなんだ！ 人がいい気持ちで昼寝をしていたというのに！」

みすばらしいなりをした騎士らしき男は、盗賊たちを睨みつけた。

「うるさいっ、俺たちを骸旅団と知ってかつ！」

言うなり、賊の一人が男に切りかかっていった。

「ええい、面倒な奴らだ」

男は賊の剣をひらりとかわし、鞘に収まったままの剣の柄で相手の鳩尾みぞおちをすどん、と打ちつけた。すると、賊の体は糸を切られた操り人形のように、その場に崩れ落ちてしまった。

「ム、こやつできるぞ」

男の手際よさを見て、賊たちは用心して、安易に手を出そうとしなかった。一部始終を見ていたラムザはというと、頼もしい助っ人の登場に心から感謝していた。

（この隙に……）

ラムザはそつと立ち上がろうとした。

——が、その時。

頸すじに何か冷たいものが走るのを感じて、彼は動きを止めた。見ると、彼の頸に剣が宛がわれている。

「動くな」

冷ややかな女の声がして、木の陰から、ひとりの騎士が姿を現した。その後に続いて、数人の弓使いが現れた。

助っ人の方かというと、俄に現れた弓兵に囲まれて、こちらも身動きがとれないでいた。男はぐると周囲を見回して、こちらが不利とみるや、

「あはは……参った。このとおりだ」

と、あっさり剣を投げ捨ててしまった。

囚われの身となった二人は、古砦の柱に縛り付けられていた。

「貴様ら、北天騎士団の斥候かつ！」

大柄な騎士が、二人の捕虜にむかって大声で怒鳴りつけた。他にも数人の、いかにも屈強そうな戦士が、二人を囲んで睨みを利かせている。

「違います！ 私は、父が病に倒れたという知らせをうけて、イグーロスに向かっていたところです。この人は、たまたま、あの場所に居合わせただけの、旅の方です。断じて北天騎士団の斥候などで

はありません!」

ラムザは毅然として言った。

「そうだ! そのとおりだ!」

と、男も同調する。

「何とでも言うがいい。ともかく、ミルウーダが戻るまでは、ここにいてももうからな」

騎士は、フンツと鼻を鳴らすと、仲間を引き連れて行ってしまった。ミルウーダとは、あの若い女騎士のことだろう、とラムザは思った。彼女は、捕虜の尋問を部下の者に任せて、自身は偵察に出ているらしかった。

「やっかいなことになったな……」

独りごちて、男はうなだれた。

「申し訳ありません。私のせいであなを巻き込んでしまつて……」ラムザが詫びると、

「いや、気にすることはないさ」

と、男は苦笑した。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。俺の名はウルフ。よろしくな」

「私はラムザです。こちらこそ、よろしく」

やがて、日が暮れた。

砦の中には、見張り番の骸旅団の賊たちが、焚火を囲んで、各々酒を飲んだり、樂を興じたりして、思い思いにたむろしていた。大方の者が騎士の身なりをしているが、中には長いローブを纏った魔道士らしき者もいる。ただ、全員が一樣に、マントやローブなどに、骸旅団の結束の証である、兜をかぶった髑髏の紋章を縫い付けていた。

「全員落ち武者、か」

盗賊たちの夜宴を遠目に見ながら、ウルフが、ぼそっとつぶやいた。

「え、なんですか?」

「どいつもこいつも落ち武者だって言つたんだ。前の五十年戦争で、

骸騎士団は平民の義勇兵として貴族のお坊ちやま方以上の働きをしたのに、結局畏国は負けちまって、戦争が終わったとなりや、もう用済みだといわんばかりに、ぼいっ、だ。そりやたまったもんじやないだろうさ。お前ら貴族のために死んでいった仲間の命はどうなるんだ、てね」

「……………」

「あんたもどこぞの貴族の御曹司が知らんが、奴らの怒りは本気だ。ただじゃすまないかもな」

ラムザには何も言えなかった。この男が何者なのかは知らないが、おそらく言っていることは正しいのだろうと思った。このままいくと、本当に身包みはがされて、彼らの恨みの剣で八つ裂きにされてしまうかもしれない。

砦の屋根は、とうの昔に焼け落ちてしまったのか、見上げると、雲ひとつ無い満天の星空である。その星のひとつひとつが、ラムザを恨みのこもった目で見下ろしているような気さえた。

——僕はちがう。いや、誇り高きベオルブの家の子は、貴族という身分の安寧の上に胡坐あぐらを掻くようなことは断じてしない。

戦争中、ラムザの父バルバネス・ベオルブは、絶体絶命の窮地に陥っていたところを骸騎士団の義兵に救われたことがあった。その義兵こそが、ラムザの無二の親友である、ディリータ・ハイラルの父、オルネス・ハイラルであった。彼は、撤退するバルバネスの本隊の背後を守る、殿しんがりの役目を自ら買ってでたのである。殿は必死の役目であった。バルバネス配下の将の中にも、この役目を敢えて引き受ける者はなかった。

しかし、オルネスは見事にその役割を果たし、骸騎士団の同志たちと、そろって討ち死にした。バルバネスは、殿部隊の全滅を聞き、陣中であって大いに涙したという。

イグーロス城に無事の凱旋を果たすと、バルバネスは全軍の指揮権を子のザルバッグに委ね、自らは第一線から退いてしまった。

戦争がおおよその終息をみた後、バルバネスは名も無き戦死者た

ちの御霊を弔うために、各地に碑を立て、残された妻子の生活の糧にと、ベオルブ家の財を惜しまずなげうった。譜代の重臣やラムザの兄たちは、さすがにやりすぎではないか、とバルバネスを諫めたが、彼はまったく耳を貸そうとしなかった。

そんなさなか、バルバネスはついにオルネスの子を探し当てた。その子——ディリータとティータの兄妹は、病で早くに母を亡くしており、父も戦死してしまったので、どこにも身寄りが無かった。バルバネスは自らガリオンヌ領内の寂れた農村に赴き、幼いふたりの兄妹に、父オルネスの忠義を説いて聞かせた。

そしてついに、

「この子らはベオルブ家が引き取ることにする」
と言って、イグーロスの邸にハイラル兄妹を連れ帰ってきてしまった。

これを聞いた臣下の者どもは色を失い、長兄ダイスダーグも
「お戯れもほどほどになさってください」
と諫めたが、

「なに、わしが手ずから、この子らを貴族の子にも負けないほど優秀にしてやるから、案ずるな」

そういつて、息子の諫言を笑い飛ばしてしまった。

「父上の器の大きさは測り知れん」

ダイスダーグは驚き呆れて、その後は父の行動に口を出すことはなかった。

バルバネスは、ハイラル兄妹を我が子同然に扱い、彼の実の子らとも分け隔てなく接した。

殊にラムザと妹のアルマは、ハイラル兄妹と歳が近かったこともあり、幼いころから互いに良き遊び相手となっていた。

ラムザとディリータが士官学校に入学できる歳になると、バルバネスは、ディリータを北天騎士団総帥の特別推薦者として、ラムザとともに、畏国屈指の名門校である、ガリランド王立士官学校に入学させた。ここに通う生徒は、名のある貴族や王族の子弟と決まっ

ていたから、平民階級出身であるディリータの入学は、まさに異例中の異例であり、創立二百年を誇るガリランド王立士官学校の歴史を顧みても、前例のないことであった。

「人は身分を持ってこの世に生まれ出るのではない。身分は人間が後から勝手に作り出したものだ。人は身分に縛られているのではなく、自らを身分に縛りつけているのだ」

と、父は言った。ラムザも、身分という垣根を取り払えば、人々はもっと歩み寄れるはずだ、と常々考えるようになっていた。

ラムザは、一刻も早くこの場を抜け出して、父のもとにゆかねば、と気ばかり急って、その夜は一睡もすることができなかった。

夜明けごろ、櫓^{やぐら}にいた見張り番が

「ミルウーダが戻ってきたぞ！」
と呼ばわった。

やがて砦の外から蹄の音が聞こえてきたかと思うと、赤羽のチョコボに跨った女騎士が、数騎の騎兵を引き連れて砦の門から入ってきた。ミルウーダと呼ばれた女騎士は、さっとチョコボから飛び降りると、そのまま石壇のほうへ歩いて行って、その上に立って、ぐるりと周囲を見渡した。骸旅団の者どもは石壇を取り囲むようにして立ち、ミルウーダを見上げた。

「聞け、同志たちよ」

騎士ミルウーダは、声を張り上げるでもなく、よく通る声で言った。

「先刻、敵将ザルバグ・ベオルブ率いる北天騎士団の兵、千あまりは、ライナス河を越え、その後隊を三つに割り、今も旧街道を南下している。ここはもう間もなく、北天騎士団に包囲される」

周囲がにわかになじめいた。ラムザは兄の名を聞き、わずかに希望を取り戻したが、と同時に、むざむざ敵に捕らわれて、ここにこうして縛りつけられている自分を情けなく思った。

（兄上に知れたら、なんと言われるだろう……）

ラムザは不安に駆られたが、どうすることもできなかった。

「皆、この戦を最後と思って、ひとりでも多くの敵を冥土への道連れとしようぞ！」

ミルウーダが剣を掲げると、一同それに習って、喚声をあげた。

やがて朝日が顔を覗かせるころ、マンダリアの砦は、ザルバッグ率いる北天騎士団軍に、すっかり囲まれてしまった。

「よかったな。もしかすると助かるかもしれんぞ」

ウルフが、ラムザに顔を寄せて囁いた。

「ええ……そうなるの良いですね」

「なんだ、お前、うれしくないのか？」

「いえ、そういうわけでは……」

そこへ、女首領ミルウーダが長身の騎士を一人連れてやってきて、

「聞いてのとおり、我らはこれから決死の戦いに臨むこととなった。したがって、捕虜があっても仕方がないから、君たちを釈放することにした。レッド、お二人の縄を解いてあげて」

と言って隣に立っている男に目配せすると、レッドと呼ばれた騎士は前に進み出て、短剣を引き抜き、二人を縛っていた縄を断ち切ってしまった。

「いいのか？　こちらのお坊っちゃんは、見たところ、なかなか賤しからぬ御身分のようだが」

ウルフは思いの外、あっさり解放されてしまったので、拍子抜けし言うのと、ミルウーダはラムザを一瞥して、

「子どもの命まで取ろうとは思わない。あとは君たちに任せる」

それだけ言って、立ち去ろうとした。するとラムザが、

「この手勢で、本当にザルバッグ・ベオルブと戦うおつもりですか？」

と、ミルウーダの背にむけて言った。

「逃げることもできまい」

「全滅しますよ」

「……もとより覚悟の上だ」

「……………」

このミルウーダという女騎士は、ただか盗賊の一頭目で終わる人物ではあるまい、とラムザは思った。今の北天騎士団に、はたしてここまで潔い戦士があるだろうか。

——なんとかして引き留められないものか。

「あまりに無謀です！」

ラムザは意を決して、言った。

「私の兄は、貴女方に反抗させる隙も与えず、あっという間に殲滅してしまうでしょう！」

「……………」

ミルウーダとレッドは同時に歩みを止めて振り返った。ウルフも、思わぬ告白に驚いた様子で、ラムザのほうを向いた。ラムザは、まっすぐにミルウーダの目を見て、

「ですから貴女方は、私の兄、ザルバッグ・ベオルブに、一人残らず殺される、とそう言ったのです」

つかの間の沈黙が流れた。やがてミルウーダが、おもむろに口を開き、

「君は敵将の弟だと言うのか？」

と、聞くと、ラムザは、

「そうです。私の名はラムザ・ベオルブ。ベオルブ家の末弟です」と、はっきり応えた。

「何を証しにそんなことを」

俄には信じられぬ、といった風のミルウーダの表情である。

「信じてくださらないのなら、私を人質に取り、兄のザルバッグに使いをたてて、全軍をライナス河の向こう岸まで退かせなければ、弟の命はないとの旨、お伝えください。さらに使いの者に私の剣を持たせれば、剣にはベオルブ家の紋が打ってありますから、兄も信じてくれるでしょう。兄が軍を退いたのを見届けたら、貴女方は何処へなりとも逃げればよいのです。」

「……………戦わずして逃げろ、と？」

「そういうことです。貴女ほどの人ならば、このままでは犬死になることぐらい、お分かりのはずでしょう」

「どういうつもりだ？」

「私はただ、安易に命を捨てるものではない、と言っているだけです。死んでしまったら、志を遂げることは、永遠に叶いませんから」
「……………」

ミルウーダの目は、尚いっそう疑り深くラムザの真意をえぐり取るようとしているようであった。

——そんなにうまくいくものか？

そうやって身構えてみる一方で、彼女にしてみれば、ラムザの策を用いるより他に、この窮地を脱する方法はなさそうではある。

レッドが顔を寄せてミルウーダに何言か囁き、彼女はその言に耳を傾けながらしばらくの間黙考していたが、やがてひとつ小さく頷くと、

「……わかった。やってみよう」

終にラムザの策を容れた。

ミルウーダは、レッドをザルバッグへの使者とし、レッドはラムザの佩^はいていた剣を受けとると、早速、敵陣に赴いた。

時に、北天騎士団を率いるザルバッグ・ベオルブは、街道に程近い高台の上に陣取って、愛用の黒羽に跨がり、丘上の砦を眺めていた。

折ふし初夏の風は爽やかにマンダリアの野を渡り、丘を三方から囲んでいる北天騎士団の青地に白獅子の戦旗は、青天に揚々とはためいている。

「奴等は降^{くだ}る かな？」

ザルバッグは、彼の横に銜^{くつわ}を並べている老騎士に訊いた。老騎士は、その名をマルコムといい、ザルバッグの右腕、則ち、北天騎士団副団長である。ベオルブ家譜代の忠臣のひとりで、ザルバッグのよき

知恵袋となっている。

「いえ、おそらく、我らに一矢報いんと、決死の覚悟で打って出てくるでしょう」

「そうだろうな」

「しかし將軍。追い詰められた鼠は猫の手をも噛むといえます。ゆめゆめ油断はなりませぬぞ」

「ははは、ぜひとも噛みつかれてみたいものだな」

ザルバッグの蒼眼は、子供のように輝いていた。彼は根っからの武人で、面倒な駆け引きを嫌い、常に命懸けの決戦を望んだ。二十も半ばを過ぎ、その血はいよいよたぎって歴戦の英雄の器にすら収まりきれぬものがある。

「む、”草”が戻ってきたようすな」

マルコムはチョコボの首を巡らすと、此方へ駆けてくる軽装の兵を待ち構えた。

”草”というのは、主に斥候や伝令の任を負う者たちのことで、軍の情報戦の主力である。

草から報告を受けとったマルコムは、戻って来ると、

「將軍。敵方から遣いの者が参ったようすぞ」と、伝えた。

「なんだ、もう降ってしまうのか」

ザルバッグは報告を聞いて、さも面白くないというような顔をしたが、胃を脱いで、黒羽から降りると、

「すぐに連れて来させろ」

と、マルコムに命じた。

まもなく、使者は二名の兵士に引き連れられてきた。使者はザルバッグの前に来ると、その場に拝跪した。

「面を上げろ」

ザルバッグは、彼の足許に跪いている遣いの騎士にむかって言った。「はっ」

応えて、騎士はザルバッグを見上げた。ミルウーダの命を帯びてき

たレッドである。

「ふむ。なかなかいい面構えをしている」

ザルバッグはレッドの人相をじっくりと観察した。

「で、要件はなんだ。手短に言ってみろ」

「つきましては、貴軍にご退去願いたく、まかり越しました次第で
ございます」

「……？」

ザルバッグは、意外な返答に驚いて、マルコムと顔を見合わせた。

「なんだと？ そんな馬鹿げた要求があるか！ 貴様には、三方を
我が軍に囲まれている、あの砦が見えぬのか！」

マルコムが丘上の砦を指して凄んでも、レッドは全く臆する様子も
なく、

「しかと、見えております。私は、なにも、妄言を吐いているので
はありません。ただ、軍をお退き願えないのであれば、弟君のお命
が虚しくなりますが」

「なに？ それはということだ」

ザルバッグが問うと、レッドはこの次第を具つぐみに話した。

レッドが話し終えると、ザルバッグの顔はみるみるうちに色を失
っていき、

「つまり、我が弟は自ら進んで人質になったと？」

「そういうことです。そしてこれは……」

レッドはラムザの剣を取り出し、恭しく捧げ持った。

「弟君が、この剣を將軍にお見せすれば、自身が囚われの身となっ
ていることを信じてくださるであろうと、私に託されたものであり
ます」

ザルバッグは、その剣をレッドから取り上げると、鞘から剣をひき
抜いて見分した。疵ひとつない細身の刀身の付け根に、ベオルブ家
の獅子頭の紋が打ってある。

「むむ……確かにこの剣は、ラムザが士官学校に上がるとき、父バ
ルバネスがルザリアの名匠に鍛えさせたものに相違ない」

ザルバッグは剣を鞘に納めてから、

「マルコム、全軍撤退だ。狼煙^{のろし}をあげよ！」

と直ちに命じた。何事も決断の早い男である。

「將軍、よろしいので？」

「致し方あるまい。撤退といったら撤退だ。ぐずぐずするな」

ザルバッグは黒羽に飛び乗ると、レッドを見下ろして言った。

「使者の方。貴殿の主人に、宜しく申し伝えよ。撤退の儀、しかと承った。我らがライナスを越え次第、しかるべく我が弟、ラムザ・ベオルブの身柄をこちらに引き渡すように、とな」

「はっ、必ず」

「身代金は求めないのか？」

「はい。そのようなものは、もとより我らの目的とするところではありませんので」

「そうか、ならばよい。行け」

レッドはザルバッグにむけて一礼すると、急ぎ砦に引き返していった。

やがて中空高く、白煙が上がった。それと同時に、丘を囲んでいた北天騎士団は、一斉に動き出し、本隊に合流し始めた。

丘上の砦からその様子を見ていた骸旅団の兵たちは、俄に喚声をあげた。

「悔しいですな。あの程度の砦、一刻もかからず捻り潰せるものを」
マルコムが口惜しげに歯噛みすると、

「なに、弟の命には代えられんよ」

ザルバッグは黒羽の首を反し、本隊の先頭に向かって走り去って行った。マルコムは、なお名残惜しげにマンダリアの丘のほうを向いていたが、

「えい、ままよ」と、捨て台詞を吐いて、すぐに主人の後を追った。

かくして、一撃の剣槍を交えることも、一滴の流血を見ることも

なく、北天騎士団の大軍は、古砦に籠る骸旅団の小兵を前に、全軍引き揚げとなった。

「これほどの珍事が、いまだかつてあっただろうか……」

ミルウーダは楼の上に立って、今や完全にライナス河の彼岸に撤退して、蟻の群れのように蠢うごめいている北天騎士団の大軍を眺めていた。そこに、使者として敵地に赴いていた、レッドが戻ってきたとの知らせが入った。兵士たちは、歓声をもって、彼を迎え、その労をねぎらった。

「首尾よく運んだようね」

「ええ。全てはラムザ殿のおかげです」

「まったく。図らずも、敵の斥候かと疑って捕らえた者に命を救われようとは」

ミルウーダとレッドは、笑顔で互いに手を握り交わした。

ミルウーダは、直ちに撤退の触れを出した。ラムザとウルフには、チヨコボがそれぞれ一頭ずつ与えられた。

「君の機転がなければ、今頃我らは、ひとり残らず北天騎士団に討ち取られていただろう。どうか、先日の非礼を赦されたい」

ミルウーダが詫びると、ラムザはとんでもない、とばかりに、

「私は貴女という人物を信じ、命を預けたまです。それに、我が兄の寛大さがなければ、きっと戦になっていたにちがいありません」
あくまで謙遜して言った。

「それはそうかもしれないが、私は、腐れきった貴族ばらの中にも、君のような公平な心を持った君子がまだいるということを知って、素直に嬉しく思っているのだ」

そういって、ミルウーダはラムザとも固く手を握り交わした。

時に、日は西の地平にさしかかり、空を茜に染めていた。

（いつか、貴族も平民もなく、誰もが皆こうして手を取り合える日がくるのだろうか……）

丘を下っていく骸旅団の兵士たちを見送りながら、ラムザは内心そんなことを思っていた。そこに、ウルフがチヨコボを寄せてきて、

「盗賊の頭にしておくのはもったいないお方だよな」

妙に真剣な顔をして言った。

「ええ、私もそう思いました」

「へえ、ベオルブのお坊ちゃんでも、見るべきところはちゃんと見てるんだな。いや、まったく、王都の酒場にあんなきれいな踊り子がいたらなあ」

「……………」

ひとり頷いて納得している様子のウルフを見て、ラムザは呆れて返す言葉も無かった。

二人は丘の頂上で別れた。ウルフはついにその素性を明かすことなく、

「俺は幻の聖竜を探す旅を続けることにする。聖アジヨラのお導きあらば、またどこかで会おうでしょう！」

わけのわからぬことを言って、街道を東に去っていった。

（なんとも不思議な騎士だな……）

その姿を見送ってから、ラムザはチョコボの横頸を叩いて、兄の許に急いだ。

ラムザが北天騎士団の夜営地に着いたところには、辺りはもうどっぷりと夜の闇に浸っていた。ライナス河の畔には、ここかしこに、木の骨組みに皮布を張っただけの、簡単な仮小屋が設われ、羊肉や川魚を焼く煙が、もうもうと立ちこめていた。

ラムザは芳ばしい薫りに、たまらなく 空腹を覚えた。思えば二日前、父急病に倒るの知らせを受けてガリランドを飛び出してきて以来、まともなものを口にしていなかった。

（兄上は、たいそうお怒りのことだろう）

仮小屋の群れの少し奥まったところに、屋根の先端に大将旗を掲げた、一際大きい小屋がある。ラムザが小屋に近づくと、入口を守っていた兵士が、手に持った槍を同時に胸の前に掲げ、敬礼の態を

とった。兵士の一人が、

「將軍が中でお待ちかねであります」

と言ったが、ラムザは頷いただけで何も答えずに、中へ入っていった。

小屋の中では、諸將が円卓を囲んで、少しばかり酒気を帯びた議論を催していた。ザルバッグは、隣席にある老臣マルコムと、なにやら熱心に話しこんでいたが、ラムザが入ってきたのに気づくと、

「おお、弟よ無事に戻ったか！」

といって立ち上がった。諸將も、

「ラムザさまだ！」

「ラムザさまが戻られたぞ！」

口々に言って、これを迎えた。ラムザは少し面喰らったものの、
「ただ今戻りました。この度は、不覚にも敵に囚われるところとなり、兄上には多大なるご迷惑をお掛け致しました」

と、丁寧な謝辞を述べた。同時に、なにやら奇妙な音がして、ラムザは顔を赤らめた。円卓の上に載った、見るからに旨そうな肉や果物にそそられて、ついこらえきれずに腹の虫が鳴いたらしい。

「なんだ貴様、戻ってきたばかりだというのに、気の早いことだ」

ザルバッグが言うと、諸將はどっと声をあげて笑った。

「まあ、細かい経緯は後程聞くとして、まずは空腹を満たすとしよう」

ザルバッグは、真っ赤になってその場に縮こまっているラムザを、自分の隣席に招いた。マルコムは自分の席を譲りながら、

「兄上に、しかとお叱りを受けねばなりません」

赤ら顔をにやつかせながら言った。ラムザは所在無げに、兄の隣に収まった。

「さて、皆の者、勇者の凱旋を祝そうぞ！」

ザルバッグが盃を掲げると、皆、

「勇者ラムザに乾杯！」

と、それに倣った。

宴はいよいよ本格的となった。ラムザは食事を前にして、最初のうちはなんとなくためらっていたが、

「なにを遠慮しているのだ。さあ、食べ食べ」

兄ザルバッグはもうしたたか酔っている様子なので、だんだんとうち解けてきたのであった。

宴も酣たけなわとなった頃、ラムザは父の容態をザルバッグに尋ねた。ザルバッグは快活に笑って、

「父上なら心配には及ばん。ここ数日臥せておられたようだが、なに、病などにやられるお方ではあるまいよ」といって、盃の酒を豪快に飲み干した。

「そうですか……。早くお会いしたいものです」

ラムザがそういつて俯くと、

「なんだ貴様、父上の身を案じて、わざわざこんなくんだりまで参ったのか」

ザルバッグは呆れ顔で言った。

「よもや、父が恋しい歳でもあるまいに」

「そうですが……ただ、不吉な感じがしたものですから」

「なに、不吉とな」

「はい。漠然とではありますが……」

父バルバネスは今年で齡六十を越えるが、いまだ筋骨たくましく、前線を退いた後も、毎日の鍛練を欠かすことはなかった。それこそ、風邪ひとつひいたことはない、と自身豪語し、我が子らに健康増進を説くほどであった。

——その父が病に倒れたと聞き、ラムザは、それはただごとではあるまい、と一心不乱にここまで駆けてきた次第である。

（なんともなければよいが……）

空腹に久々の美酒美食をもつてしても、ラムザの心中の、霧のようにもややもやした感じは晴れなかった。そこに、

「そういえば」

傍らにいて兄弟の話を聞いていたマルコムが口を挟んだ。

「ディリータ殿はどうされたか？ 彼のもとにも、バルバネス將軍の急病の知らせは届いておったはずだが」

「あ、ディリータはガリランドに残りました」と、ラムザは答えた。

知らせの届いた夜、ラムザは早急に親友にもその旨を伝えたのであったが、ディリータは、

「父上は病に負けるようなお方ではない。わざわざ心配して見舞いにいくまでもないだろう」

と、いたって落ち着いた様子であったので、ラムザ一人で来たのである。

ザルバッグはそれを聞いて、

「さすがに父上の見込んだ男子だけのことはある。武人たるもの、何事に対しても、そのくらい大きく構えていなければなあ」

ラムザを横目に大声で言った。ラムザは、暗に馬鹿にされた感じがして、渋い顔をしていたが、その様子を察したマルコムは、

「いやいや、將軍。武人には、時に母のごとき優しさも必要ですぞ」ラムザを弁護するようなことを言ったが、

「ははは、確かに、君は母親に似たのかもしれんな」

ザルバッグはさらに大きな声で言って、ラムザの背を平手でばんばんと打った。ラムザは兄になされるがままに、苦笑していた。本人に悪気はないのだが、ザルバッグにはこうして人のことをいじり回して喜ぶ悪い癖があった。

——母といえば。ラムザとザルバッグは異母兄弟である。ザルバッグと長兄ダイスターグの母は、王族の流れを汲む名門貴族の娘で、その母が病で急逝した後に後妻として迎えられたのが、ラムザと妹のアルマの母である。先妻と比べて、その出自は、ガリオンヌ領の一地方官吏の家という大分劣ったものではあったが、先妻との結婚がいわば政略的結婚であったのに対し、後妻は、バルバネスが若い時分から思いを寄せていた女性ひとであったので、彼は殊更にこの女性を寵愛し、やがて生まれた二人の子らも、大そう可愛がった。

しかしその後妻も、アルマを産んで間もなく流行病にかかって空しく逝ってしまったので、そのころまだ幼かったラムザは、ほとんど母の面影を覚えていなかった。

父はというと、その後妻のことが忘れられないらしく、

「おまえの母は、たいそう慎ましく、優しい心をもった女性であった」と、度々ラムザとアルマに言い聞かせていた。

ラムザは、幼心にそんな母の姿を浮かべて恋い慕いつつ、やはり年長の兄たちと比べると、どうしても温厚柔和にすぎる自身の性格をなかなか好きになれずにいたところもあった。

そんなラムザの心中を知ってか知らずか、父の口からも

「おまえは多分に母に似たのだ」

と言われた覚えもある。

が、それは決して女々しいという意味ではなく、ラムザの持つ生来の優しさのことを指しているのだと、その心を解かれてからは、

「母に似ている」

と言われたところで、別段悪い気はしないラムザなのであった。

第一章 持たざる者ゝ2. 遺志を継ぐ者

夕暮れ時に始まった宴は、夜が更てもなお続いた。

行軍中の軍隊がこんなにも浮れているのは、先日、ザルバッグ將軍指揮のもと、大々的に行われた骸旅団殲滅作戦において、最大の反抗勢力であった旅団長ウィーグラフ率いる反乱軍を見事、壊滅せしめたためである。

この作戦の戦果により、ガリオンヌ領を荒らしまわっていた骸旅団の大半は、その中心的勢力を失い、路頭に迷うこととなった。

マンダリアの砦に立て籠っていたのは、掃討作戦で敗走した骸旅団の残党であり、ザルバッグがいとも簡単に敵の条件を呑んだのは、第一に実の弟の命を救うためであったが、しばらくは大した反抗もできまい、という彼の余裕でもあった。

兎も角も、先日の大勝利もあって、ラムザが今回、敵の人質に取られた挙句、残党とはいえ、敵をむぎむぎ逃してしまったという大失態に対する責任は、とりあえず不問となった。

明くる早朝、ザルバッグ軍は、昨晚の酔いも冷めやらぬままに、イグーロス城への帰還の途についた。

行軍は滞りなく進み、日が大分高くなったところになって、ザルバッグ率いる北天騎士団は、イグーロス城下に凱旋を果たした。城へ続く道々、英雄ザルバッグの雄姿を一目見ようと、大勢の人々がひしめき合い、各々手を振ったり、喚声をあげたりしていた。自慢の黒羽に跨ったザルバッグ將軍は、誇らしげに胸を張り、その蒼眼は真っ直ぐ前を見据えていた。

城門に着くと、鼓笛隊が整然と列を成し、華やかな凱旋のファンファーレを奏でた。城からは、ガリオンヌ領主のラーグ公爵が直々に出迎えに現れ、大いにその労をねぎらった。

ラーグ公爵に戦果を報告したのち、兄弟は父を見舞うため、ベオルブ家の邸へと向かった。

邸に着くと、侍従の者が出迎えに現れ、バルバネス將軍は寢室にて静養中であると述べ、二人を案内していった。

寢室の前に来て、従者が兄弟の来訪を告げると、「入ってきたまえ」と、中から小さく返答があった。二人はちょっと顔を見合わせてから、おもむろに室内に踏み込んだ。

寢室の窓は開け放たれ、午後の陽光とともに、初夏の涼やかな風が、梢のそよめきを内へ連れ込んでいた。

父はベッドの上に半身を起こし、静かに書物を捲っていたが、兄弟が部屋に入ってくると、書物に落としていた目を此方に向けて、無言で微笑んだ。

「父上……」

と、ラムザがいった。我が子を前に敢えて明るく繕ってはいるが、頬は瘦け、膚は青白く、その表情に往年の雄姿はほとんど見られなかった。兄弟は、久々に対面した父の変わりように、動揺を隠せずにいた。

「急病と聞いて、ガリランドより飛んで参りました。お健やかなご様子でなによりです……」

ラムザは、努めて健気にいった。

「うむ。無用な心労をかけてしまったな。このとおり、今は床を出ることもかなわん。わしも老いたものよ」

バルバネスはやや自嘲ぎみにいった。

「気弱なことをおっしゃる。父上には、まだまだ頑張ってもらわなくては」

ザルバッグが、そんな父の弱気を諫めた。

「いやいや、畏国が大戦の荒廃から立ち直るためにも、今は若い力こそ肝要である。それ故に、わしは北天騎士団の全指揮権をそちに預けたのだからな」

言い終わると、バルバネスは二、三度咳き込んだ。ラムザはすぐに、ベッドの傍らの水差しを手に取ると、グラスに水を注いで父に渡した。すまぬ、といってバルバネスはグラスの水を一息に飲み干

した。

「——ときに、ザルバツグよ。前の戦の首尾はいかに？」

身は病床にあっても、天騎士バルバネスが戦場を忘れることはないらしい。バルバネスが先日の戦果を問うと、ザルバツグは胸を張って答えた。

「我らはレアノール野の決戦において、賊将ウィーグラフの反乱軍一万を徹底的に殲滅いたしました。いま一步のところでウィーグラフの身は捕り逃しましたが……まあ、貴奴らは当分の間、盗賊紛いのことは続けても、大規模な反乱を起こすことはありませんまい」
そこでラムザのほうを横目でちらと見やると、

「……その後、我が軍はマンダリアの丘にある砦跡に立て籠った賊の残党を囲みましたが……まあ、敵の数もそう多くはありませんでしたので、小勢相手に時間を費やすのも無駄と思い、包囲を解いて、逃がしてやりました」

と、多少事実をばかして言った。

「そうかそうか。逃がしたとな」

バルバネスは、眼尻にしわを寄せて頷いた。

「骸旅団として、今でこそ盗賊の輩と目の敵にされてはおるが、前の畏鷗大戦の功績は何も我ら北天騎士団のものばかりではない。そちも、わしも、今こうして生命を保っておるのは、ひとえに、ディリータの父オルネスと、骸騎士団の名もなき兵卒の犠牲の上にあること、ゆめ忘れてはならんぞ」

どこか、幼子を諭すような口振りである。

「それはよく心得ております。此度は、敵が敗残の少兵であったこともあり、多少の恩をかけてはりましたが、ウィーグラフはこの混乱期におよんで徒に国土を踏み荒らし、自らを平民の代弁者などと標榜しながら、かえって民草を苦しめております。ガリオンヌの治安を司る北天騎士団を任されたからには、草の根分けても貴奴を探しだし、処刑台にかけてやらねばなりません」

「……うむ。そちの言うことはもっともであるが、賊将ウィーグラ

フとて、身は平民の出でありながら、前の大戦においては、能く兵を用い、その武勇は北天騎士団の名だたる将に勝るとも劣らなかったという。ベオルブの家の子たる者、彼らの言い分を聞いてやるくらしいの器量も、持ち合わせておらねばならんぞ」

「は……」

血気盛んなザルバグは、やや表情に不服の色を隠せないようであったが、父の身体を気遣って、これ以上は敢えて言わなかった。

久々にまみえた親子は、それから暫しの間積もる話題を崩しあい、やがてザルバグは公務があるといって、その場を辞した。

二人きりとなったラムザとバルバネスは、窓外にまもなく沈もうとする夕陽を黙って見つめていた。

「美しいな」

バルバネスがしみじみといった。ラムザは微笑みながら、父の横顔を見つめていた。その顔には、かつてない穏やかさがあった。またそこには、何かを悟ったような、あるいは諦めにも似た色が窺える。

「ディリータは元気にやっておるかね」

「ええ、相変わらずですよ。ホランド家の方々も、とても良くしてくださってますし」

「そうか。ディリータとは仲良くな。あの子は将来、きっとお前の良き助けとなってくれる」

「時々、くだらないことでけんかはしますけどね。兄上から父上にご病気との便りを受け取った時だって、僕がなんと言っても、あいつは動こうとしませんでしたし」

「ハハハ。奴らしいの」

ラムザも、父につられて笑う。

「いやまったく……ホランドに便りをよこしたのは、ダイスダーグの老婆心であったのだが……正直、おまえがイグーロスまで駆けつけてくるとは思わなんだ」

「いや……それは」

「復活祭の休暇までには、まだ間があらうに」

「心配でいてもたってもいられなかったものですから」

「くくく……」

「なにがおかしいんです？」

「いや、なに。やはりおまえはローサに似たのだと思ってな」

「……え、母上に？」

ローサは、バルバネスの後妻、つまりラムザとアルマの母の名である。しかし、父の口からその名が発せられたのを、ラムザは初めて聞いた。

「……兄にもいわれました」

「そうか。だが、それでよいのだ。おまえは」

「……」

「不服か？　しかし、わしもこの歳になってあらためて思う。やはり武人は、ときに母のごとく優しき心、慈悲深き心を持ち合わせておらねばなんのだと」

「……」

「そして、そういった心は、およそ英雄と呼ばれる者に欠けている素質でもある」

「……そうでしょうか」

開け放たれた窓からは、冷え冷えとした夜風が入り込んできている。今や落日は西の山々の稜線にその姿を隠し、薄紫の雲間には宵の星々が瞬き始めている。

ラムザは立ち上がると、両開きの窓をゆっくりと閉めた。

バルバネスは、息子の背中をを無言で見つめていた。

「……ラムザよ」

「はい、父上」

「……」

バルバネスはラムザに、椅子に掛けるよう目で促した。ラムザはそれに従って、先ほどまで腰かけていた椅子に座った。と同時に、何かただならぬ雰囲気を感じ取って、ラムザは無意識に身を引き締めた。

「……本来ならば、この儀については、然るべき遺言状を以ておまえに伝わるはずであった」

一息の間をおいてから、バルバネスはおもむろに切り出す。

「しかし今日、図らずもわしはこうして親子水入らずで語り合う機を得た。この際、わずらわしい文書は抜きにして、わし自らの言葉を以て、おまえにこの儀を伝えようと思う」

「……？」

ラムザは咄嗟に思考を巡らした。遺言状とは？ 遺言状で伝えねばならぬほどの儀とは？ 父はすでに自らの死期を悟っているというのか？

唐突な父の言葉を前に、ラムザは戸惑いの色を隠せない。そんな息子の混乱をよそに、バルバネスは淡々と言葉を続ける。

「おまえは末の男子ながら、今やベオルブの名に恥じぬ立派な騎士となった。もはや、わしの跡目を継いだとして、先祖のお怒りはこうむるまい」

しかし次の瞬間、電撃に打たれたかのごとく、ラムザの思考は停止していた。

「……え？」

——跡目を継ぐ？

父の言を額面通りに受け取るならば、それは有能な兄たちを差し置いて、胎違いの三男坊にすぎぬラムザが畏国の武門の棟梁を引き継ぐということである。

「なにをおっしゃるかと思えば……。お戯れもほどほどになさってください」

「いや、戯れでいっているのではない」

バルバネスは、ラムザの顔をまっすぐ見据えた。その目に、もはや先ほどまでの穏やかさは見られなかった。物言わでも、父の決心の程が窺えるかのようにであった。

「勇者ザハラムより代々ベオルブ家に伝わる宝剣、レオハルトをおまえに託そうと思う」

暫しの間沈黙が流れた。閉ざされた窓越しに、庭の木々の葉が、気まぐれな風に誘われてざわざわと囁きあった。

「しかし父上、それは……」

「そうだ。レオハルトを継ぐ者、それすなわちベオルブを継ぐ者となる。ラムザよ。おまえは、このわしに代わって、ベオルブ家の当主となるのだ」

その夜はゆるりと明けた。

結局、ラムザは一睡の間も得られなかった。朝の小鳥たちの囁きも、今日のラムザには妙に遠く霞んで聞こえた。頭の中も何となくぼうつとしていて、昨日父が言ったことを反芻してみる気さえ起らないのであった。

彼はそのまま着替えを済ませ、朝食の席に降りて行った。

食堂に入ると、兄二人はすでにあわただしく食事を始めていた。

広間の中央に置かれた長机のいちばん上手の席は空いており、そのすぐ右手の席に坐っている長兄ダイスダーグは、食事の合間に彼の隣りに立っている秘書官にあれこれ政務に関する指示を与えていた。長兄に向き合うように坐っている次兄ザルバッグはというと、そんな兄には眼もくれず、黙々と食事を続けていたが、ラムザが広間に入ってきたのに気づくと、にこりと笑って、「おはよう」と陽気に挨拶した。ラムザはその声に一瞬ギクリとしたものの、「あ、おはようございます、兄上」と、やや笑顔を取り繕って、そそくさとザルバッグの隣りに収まった。そこでやっと弟の存在に気づいたのか、ダイスダーグも、「お、ラムザか。おはよう」と手短かに言ったが、すぐに秘書官とのやり取りに戻ってしまった。

「久々の我が家はどうかだね。よく眠れたか？」

ザルバッグが言った。

「はい、それはもう……」

「そうか。私も昨日は久々によく眠った。こここのところ戦続きだっ

たからな。やっぱり我が家はいい」

「……………」

ともすると途切れがちな会話をなんとか保とうとするばかりに、ラムザの食事は一向にはかどらなかった。彼の頭の中で、思考が昨日の父の言に向かうのを必死に拒んでいるかのようであった。

「今朝はいやにおしゃべりだな、お前は」

弟がルザリアの踊り子の話題を持ち出したところで、ザルバグもさすがに不審に思ったらしい。普段はわりと寡黙なほうのラムザではある。久々の家族の団欒とはいえ、何となくぎこちない弟の様子に、彼が違和感を覚えたのも無理はない。ここで秘書官が退出し、ダイスダーグが二人の会話に加わったのがせめてもの救いであった。「オムドリア王のご容態が、ここのところどうも芳しくないらしい」ダイスダーグが深刻な面持ちでいった。

「明日、ラーグ大公がお見舞いに赴かれる。私もお供することになった。ゴルダーナ卿はすでにルザリアにあって、陛下に謁見したとも聞くしな」

「ほう、南天公がね……………」

ザルバグが意味ありげに笑みを浮かべた。

「そいつは穏やかならぬことだな」

「ともかく…………支度を急がせねばならん」

ダイスダーグは席を立ちかけて、そういえば、とラムザのほうを向いていった。

「アルマとティータが父上の見舞いに帰るそうだ…………。昨日オーボンのシモン司教から手紙があってな。来月にはイグーロスに帰るはずだ」

「え、アルマとティータが…………？」

ラムザの妹アルマと、彼の親友であるディリータ・ハイラルの妹ティータは、五つの時に王室領ルザリアにあるオーボンヌ修道院に入っており、以来ほとんど時期をそこで過ごしていた。そのオーボンヌ修道院の司教、シモン・アスールは、グレバドス教会から最高

司祭の榮譽を授かったほどの人物で（最高司祭とは、布教活動や神学研究などにおいて、著しい成果を残した者に与えられる、グレバドス教皇に次ぐ高位である。）、王室との関わりも深く、オリナス王子ご誕生の折、政治的理由により、現国王オムドリア三世の異母妹君で養女でもあらせられるオヴェリア・アトカーシャ王女も、同院に入られたことはよく知られている。

朝食の後、ラムザはひとりぶらぶらとイグーロスの城下に繰り出した。

アジヨラの復活祭で賑わう大通りからは少し外れて、彼はひととき薄暗い裏路地に入っていた。妖しげな匂いを漂わせる葉間屋や浮浪者のうごめく酒場などをいくつか過ぎると、急に開けた所にひっそりと佇む修道院がある。

ややくすんだ石壁に歴史を感じさせる礼拝堂の裏手に回ると、そこにはベオルブ家先祖代々の霊を祭った墓がある。やや奥まった所にある一番大きな墓石の前に跪き、ラムザはしばしの間黙祷を奉げた。

（もはや、わしの跡目を継いだとて、先祖のお怒りはこうむるまい）昨日の父の言葉が、ラムザの脳裏によみがえる。

（ラムザよ。おまえは、このわしに代わって、ベオルブ家の当主となるのだ）

武門の家の継嗣は、およそその家の嫡男をもって行われるというのが世の習いである。ましてベオルブ家の場合、長兄ダイスダーグが、母の血筋、またその素質という面からしても、後継者たるにふさわしいということは、誰の目に見ても明らかである。

——無論ラムザも、その道理を父に訴えた。それに対し父は、「表向きの後継ぎは、おそらくダイスダーグとなるであろう」としながらも、

「——但し、真の後継たる証、すなわちレオハルトの剣は、そちに託さねばならん」

と、あくまで正式な世継をラムザとする自らの意思を明確にした。

また、レオハルトの剣に関しては、

「邸の宝物庫にあるは贗物で、真の剣はルザリアの刀匠、ルドルフの許にある。然るべき時来たらば、その者を訪ねよ」というのである。

その家の世継たる証として、何かしらの具体物を代々受け継ぐという風習は、武門の家に限らず、いわゆる貴族階級の家のあいだでは、特に珍しいことではなかった。そして、王族はもちろんのこと、ベオルブのような古い家柄になるほど、「後継の証」はかなりの重みをもって扱われる。

（これは、そちにのみ残す遺言。たとえ身内の者であっても、他言は一切無用であるぞ）

この決断が、父の気まぐれでも、愛する妻の子に対する単なる偏愛によるものでもないことだけは、はっきりしていた。何か測り知れぬ大きな理由あつてのことに違いないが、父は「今はまだわからぬでもよい」として、詳らかにしなかった。

（何故？ いったい何のために？）

答えの無い疑問は、あぶくのように次々と湧き出でては消えていく。彼にはまだ、何の心構えも、準備もなかった。街道をゆく道々、彼をせきたててやまなかつたあの不吉な感じは、まさにこのことであつたのだろうか？

「そこにいらっしゃるのは、もしや、ラムザ様ではありませんか？」不意に聞き覚えのある声がして、ラムザは目を開けてそちらを振り向いた。見ると、質素な麻の修道衣をまとった少女が、そこに立っている。

「あ、やっぱりラムザ様だ」

何か美しい調べにでも導かれるようにして、少女はラムザのほうにつと歩みをよせる。

「やあ。エリザ、こっちだ」

ラムザは、空をまさぐっている少女の手を取り、彼の存在を知らしめた。

「ああ、お久しゅうございます」

エリザは少し小首を傾げるようにして、顔を綻ばせる。たしか幼い頃に患った熱病の所為であったか、その瞳に光はなかった。

「……一年ぶりくらいかな」

「そうですね。去年の復活祭の折にもいらっしゃったのを覚えております」

「ああ。その時はディリータもいたっけか」

「ディリータさまは、今日はいらっしゃらないのですか？」

「うん。あいつは今ガリランドにいるよ」

二人は傍の石垣に腰をおろした。

ラムザと幾つも歳の違わないこの修道女は、ここの司教が営む孤児院の出で、ベオルブ家の墓がこの修道院にあることもあって、二人は幼い時分からよく知り合っていた。ディリータとティータの兄妹は、ベオルブの家に入る前、一時的にここの孤児院に預けられており、その頃から、エリザはよき遊び仲間となっていた。士官学校に上がってから自然と会う機会も減ったが、休暇などの折を見ては、ラムザはちよくちよくここを訪れていた。

「ベオルブ家の方々さまもお変わりなく？」

「いや、それが……」

ラムザは父の急な病のこと、その知らせを受けて、先日帰郷したばかりだということをエリザに話して聞かせた。

「そうでしたか……父上様がご病気に」

エリザは少し眉を曇らせて、うつむき加減にいった。

「いや、剛毅な父のことだ。心配はいらないよ」

そう言いながら、ラムザは一抹の不安を覚えずにはいられなかった。昨日久々にまみえた、あの父らしからぬ蒼白な顔。ただの病でないことは、素人目にもわかった。

——そして、あの遺言。

父は、自らの余命幾許もないことをすでに悟っているようでもあった。武人として、病床に命尽きることがいか程に口惜しいことか。

それを思うだけで、若いラムザの心は疼いた。そして、今は更なる重みが、彼の両肩にのしかかっていた。

「……ラムザさま？」

自然とこぼれ出てくるものを、ラムザはそつと拭った。折々に見せる彼のこんな姿を、兄たちは「女々しい」というのかもしれない。

「いや、なんでもない。大丈夫だ」

ラムザは健気にもそう言って、笑ってみせた。エリザはその顔に微笑を絶やさず、ラムザの顔を見つめていた。彼女の盲た瞳が、ラムザの面を正確に捉えることはなかった。しかしその瞳には、表情のさらに向こう側を見透かすような、不思議な深みがあった。

「……礼拝堂に参りませんか？ 父上様のご快癒を共に祈りいたしましょう」

「ああ……そうだね。そうしよう」

二人は連れ立って、礼拝堂に向かった。

建物の外見の割に広い印象を受ける礼拝堂の内には、午後の参拝客の姿がまばらにあった。復活祭の月ということもあり、いつもは人っ子一人いないというのが当たり前な礼拝堂にも、わずかながらの活気があった。

ラムザとエリザは、正面に据えられた祭壇の前に跪き、キルティア聖教の作法に則った拝礼を施した。そのまま黙祷に入り、無言の祈りは始まる。

——すべてを「無」に帰して、ありのままの自分に対面すべし。

これが、聖アジョラの導きの詞である。「神は己が心内にあり」というのがキルティア聖教の一般教義であり、雑念煩惱の一切を払い、無垢なる自己に対面することで初めて神への祈りは通ずると、そう信じられている。細かい規律を定めた教典などもなくはないが、多くの民草に受け入れられているのは、

「神は己が心内にあり」

という、この一念だけであった。

（余計なことは考えるな。頭の中を真っ白にして、自分自身に向き

合うのだ)

ラムザが初めて剣を取った日、父はまず最初にそういった。

「わからないよ」

幼いラムザが言うのと、

「理解できるものではない」

と、父は答えた。

「実際、わしにもよくわからん。理屈で説明するのは難しい。あえて言うならば……」

(己を見失わぬこと)

ラムザは心の中で復唱した。己を見失わぬこと。己を見失ったとき、その剣は狂気にとらわれ、無用な殺戮を生み、果ては己が命を奪い去る。

祈りを終えると、ラムザは静かに立ち上がった。エリザはまだ祈りを続けている。祈りに決まった長さはないが、今のラムザにとって、心を白にするという業は容易ではなかった。しかし無言の祈りは、彼の気持ちを新たにするに十分な時間を与えてくれた。

「ありがとう。貴重なひと時だった」

去り際に、ラムザはエリザの手を取っていった。

「私はいつもここにおります。またいつでもいらしてください」

エリザはそう言ってほほ笑んだ。その無垢な笑顔を前に、ラムザは少しだけ痛みを分かち合えたような心地に浸っていた。

「ああ、きつと。父上の病が治るまで毎日祈りに来よう」

ラムザも笑顔で答えた。

それから二週間あまりが過ぎ去った。季節の色も、心なしか青々と、夏の気配を帯びてきている。

ラムザは日々、武芸に励むかたわら、夕暮れ時には城下に出て、例の修道院で祈るといった一日を繰り返していた。あの日以来、父は主治医を除いては、一家のうちの誰とも面会しようとしなかった。

ラムザは気持ちを整理しながらも、心のどこかで覚悟を決めようとしていた。その一方で、現実を受け入れようとしないうちにあるのも、彼はよく承知していた。

別れの時は無情にも刻一刻と迫ってくる。

ラムザがイグーロスに戻ってから一月あまりが経った巨蟹月三日、バルバネスは終に危篤状態に陥った。

「父上は……もう長くないそうだ」

ラムザは、この日イグーロスに帰ってきたばかりのアルマとテイタに、そのことを冷静に伝えながらも、内心では堪えきれないものを人知れず、そっと流した。若い彼にとって、その別れはあまりに早すぎたし、その背に負うた宿業はあまりに重すぎた。

「兄さん……ここにいたのね」

庭の一角であった。高台に位置するベオルブの邸からは、イグーロスの城下を一望することができる。ラムザは背の低い石堀に腰をおろし、そこで独り、遠い目をしていた。

「アルマか」

「さっきから姿が見えないものだから……」

アルマは、砂利を手で払ってから、兄の隣に座った。

「こんなときに……お兄様たちはどこにいるのかしら」

「ダイスダーク兄さんは、ラーグ公のお供でルザリアに行ってる。ザルバツグ兄さんは、北部で起こった反乱の鎮圧に向かうといっていた」

「そう……」

「父上の様子は？」

「まだ意識が戻らないの。でも、声をかけると、何かおっしゃろうとするの。ずっとお側にいたかったけれど、お医者様が治療なさるというので……」

「そうか……」

この季節特有の、湿っぽい空気が顔をなでる。イグーロスの上空に広がる青天は、遠くマンダリアの草原地帯に差し掛かったところ

で、切り取られたように黒々とした雷雲に変わっている。時折稲光を見たかと思うと、少し遅れて、ドロドロと戦鼓を轟かすような雷鳴が、地面を伝わってくる。

傍らでアルマのすすり泣く声が聴こえたが、ラムザはそんな妹を慰めてやることもできずに、ただ俯いていた。

ラムザより三つ年下の妹は、今年で十三になる。ひと周りもふた周りも歳の離れた兄たちに比べ、同じ胎の産まれである妹のアルマは、彼にとってずっと親しみやすい存在であった。そして妹も彼と等しく、いや、もしくはそれ以上に父親の愛情を一身に受けて育ってきた。

その愛すべき父との別れが目前に迫っているのである。まだ幼いとはいえ、もう十三になる娘には、その現実を現実として受け止めるだけの、十分成熟した分別がすでに備わっていた。

「女学院にはもう慣れたかい？」

久々にまみえる兄妹の会話である。ラムザは、努めてありふれた話題に持ち込もうとした。

「……ええ」

アルマも袖で涙を拭って、それに応える。

「友達もたくさんできたわ。でも……」

「でも？」

アルマは妙に言葉を濁して俯いてしまった。気になってラムザが聞いただと、「ディリータには言わないで……」と、少しためらいがちに話し始めた。

「ティータのことなんだけれど……」

ラムザが先ほど言った「女学院」というのは、ルザリア王立貴族女学院のことであり、畏国じゅうの名門といわれる貴族の息女で、この「女学院」の門を出ないものはなし、というくらいの名門校である。

アルマとティータも昨年そこに入学したばかりなのだが、アルマによれば、その同窓たちから、ティータが陰湿ないじめを受けて

いるのだという。

「そうか……ティータが」

おおよそ想像できないことでもなかった。ガリオンヌ領における武門の棟梁、名門ベオルブ家の養女とはいえ、ティータが平民階級の出であることは、自然、「女学院」の学生たちのあいだにも知れ渡っていたにちがいない。殊に、そこは畏国じゅうの名門という名門の女子たちの集う学び舎である。彼女たちの過剰なまでの自意識が、その場においては例外中の例外ともいえるティータの身を遠ざけたのも、別段不思議なことではない。

「私がそばにいるときは、誰もそんなそぶりはみせないの」

アルマは、あたかもそれが自己の責任であるかのようにいった。

「でもね、ある子がわたしにいったの。『どうしてベオルブ家のあなたが、あんな汚らしい子と一緒にいるの?』って……。わたし、そのとき初めて知ったの。ティータが、わたしの見ていないところで辛い目に遭ってるって」

アルマは両膝に顔を埋めて、肩を震わせた。兄たるラムザは、そんな妹の肩に手を置いて、表情に困惑の色を浮かべていた。

「自分を責めることはないさ。誰に何といわれようが君たちは親友、そうだろう?」

「……………」

アルマがしゃくりあげながらも、大きく頷くのがわかった。

誰の責任でもない。寛大なる父は、ダイスダーグやザルバグの反対に遭いながらも、ハイラル兄妹を実の子らと分け隔てなく、同じ学校に通わせようとした。結果として、社会の風潮がバルバネスの理想を受け入れなかったまでのことである。

ラムザの通う王立士官学校でも、平民の出である親友のデイリータは、何かにつけて僻みや嫉みの対象となっていたが、デイリータには、そんな陰口などものもしない強さが元々あったし、だいいち学内では、彼はどんな名門貴族の御曹司にも引けを取らない優秀な士官候補生であった。

優秀という面では、妹のティータも幼い時分から学問を好み、「女学院」での成績は、アルマよりもむしろ良いくらいなのである。しかし、多感な時期の少女の心は、硝子細工のごとく傷つきやすく、繊細で、脆いものである。

いつしかティータは、アルマの前でもあまり笑顔を見せなくなっただという。

「わたし……ティータが……かわいそうで……辛くて……でも……何もいえなくて……」

「……………」

今のラムザには、そんな妹の悲しみを無言で抱き止めることしかできなかった。否、むしろいかなる慰めの言葉も、この際何の役にも立たないように思えた。

「もう……家に帰ろう。嵐が来そうだ」

二人の頭上には、いつの間にか分厚い灰色の雨雲が、低く垂れこめていた。一陣の生ぬるい風が通り過ぎたかと思うと、ぽつりぽつりと、滴が落ちてきたのを肌で感じた。

「……さあ」

ラムザは、涙に暮れる妹の肩を抱きかかえるようにして立ち上がり、屋敷のほうにむかって歩き始めた。

第一章 持たざる者 3. 牧人の村

——天騎士バルバネス死す。

との訃報が畏国全土を駆け巡ったのは、夏もいよいよ盛りと見える、巨蟹の月は六日のことであつた。

これでまた一人、畏国は五十年戦争の英雄を失つたことになる。わけでも、バルバネス・ベオルブは一代の英傑として、民草にもっとも慕われた将ではなかつたかと、貴賤を問わず誰の胸にも思い出される。慣例に従うならば、死後に贈られるべき「天騎士」の称号を生前に賜つた者も、後にも先にもバルバネス將軍だけであつた。

なんにせよ、幾多の合戦で圧倒的な勝利を収め、泥沼化した戦争を終結に導き、その生涯を戦と民の平安に捧げた勇者の最期にしては、その死は実に穏やかなものであつた。葬儀は内々に、しめやかに執り行われ、棺はベオルブ家代々の墓に納められた。

家長となつたダイスダークは、定めどおりに伝家の宝剣レオハルトを受け継ぎ——もっとも、これが表向きの家督継承にすぎぬことは、世間の想像の及ばぬところであるが——これを以て正式にベオルブ家の後継となつたことを国王に奏上した。

その後、もともと政治家肌であるダイスダークは、そのままガリオンヌ執政官の役職に留まり、北天騎士団総帥の座は、新たに聖騎士に奉ぜられた次兄ザルバッグが引き継ぐこととなつた。

巨星墜つとも、武門の棟梁ベオルブの名は、依然盤石に見えた。

——その一方で、今や国家の疲弊は頂点に達していた。

北天騎士団による大規模掃討作戦で一時はなりを潜めていた骸旅団も、近頃では次第にその勢力を盛り返し、畏国各地で比較的規模の大きい反乱が散発するようになっていた。彼らは、もっともらしい文句を並べ立てて貧困に喘ぐ民を扇動し、中にはおおっぴらに王室に対する叛意を掲げるものもあつた。

しかし、そういった混乱のほとんどは、およそ大義も名分も無い

無秩序な略奪と暴力の繰り返しであり、神にすがるほかない多くの弱者は、いつ果てるとも知れぬ不安と恐怖に脅える日々を、ただ連綿と明日へ繋いでいた。

殺人・暴行などは日常茶飯事、押し寄せる治安悪化の波は、地方に留まらず、法と権力の庇護下にあるはずの大都市にも、次第に及び始めていた。

——そしてこの地、魔法都市ガリランドとて、その例外ではなかった。

ガリランドは、イヴァリース半島の南部を走るサドランダ街道の、ちょうど中間部に位置する城塞都市である。

外縁に堅固な城壁を巡らした市街地と、城壁の外的一段低くなつた土地に無秩序に拡がるスラム街から成る都市構造は、他の主要都市と較べてみても大して変わりばえないものであるが、このガリランドだけは、なぜか”魔法都市”と、昔から呼び習わされていた。魔法都市といえばガリランド、ガリランドといえば魔法都市、というほどである。

その名の云われは様々に考えられるが、ひとつに、千年の昔に魔族の支配からこの街を解放した初代都督サガリアス・ガリランドに始まり、現在その席にあるマツトパス・バラフォーム卿に至るまで、都督の任に就いた者は例外なく有能な魔術士であったこと（ふつう都督や領主を務めるのは、その土地の有力貴族か武家である）、もうひとつには、五十年戦争の英雄・魔道士エリディブスを輩出したことで知られる王立魔法学院を筆頭に、白魔法、黒魔法、召喚魔法、妖術、風水術など、幅広い分野の魔術を教授する学校が数多く門を開いており、魔術を志す者が畏国じゅうから集まってくることなどが、その主たるものであろう。

ともあれ、その学園都市的気風からして、長らく暴動・略奪などとは無縁の土地であったガリランドにも、大戦後のスラム拡大に伴い、そういったものの影がちらほら見られるようになっていた。

現状を憂慮した現都督バラフォーム卿は、老朽化した城壁の修繕と

警護の強化を命じ、スラムと市街区の間の行き来を制限することで、なんとか上界の治安を維持しようとした。

そうした対処が功をなしてか、市街区内に限っては、今のところ大した問題も起きていなかった。

その日の早朝、ガリランド都督府の門前には、市場の商人たちが殺到していた。

マツトパス・バラフォーム卿は、急を知らせる政務官の大声で目を覚ました。

「何事だ、こんな朝早くに」

肥えた半身をベッドの上に起こし、愛用の鼻眼鏡を手探りしながら、バラフォーム卿は唸った。

「これでございますか……？ 都督」

若い政務官は、サイドボードに置いてある鼻眼鏡をバラフォーム卿に手渡した。

「おお、すまん、これだ……よし。で、何が起こったのだ？」

「それが……」

政務官は、今朝の騒動について語り始めた。

商人たちが口々に訴えるのは、「キャラバン隊が定刻になっても到着する様子がない」ということであった。

キャラバン隊の大部分は問屋商人であり、毎朝近隣の漁港や農村などから、都市部に新鮮な品物を送り届けることになっている。

が、普段ならもうとっくに着いていてもおかしくない時刻になっても、今日に限っては荷車ひとつ現れない、というのだ。

もっとも、近頃になって盗賊匪賊の類が増えてきてからは、無傷でキャラバン隊が到着するということのほうが、むしろ珍しいくらいなのだが、さすがに荷車ひとつたどり着かないのはおかしいと、不審に思った商人たちが城門の衛兵に事情を聴けば、

「昨晚遅くから、街道沿いの村落付近に骸旅団と思しき輩が出没し

ている」

とのことであった。

で、さっそく調査隊を派遣してもらうべく、商人たちはそろって都督府まで訴え出に來たわけである。

「品物が届かなければ商売ができない、というのです」

「そりゃ……そうだろうな」

「いかがいたしましたよう」

「とりあえず原因を探らねばなるまい。今すぐ動ける手勢はあるのか？」

「アルマルクとかいう者が率いる北天騎士団の一隊が、昨日より兵舎に詰めておりますが」

「数は？」

「五十騎ほどかと。イグーロスのザルバッグ將軍の遣した治安維持部隊だそうで」

「まあ、よからう。その……アルマルクなるものを呼んで参れ」

「承知いたしました」

政務官が足早に出ていくのを見届けてから、バラフォーム卿はのろのろと床を抜け出し、身支度を始めた。寢室の窓から外の正門を見やると、なるほど、数十名はあるかと思われる商人の一団が、門や柵にへばりついて、何事か喚いている。すると、先ほどの若い政務官が庭先に出てきて、商人たちに対応しだした。

そんな様子をぼんやり眺めつつ、支度を済ませたバラフォーム卿は、大欠伸ひとつ、階下へと降りていった。

いつもより早い朝食を終え、食後の豆茶を啜ソイ・ティーしていると、ろに、若い政務官が大柄な黒髪の男を引連れて入ってきた。

「あ、お食事中でしたか」

「かまわん、もう済んだ。で、そこにおるのが……」

「アルマルクであります」

黒髪の男が名乗った。不精髭を生やし、生々しい傷痕の残る面構えなどを見ても、いかにも歴戦の兵つわものといった風体である。

「うむ。朝早くに呼び出してすまなんだな。で、アルマルクよ。さつそくだが、君の率いる部隊に、街道の偵察任務に就いてもらいたい」

「と申しますと、今朝のキャラバン隊の一件で？」

「お、聞いておるなら話は早い。いかにも、その一件で朝っぱらから商人どもが騒いであきんどの。ひとつ走り行って様子を見て来てはくれぬか？」

「……は、かしこまりました」

「ついでの骸旅団のネズミを二、三匹ひとつとらえてくれば、やつらもつべこべ言うまいで」

ぐいとひといきに豆茶を飲み干して、バラフォーム卿は満足げに笑みを浮かべた。

「以上だ。頼んだぞ」

兵舎に戻ると、アルマルクはこの辺りに土地勘のあるもの数人を選び抜き、自身それらを率いてガリランドの城門を出た。

街道を少し行ったところで、右手に小高い丘が見えてくる。アルマルクはチョコボの首をそちらに向けると、一気に丘の頂に登り詰めた。

その場で小手をかざすと、街道はずっと東へと伸びて行って、やがて黒々としたスウィージの森に達している。街道から北のほうに視線を反らしていくと、ここから三クエータ（一クエータは約一、六キロメートル）あまり離れた谷あいまきに、一群の人家がある。

「あれに見えるのは？」

アルマルクは傍らの部下に訊いた。

「は。たしか、この一帯で牧を営むものたちの部落であつたかと」

「ふむ……」

谷間を囲む草地に、ぼつりぼつりとゴマ粒のような家畜の影が見える。

村落へは、街道から枝分かれた細い小道が一本、うねうねと続いていた。

アルマルクは、部下の中でもいちばん年若と見える騎士を此方へ呼び寄せて、

「あの部落へ行って、何か変わった様子がないか探ってこい」と命じた。

半時あまりすると、若い騎士は戻ってきて、偵察の結果を報告した。

——その騎士の所見によれば。

村は平穏そのものにみえたが、よく見ると其処此所に怪しげな騎士や魔道士らしき者の姿があり、用心深く谷間の外を窺っているさまからして、どうもその村の者とも思えないという。

「ううむ……」

アルマルクは眉根を寄せた。彼の眸は、じっと彼方の村落を見据えている。

彼自身、キャラバン隊の大行列は幾度となく目にしている。

総勢およそ三百人、荷駄を負う力自慢の茶羽チョコボと、それを引く人夫、隊を野盗や魔物から守る傭兵などが延々、列をなして街道を練り歩くのである。

——その大行列が骸旅団に襲われたのだとしたら？

当然、何かしらの痕跡はあってしかるべきである。しかもキャラバン隊は無防備ではない。地方の大富豪が資産にものをいわせて雇った精鋭が、油断なく荷駄を護っているのである。骸旅団が荷を奪おうとしたなら、彼らとの戦闘は絶対に避けられない。

そして、今。

彼の見える限りでは、そうした異変の痕は見られない。

（どこかで足止めを喰らっているのでは？）

アルマルクの熟練した状況判断能力を持ちだすまでもなく、そう考えるのが自然である。

一方で、先ほどの物見の報告も無視できない。なにしろ、神出鬼

没の骸旅団である。本当に何の痕跡も残さずに、荷駄を奪っていったということも考えられなくはない。それに、彼ら治安維持部隊の任務は本来、骸旅団の検挙にある。とりあえず、かの村落に骸旅団の影が見えた以上は、これを見過ごすわけにもいかない。

アルマルクは先ほどの物見役に、今度は街道を東に、コロナス河の岸边に至るまで偵察を続けろと命じた。

「街道およびその周辺に、何か異変のあった痕跡を見つけたらすぐに知らせろ。その他の者は、これより一旦ガリランドへと引き返し、兵を増員したのち、かの牧人の集落の搜索に当たることとする」

やがて、物見を言いつかった騎士は街道を東へ、アルマルク以下は西へとチョコボの首を向けて駆けていった。

ガリランドに帰りつくと、アルマルクは五十騎二隊を編成し、例の村落へ向かった。

都督府が五十騎ほどと見積もっていた北天騎士団治安維持部隊の兵数は、実際のところ百騎以上はあった。

この部隊は都督府直轄ではないから、政務官でも正確な数を把握していなかったようである。

ともかく、これほどの大部隊がガリランドに駐留するのは、過去にないことであった。

その全騎を率いての大搜索である。

日ごろ、城門の衛兵や市中の警備兵くらいしか見たことのないガリランド市民の目には、物々しく武装した騎士の群れが街のど真ん中をものすごい勢いで突っ切っていくその光景は、さぞかし異様に映ったことであろう。

「いったい何の騒ぎだ？」

「どこぞで戦でも始まるのかい？」

彼らも気が気ではない。

当の商人たちも、予想以上に大規模な動きに度肝を抜かされてい

た。

「骸旅団はそんなに大勢現れたのか？」

「これじゃあ、品物も無事では済まないだろうなあ」などと、口々に囁きあっている。

——これこそ、世に”平和ボケ”というやつであろうか。

今や、暗澹たる情勢下にあるイヴァリースにも、中には安穩と「自分たちは守られている」という甘い考えに浸って、実際その身に事が及ぶまで、自分が素っ裸でいることに気づかない者もいる。

ましてガリランドは、前の大戦でも戦禍を免れている。その上、市街区の封鎖政策も相まって、彼らの多くは足下に広がるスラムの惨状に対してさえも、知らぬ存ぜぬを決め込んでいた。

そんなガリランド市民を尻目に、アルマルク率いる兵どもは、早くも城門を飛び出して、莽莽たる草原を疾駆していた。

——骸旅団の徹底殲滅。

これこそが、北天騎士団新総帥ザルバグ・ベオルブの掲げた一大方針であり、各主要都市に派遣された治安維持部隊にも、

「その影あらば逃すべからじ」

との通達が行き渡っていた。

はたして谷あいの一村落は、蟻の一匹も逃すまいと徹底的に包囲され、アルマルクを頭に、騎士は続々と村の敷地内に侵入してくる。牧原の民はただ呆然と、突如として現れた大勢の客人を前に声も出せずにいた。

その中から、村の長とみえる老人がアルマルクの跨がる軍用チョコボの前に進み出て、

「あの……あなたがたは？」

と、恐る恐る訊ねた。

「お前がここの長か？」

アルマルクはチョコボの上から老人に訊いた。

「はい……左様でございますが」

「我等は北天騎士団治安維持部隊である。今朝がた、ガリランドに

向かう途上のキャラバン隊が、その消息を絶ったという話は聞いているか？」

「いえ、そのようなことは何も……」

「ならば、骸旅団らしき者どもの姿がこの辺りで目撃されているのだが……」

今度は、事の成り行きをじっと見守っていた村人たちに質問が飛んだ。

「誰か知る者はおらんのか？」

——が、誰も応えない。

人々の表情は皆一様にこわばり、周囲を見回すアルマルクの視線を避けるように、目を逸らすばかりである。

（ム……何かあるな？）

アルマルクの勘が、機敏に違和感を感じ取った。彼の目は、今や鋭く周囲の村人たちの上に注がれていた。

「我等は、骸旅団の賊どもがキャラバン隊を襲撃したものと見ている。キャラバンは相当の太所帯であるというが、その荷がひとつ残らず奪い去られたのだとしたら、奴等はまだそう遠くへは逃れられずにいるはずだ」

彼の迫及はなおも続く。

「……ちようどこの辺りの集落などは、大量の荷を一時的に隠しておくのはちようどよいところと見えるが？」

「……むしろが賊を匿っている？」

村長が憤慨した様子で問いかける。

「そんなことは言っていない。我々はただ、ここの住民が賊に脅されて、仕方なく村を隠れ場所に利用させているのではと、そう考えているのだ」

「……………」

村長は顔を伏せて押し黙ってしまった。

（妙だな……）

と、アルマルクは顎を擦る。

彼らが脅されているのなら、直ぐにでも賊の身柄を譲り渡してもよいはずである。ここの住民が賊を庇ったところで、彼らには何の益もないのだ。

（ほんとうに何もないというのか？）

しかし偵察によれば、確かにこの村で、怪しい騎士や魔道士といった者の姿が認められているのだ。それに、ここで引き下がっては、都督への面目も立たないし、だいいち、わざわざ百騎もの大部隊を引っ提げてきて、仰々しくこんなちっぽけな村を囲んでおきながら、やっぱり何もなかったでは済まされない。

「……もう良い。念のため、村の中を調べさせてもらうぞ」

アルマルクが部下に目配せすると、強制捜査は直ちに開始された。

彼の心配を他所に、半時もしないうちに騎士らしい男がひとり、引き連れられてきた。そのあとも次々と、騎士だの魔道士だのといった身形をした者どもが、民家の屋根裏や地下倉庫などから見出だされ、終いにはその数二十余名に及んだ。

その中には、深緑色のマントやローブに、骸旅団の結束の証たる兜をかぶった髑髏の印章をあしらったものを身につけている者もいた。

「やはり骸旅団の仕業か」

アルマルクは髑髏の印章を見ていった。

「なぜ庇いだてした？」

「それは……」

アルマルクの詰問に、村長は困惑して答えに窮していた。自らの意志で賊を匿ったのなら、それを罪に問われても不思議ではない。

「深手を負った者がおりましたので……見捨てるのも酷と思い、手当てをしたまでにございます」

「なに？」

みると、たしかに相当な深手とみえる傷を負った者もいる。負傷者

の額や腕には清潔な布が巻かれており、懇ろに手当がなされてある。
(どうも、この者たちがキャラバンを襲ったものとみて間違いなさ
そうだが……?)

アルマルクは、賊の傷を見ながら考えた。負傷者がいるのも、キャラバンを護っていた守備部隊との間に、小競り合いがあったからに
違いない。

「……まあよい。お前たちの行いを咎めはすまい」

結果として、今回の搜索は十分な成果をあげたといえる。アルマルクも、村人たちの純粋な親切心まで罪に問おうとは思わなかった。
——あとは奪われた荷を取り戻すのみ。

骸旅団の構成員は数珠つなぎにされ、はや観念した様子で処置を待っている。

が、その中に一人、佯然しょうぜんと胡坐をかいている者がある。

「おい、お前」

「……………」

アルマルクがその者の目の前で呼びかけても、男は眉ひとつ動かさない。

「名は？」

「……レッド。レッド・アルジール」

「お前が頭か？」

「そうだ」

「奪った荷をどこへやった？」

「そんなものは知らん」

「しらをきるつもりか。今朝がた問屋商人のキャラバン隊を襲撃して荷を奪ったのは、お前たちであろうが」

「全く身に覚えがない」

(こやつ……)

アルマルクは腰に佩いた長剣をすらりと抜き放つと、その切っ先をレッドの鼻先に向けた。

「……手荒な真似はしたくない。荷をどこへやったか。言え」

「……………」

剣を向けられてもなお、レッドは全く動じない。それどころか、余裕綽綽たるその態度は、むしろアルマルクを圧倒しているようでもある。

「この村をひっくり返そうが掘り起こそうが、無いものは無い」

レッドは、差し向けられた剣の刃よりも鋭い双眼でアルマルクの顔を見返して、言った。

「たしかに我らは、巷に骸旅団と呼ばれているものに違いないが、今ここにいる者たちは誰ひとりとして、あなたのいう追い剥ぎには加担していない。そのことは誰よりも、ここの牧人^{まきこうてい}たちがよく知っているはずだ」

レッドの眸に揺らぎはない。

（…………どうなのだ）

抜き払った剣はそのままに、アルマルクは横目で村長に訴えた。

「……は。彼のいうことに間違いは無いかと」

やや躊躇の色を見せながらも、村長はアルマルクの視線に応えていった。

「彼らがこの村に助けを求めに来たのは、三日前のことでございます。それ以来、彼らはひたすら警戒した様子で、今日までじっと身を潜めておりましたから……」

「三日前だと？」

アルマルクは無心にその険しい顔を村長のほうへむけた。村長はその表情にたじろぎつつも、さらに言葉を続けた。

「……はい。三日前の早朝でした。盗賊を匿うべきではないと言う者も当然おりましたが、わたくしの一存にて、怪我人の面倒だけでも看ようと決めたのでございます。はじめのうちは、わたくしどもも用心しておりましたが、彼らは略奪することも、村人に暴力をふるうこともありませんでしたし、それどころか、われわれの手当てに対しては礼を以て応え、昨日などは、牧の家畜を狙ってきたクアールの群れを彼らに追い払っていただきました。それに今朝とて、

村を出た者はありませんでしたし、まして略奪した大量の荷なども見た覚えはございません」

そこまで言って、村長は固唾を呑んで心配げな目をレッドのほうへ向けた。

アルマルクは、再びレッドの方に視線を戻した。目下に縛められている騎士は、尚もその綽然たる態度を崩していない。彼は、刃の先にある男の顔をしばらく鸚視^{がくし}していたが、やがておもむろにその切っ先を下ろすと、長剣を元の鞘に収めて、

「……荷がほんとうに隠されていないか、もう一度調べろ」と一言、部下の騎士に指示した。

で早速、村の至るところで土が掘り返され、倉の中身が掻き回されたが、一向に奪った荷らしいものが出てくる様子はない。

そしてついに、

「懸命に搜索しましたが、それらしいものはどこにも……」

と、搜索班も音をあげてきた。そんな様をみて、レッドは口元に薄ら笑いすら浮かべている。

「……わかった。もういい」

アルマルクは深く溜め息をついて、荷物捜査を打ち切った。

どちらにせよ、ここに繋がれている者共は国家認定の過激派集団である。犯罪の証拠が拳がらなかったとはいえ、今後どんな火種になるとも知れない連中をここで野放しにして置くわけにはいかなかった。

「貴様らが追い剥ぎに加担していないというのは確かなようだ。……が、身柄はこのままガリランドに送還し、都督閣下の検断を仰がねばならん」

「……わかっている」

レッド以下、骸旅団の者たちに抵抗の意思は見られない。

アルマルクが命ずると、すぐさま北天騎士団の騎士たちが駆け寄ってきて、骸旅団の構成員を村の囲の外まで引っ立てていった。

アルマルクは踵を返して、軍用チョコボの上にひらりと跨ると、

「騒ぎだてしてすまなかったな。今後骸旅団の輩を見かけたら、ただちに北天騎士団に知らせるように」

と、村長を見下ろしていった。

「彼らはどうなるのです？」

村長は、騎上のアルマルクに問うた。盗賊の輩にも、牧人たちの温情は移るものらしい。連行されていく骸旅団の騎士を見送る村人たちの眼にも、どこことなく憐みに近いものがあつた。

「処断は都督どのが下される。彼らが追い剥ぎの下手人でないことは、いちおう私から都督どのに申し上げるが……骸旅団に対する処罰は近頃容赦なきものとなつてきている。市民の面前での公開処刑となるもやむをえまい」

「そんな……」

アルマルク自身、北天騎士団の骸旅団に対する弾圧は、近頃行き過ぎて思うように思えなくなつた。

が、そんな情け心が胸に芽生えたところで、どうこうできる彼の立場でもなかつた。

青ざめる村長の顔を眼の隅に残しながら、アルマルクはチョコボの横頸を叩いた。

（いったいどうなっている？ 荷は？ キャラバンはどこへ消えたのだ？）

彼は、納得のゆかない顛末に首を捻っていた。

（やはり、街道のどこかで足止めをくらつているとしか……）

「ん？」

その時、アルマルクを乗せたチョコボの足下をととと、と駆けていく小さい影を捉えて、彼は咄嗟に手綱を引いた。顧みると、この村の子供らしい少年が、虜囚の列の先頭を曳かれていくレッドに近づき、何事か囁いている。

「おい、その坊主！」

騎士のひとりが少年に気づいて引き離そうとしたが、少年は素早くその腕をかくぐると、次の瞬間にはもう村の中に消えていた。

「なんだあれは」

騎士がレッドに訊くと、

「……世話になった家の子供だ」

と、レッドは平然と答えた。騎士はアルマルクの方を見て判断を仰いだ。アルマルクは首を横に振っただけで、すぐ前に向きなおった。

谷間を抜けて街道の枝道に入ると、村を囲んでいた騎士たちも続々と一行に合流した。

「村を抜け出した者は？」

アルマルクは、包囲作戦の指揮に当たらせたと者に訊いた。

「ありませんでした」

「そうか。ご苦労だったな」

「お……これはまた、ずいぶんな数を挙げられましたな」

「うむ。が、キャラバンの荷は取り戻せなかった」

「……？ こやつらの仕業ではなかったのでしょうか？」

「ああ。どうやら、レアノール殲滅戦で落ち延びたものたちらしい……」

そこで、ふと見た西の空に眼を留めて、アルマルクはチョコボの歩みを止めた。街道の先、ガリランドの方角である。

「隊長っ！ あれを！」

他にも異変に気づいたらしい騎士たちが、西の空を指差している。

「……ああ。私にも見えている。」

一筋の煙であった。それもただの煙ではない。北天騎士団の間で用いられている、緊急を知らせる赤い狼煙であった。

第一章 持たざる者 4. 獅子と狼・上

騎士アルマルク指揮の下、大々的に骸旅団の集団検挙が敢行された件の村――^{くだん}

牧人たちがささやかに営むこの谷合の一村落は、土地の人間からはコロヌルだとか、クヌールだとかいう名で呼ばれており、いずれも、この地方の遊牧民の古い言葉で”水の出るところ”というような意味を持つらしい。

それにしては、この村に水らしい水は見あたらない。井戸はあるが、目に見える形での水気は一切ないのである。

しかし、この美しい谷を形成したものが、悠久の水の流れであることは疑いようもなく、ここに人が移り住むようになるずっと前、コロナス河が現在よりもっと西側を流れていた時代には、この地から豊かな流れを滾滾と大地に注ぎこんでいたのである。

その頃の名残らしきものが、今日も谷の奥深くに窺える。

それは、真っ暗な空洞であった。

その入口は、空を仰ぐような格好でほぼ真上に口を開けており、周囲は背の高い灌木で覆われているため、この豎穴の存在を知る村人以外の者なら、うっかり足を踏み外して滑り落ちかねない。

だから、村人たちは、よそ者にはここに近づかないよう忠告することにしていた。現に村人でも、ここに転げ落ちて怪我をする者が今だあとを絶たないのである。

内部は意外と広く、ずんずん下に降りて行けば、やがて巨大な地下水脈に達する。

どういう自然の悪戯か、はるか昔は地上を穿っていた流れが、今は地の底に潜っているのである。その流れに逆らうように洞窟をひたすら上っていくと、やがてベルベニア山系の一角、レウス山の中央に出る。

が、そこに出るまでの道のりが容易ではない。

この穴ぐらは半ばゴブリンの巣と化しており、よほど腕っ節が良いか、さもなければ洞窟の住人たちを黙らせるのに十分な威嚇魔法を扱えなければ、およそ彼らの熱烈な歓迎を避けて通ることはできないのであった。

そんな危険極まりない魔の巣窟のヌルヌルした壁を、ちらちら照らしながらゆっくりと進んでゆく二つの明かりがあった。

「ミルウーダ、この辺で少し休みにしませんか？今朝からずっと歩きっぱなしだ」

二つの明かりのうち、後ろをついていくほうの影がいった。まだ幼さの残る少女の声だ。その声が、洞窟の壁に幾重にもこだまして、やがて奥の暗がりには吸い込まれていく。

「しっ……！　ゴブリンどもに感づかれるとまた面倒だ」

「……すみません」

松明に照らされて、壁に映し出されたシルエットが少し縮こまる。

その輪郭は、実に奇妙な形をしていた。

ちょうど人間の頭にあたる部分が、竜騎士の扱う長槍の先端よろしく円錐形をなしているのである。

むろん、それは頭そのものではない。

この少女は、黒魔道士なのである。

頭の尖りは、世に黒魔道士と呼ばれる者たちが古より身につけている、共通の衣装なのであった。

この奇妙な装束の正式な呼び名も一応あるにはあるが、見たまま“三角帽子”だとか“尖り帽子”などと呼ばれる場合がほとんどであり、長いローブを纏い、“尖り帽子”を目深に被るのが黒魔道士たちのいわば“正装”であった。

そして今、この狭苦しい洞窟を行く少女もまた、その例に漏れず身長の上半分以上もある尖り帽を被り、薄汚いローブを地面に引きずってビショビショにしていた。

そのローブをいまいましてにたくしあげながら、松明を片手によりちよち歩くさまは、相当な難儀に見えた。

自然、前をゆくミルウーダとの距離もどんどん開いていく。彼女が後ろを振り返ると、黒魔道士の少女の松明は、だいぶ下のほうにいた。

溜息ひとつ、歩みを止めてミルウーダは少女が追いつくのを待った。同時に、周囲の壁の隙間や破れ目に注意を向けるのを忘れなかった。洞窟ゴブリンの光る二対の目が、此方を狙っているかも知れないからである。

ようやく、少女は顔が認識できるくらいの距離まで登りついた。もつとも、その顔は”尖がり帽子”の幅広のつぼと、ローブの深襟に隠されて、まったく見えないのであるが。

「エマ……そのローブはなんとかならないのか？」

少女はエマというらしい。肩で息を切らして前屈みになっているエマを見下ろして、ミルウーダが呆れ顔で言った。

「ごめんなさい……ミルウーダを守るためについてきたはずが、完全に足手まといになってますね」

「だからそのローブをなんとかしろと……」

「これですか？ これはだめです。これを着てないと、黒魔道士じゃなくなっちゃいますから」

「……………」

まだ息の揚がっているエマを差し置いて、ミルウーダはまたずんずん歩き始める。

「ちょっと待って……」

エマはあわてて後を追う。

「この先に、地上から陽の光が射しているところが見える。そこで少し休もう」

ミルウーダは、エマに背を向けたまま言った。

ほどなくして、急に開けた空間に出た。

空間の中央には地下水脈から供給された水が溜まっており、ちょっとした洞窟湖を成している。その湖面に、天井の破れ目から射す光が反射して、周囲の岩壁に水の揺らぎを灰白く映し出している。

二人は湖の縁まで降りていって、松明を地面に突き刺すと、その場にあった石の塊に腰を下ろした。

「この水は汚れていないようですね」

エマが水面を覗き込んでいった。そのまま前のめりになって、危なっかしく水をすくいとると、それを帽子とローブの間に流し込んだ。「ミルウーダも、どうです？ 雪融け水みたいに冷たくておいしいですよ」

「そうね……いただろうか」

と、ミルウーダもエマの隣に屈みこむと、片手に水をすくい取って口に含んだ。

「……ん、たしかに」

「でしょう？ あの村の井戸水がとってもおいしかったのも、きっとこの地下水を汲み上げていたからですよ」
言いながら、もう一度すくって飲む。

「ああ、そうだ、水筒に詰めて持っていきましょう。ポーションの材料にもいいかもしれない」

エマは懷から、首かけ紐付の牛革水筒を引っ張り出すと、それを湖に浸していっぱいにした。

「これで……よし、と」

最後に袋の口を紐で固く縛ると、エマは大事そうにそれを懷にしまった。

衣装のせいで見えないが、きっと満足げな笑みを浮かべているに違いない、と、エマの姿を横目に見ながら、ミルウーダは内心でそんなことを思っていた。

本人は、「ミルウーダを守る」などと言って張り切っているが、駆け出しの魔道士はいえ、こんな年端も行かぬ少女までも争いの渦中に巻き込んでしまったことに、少なからず責任を感じずにはいられないミルウーダではあった。多くの同志たちを残してコロヌルを離れる決心をしたのも、一つに、エマに対するこの責任感があった。

北天騎士団があゝの村にやってきた時、ミルウーダも当然、ここま
で連れ添ってきた同志たちと運命を共にする気でいた。

そんなミルウーダを諫めたのは、彼女の最も信頼を置く同志であ
る、レッド・アルジールであった。

「あなたは、ここで捕らわれるべきではない」

レッドは言った。

「マンダリアで幸いにも拾いえた命を、ここで無駄にするおつもり
か」

「しかし……」

ミルウーダは、友を見捨てる非情をどうしても割り切れずにいた。

「だめだ。君たちを置いて、私だけ逃れるなど……」

「あなただけではいい」

レッドは頭を振った。

「同志の内に、エマという黒魔道士がいるでしょう。ほら、ドータ
ーのスラムで拾った孤児の」

「ああ……知っている」

「あの娘を連れて行くべきです。彼女はまだ若いし、将来もある。
しかるべき場所で、そろそろ別の人生を歩ませるべきだと思うので
すが」

「それは、私も考えていた。いかんせん、当人にその気はないよう
だが」

「あなたに惚れこんでいますからね。でも、やはりここで捕まるべ
きではない。あなたにしても、ウィーグラフどのと合流し、共に再
起の旗を掲げていただかねば」

「兄は無事でいるだろうか……」

「きっと。どこかで、あなたとの再会を切望しておられるに違いな
い。ギユスタヴが離反した今、ウィーグラフどのが頼れる者は、実
の妹であるあなたを措いて他にないのですから」

「……………」

「できることなら、我らもお供したい。ですが、怪我人もおります

し、この人数ではどうしても足が遅すぎる。また敵に見つかるのも時間の問題でしょう。ここはいったん身軽になって、一刻も早くウィーグラフどのとの合流を果たし、味方の士気を高めるのが先決です」

あらゆる点において、レッドの言は的を射ていた。

さらには、事態が彼女に一切の予断を許さないこともあった。

終に、ミルウーダは仲間と袂を分かち決心をした。

村の子供に案内させてこの洞窟に入ったのは、今朝早く、北天騎士団が強制捜査を始めた頃であった。ミルウーダはその子供に、「生きて再び見えん」と、レッドへの言伝を頼んで、エマと共に竪穴の闇に潜ったのである。

——そして、今。

かくのごとく地下の深みに追いやられ、ミルウーダは自身の行く末に、果ては「生ける骸たち」の名のもとに集った同志たちの行く末に、暗澹たる思いを抱かずにはいられないのであった。

(我らの志は……)

ミルウーダは胸に手を当て、今に至る軌跡を反芻してみる。

骸旅団を取り巻く状況の悪化を決定づけたのは、二月前、レアノール野の決戦における大敗であった。

この敗戦は、長らく骸旅団の団結を支えてきた基盤に、致命的な歪みをきたしたのである。

決戦の日は、畏国暦一〇二〇年金牛の月二十九日。

骸旅団の精鋭二千に、各地で蜂起した土民を合わせると、義軍はおよそ一万。対する北天騎士団は、多目に見積もってもせいぜい一千ほどの小勢。兵の常識からすれば、負けるはずのない戦であった。「この一戦に勝利すれば、世の中は変わる」

義軍兵の誰もが、そう信じて疑わなかった。

ラッツ砦での誓い以来、骸旅団、ひいては畏国全土の窮民の向心

力たり続けた騎士ウィーグラフ・フォルズもまた、必勝を目前に半ば驕りを禁じ得なかった。

「北天騎士団を率いるは、畏鷗大戦の雄、ザルバッグ・ベオルブ。相手にとって不足はなし」

と、戦を前にその黄金色の双眸を輝かせていた。

彼もまた、前の畏鷗大戦、すなわち五十年戦争においては、骸騎士団の一志士として最前線で剣を振るっていた者である。

そんな彼にしてみれば、ザルバッグ・ベオルブという男は、単に仇敵としての存在だけではあり得ず、かつては祖国のために同じ旗の下に集った戦士として、あるいは尊敬に近い念もあつたに違いない。今はこうして敵味方に別れて睨みあっているのも、それは、ひとえに生まれついた”運命”^{さだめ}の違いでしかなく、このウィーグラフも、その武勇と才覚からして、それなりの門に生まれ出でていたならば、ザルバッグとも肩を並べるほどの英雄となっていたかもしれないのである。

無論、そういった考えにとらわれて、己の出自を呪ったことも一度や二度ではない。

ウィーグラフと、彼より九つ年下の妹ミルウーダは、ルザリア王室領内の農村に生まれた。

いちおうその辺りの農家では一番大きな耕地を有する家であつたし、平民階級にしては比較的高い生活水準にあつたこともあり、子どものうちから働き手として駆り出されるのが当たり前な一般的な農家の子らとは違って、幼くから、その地方の富裕層の子弟などに混じってしばしば学問をする機会などもあつた。

そういった特異な素質もあつて、畏鷗大戦末期に於いては、開戦当初から平民の義兵団として一大勢力を誇っていた骸騎士団に参加し、当時にして二十歳を少し出たばかりの若年の騎士ウィーグラフは、めきめきとその頭角を現していった。

そして、ここにいま一人、非凡なる勇と才覚を兼ね備えた青年が登場する。

その名をギスタヴ・マルゲリフといい、ウィーグラフよりもふたつばかり年下であったが、騎士団に参加した時は既に、百名あまりの山賊どもを従えていた。

一見するに、上背はそれほど高くなく、剣士というよりは狡猾な策士を想わせる風貌であった。シルバーブロンドの長髪と灰褐色の切れ長な瞳は、周囲の者に荒野を彷徨く”狼”を連想させた。

人の見かけというのはなかなか裏切らないもので、やはり彼は騎士らしい、正面きった華々しい戦法には拘らず、伏兵や巧みな罠を用いた奇襲作戦を得意としていた。

対するに、騎士ウィーグラフの信条は、ひたすら猛進的な正攻法にあった。戦の趨勢を全て、己が統率力と士気の鼓舞を以て決してしまうのである。そして、回りくどい策など用いずとも、あまたの戦闘において、彼は例外なく勝利を収めてきた。

その武勇はまさに「獅子」の如しであり、骸騎士団における若き実力者として、「狼」のギスタヴと好対照をなしているふうであった。

自然、志士たちの人気は、”狼”よりも、この”獅子”の方に集まっていくのであったが、かといって、ギスタヴがつまらぬ嫉妬心に駆られるようなことはなく、「すべては、骸騎士団のため」と、ギスタヴは喜んで裏方に回り、汚れ役に徹してきた。

こうした二人の若い力により、骸騎士団は、戦争末期に至ってからも、正規軍たる北天騎士団・南天騎士団にも劣らぬ戦闘能力を有し得たといわれている。

しかし、この度のレアノール野の決戦を前にして、それまでうまく作用していた二本の軸が微妙にぶれたしたのである。原因は、敵将ザルバッグにあった。ここへきて、首領のウィーグラフが、ザルバッグとの決戦に拘りはじめたのである。

長らく、”宿命の好敵手”と自ら位置付けてきた男が、目の前に陣取っている。しかも、ラッツ砦での蜂起からレアノールに至る諸戦で、反乱軍は負け知らず、その勢力も、蜂起時の数倍に膨れ上が

っている。

「勝負を決するなら、今において他にない！」と、彼が俄然意気込んできたのも無理はない。五十年戦争で使い捨てられた戦士たちも、積年の恨みを今晴らさんと意気込んでいる。

この時、反乱軍は炭鉱都市ゴルランドをその手中にいられていた。王都ルザリアはもう目前である。

「友よ、聞いてくれ」

ギュスタヴは、決戦を前に異様な昂りをみせている作戦会議の場において、あえてウィーグラフに意見した。

「もはやここまで来れば、対等に貴族議会と渡り合える。これ以上無用な戦を続けて、我らにいったい何の利があるというのだ」

「……なんだと？」

ウィーグラフは、なにを言っているのかわからないとでもいうふうな、興奮した目をギュスタヴに向けた。

「我々はゴルランドを取った。奴らの心臓を握ったのだ。あとは、目前の北天騎士団を蹴散らして、ルザリアを目指すのみではないか」
「そうだ。我らは心臓を握った。だからこそ、あえて今は軽率な行動を慎み、反乱軍は解体して、我々に有利な状況のまま和平交渉に持ち込むべきではないのか？」

「馬鹿な！」

ウィーグラフは憤慨していった。

「貴様の目は節穴か？ この圧倒的兵力差が見えぬとでも？」

「わかっている。しかし、相手はあのザルバッグ・ベオルブだ。だいいち、この兵力差もおかしい。相手に何か策があるのかもしれない。今部下に探らせているから、うかつに前に出るべきではない！」

「ほう……ここへきてギュスタヴどのは怖気づいたと見える」

「まさか！ 俺は同志たちの行く末を思っ……」

「そんなに怖いなら、貴様だけここに残って、満足のいくまで貴様の従順な犬どもに敵を嗅ぎ回らせておけ！」

会議はこのまま、ウィーグラフの主戦論が貫かれ、多くの者が彼

に賛同した。一方ギスタヴは、僅かな同志を募り、情報が出そろ
うまでゴルランドに残ることとなった。

ウィーグラフ指揮の下、ただちに総攻撃の準備が開始され、二十
九日の早朝、反乱軍総勢一万は、朝靄のレアノール野に続々と繰り
出した。

「やっとこの時がきた!」

「今こそ、貴族どもの肥えた腹に、我らの恨みの剣を突き立ててや
るのだ!」

全軍の士気は、今や奮えんばかりである。

「……………」

ギスタヴは、人種も装備もバラバラな土民兵の群れを目下に、複
雑な心境を面に隠せずにいた。

(いくら数を増やそうと、所詮は烏合の衆ではないか……)

彼の抱く不安の多くは、この点にあった。今までの戦も、ほとんど
勢いだけで押し切ってきたといってよい。天才的な統率力を持つウ
ィーグラフでさえ、この雑軍を扱いきれないことは、とうに彼
も見抜いていた。

「ギスタヴ」

「お、ゴラグロスか」

見ると、分厚い毛皮の鎧を身につけた大男が足早に歩み寄ってくる。
不精髭を生やしたいかつい顔に、なにやら深刻な様子を見せている。

ギスタヴ以上に、剣士らしからぬ風貌をもつこの男は、その名
をゴラグロス・ラヴェインといい、もとはベルベニア地方の山間を
縄張りとしていた山賊の頭目であったが、あるとき、なんの前触れ
もなく一味の根城に現れた浪人に説かれ、大挙、一味を引き連れて
骸騎士団に参加することとなった者である。

その浪人というのが、ギスタヴであったことは言うまでもない。
以来、互いの実力を認めあい、今日まで支えあってきた仲である。

「ウィーグラフはザルバッグ將軍との決着に逸っているようだな」

「ああ。いちおう説得は試みたのだが」

「やはり駄目か」

「うむ。獅子が目前に肉塊を置かれたとなつては……で、”草”のほうは？」

「それなんだが……」

ゴラグロス配下の「草」は、昨晚遅くに敵本隊の背後に回り込み、王都に通ずるカルバラ峠の山道付近に探りをいれていたのである。レアノール野と王都ルザリアとの堺にあたるこの峠は、旅人たちの間でも難所として知られ、起伏の激しい複雑な地形をなしている。

で、浪人として畏国じゅうを遍歴した経験から、諸国の地理に詳しいギスタヴは、レアノール野が決戦の地と決まったときから、この峠に注目していた。

「兵を極めたザルバツグ將軍なら、この地形を利用しないはずがない」

彼は直感的にそう判断した。

「まず將軍みずから寡兵と見せかけて我らの目前に陣取り、こちらが総攻撃を仕掛けたところを巧みにこの地に誘い込み、伏兵を以てこれをせん滅する。狭地では大軍も役にはたたない。そうなれば、我らはなすすべもなく敗北を喫するだろう」

と、こう予見を立てて、その危険を昨日の作戦会議で説こうとしたのだが、大将のウィーグラフをはじめ、誰一人聞く耳を持たなかったのは、先ほど述べたとおりである。

案の定、ゴラグロスの”草”の報告によると、伏兵そのものは確認できなかったものの、カルバラの峠近辺に北天騎士団の哨戒部隊がうろついております、しきりに警戒の目を光らせていたのだという。

「間違いない！ 敵は奇計を用いる気だぞ！」

確証を得たギスタヴとゴラグロスの二人は、さっそくチョコボに飛び乗ると、ウィーグラフのもとへ駆けて行った。

「だが……伏兵そのものは見当たaranのだな？」

ギスタヴが常ならぬ熱弁をもって諭すと、ウィーグラフはやっと彼の警告に耳を傾けた。

「ああ。しかし、伏兵はあると思っていて間違いはない。うかつに攻めたてて深追いするな」

「……心得ておこう」

いちおう危機は伝わった。

あとは、ウィーグラフの指揮が復讐に猛る兵たちをうまく抑えきれるかにかかっていた。

日がレアノール野の東の地平線を完全に離れた時、ついに決戦の火蓋は切られた。

兜を被った髑髏の戦旗が蒼天に翻り、北方出身のつわものが吹き鳴らす巨大な角笛に、野蛮な雄叫びが応える。

過半数は歩兵であった。装備も満足に整っていない者がほとんどである。手に手に曲刀だの鍬だの樵^{きこり}の斧だの、さまざまな得物を持ち、真っ直ぐ敵にぶつかっていく。

迎え撃つ北天騎士団は、揃いも揃って白銀の鎧兜に長柄の槍を持ち、整然と隊伍を組んでいる。もちろん、全員が騎兵である。狂った獣のように迫ってくる大軍を目の前にしても、身じろぎひとつしない。

これぞ、世に名高き”白鷺隊”であった。

前の大戦より、ザルバッグ將軍手ずから育てあげた、北天騎士団の誇る精鋭中の精鋭である。

その陣頭に立つザルバッグ將軍は、黒鉄の鎧に身を固め、愛用の黒羽に跨り、白一色の編隊の中であって、さながら両翼を広げた白鷺の”眼”のごとく、一際異彩を放っていた。

「いざ！」

彼が白銀の騎士剣を目の前に掲げたのを合図に、横一列の隊伍は、両翼の先端部分を先行させるような格好で、怒濤の進撃を開始した。この偉容を前にして、流石の狂兵たちも怯みをみせる。

レアノール野のちょうど真ん中あたりに、深いところでも大人の

腰がつかるくらいの浅瀬がある。

両軍は、そこで激突した。

といっても、正面きってぶつかったというよりは、反乱軍は巨大な鷲の翼に包み込まれるようにして、左右から猛烈な攻撃を受けた。この陣形は、遙か東方の異国より伝わった兵法に倣ったものだという。

北天騎士団の騎兵たちは、混乱する敵の歩兵たちを長槍でもって優々と串刺し、思う存分殺戮を加えたあと、途中で味方とすれ違い、十分離れたところで引返し、再び左右から挟撃する。この一連の動きを繰り返すのである。

俯瞰するに、それは巨大な猛禽の羽ばたきに似ていた。

鷲が羽ばたく度に、反乱軍の兵士たちは水飛沫となって、浅瀬の流れを血の色に染めていく。

そうした一方的な攻勢が、しばらく続いた。

「まずい……！」

ウィーグラフはようやく自軍の危険を感じとったが、もはや退くに退けない状況にあった。

（しかし……数ならばまだこちらが圧倒している！）

獅子の血が、彼の体内で沸沸と煮え始める。

「兄さん！」

副将格のミルウーダが、栗色の髪を振りかざしてウィーグラフのチヨコボに並んだ。白い顔が、血と汗にまみれている。

「このままでは危ない！ いったん退いて……」

「無理だ。今退いたならば、味方は完全に崩れる」

「しかし……」

「だまれっ！ それでも退くというなら、我が妹とて容赦はせんぞ！」

「くっ……」

ウィーグラフは気合の一声とともにチヨコボの横腹を蹴りこむと、敵味方の入り乱れるなかを単騎突入していった。

「ザルバッグ何するものぞ！」

彼は、手近な敵の騎兵を力ずくで引きずり下ろすと、その長槍を奪って、次々と騎上の敵を叩き落としていった。

まさに獅子奮迅の活躍である。

その雄姿を目の当たりにして、反乱軍の戦士たちも俄然士気を盛り返してきた。

「ウィーグラフに続け！」

との声に、これまでに無かった連携すら見せ始める。彼らの雑草根性とでもいうべきものは、こういう時に異様なまでの生命力を発揮する。

瞬く間に、形勢は逆転した。

もとより数で勝る反乱軍である。こう俄かに団結されると、殲滅戦に優れた陣容も容易には効かなくなってくる。

(ひとまずはこんなところか……)

ここで軍の趨勢を見極めたザルバッグは、騎士剣を頭上高く突き上げると、その切っ先をまっすぐ北へ向けた。

と同時に、敵に攪乱され散り散りになっていた騎兵たちは、ザルバッグの元に収束をみせはじめた。

「逃がすか！」

当然、勢いづいた反乱軍はその背を追いかける。

その追撃を適当にあしらって、追いつかれるでもなく引き離すでもなく、北天騎士団の精鋭たちは退却を続ける。

「いかん……追うな！」

その時、後方にあって冷静に敵軍の動きを見極めていたギュスタヴは、彼の危惧していたとおりのことが、今まさに行われようとしていることに気づいた。

「罠だっ！ 引き返せ！」

しかし、誰一人足を止めるものはいない。

彼らにとって、この戦は、自らを塵芥の如く掃き捨ててきた者たちに一矢を報いる、またとない好機なのである。積年の怨みつらみ

が、今や彼らを盲目的な追撃へと駆り立てていた。

「ウィーグラフ！ どこだ！」

もはや反乱軍は、完全にその統制を失っていた。堰を切った濁流は、きわめて物理的に、カルバラ峠の入口に流れ込んでいった。ここへきて、”白鷺隊”は急激にチョコボの脚を速め、みるみるうちに反乱軍の追手を引き離していった。

「だめだ……追ってはならん……追っては……」

「ギユスタヴ！」

猛牛の群れのような反乱軍の前方から、ゴラグロスが息を切らして駆け戻ってきた。毛皮の鎧のあちこちに折れた矢が立っている。

「やはり敵の奇計だ！」

「どうした……？」

「峠道に味方が差し掛かったところで、いきなり足元がぬかるみだした。そのまま身動きが取れなくなつて……あとは矢の嵐だ！」

「風水士（自然の力を利用するのに長けた戦士）か……」

「俺はなんとか逃れたが、先頭の味方は壊滅した！ このまま闇雲に追えば全滅するぞ！」

見れば、敵の術中から辛くも逃れ出た兵士たちが、死に物狂いで此方に敗走してくる。その泥人形のような姿を追って、林間に潜んでいた北天騎士団の伏兵も続々と姿を現す。

「くっ……」

流星の”狼”にも、焦りの色がみえる。

軍の統制を司る者の姿も見えぬとあっては、作戦上の退却すらかなわない。

もはやこれまで、と観念したものか、ギユスタヴとゴラグロスは、チョコボの首を巡らすと、ゴルランド方面を目掛け、必死に鞭を振るっていた。

「ひとまずはゴルランドまで退いて……」

というのが、両名の胸中であつたに違いない。

が、そんないちるの望みも、はやゴルランドの城壁が見えてきた

ところで、虚しい塵となり果てた。

「あれは……」

絶句する二人の目線の先にあったのは、もうもうと黒煙を上げるゴルランド市街区の姿であった。

総崩れの際を突き、北天騎士団の副将マルコムが、別動隊を率いて迅速にこれを奪還したものである。

「こうなってしまうては……」

ギユスタヴは力なく項垂れた。うなだ

「もはや貴族議会との交渉も望めん。何もかもおしまいだ」

と、やむなく進路を変え、あとはどこをどう逃げたものか、皆目見当もつかなかった。

第一章 持たざる者 5. 獅子と狼・下

かくして、レアノール野の決戦は、正午を待たずにその決着をみた。

反乱軍にしてみれば、あまりにも惨めな敗戦であった。

当初一万近くあった兵員も、最終的に生き残った者は千にも満たなかった。

さらには、反乱軍の首領たるウィーグラフの生死も不明、ギウスタヴも、ゴラグロスも、その後の行方を知るものはなかった。

ミルウーダは辛くも死地を逃れ、僅かな味方と共にガリオンヌ方面へと敗走した。

そして、六日かけてマンダリアの古砦にたどり着き、そこに籠って北天騎士団の追撃部隊に最後の抵抗をみせたのが、双児月四日のこと。

ここで北天騎士団の包囲に遭いながらも、偶然捕らえたベオルブ家の末弟の献策で、なんとか窮地を脱し得たのは、不幸中の幸いでもいふべきか。

その後、北天騎士団の目をかいくぐりながら各地の砦跡や洞窟を転々とすること約一月、ミルウーダ一行はやつとの思いで骸旅団の根拠地、“蔓草砦”に入った。

この“蔓草砦”というのは、その昔、ガリオンヌ南方を治めていた有力貴族が築いたといわれる小規模の山城で、度重なる戦乱を経て、いつしか密林の奥深くに忘れ去られていた遺構である。正式な名称を知る者はなく、ただ古びた城壁のあちこちに蔓草が巻き付いているので、骸旅団の者たちの間では、“蔓草砦”と呼ばれていた。ミルウーダも、落ち延びた者は皆いったんこの“蔓草砦”に集まるだろうと予測して、またあわよくば、兄ウィーグラフとの合流も果たせるものとして、まずはここを目指して来たのである。

案の定、“蔓草砦”には、その数百名にも満たないものの、レア

ノールから落ちてきた者たちが避難していた。その中には、ギスタヴやゴラグロスの姿もあった。しかし、ウィーグラフの姿は見られなかった。

「兄は……？」

と、ミルウーダはその安否をギスタヴに問うた。彼は頸を振って、「わからない」と答えた。彼の目元にも、疲労の痕がありありと刻まれていた。

「死んだ……と言う者もいる。が、確かな事は分からん。俺も、ここまで落ち延びてくるのが精一杯だった」

「……………」

「しかし、今のところ何の情報も入ってきていない。おそらくは、どこかで生き延びているものと思われる」

ギスタヴ一行が“蔓草砦”に入ったのも、ミルウーダ一行の到着するほんの五日前のことであった。敗走する途中、味方とはぐれたり、魔物の群れに襲われたりしながら、ようやく砦にたどり着いたものの、皆憔悴しきって、立ち上がることもすままならないような状態であったという。

「さんざんな敗北を喫したあげく、首領のウィーグラフまでも行方知れずとなっては、これからどうしたものかと、誰もが途方に暮れていたところだ」

ゴラグロスが言った。

「そんなところへ、あんたが生きて戻ってきてくれただけでも、皆だいぶ気を持ち直すことができたはずだ。ひとまずは休息をとって、それから今後の方針を話し合おうじゃないか」

「……………」

ミルウーダは無言の頷きを返し、その場を辞した。

兄に会えなかったことの落胆もあるが、とにかく今は身心ともに疲れきっていた。

身体じゅうの傷も、今さら思い出されたかのように疼きだしていた。

「……みんな、今はゆっくり休んで」

ミルウッドは、レッド以下、ここまで連れ添ってきた同志たちにも休息をとるように言い、自身、久々に身を横たえて束の間の眠りに落ちた。

翌朝早く、蔓草砦の地下室には骸旅団の主だった者達が集い、今後の活動方針が話し合われていた。

「まずは……活動資金の工面からだ」

口火を切ったのは、ギユスタヴであった。

「装備を整え、糧食を確保するのにも、先ずは金が必要。問題は、その金をどうするかだが……」

「ゴルランドで炭坑夫でもやるか？」

ゴラグロスが冗談をいうと、その場にいたギユスタヴの取り巻きたちが、どっと沸いた。笑いながら、それでも棘のある彼らの視線は、ミルウッドに向けられていた。

「……………」

ミルウッドは、その視線を痛いほど感じていた。どんな言い訳を試みても、結果的に、ギユスタヴの忠告にほとんど耳を貸さなかった兄ウィーグラフの失策によって、ゴルランドを奪い返されたばかりか、再起不能なまでの損失を被ったという事実は、やはり疑いようのないものであった。

「まあ、それはともかくとして」

ギユスタヴは、両の手でその場を収めながら、続ける。

「我らは、これまで、崇高なる使命のもと集い来たった志士団たるを自負してきたし、今をもってその信ずるところは何ら変わるものではない……しかし一方で、我らは現実も見なくてはならない。我らも人間だ。生きなくてはならない。志は高くとも、それが叶うのは、生あっての上だ」

と前置きしてから、彼なりの現状打開策を打ち出した。

「今や我らを取り巻く状況は、明日をも知れぬものとなっている。ザルバッグ・ベオルブが、この蔓草砦を見つけるのも時間の問題だろうし、もはやここに身を潜めて機が熟すのを待つ余裕もない。かくなる上は手段も選んではいられないが、かといって物盗り追い剥ぎを続けたところで、日々食いつなぐのがやっとならう。我らの目標は、あくまで再起の旗を立てることにある。そのためには、効率良く、かつ大量の軍資金をなるべく短期間に集める必要がある。そこで……」

彼がここで一倍声を落とすと、一同は額を寄せて、その言葉に耳を傾けた。

「……………」

一呼吸置いて、彼は計画の核心を披露した。それを聞いて、面々の表情は一瞬凍りついた。

「……誘拐？」

「そうだ」

「いったいだれを？」

「候補は複数ある。が、どれも貴人や、権力者の身内の人間だ」

「うまくいくのか？」

「必ず」

——すなわち。

現在、相当な地位家柄を持つ貴人、及びその身内を誘拐し、莫大な身代金を求める。誘拐計画はなるべく少人数で実行し、万一失敗した時のリスクを抑える。

実働可能な人員が極端に少ない今、綿密な計画さえあれば、最も効率良く大量の軍資金を調達できる可能性があるのが、この”貴人誘拐作戦”というわけである。

この突飛な作戦は、けっしてギユスタヴの”やけくそ”などではなく、すでに彼の脳内で、綿密な構想が出来上がっているようであった。しかしその詳細は、あえてこの場では伏せられた。作戦実行までに、徹底的な秘密主義を貫くためである。

ギユスタヴ派の者たちは、この計画に一縷の望みを託したようで、うち揃って賛成の声を同じくした。

その中であって、あからさまに顔色を曇らせていたのは、他ならぬミルウーダであった。

「……無理に協力しろとは言わん。君たちには君たちのやり方を通してもらってかまわんが？」

押し黙っているミルウーダの様子を察して、ギユスタヴが落ち着きを払った声で言った。ギユスタヴ派の面々も、ミルウーダの表情に半目を注ぐ。

（人の道に外れた行為だ……！）

声にならぬ声を、彼女は内で囁みしめていた。かといって、彼女はそれを女の身ゆえの甘さとは思っていなかった。

——やがて。

「……そうさせてもらおう」

と、ミルウーダはそれだけを言って、席を立った。

「ここより他に行くあてはあるのか？」

去っていくミルウーダの背を、ゴラグロスのだみ声が追った。

「……兄と合流し、ともに再起を図る。それまでのことだ」

「そうかい。では、せいぜい死なぬようにな」

ギユスタヴを取り巻く者たちは、呆れ顔を隠そうとしなかった。

「兄妹揃って、手に負えぬ頑固者よ」とでも言わんばかりである。

「……………」

ギユスタヴはというと、眉ひとつ動かさず、円卓上の蠟燭の炎をじっとその瞳に映していたが、一言、

「ウィーグラフによろしくな」

と言ったのを聞いたか聞かずか、ミルウーダは足早に石の階段を上って行った。

その日のうちの夜半、ミルウーダにつき従う僅かな人数は、蔓草

砦を去った。

ミルウーダは、己の考えがギユスタヴの方針と相容れぬものであることを、これまで連れ添ってきた者たちに説き、選択を各々の判断に任せた。

彼女自信、ギユスタヴの策が現状もつとも理にかなっていることくらいは、重々承知していた。ただ、彼女の中にある良心とも正義ともつかぬものが、容易にそれを受け入れないのであった。

しかし、もつと単純な理由で、多くの者たちはギユスタヴと行動を共にすることを選んだ。

それはすなわち、”生きたい”という甚だ人間らしい本能であった。彼らは、ミルウーダほど潔く大望に殉ずることができないのであった。

もつともミルウーダには、彼らの意思を咎めるつもりなど毛頭なかった。

「星々のお導きあらば、再び見えることもあろう」

砦に残ることを選んだ者たちにそう告げると、ミルウーダは赤羽の背に跨り、レッド以下二十名ほどの同志を引き連れ、月の仄暗い空の下を北へ向け、ひた走っていった。

マンダリア平原の南端を突っ切り、間もなく東の空が白んできた頃には、一行はガリオンヌ領の広大な盆地を見下ろす丘の頂に立っていた。目下には、魔法都市ガリランドの尖塔群がそびえ立ち、南北を走るフォングラード街道と東西を横切るサドランダ街道とが、ここで交わっている。

「ガリオンヌ領内は、どこも北天騎士団の目が光っています。まずは、ルザリアへ入りましょう」

とのレッドの意見に従い、一行は山麓の密林地帯の道なき道を東の領境を指し、黙々と進んだ。

半日ほどで、一行はライナス河の支流のひとつ、コロヌル川へぶち当たった。川幅はさほど広くないが、底が深く、流れも速いので、チョコボの脚ではおろか、泳いで渡ることもできそうにない。

ミルウーダは、この川縁で暫時休息をとらせ、その間、レッドともこの川を渡る方策を考えていた。

「一番近い橋は？」

「たしか、ここより北へ一クエータほど上ったところに、古い石橋がひとつあったかと」

「それしか、渡れそうな橋はないのか？」

「私の知る限りでは」

「……そこも、敵に抑えられているだろうな」

「おそらくは」

「しかし、この川を渡るより他にルザリアへ出る道はない。レッド、すまないが、その橋の様子を見てきてくれないか？」

「心得ました」

レッドは二、三人足の強そうなのを従えて、川縁の森を北へ向かった。

ほどなくして、レッドは目標の石橋を発見した。

木立に身を隠して観察すると、案の定、北天騎士団の一隊が橋を固め、そこを通る旅人を検問していた。

レッドは急ぎミルウーダのもとへ戻り、次第を報告した。

「……やはりな」

「ですが、たいした人数ではありません。その気になれば強行突破できるかもしれません」

「旅人に扮して、ごまかすことはできないだろうか」

「そのような用意があればともかく……今の状態では危険でしょう」
「……………」

日は間もなく暮れようとしていた。

ミルウーダは意を決して、奇襲作戦を敢行することにした。

夜が更けるのを待って、一行は移動を開始した。目標地点に到達すると、ミルウーダは弓使いを西岸の森の中に配し、自身の合図を以て一斉に石橋の敵兵へ向かって矢を射かけさせた。

「やっ！ 敵襲だ！」

「敵はどこに!？」

突然の襲撃に北天騎士団の騎士たちが大混乱に陥っているところへ、レッド率いる白兵部隊が、喚声をあげて検問所の突破を開始した。

弓兵の援護射撃の下、レッドたち白兵部隊は立ちふさがる敵を次々となぎ倒し、川の流れに放り出し、あっという間に向こう岸へ渡り終えた。

それを見届けて、

「今だ!」

とばかりに、今度はミルウーダの後方部隊が、剣を引き抜き、まだ橋の上に残っている敵を蹴散らして、間もなく対岸のレッド隊との合流を果たした。

「よし! あとはひたすら走れ!」

ミルウーダ一行も当然無傷では済まなかったが、橋上の北天騎士団の損害は甚だしかった。

「追え! 逃がすな!」

と、部隊長が追撃の指示を出したところには、もうとっくにミルウーダたちの影は見えなくなっていた。

林間の闇に紛れ、一行は駆けた。

ようやく、追手を巻いたとみえたところで、ミルウーダは手頃な横穴を見つけて、一行を休ませた。

ミルウーダは横穴の壁に背をあずけて、松明の明かりで照らし出された面々を一通り見やった。

「……………」

やはり手傷を負った者も多く、脱落者も少なくない。

(このまま強行軍を続けては……)

さすがのミルウーダも、この先が案じられてきた。ルザリアはまだ遠い。どこかで糧食の補給と、負傷者の手当てをする必要があった。

——と、そこへ。

長弓を背負った少年兵がミルウーダのもとへ寄ってきて、

「あの……」

と、何事か物言いたげな目をこちらに向けてきた。

「どうした？」

ミルウーダが視線を合わせると、少年はちよと照れたように眼を伏せる。

「おれ……このへんのコロヌルって村の生まれで……そこで……あの……貧しい村ですが……もしかすると……そこで食いものを分けてもらえるかもしれないです……はい」

「え……それは本当か？」

ミルウーダは、愿朴げんぼくな少年の言葉の端に光を見出したかのように、瞳を輝かせた。

「はい……それに……けが人の手当ても……村長を説得できればですが」

「……できそうか？」

「はい、やれるだけやってみます」

少年は、ミルウーダの想像以上な好反応に少々まごつきながらも、

「では……すぐに行ってきます！」

と、一躍、風のように夜の闇に消えていった。

翌早朝、ミルウーダ一行は、少年の案内でコロヌルの村へ入った。

少年は、村長の説得に相当難儀したというが、ミルウーダの人となり説き、その窮状を訴えたところ、

「少しの間なれば」

と、ようやく滞在の許しを得たのであった。

牧人たちは、警戒の色を目端に潜めながらも、十分に温かくミルウーダ一行をもてなした。

豆のスープにヤギのミルク、干した果物など、決して贅沢なものではないけれど、一行は久しく忘れかけていた人間の味を舌に触れ、涙しない者はなかった。

牧人たちは、そんな彼らの様を見るにつけ、次第に警戒心を緩めていき、重傷者には進んで手当てを施した。

「このご恩は、けっして忘れません」

荒海に漂って流木を掴むの思いである。この厚遇に対し、ミルウーダは感謝の意を深くする一方で、いつまでもこの地に留まってはられないという焦燥に駆られもしていた。

一両日は療養に費やすとし、外への警戒も怠らなかったが、早くもこの日、北天騎士団の一隊来たるの報せがもたらされた。

「はや、これまでか」

と皆が覚悟を決めるなか、レッドの言に依り、ミルウーダはエマと共に、コロヌルの村人たちだけが知っているこの地下の抜け道に、降りたのである。

幸い心配された敵の追跡もなく、地下に巢食う洞窟ゴブリンどもにも出遭わず、二人は暗く湿った長大な洞窟をようやくここまで進んできた。

「……………」

ミルウーダは、神秘的な蒼さを湛える洞窟湖の水面を、ぼんやりと瞳に映していた。

思えば長い道のりであった。まったくもってそれは、一条の糸を渡るに等しい道であった。

レアノールでの敗北以来、幾度となく死地を潜り抜け、最後には、ミルウーダ自身もつとも頼みとしてきたレッドと、自分に運命を託してくれた同志たちを見捨てることとなっても、彼女はまさに骸同然な体となつて、際どい生命を今日まで繋ぎ止めてきたのである。

（これでよかったのか？）

ここに至っても、ミルウーダの心の隅には、決別した同志たちのことが、黒い染^{しみ}みたいな跡を残していた。

たとえ兄ウィーグラフとの合流を果たせたとしても、再起を図れるほどの兵力が集まるとも限らず、そもそも、兄が生きているという保証もない。

かといって、ギユスタヴ派の勢力が思想的に離反した今、頼れる人間は兄を置いて他にない。無論それは、兄の立場にしてみても同じことであろう。レアノールでの失策は、結果的に彼への信頼を大

きく削ぐこととはなった。しかし、兄の支えとなりえるのも、今は肉親たるミルウーダを描いて他にないのである。

「……行こう、今は！」

まだ片付きそうにない胸の内に強引に蓋をして、ミルウーダは立ち上がった。

「エマ、できるなら今日じゅうにレウスへ抜きたい。歩みを速めるぞ！」

「休憩はもうおしまいですか？」

湖に足を浸して、すっかりくつろいでいたエマが、悲痛な声をあげる。

「そうだ。ここも安全ではない。一刻も早く地上に出なければ！」

二人は松明を手になると、再び歩き始めた。

地下道は、湖を底にするようにして次第に登り坂となっていた。

「出口は近い……！」

先に行くミルウーダは、微妙な空気の変化を表皮に感じ取っていた。

第一章 持たざる者 6. 蛇の口にて

ギュスタヴ一派の動きは、なかなか迅速であった。

ガリランドに駐屯していた北天騎士団治安維持部隊の陽動に成功すると、ゴラグロス率いる実働部隊は直ちに計画を実行に移した。

彼らの目標は、すなわち、ガリランド都督マツトパス・バラフオム卿その人の身柄であった。

市街区の建物に次々と火を放ち、警邏の兵の目をそちらに引き付けながら、ゴラグロス以下十名ほどの工作員は、目に付きにくい裏路地を縫うようにして、都督府の建物を目指し、最短の距離を駆け抜けた。事前に、ガリランド市街区の地図は、完璧に彼らの頭の中に入っていたのである。

そして、目標の都督府の門前までは難なくたどり着いた。衛兵をすばやく黙らせると、工作員は次々と塀を乗り越え、都督府の内部に踏み込んだ。

突然の来客に慌てふためく政務官や雑用係には目もくれず、ゴラグロスは、最上階にある執務室前に来ると、その両開きの扉を勢いよく蹴破った。

——が、正面の執務机には誰もおらず、広い室内を見回しても、都督らしい姿は無かった。

「ちっ、勘づかれたか？」

室内の筆筒や調度品の影を調べても、抜け道や隠れ場所は見出せない。間もなく、都督府内の他の部屋を搜索していた部下たちも戻ってきて、

「目標は見当たりませんでした」と報告してきた。

執務室の長窓の外を見やると、北天騎士団の兵舎あたりから、すでに緊急を知らせる赤い狼煙が立ち昇っていた。誘き出した北天騎士団の部隊が戻ってくるのも、はや時間の問題かと知れた。

ゴラグロスは踵を返すと、

「退くぞ！」

と一言、駆け足で執務室を出て行った。階段を降りながら、ゴラグロスは考えていた。

事前に計画が知られていたとは考えにくい。そうであれば、北天騎士団が総出で失踪したキャラバン隊の捜索に向かうことはなかったはずだ。

ギユスタヴの誘き出しは、完璧だった。

朝のうちに、街道付近に骸旅団が出没しているとの噂を流布し、工作部隊の手によって、コロナス河に掛かるつり橋を落とす。これにより、キャラバンの大隊を足止めし、本当に大勢の骸旅団が現れ、キャラバンを襲撃したかのように見せかける。

ガリランドに駐屯する北天騎士団の頭数もあらかじめ調べてあり、ギユスタヴは、おそらく外の騒ぎの鎮圧に兵員のほぼ全てを差し向けるだろうと予測し、結果、見事にガリランドは手薄となった。

そして、都督誘拐というもっとも肝心なところは、ゴラグロスら腹心の同志に任せたのである。

「北天騎士団は、我らの殲滅に必死になっている。陽動は上手いくとは思いますが、それでも作戦実行に多くの時間は割けない。ぬかるなよ」

そういつて別れたギユスタヴ本人はというと、彼は陽動部隊の方の指揮に当たっていた。こちらの数を合わせても、作戦実行に関わったのは、せいぜい三十名ほどであった。

「やはり、そう上手くはいかないか」

ゴラグロスは、口惜しげに都督府の建物を見上げながら独りごちた。「すまないな。ギユスタヴ」

ギユスタヴの紡ぎ出す作戦は、いつも一糸の綻びもないものであった。それを自分の不手際によって破綻させてしまった。ゴラグロスの自責の念は、相当なものであったに違いない。

しかし、今回の件については、完全に彼の運がなかったというほ

かない。

骸旅団の進退を賭けた「要人誘拐作戦」であったが、今回彼らの標的の一人となったマット・パス・バラフォム卿はというと、彼はこの日に限って、たまたまガリランド王立魔法学院で開かれた魔法学会の最中にあり、難を逃れえたのは、まさに不幸中の幸いといった。都督がようやく事態を把握した頃には、すでにガリランド市内の騒ぎは鎮静に向かいつつあった。

北天騎士団治安維持部隊も戻ってきて、アルマルク指揮のもと下手人の搜索が行われたが、この時にはもう後の祭りであった。

この顛末を見ても、失敗に終わったとはいえ、骸旅団の少数精鋭による疾風迅雷ぶりに比べて、ガリランドの軍事行政の鈍は、目に余るものがあつた。

——が、この騒ぎの中で、ささやかな活躍を見せた者もあつた。

ガリランド王立士官学校の、士官候補生たちである。

事件当時、彼らは兵科の真最中であつたが、アロー戦線還りの鬼教官として知られるボー・アダム・ダーラボンの指示で、警邏部隊が対応に移るよりも早く、すでに独自の行動をみせていた。

まずは混乱する市民を屋内に非難させ、次に市内の要所要所に即席のバリケードを築き、襲撃に備えた。あちこちに上がっていた火の手に対しては、黒魔道士見習いたちが水魔法で消火にあたり、被害の拡大を防いだ。

さらには、計画が失敗に終わり、撤退に移った骸旅団の工作員数名を、彼らの手によって捕らえていた。

ようやく厳戒態勢が解除されたのち、その捕虜を連れて、ダーラボン教官と数名の士官候補生は、北天騎士団治安維持部隊の兵舎を訪れていた。

「本当に、よくやってくれた」

骸旅団の捕虜を牢に入れ終えると、アルマルクはダーラボンに向か

って慇懃に礼をいった。彼なりに、負い目に感ずるところもあったのだろう。

キャラバン隊搜索時、彼がコロナス河方面へ偵察に遣った騎士が「街道途中の橋が落とされており、キャラバン隊は、北へ大きく迂回するを余儀なくされている」と報告してきたのは、ガリランド襲撃が知れた後だった。彼らは、まんまと敵の陽動に引っかかったことになる。

「なんのなんの、我らはガリランド市民として当然の行動をしたまです」

ダーラボンは、アルマルクの姿勢に対し、あえて食い下がった。

「しかし、このひよっこどもは本当によく働いてくれました。特に、ここにいる二人は、勇敢に戦い、みごと賊を捕らえてご覧にいれました」

そういうと、ダーラボンは、彼の後ろに控えていた二人の若者を差し招いた。二人は、ぴんと背を伸ばしたままアルマルクの前まで来ると、握り拳を胸にあて、北天騎士団の作法に習って敬礼を施した。アルマルクはそれに応え、改めて二人の若者の顔を見た。

「ガリランド王立士官学校騎兵科所属、ディリータ・ハイラル」

まず名乗った方は、名門貴族の子らの集う王立アカデミーには似つかわしくない、野性味みたいなものを感じさせる風貌の持ち主であった。美男ではあるが、膚は浅黒く、眼には、^{まなこ}なにか容易に人を寄せ付けぬものがある。

「同じく、ラムザ・ベオルブ」

対してこちらは、一見して貴族の子息と分かる気品を漂わせている。名門ベオルブ家の名を聞かずとも、それなりの家に生まれついた身であろうことは、その容姿から想像できる。長いブロンドを結び、武家の子にしては柔和な面立ちをしている。しかし、その碧眼に緩みはなく、確固たる意思を感じさせるものがある。

「ほう、君は、あのベオルブ家の」

アルマルクは、ラムザの顔を見ていった。彼の胸には、つい先日

悲報があった。

「亡きバルバネス公は、世に二つとなき英雄であらせられた……謹んでお悔やみを申しあげる」

「……は」

アルマルクの弔辞を受けて、ラムザの眸が、心なしか揺れた。

「父は星に召されましたが、その遺志は、私とともにあります」
が、ラムザは気丈にも、そう答えた。

「それに、私には、優秀な兄たちと、愛する妹、そして——ディリータという頼もしい友があります」

ラムザがそういうと、その言葉の端に何を思ったか、傍らにいたディリータは、ふと、その表情を綻ばせた。

「これは、なんとも頼もしい。さすがは白獅子の子よ」

アルマルクはそういつて頷くと、再び敬礼を施した。

「異国の将来は、君たち若者の肩に掛かっている。これから励んでくれよ」

二人は無言でそれに応えようと、ダーラボンの後ろに下がった。

「では、我らはこれにて」

他にもいくつかの報告を終えたあと、ダーラボンと士官候補生は、兵舎を去っていった。

——これで、ひとまず一難は去った。

しかし、捕虜の尋問から分かった今回のガリランド襲撃の目的は、アルマルクの肝を冷やすのに十分であった。

彼は、早速、イグーロスの総司令部に遣いを送って、事件のあらましを報告した。

この時すでに、ガリランドの北天騎士団治安維持部隊には、イグーロスのザルバツグ將軍から、新たな指令が下っていた。

その内容はというと、

「近日、ガリオンヌ領主ラーグ公爵と、ランベリー領主エルムドア侯爵が、会談のため、非公式にガリランドを訪問する由。万一の事態に備え、至急ガリランド、及びその周辺の警戒を厳にせよ」

とのことであつた。

非公式会談とはいえ、この機を骸旅団が逃すはずがない。

そう懸念し、アルマルクは、骸旅団が”要人誘拐”という暴挙に打って出たこと、首謀者は今だ逃走中であることを踏まえ、イグーロスに対し、増援の急派を求めたのである。

イグーロスからの返答は、一日を待たずして届いた。
すなわち、

「警備の補強要員として、さらに百騎を増派する。また、捕虜に関しては、全員をイグーロスに護送せよ」
との迫命であつた。

捕虜とは、今回の事件で捕らえた工作員数名と、コロヌル村に潜伏していた二十数名のことである。皆、同様に北天騎士団の兵舎の獄に繋がれ、処断を待っているところであつた。

直ちに処刑せよとの厳命ではなかつたことに、アルマルクは、ひとまず安心した。

「が、おそらくは……」

彼は、コロヌルで捕縛したレッドという騎士と、彼らを匿った牧人たちのことを、ふと、思い出していた。

「私としたことが……情が移つたともいうのか？」

そう独りごちて、アルマルクは自嘲した。もはや、彼らに情けを掛ける余地はない。彼らは、追い詰められたあげく、ついに”人攫い”という人の道に外れた行為に及んだのである。この罪に対しては、極刑を以って臨まなければ、民への示しが見つからない。彼自らの手を汚さずに済んだだけでも、幸いとせねばなるまい。

その捕虜の護送であるが、新たに百騎の増援があるとはいえ、警戒に当たる兵をそちらに割くわけにもいかなかった。

（どうしたものか）

と思案しているうちに、彼は先日の士官候補生に思い至つた。実戦訓練として、彼らを護送任務に就かせてはどうか、と考えたのである。非常時に士官候補生を駆り出したという前例も、戦時には無く

はない。

早速、アルマルクはダーラボン教官に、この案を持ちかけた。
ダーラボンは、

「うむ、学長に掛け合ってみよう」

と承諾し、間もなく許可は下りた。そして、ラムザ・ベオルブが護送部隊長に任命され、以下、十数名の有能な士官候補生が、任務に当たることとなった。その中には、ディリータ・ハイラルの名もあった。

「なにせ皆若いからな……捕虜に舐められはせんかの」

ダーラボンは、鬼教官らしからぬ心配な目で教え子たちを見ていたが、

「ご心配なく。家に帰るつもりで行って参ります」

と、ラムザは頼もしげな笑顔を見せ付けていった。

出発日の早朝、ラムザとディリータ、以下士官候補生の十数名は、北天騎士団治安維持部隊の兵舎に来ていた。

兵舎の前には、すでに数名の捕虜が数珠繋ぎにされて、護送車の到着を待っていた。

彼らの扱いは、さほど酷いものではなかったらしく、皆、それなりに血色の良い顔をしていた。

——が、最後に引っ立てられてきた男だけは、なにか、様子が違っていた。

「おい、しっかり歩かんか！」

ふらつく歩みに手こずって、長身の男を引き連れる騎士は、そう言っ
て、強引に手枷の紐を引っ張った。騎士になされるがまま、男は
へたり込むようにして、数珠に加わった。

男は、他の捕虜たちと同じく、黙然と座していたが、ふと、その
顔を上げて、ラムザの方を見た。

「……？」

ラムザも、その男の視線に気づき、目をそちらに向けた。

垢で黒ずんだ顔はやつれ、髭も髪も伸び放題になっていたが、ラムザには、その男の顔に見覚えがあった。

二人はしばらく無言で視線を交わしていたが、男は口元を少し歪めて、面を伏せてしまった。

「護送車が来たようだな」

ディリータが、そういったのを聞いて、ラムザは視線を戻した。

護送車は、二頭のチョコボに牽かれて来た。

護送車といっても、荷車の荷台に日差し避けの屋根が取り付けられたような簡素なもので、捕虜の二十名あまりは、その狭い空間に無理矢理詰め込まれる形となった。

「牛乳瓶以下の扱いだな」

すし詰めにされた捕虜たちの様を見て、ディリータが皮肉めいたことを口ずさんだ。ラムザは、ディリータが、どういうつもりで、そういう言葉を口にしたのかは分からなかったが、あまりいい気分はしなかった。

「彼らも人間だ」

ラムザがそう言うと、

「当然だ」

と、ディリータは無表情で答えた。

「が、これが敗者の姿だ」

「……………」

ラムザは、初の実戦訓練に意気込む反面、この任務の内容に、どこか受け入れがたいものを感じてはいた。

自分に与えられた責務であることは理解していても、それが、果たして正義を為すことなのかどうかは、割り切れずにいた。

「気負うことはないさ」

ディリータは、ラムザの肩に手を置いていった。

「僕らの任務は、捕虜を無傷でイグーロスまで護送すること。それだけだろう？」

「わかってるさ」

「君は優しすぎるんだ。敵は情けなんてかけてくれないぜ？」

—— 知った風なことを

と、言いたい気持ちを微笑みのうちに押し込めて、ラムザは、「ああ」と、一言だけを返した。

ディリータの、こういう現実的なものの見方は、学ぶべきところなのかもしれない。

ラムザは、護送部隊の先頭に立つと、出発の号令を発した。

護送車がガラゴロと動き出し、それを取り囲むようにして、士官候補生たちが歩みを進める。

ラムザを含め、皆、正式に騎士に叙任される前の、「見習い騎士」という身分であった。

が、その装備を見ると、剣に弓、杖、さらには、武器らしいものは何も身につけていない者など、さまざまである。

—— イヴァリースの軍隊の戦術概念には、“専門職”^{ジョブ} というものがある。

各々に、剣術、射術、魔術、工術など、自分のもつとも得意とする戦術を持っており、「騎士」に叙されて初めて、それぞれの専門^{ジョブ}職として、さらに上級の技術を身につけていくというのが、この国の戦士の、一般的なキャリアの積み方である。

この護送部隊をざっと見ても。

—— 剣術（主に剣による近接戦闘術）を得意とする、ラムザ、ディリータ、ラッド、アレックス

—— 工術（アイテムによる後方支援術）を得意とする、リリアン、ジョセフ、ニール

—— 射術（弓、弩による遠距離戦闘術）を得意とする、イザーク、カマール、イアン

—— 魔術（魔法による遠距離戦闘・支援術）を得意とする、フィリップ、ローラ

——闘術（体術による中近距離戦闘術）を得意とする、ポポ

といった具合に、実に多岐に渡っている。これらのジョブをバランス良く組み込むのが、必然、良い部隊編成の条件となってくる。

これらのジョブの多くは、近代以降の武器の進化によって、ほとんど失われてしまうのであるが、当時の戦士たちにとって、己のジョブを極めることは、その者の生き甲斐といっても差し支えないものであった。

——さて、話を元に戻して。

一行は、ガリランドの北門を出て、フォングラード街道を北へ指して行った。

「暑いな」

ラムザは、小手で額に滲む汗を拭っていた。

季節は、もうすっかり夏であった。

南中にさしかかった太陽が、容赦なく大地を灼^やいていた。西部の平野には木陰も少なく、それだけで、辛い行程だった。

間もなく、フォングラード街道は二手に分岐し、一方は、サドランダ街道へ接続する枝道、もう一方は、そのまま北上し、レナリア台地を抜け、フォボハム領へと続いている。

護送団は、ここで枝道の方に入り、西へ針路をとった。

ラムザの計画では、今日中にこの枝道を抜け、夕方には、サドランダ街道沿いの宿場街に入ることになっていた。まともな寝床が得られそうなのはそこだけで、宿場を出てからは、イグーロスまで、しばらく人家もろくにない道が続く。

春の終わりに、父を見舞いにイグーロスへ帰った時は二日もかからなかった道も、護送車を牽いてゆく此度の旅路は、遅々として進まなかった。

そのうえ、この暑さである。

ラムザは、護送車に押し込まれた捕虜の体調を気遣って、ちよくちよく足を止めた。

「イグーロスに着くまでに、全員ミイラになれたら困るからな」
ラムザは、水筒を捕虜に手渡ししながら、そんな冗談を言った。捕虜はたちは、たった一つの水筒を廻して、各々に口を濡らした。

ただ一人、例の男だけは、水筒に口をつけようとすらしなかった。
「大丈夫なのか？」

と、ラムザが訊いても、男は何も答えず、別の捕虜が、

「北天騎士団の牢屋にいるときから、あの調子だ。言うだけ無駄さ」と言ってきた。

「……………」

男は目を閉じて、眠っているのか、じっとして動かない。ラムザはひとつ溜息をついて、再び出発の合図を発した。

やがて、辺りがどっぷりと暮れた頃。

ラムザは目前に、宿場街のわずかな灯りを見出していた。

少し進むと、やがて、見張り小屋付のこじんまりした門が現れた。

「僕が行ってこよう」

といって、ディリータが見張り小屋に走っていった。

小屋の中には、この宿場の自警団の者らしき中年の男がいて、屈強そうな体躯をもてあましていた。

「我らは、イグーロスのザルバグ・ベオルブ將軍の命により、骸旅団の捕虜を護送中の部隊である。開門を求める！」

というと、見張りの男は、ディリータの顔を見てから、小屋の窓から身乗り出し、外の様子を伺った。

「あの車に、捕虜が乗ってんのかい？」

護送車のほうを見ながら、見張りの男が訊いた。

「そうだ」

「へえ、そいつはいい」

男は再びディリータのほうへ視線を戻すと、不敵な笑みを口元に浮かべた。

「ずいぶん若い騎士さんだな」

「騎士ではない。ガリランド王立士官学校の士官候補生だ」

「ほう、貴族のお坊ちやま方が、また、どうしてこんな所に」

「北天騎士団は骸旅団の殲滅作戦中で、どこも人手が足りてないんだ」

「へえ、そうかい。前に、この宿場が骸旅団に襲われた時は、北天騎士団の方々は、いらっしやらなかったがねえ……まあ、人手不足なら致し方あるめえか？」

男はそういつて奥へ引つ込むと、やがて、ギシギシと音を立てながら、門が開き始めた。

「すまない」

戻ってきた男に、ディリータは礼を言った。

「蛇の口」へようこそ。酒と女は上等だが……どっちもほとんど残ってねえな。盗賊の連中はいい見せモノになるぜ」

「……………」

ディリータは何も言わずに小屋の前を離れると、護送団の後に続いて、門をくぐった。

見る限り、宿場街としては大きい方である。が、閑として活気がない。

ここであいったん、捕虜たちは護送車から降ろされ、手頃な空家にまとめて収容された。

ラムザは、数名を見張りに立たせ、残りの者には休息をとるよう言い渡した。

で、彼自身はというと、空になった護送車の荷台に腰掛け、何やら思案に暮れていた。

——間もなく、夜は更けて。

そこには、空家の内に入っていくラムザの姿があった。

見張り役の者は、彼の行動を訝しんだが、ラムザは気にも留めず、照明用の蠟燭の弱い光を頼りに、人いきれのする、暗い室内を見回していた。

捕虜たちは、手枷をつけられたまま、深い寝息を立てている。その中に、あの男が、部屋の隅っこで、じっと頭（こぶ）を垂れている。

ラムザが、その男の傍に腰を下ろすと、その気配に気づいたのか、男は僅かに面を上げた。

「あなたは……レッド？」

「……………」

男は目を伏せ、何も答えない。が、この男は、マンダリアの古砦で出会った、あの、ミルウーダという女騎士とともにいた者には、違いなかった。

「あの女騎士——ミルウーダは、どこへ？」

マンダリアでの一件以来、ラムザは心のどこかで、かの女騎士の行く末を気にかけていた。

本来ならば、敵となすべき相手と結び交わした、あの手のことを、彼は忘れてはいなかった。

「君には……感謝している」

「え……？」

途切れ途切れに、ようやくレッドの口から洩れた声は、しかし、ラムザにとっては意外な言葉であった。

「あの時……我らは……かけがえのないお人を……失うところだった」

「……………」

「彼女もきつと……君に……感謝していることと……思う」

——感謝？

その言葉は、奇妙な響きをもって、ラムザの頭蓋にこだました。

ミルウーダも、自分に感謝しているだろうと、レッドはいう。しかし、今のラムザは、骸旅団に仇なすものとして、その責務を果たさんとしている。

それでも、彼らは自分に感謝するというのか——

「あの時はただ、彼女を無駄死にさせてはならないと……そう思っただけです」

ラムザは、本心から、そう述べた。

「そうか」

「彼女は……ミルウーダは無事なのですか？」

「そうだと信じている」

「……………」

ミルウーダという女性は、この、レッドという騎士にとっても、特別な人なのだろう。

彼の口ぶりから、ラムザはそんなことを感じていた。

「君は……真の骸ホムと化していた……我らに……希望を……与えてくれた」

「希望？」

ここで、レッドは、初めてラムザの眸を見た。

「そう……われわれは……話し合える……」

その言葉を聞いて、ラムザは、はっと表情を変えた。

——われわれは、話し合える

それは、亡き父の理想であり、ラムザの理想であった。

そして、ミルウーダと手を握り交わしたあの時、確かに、その希望の片鱗みたいなものを、ラムザは感じ取っていた。

レッドは苦笑いを浮かべ、再び面おもてを伏せた。

「なぜ食事を口にしないのです」

レッドの足元に、捕虜全員に支給されたパンが手付かずで転がっているのを見て、ラムザが訊いた。

レッドは、静かに首を振った。

「無駄なことだ……本意ではないにせよ……身内のでかしたこと」
「……………」

——都督誘拐未遂。

骸旅団によるガリランド襲撃の本当の目的は、都督の誘拐と、その身代金の要求であった——その事実、ラムザの耳にも届いていた。

未遂に終わったとはいえ、その凶悪犯罪の実行犯たる骸旅団の者たちには、おそらく極刑が下されることとなる。

「今さら……生にしがみついたとて……何になる」

「しかし……」

ラムザは、苦い顔をして、顔を背けた。

必然、その法の裁きを下すのは、イグーロス執政官ダイスダーグ・ベオルブということになる。そして、ラムザの良く知るダイスダーグという人間が、情に流されて、処断に迷うなどということは、ありそうもないことであつた。

そうとは分かりきっていても、このまま死の道を歩む人間を見捨てることができないのが、これまた、ラムザという人間の優しさというべきか、甘さというべきか。

「まだあきらめるのには、早いですよ」

ラムザは、最後にそれだけ言つて立ち上がると、空家から出て行つた。

夜風は涼しく、満天に星は瞬いている。

ふと、背後に気配を感じて、振り返ると、そこにはディリータがの姿があつた。

「休まなくていいのか？」

と、ディリータが言う。

「そうだな。少し眠るよ」

「そうしたほうがいい」

「君は？」

「僕は見張り番の交代に来たんだ」

「そうか」

「ラムザ」

「なんだ？」

「あまり気負いしすぎるなよ」

「そんなふうに見えるか？」

「昔からな」

「……………」

「君はベオルブの子だが……それ以前にラムザなんだからな」
「え？」

「いや、なんでもないさ」

「……………」

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

片手を挙げて、ラムザは宿の方へ歩いていった。

その友の背を見送ってから、

「……あまり気負うなよ」

ディリータが、もう一度つぶやいたその声は、誰に言った言葉か、夜風に乗せられて、何処へともなく運ばれていった。

第一章 持たざる者 7. 急使

——明けて、任務二日目。

護送部隊の面々は、捕虜たちを引き連れて、昨日入ってきた門とは反対側の門の前に集まっていた。

骸旅団の捕虜たちは、再び数珠繋ぎにされて、早朝の薄明かりに、その惨めな姿を晒していた。

ラムザは、護送車に押し込められていく捕虜の列を遠目に眺めていたが、その中に、レッドの姿を見とめていた。

レッドの態度は、昨日と変わりなかった。

亡者みたいに上体を低く下げ、ぼさぼさに伸びきった髪に遮られて、その表情は窺い知れない。

ガリランドを出てからこつち、水一滴口にすることなく、おそろく昨晚の様子からして、ろくに眠ってもいない。

まだ生命活動が続けているのが、不思議なくらいである。

彼のいったとおり、その姿は、とつくに魂の抜け去った骸のようであった。

——と、そこへ。

何かが、こつんと、レッドの頭に当たって、彼は、はたと歩みを止めた。

「こいつっ！」

と、どこからか声がして、さらにもうひとつ、今度は別の捕虜の肩を掠めて、それは地面に転がった。

なんのことはない。

子供の掌に収まるくらいの、石礫であった。

捕虜の”搬入”に当たっていた、ジョセフという士官候補生が、石礫の飛んで来た方向を見やると、まだ五つかそこの童が、民家の前に立って、次の一撃を拾いあげたところであった。

「姉ちゃんをかえせ！」

と、それを、めいっぱい振りかぶって、捕虜たちの列に向かって、投げる。

それは、大きく外れて、護送車の日差し避けに当たった。

「おい、やめろ！」

と、叫ぶジョセフは知らぬふりで、そこらに落ちている石ころを拾っては、次々と投げてくる。

「くそっ……」

と、たまりかねたジョセフが、その童の方へ歩いていくと、民家の戸口から母親らしき女が出てきて、抗う童を無理やり、家の中に引っ込めてしまった。

民家の壁越しに、童の泣き喚く声が、その場にいる誰の耳にも聞こえる。

「……………」

その光景を、いちばい複雑な表情で見つめていたのは、ほかならぬディリータであった。

「あそこんちのガキはな」

彼の傍らに、いつの間にか、昨日の見張り小屋の男が立っていた。

「姉貴を骸旅団の連中に攫われたのさ……この前の襲撃でな」

「……………」

「今ごろ、どこかに売り飛ばされているんだろ。かわいそうにな…

…面倒見のいい、良い娘だった」

ディリータは、黙って男の話を聞いていたが、やがて

「僕にも……妹がいます」

と、一言、ぽつりと呟いた。

「ほう」

「両親は幼いころに亡くしましたが……それくらい、たったひとりの肉親です」

「名前は？」

「……ティータ」

「ティータ、か。いい名だな」

男は、太い腕で頭をボリボリ搔きながら、最後に、

「大切にしなよ。兄貴」

といって、門の方へ去っていった。

まもなく、やかましい音をたてて、サドランダ街道方面へと出る門が開いた。

思わぬ足止めをくらったものの、捕虜はようやく収容され、あとは出発を待つのみとなった。

「世話になりました」

ラムザは、見張り小屋の男にそう告げて、全員揃っているのを確認すると、出発の合図を出した。それに合わせて、護送車を牽く二頭の茶チヨコボが、同時に歩き始めた。

”蛇の口”を出ると、一行はそのまま枝道を抜け、サドランダ街道に入った。

目前には、広大なマンダリア平原が横たわっている。街道は、大平原を突っ切って、はるか彼方に見える小山——マンダリアの丘に続いている。

平野部を走る街道が、わざわざこんな峠を通っていくのは、かつてそこにあった砦のためであろう。

古い記録によると、それなりの規模を誇る砦であったそうだが、使われなくなってから久しく、今は廃墟となって静かに平原を見下ろしている。

丘を避けて通る道が作られてもよさそうなものだが、マンダリアの丘の頂に湧き出る清水と、野宿できる場所を求め、ここを立ち寄る旅人が今でも絶えなかった。人の足でマンダリア平原を越えようとする、どんなに急いでも丸一日以上はかかるから、廃墟と化した現在でも、恰好の旅の中継地として機能しているというわけである。

ラムザはひとまず、以前もそうしたように、この砦跡を目指すこ

とにした。

一行は黙々と歩く。

辺りには、魔物の気配もない。この一帯は、クアールと呼ばれる、きわめて好戦的な野獣が棲息することで知られるが、街道を大きく外れない限りは、めったにその群れに出くわすこともない。

それでも注意するに越したことはないが、夏の陽光はいよいよ高く、さすがのクアールも、この暑さにはへたばっているのか、平原を見渡すかぎり、それらしい姿はどこにも見られなかった。

頭上には、大トンビが一匹、奇怪な声をあげて旋回している。

初の実戦訓練という気負いも、いつしか茫漠たる意識の果てに薄れ、今はおぼつかぬ足取りを、士官候補生たちは半無意識のまま運んでいた。

道は峠へ向って、やや上りにさしかかったところであつたか。

部隊の最後尾に付いていたカマールという弓使いが、今までになかった微かな物音をその耳朵に感じ取っていた。

「何か来る……！」

カマールの声に、一同は何事かと、その歩みをいったん止めた。カマールは斥候術に優れた戦士であつた。それだけに、人一倍、五感も鋭い。

音は後方から来ているらしかった。カマール以外の者には聞き取れなかったその音も、次第に、誰の耳にもはつきりと伝わってきた。「チョコボの蹄の音か……？」

ラムザは小手をかざし、音のするほうにじっと目を注いだ。弓使いの三人——イザーク、カマール、イアンは、すばやく弓に一矢を番^{つが}えていた。

やがて、ゆらゆらと揺れる地平に、チョコボに跨った騎兵とわかる姿が浮かびあがってきた。その姿はみるみる大きくなっていつ、早くも、騎手の顔が判別できるくらいの距離に迫っていた。

「単騎らしいな」

ディリータが言う。

「何者だろうか……旅人にしては、妙に急いでいるような？」

そういつて、ラムザは弓使いたちの横に立つと、そこで騎手を待ち構えた。相手もこちらに気づいたらしく、手綱をひくと、十歩ほど離れたところで停止した。

「何者か！」

ラムザが訊くと、騎手はチョコボの背から降りて、こちらに歩いてくる。

「害意はない！」

というと、騎手は両手を挙げて、自らの意思を示した。それを見て、ラムザがひとつ頷くと、弓使いたちは構えていた弓を下ろした。

若い男であった。騎士の形なりをしてはいるが、ラムザたちとも、そう歳は変わるまい。

臙脂の革鎧にマントといったいでたちで、腰には、一振りの長剣を佩いている。いずれも、北天騎士団の一般的な装いとは異なっている。

「どこの所属のものか」

ラムザはまず、その素性を訊ねた。

「ランベリー領、近衛騎士大隊所属」

「名は？」

「アルガス……アルガス・サダルファス」

「ランベリー領の者が、なぜこんな所に？」

「急使である。イグーロスへ向かう途中だ」

「イグーロスへ？」

「そうだ……」

ここでアルガスは、なにやら苦しげに、眉を寄せた。

「イグーロスの、ダイスダーグ・ベオルブ殿に、至急お伝えせねばならぬ儀がある」

「……？」

ラムザは、不審に思った。

ランベリー領は、イヴァリース半島の東部に位置する領地で、ガ

リオヌとは、王室領ルザリアを隔てており、お互い滅多に行き来もしない。

そのような土地から、わざわざ遠く離れたガリオヌ領の成都イグーロスへ急使とは、そも、いかなる大事か。

ラムザが、そのように質すと、アルガスはいよいよ窮まった様子で、

「ことは、ガリオヌ領内で起こった。だから……」

と何か口の中でいいかけて、ひとつ、奇妙なよろめきをみせると、突然、その場に昏倒してしまった。

「おい！」

ラムザは驚いて、すぐにその体を抱き起こした。

「おいっ！　しっかりしろ！」

呼びかけても反応はなく、アルガスは、すっかり意識を失ってしまっている。そして、その額からは、尋常でない量の汗が噴き出している。

ラムザは辺りを見回し、適当な木陰を見つけると、そこへ行つて、アルガスの体を横たえた。

アルガスは、汗にまみれた顔に、なおも苦悶の表情を見せている。

「リリアン！　ローラ！　彼を診てやってくれ！」

ラムザは、医術や白魔法の心得のあるものを呼び寄せると、彼らにいったんその場を任せて、自身は木陰の外に出て、その処置を見守っていた。

そこへディリータが駆け寄ってきて、

「いったい、どうしたっていうんだ……？」

と訊いたが、ラムザは、わからない、といったように首を振った。

「急に倒れたんだ……そういうえば、何か様子が変わったような気がするけど」

救護に当たる二人は、ポーションを口に流し込んだり、簡単な白魔法をかけたりしていたが、アルガスが目を覚ます様子はない。

「ガリオヌ領内で何かあったといっていたな……？」

「ああ」

「……………」

ディリータは口もとに手を当て、しばらく思考を巡らせていたが、やがて、

「……彼がランベリーの近衛騎士なら、エルムドア侯爵の身に何事か起こったのかもしれない」

と、切り出した。

「エルムドア侯に……？」

ラムザが訊き返すと、ディリータは、やけに深刻な顔をして頷いた。

「ああ。そうでもなければ、近衛騎士たるものが、主のもとを離れるとは考えにくい」

「たしかに……」

「侯爵は、ラーグ大公と、ガリランドで非公式に会談を行う予定だったと聞いている。もしかすると……」

「……………」

恐ろしい予感が、二人の間で、徐々にたしかなものへと変わりつつあった。

二人の胸には、当然、つい先日之都督誘拐未遂事件があった。現に、実行犯のほとんどは逃げおおせていたし、首謀者と目されるギユスタヴなる男の動向も不明なままであった。彼らがまだあきらめずに、次なる標的として、エルムドア侯爵の身を狙ったとしても、なんら不思議ではない。

「まさか……」

ラムザは、困惑した視線を、力なく横たわるアルガスの方へ向けていた。

しばらくして、アルガスの救護に当たっていたリリアンが二人のもとに来て、

「いちおう、できるかぎりのことはしたわ」と、報告してきた。

「ただ……何かしきりに、うわごとをいつているの」

リリアンは怪訝そうに、木陰に横たわって、なおも白魔道士のローラの回復呪文を受けているアルガスの姿を見やった。

「うわごと……？」

ラムザが訊くと、彼女は再びこちらを向き直って、

「ええ……『侯爵様』と、何度も」

といった。それを聞いて、ディリータとラムザは、ちらと目を見交わした。

「ひどく衰弱してるわ。命に別状はないと思うけど、はやくきちんとした場所で治療しないと、危ないかもしれない」

「……そうか。彼の意識が戻ったら、また知らせてくれ」

ラムザがいうと、リリアンは「わかった」といって、再びアルガスのもとへ駆けていった。

ラムザは、いったん護送車のところへ戻って、皆に状況を説明したあと、この場で休息をとるよう指示した。

ただでさえ遅れぎみの行程に、思わぬ足止めをくらう形となったが、病人を引きずっていくわけにも、また、この場に捨て去っていくわけにもいかないというのが、ラムザの判断であった。

彼は道端の岩影に僅かな日避けを見出して、ディリータと並んで、そこへ腰を落ち着けた。

「やはり、侯爵の身になにか起こったとみて、間違いなさそうだな」
ディリータが言った。

「ああ……もし誘拐されたのなら、これは大変なことになる」

「骸旅団は、法外な身代金をふっかけてくるだろうな」

「……………」

ラムザは、それには答えず、何か納得のゆかぬ気持ちを、その眉にみせていた。

（人の道に外れた行為だ……）

骸旅団の犯罪行為を、そうやって非難してみる一方で、彼の胸のうちには、今は捕虜となっているレッドと、あのミルウーダという女騎士との出会いが思い出されていた。

目的のためならば、人の命を金に替えるという非道も厭わない。それが、「骸旅団」という組織のやり方ならば、ラムザがマンダリアの砦で捕えられたあの日、彼らはその方針に従って、ラムザの命と引き換えに、多額の身代金を要求することもできたはずである。しかし、騎士ミルウーダは、それをしなかったばかりか、捕虜を解放し、自らは大敵の前に打って出て、その志に殉じようとした。

たとえ志のためとはいえ、安易に命を捨てるというのは賛同しかねるが、ラムザは、彼女の、その”覚悟”に、胸を打たれていたのである。

「……どうかしたのか？」

先ほどから押し黙っているラムザを訝しんで、ディリータがいった。「いや、なんでもない」

そう答えて、ラムザはどこか遠くの方を見据えていた。その目線の先に、ぼんやりと、碗を伏せたようなマンダリアの丘の姿が浮かんでいる。

「……大戦時、骸騎士団は義のため死したと、父上はおっしゃっていた」

ややあって、ディリータが言った。

「それなのに、その志を継いだはずの骸旅団は、今や、単なる野盗集団の類に成り下がっている」

「……………」

「やつらは平民の味方などと吹きまわって、その実、弱い立場にある者から略奪を繰り返している。そして今度は……人攫いだ！」

「……………」

「今の彼らに、”骸”の騎士を名乗る資格はない。そうは思わないか？」

ディリータの向ける真剣そのものな目に、ラムザは直ぐに答えることができなかった。

「しかし……」

と、言葉を詰まらせて、面を伏せる。

——自分の考えは、やはり甘いかもしれない。

今の骸旅団の中にも、ミルウーダやレッドのように、誇り高き志士がいることも事実だ。しかし、彼らとて、”骸旅団”という集合の一部分であることに変わりはない。

そして、”社会”という無慈悲な神は、その”部分”には目もくれず、”集合”として、彼らに審判を下す。それは翻って、ラムザという個人がどうであろうとしたところで、結局のところ、自分は、傲慢で、平民を搾取し続ける”貴族”という集合の中に含まれる者として、”社会”に認知されるということでもある。

「……彼らの中にも、潔い戦士はいる」

と、ラムザはいった。今のラムザには、そう答えるしかなかった。それを聞いて、ディリータはついと目を背けて、表情に不服の色を隠そうとしなかった。

「……やっぱり、君は優しすぎるんだ」

そういつて立ち上がると、ディリータは護送車の方へ去っていつてしまった。

「……………」

ラムザは、その背を黙って見送ってから、ひとつ、大きな溜息を漏らしていた。

アルガスが目を覚ましたのは、日もだいぶ落ちてきて、夕風の涼しく感じる頃であった。

彼が倒れたのは、多分に疲労のせいもあるようだが、ほかにも、背に矢疵を負っており、そこからくるらしい発熱もあった。

這ってでも行こうとするアルガスを、やっと落ち着かせ、ラムザとディリータは、彼から詳しい事情を聞きだそうとしていた。

「そういえば、まだ名前をいつてなかったな」

ラムザは手を差し出しながら、

「僕はラムザだ。ラムザ・ベオルブ」と、名乗った。

「……ベオルブ？」

アルガスのほうは、ラムザの手をとりながら、何かに惹かれたような表情をみせ、

「ベオルブとは……北天騎士団を率いる、あのベオルブ家？」

と、わずかに身を乗り出す。

「そうだけど……？」

「ほんとうか！」

その顔に、にわかに明るさを取り戻して、

「おれは……ついでる！」

と、アルガスは、もう片方の手も添えて、ラムザの手を握った。

「まさか、ベオルブ家の者に出会えるとは！」

「……ちよつと、落ち着いてくれ」

うろたえるラムザに宥められて、アルガスは、手負いの体を思い出したように身を引く。

「……で、いったい何があったのか、教えてくれないか？」

気を取りなおしてから、ラムザが訊くと、アルガスは苦い記憶を噛みしめるように、

「侯爵様が……エルムドア様が骸旅団に攫われた」

と、事のあらましを語りだした。

——昨日の、夜中。

ランベリー領主、エルムドア侯爵を乗せた馬車は、アルガスら近衛騎士団の兵に護られて、魔法都市ガリランドへ向う途上にあった。そして、スウィージの森を抜ける手前、一行は、突如現れた武装集団に囲まれてしまった。

確認できただけでも、その数二十あまり。対する近衛騎士の人数は、十に満たなかった。

彼らは必死の抵抗を試みたが、あえなく打ち破られ、そのままエルムドア候の身を奪われてしまったという。

「おれは……賊の矢を受けた衝撃で、気を失っていたらしい」
アルガスは、悔悟の念を、その眉間に刻んでいる。

「他に、生き残った者は？」

ディリータが訊くと、アルガスは力なく首を振って、

「……いない。おれだけが助かった」

といって、うなだれた。

「下手人は、骸旅団とみて間違いないんだな？」

「……ああ。ただの追いはぎだったら、手出しはさせなかったさ。

奴らは明らかに、その道に通じた者たちだった」

そういつて、アルガスは唇を噛んだ。

「その後、なんとかガリランドにたどり着いて、北天騎士団の治安維持部隊に、下手人の搜索を依頼した。だが……おれは搜索部隊に加えてもらえなかった」

「……どうして？」

ラムザが問う。

「おれが……よそ者で……半人前だったから」

アルガスは、その眸に、いつそう悔やみの色を濃くする。

「半人前……？」

「そうだ。おれは、まだ、正式な騎士に叙される前の、見習い騎士だ。今回の護衛任務も、初の実戦だったんだ」

「……………」

「それで、いてもたってもいられなくなって、イグーロスのダイスダーグどのに、直訴しようと思ったんだ」

なるほど、ベオルブの名を聞いて、アルガスが過剰な反応を見せたのも、このためであったかと、ラムザは合点した。

「……他領の見習い騎士が、ダイスダーグどのに取り次いでもらえるあては？」

ディリータが、落ち着いた口調で、意見を差し挟んだ。——もったもなことではある。が、突っかかるようなディリータの物言いに、アルガスは、ぴくりと目の端を振るわせた。

「ああ……分かってるさ。でも、この一大事に、じっとしていられるわけないだろう。侯爵様が攫われてしまったのも、おれに力が無かったからだ」

そこで、アルガスは懇願するような目をラムザに向けて、

「だから、ここで、ベオルブ家の人間に会えたのは、何かの縁だ。頼む……執政官どのに……ダイスダーグどのに、会わせてはもらえないか？」

取りすぎるようなアルガスの表情に、ラムザは戸惑いの色をみせた。イグーロス執政官の実弟とはいえ、身分のうえは、単なる士官候補生にすぎないラムザなのである。この件について、兄の耳に入れることは出来たとしても、それ以上、事に関わらせてもらえらるとは到底思えなかった。

なにしろ、ランベリー領主の誘拐という、重大事件である。一介の見習い騎士の手に負えるものではないし、そこに私情を挟み込む余地もない。だいいち、兄ダイスダーグは、ガリオンヌじゅうに張り巡らした”目”や”耳”から、とつくに、この事件の詳細を把握していることだろう。

——が、その道理をいったところで、すんなり聞き分けしそうなアルガスでもない。

「……いちおう、兄上には取り計らおう。が、あまり期待はしないでくれ」

とだけいって、アルガスには、とりあえず納得してもらおうほかなかった。

日はとうに暮れていたが、ラムザは遅れを取り戻すためにも、歩き続けることにした。

アルガスは、目的地も同じということだし、何より怪我をしていたから、このまま護送部隊の列に加わった。

深夜のうちに、一行はマンダリアの砦跡に到着した。ラムザは、

実際にここで襲われた経験から、事前に斥候を遣って砦跡の安全を調べさせたが、人の気配はないという報告を受けて、やっとここに部隊を入れた。

——これで、全行程にして三分の二は来たことになる。

ここでいったん全員に仮眠をとらせ、朝方、ラムザは再出発の号令を発した。

この時、捕虜の一人が、暑いなか護送車の中に押し込められるのは辛いといって、

「歩ける者は歩かせてくれ」

と、頼みいれてきた。

「どうします……？」

ジョセフがラムザの指示を仰ぐと、

「いいだろう」

と彼はいつて、捕虜の要請を容れた。

一方、この措置に難色を示したのは、ディリータとアルガスであった。

「逃げる気かも」

と、ディリータがいったが、ラムザは決定を曲げようとはしなかった。彼は不承不承、従った。

半数以上の捕虜が、自分の足で歩く方を選び、レッドや、その他の負傷者は、護送車に残った。徒歩で行く捕虜は、手枷をされたまま、それぞれに部隊の人員が付いた。

ようやく、護送部隊は任務三日目の行程に入る。

「……………」

ふと気になって、ラムザは、ちらと、アルガスの様子を盗み見た。アルガスが骸旅団の捕虜たちを見る目には、先ほどから、尋常ならざるものがあつた。

主人を、彼らの仲間によって攫われた身としては、ごく自然な態度といえなくもなかったが、その目に、なにか薄ら寒いものを感じずにはいられないラムザであった。

——怪我さえしていなければ、切り捨ててやるものを——とでも
いいかげな、それくらいに剣幕であった。

やがて、峠は下り終えて。

街道は、まばらな雑木林へと入っていく。右手は緩やかな土手になっ
ていて、木々の合間に、ライナス河から発する靄が、かすかに
白かった。

曇天に日輪はおぼろげで、蒸々と暑い。これはこれで、各々の体
力をじわじわと削っていく。

長旅の疲れもあった。終点も間近となって、若い士官候補生たち
には、少し気の抜けていたところもあったかもしれない。

——そこを、突かれた。

「あッ！」

殿を歩いていたラッドという見習い騎士が、咄嗟に声をあげた時
には、すでにその捕虜は、脱兎のごとく、土手を駆け下りていた。

「脱走だ！」

誰かが叫んだのを聴いて、先頭を歩くラムザが、反射的に、

「捕らえろ！」

といったのと、何か鋭い音が、ひようと林間を駆け抜けていったの
とは、ほぼ同時だった。直後に、

——ドスッ

という、鈍い音がして、脱走した捕虜の姿が、追っ手の視界から消
えた。

追っ手が、捕虜の消えたあたりの草むらに駆け寄ると、そこには、
麻の囚人服を朱に染めた、捕虜の背^{せな}があった。

至近から放たれた一矢は、過たず、捕虜の心臓を捉え、その背に
つき立っていた。

啞然として、一同の目は、その矢羽から、それが放たれたほうへ
と移っていった。

「……アルガス？」

と、ラムザが言った。

当人は、ふう、とひとつ、息を吐き出してから、弓手ゆんでを降ろしていた。彼の跨るチョコボの足元には、弓使いのイアンが蒼白な顔をしており、その手には、あるはずの弓がなかった。

「……どうして、殺した」

ラムザが、咎めるような目をアルガスに向ける。

「捕らえろ、と言ったはずだ」

「すまん、足を狙ったんだがな。少し外れたらしい」

平然と、そういつて、アルガスは、彼の足元で棒立ちになっているイアンに、長弓を放ってよこした。

「……こいつが、もたもたしていたんでな。あやうく逃げられるところだった」

「……………」

ラムザの向ける視線を、アルガスは、しらと受け流して、

「だからいったんだ。手枷だけして捕虜を歩かせるなんて、正気の沙汰じゃない」

「……………」

「ああ、捕虜を殺したのは謝るよ。けどな、捕虜が捕虜として扱われるのは、おとなしく捕まっている間だけだぜ。逃げ出したら、殺されても文句は言えない。そうだろう？」

淡々としたアルガスの言葉を、ラムザは無言で受け止める。

アルガスの言うことは、道理である。ラムザに油断があったことも、否めない。

しかし――

（これは……実戦だ）

ラムザは、心にそう念じながら、それでも、自身の甘さゆえの失敗を許せなかった。

アルガスの非道を咎めたところで、どうにもならない。不思議と、怒りよりも、情けなさのほうが、ラムザの胸に広がっていった。

「……これは、僕の責任だ。誰か、彼を埋めてやってくれ」

そういつてから、ラムザはアルガスの姿を視界から追いやった。

殺すことはなかったが、アルガスの行動は正しい。やはり、自分を含め、ここにいる誰もが、実戦というものに対する、責任と覚悟が、足りていなかったとしか、いいようがない。

気まずい空気が、ひとしきり流れたあと、何名かが、捕虜の死体を埋葬するために、土手を下りていった。

死んだ捕虜は、ガリランド襲撃の折に捕らえられた、工作員の人であった。

手かせは断ち切られており、手には、鋸の刃のように、先端を削った石が握られていた。監視の目を盗んで、ここまで来る間に、少しずつ、そこらで拾った石ころを細工しておいたものらしい。

ディリータの提案もあって、捕虜は再び、護送車で運ばれることとなった。

ディリータは、すっかり気落ちしている友の肩に手を置いて、

「あんまり気にするなよ……」

と、励ますようなことをいったが、ラムザは何も答えず、埋葬が終わると、直ぐに出発の合図を出した。

第一章 持たざる者ゝ8. さすらい人・上

慣れぬ目に、新緑がまぶしい。

ミルウーダとエマは、地下洞窟をやっと抜け出し、今、レウス山の中腹に立っていた。

「やっと出られましたね」

エマが、尖がり帽のつばを持って、ぐいぐいと回した。

「これから、どこへ向かうんです？」

「まずは、休める場所を探す」

ミルウーダが先導し、横穴の出口から、急な斜面を降りていく。

ここ、レウス山に連なるベルベニア山系は、ちょうどルザリアとガリオンヌの領境になっており、峰の東側づたいに下りていけば、そこは王室領ルザリアである。

北天騎士団は、本来ガリオンヌ領の軍隊組織であるから、管轄外のルザリアでは、その目も多少緩かろうと、前にレッドの言ったとおり、ミルウーダは、そこを目指していた——といっても、その先に、なにか明確なあてがあるわけでもなかった。

岩壁にへばりつく蔦や、岩の割れ目から突き出す樹木の枝を手掛かりに、一步一步、足場を確かめてゆく。落ちれば、まず助からない高さである。

エマは怖気づいて、横穴の近くで、まだ足踏みしている。

「なにしてる、早く来い！」

ミルウーダが、崖下から呼びかける。それでも、エマは動かない。

もういちど呼ぼうとしたところ、ようやく、彼女は最初の取っ掛かりに足を下ろし始めた。

しかし、そこからが、なかなかはかどらない。

「そのローブを脱げ！ 死にたいのか！」

エマの装束のことを言っているのである。洞窟を歩くだけでも邪魔になっていたそれを身に着けたまま、この急な崖を下りようという

のは、たしかに無理がある。

「いやです!」

「ローブの下は裸というわけでもあるまい! 邪魔なんだから、脱いで、身軽になりなさい!」

「いやです!」

「落ちても知らないぞ!」

「落ちるのもいやです!」

「なら脱げ! その帽子もだ! それでは足元もおぼつかないぞ!」
そんなやり取りが何度か続いてから、エマは渋々、上に羽織ったローブと、尖がり帽を外して、背に負った荷物にしまった。これでだいぶ身軽になったものの、これまた黒魔道士の装束である、途中で大きく膨らんだ長ズボンが、どうにも、かさばって見えた。

黒魔道士に限らず、魔術を専ら扱う戦士が装束にこだわるのは、伝統やしきたりというのもあるが、なにより、身を守るためである。

魔法は、自然界に漂うマナ（魔力の源泉となるもの）を操る術であるから、それを扱うためには、まず、マナに敏感でなければならぬ。優れた魔術師は、このマナに対する感覚が鋭く、少ないマナからでも、強力な魔法を創り出すことができる。

同時に、マナに敏感であるということは、その影響も受けやすいということである。魔術に特化した者が、長い間マナに身を晒していると、拒絶反応や、精神障害を引き起こすこともある。こういった副作用を防ぐために、魔力的に強化されたローブや帽子といった装束が、彼らには必要となってくるわけである。

もっとも、並の魔術師ならば、そこまでマナに影響されるということはなく、まして、駆け出しの黒魔道士であるエマなどにとっては、装束の心配など、取り越し苦労にすぎないのではあるが――

幾度か、ひやりとさせられる場面もあったが、エマは、なんとか崖を下りきった。

「もう、二度とこんな道のりはごめんですよ」

エマが、装束を元通りにしながら、言う。

「なら、置いて行くまでだ」

「あ、ひどい！」

「ふふ、冗談よ」

「……………」

エマは、ムツとした表情を、同時に被った尖がり帽で隠した。その一挙一動が、なにかおかしくて、ミルウーダは、クスクスと、いつまでも笑っていた。

「なにがおかしいんです」

「いや、なんでも」

「ほんとうに、ミルウーダは人が悪い」

「そうかな？」

「そうですよ。　　いつも人を小馬鹿にして」

「そんなつもりはないが」

「つもりがなくてもです」

「さ、行くよ」

「あ……ちょっと」

先に行こうとするミルウーダを追おうとして、エマは、ローブの端を踏んずけて、はでにすっ転んだ。

「——きゃっ！」

一緒に荷物もぶちまけて、地面に突っ伏したまま動かない。そんなエマの姿を見て、ミルウーダは、今度こそ腹を抱えて笑った。

惨めさのあまり、面も上げられないエマ。目に涙を浮かべて、笑いこけるミルウーダ。

——こんなに笑ったのは、いつぶりであろうか。

長い戦いと逃走の日々に身を置きながら、いつしか忘れていた感情が、彼女の中で、にわかに湧き上がってきたのだった。

エマも幼いが、ミルウーダとて、まだ二十歳は出ていない。こんな世でなければ、春を謳歌してもいいくらいな年頃である。

残酷な環境は、しかし、そんな乙女たちからも、人間らしい当たり前な感情を、容赦なく奪い取っていく。

ただ、日常の、何気ないこんなひとときだけが、暖かい春の陽だまりみたいに、つかの間のやすらぎを、彼女たちに与えていた。

いつしか、日は西に傾き始めていた。

二人は、そのまましばらく緩やかな斜面を下って行って、やがて突き当たった沢で、小休止をとった。

「この沢に沿って、このまま進んでみよう」

と、ミルウーダがいった。沢の流れに、導いてもらおうというのである。

「これで、さっきみたいな危ない道は、通らなくてすみますね」

「それは、行ってみないとわからないが」

岩がちな川べりを、二人はゆっくりと進む。

山は、静かだった。

岩にすすがれる水音と、小鳥の囀りばかりが、無常の音楽を奏でている。

川幅は次第に狭まっていき、いつしか、沢は溪谷の底を這うような流れに変わっていた。

「あつ、あそこに！」

エマが、何かに気づいた様子で、前方を指差す。

「つり橋か……？」

ミルウーダの目にも、それは見えていた。溪谷の端から端を、長さにして五十エータ（約七十メートル）はあろうかという、板橋が渡っていた。

「道が、あるかもしれませんね」

「そうだな……行ってみよう」

二人が近づいていくと、案の定、そのつり橋は、狭い山道を繋いでいたのであった。

二人は、つり橋を渡って、その道を下ってゆくことにした。

ところどころ、倒木や土くれに塞がれてはいるが、道なき道を行くよりかは、はるかに足が速かった。

——やがて。

やや開けた場所に出た。

ここだけ日の当りが悪いのか、草木の背も低く、ところどころ地面がむき出しになっている。木の天蓋に覆われた窪地は、まもなく夕闇に沈もうとしていた。

「今日はここで休めそうですね」

エマが、先だって窪地に下りていく。そして、真ん中辺りまでいって、何かに気づいたのか、ふと歩みを止めると、エマはその場にしゃがみこんだ。

「あれ？」

「どうした？」

「なんだろう、これ」

「……？」

ミルウーダも近寄ってみると、浅く穿った地面に小石が溜まっており、その上に被せられた柴や葉から、わずかに煙が燻っている。またその周りに、木の実の殻や果物の皮なんかが、無造作に散らばっている。

「人が、いたらしいな」

痕跡からして、さほど人数は多くないだろう。ミルウーダは、さつと、周囲に警戒の目と耳を廻らした。

こうした山中の開けた場所に、山賊どもが仮の宿を営むのも珍しくはない。そして、そういった輩が、狩を終えて帰ってこないとも限らない。

窪地を取り囲む木立の間隔は黒い闇ばかり、辺りは寂として、葉ずれの音もない。

「ミルウーダ、どうしたの？」

「……ここはよしたほうがいい」

「なぜ？」

「なぜって……ん？」

ミルウーダが、妙な気配を感じて、後ろを振り返った、その時だった。

足元の土が舞い上がり、何かが飛び出した。

「！」

ミルウーダとエマの両足は、あっというまに、その何かに絡め取られていた。

「きゃああああ！！」

エマが、甲高い悲鳴をあげる。

見るとそれは、植物の蔦のようであった。頑丈な蔦は、二人の両足を締め付け、頑として離さない。

「——くそっ！」

ミルウーダが剣を引き抜き、生き物のように蠢く蔦に向かって、二度三度振り下ろしたが、表皮に傷をつけるばかりで、まったく手ごたえがない。

そうこうしているうちに、こんどは別な場所からも土飛沫が上がって、さらに数を殖やした蔦が、意志を持ったようにくねって、彼女たちの両手の自由も奪ってしまった。

二人はそのまま、礫にされたみたいに、手足を突っ張る格好となった。

ミルウーダは、まだ自由の利く首だけを左右に動かして、仕掛け人の姿を探していたが、やがて、四方から、がさごそと葉の擦れる音がして、数人の男たちが、ぬっとその姿を現した。

「これはこれは」

山賊の頭らしき男が、邪悪な薄笑いを浮かべて、縛り付けられた二人のほうへ歩み寄ってくる。

手には反りの深い曲刀を握り、のっしのっしと巨体を揺らして歩くさまは、鎧を着た穴熊そのものである。

「さつきから、この辺をうろちよろしている奴があると思ったら……」

頭は、ミルウーダが抵抗できないのをいいことに、その毛むくじやらの面を、彼女の鼻先に突きつけて、

「……まさか、こんな”野うさぎ”だったとは」

「……………」

ミルウーダは、男の肉叢しむらから沸き立つ、獣のような臭いに鼻を衝かれながら、鋭い敵意を含んだ眼差しを逸らそうとはしなかった。

「へへ、そんなおっかない顔すんなよ……べっぴんが台無しだぜ」

頭が、分厚い掌で、ミルウーダの頬をぺちぺちと撫でる。それから、彼女の手に握られていた長剣を取り上げると、それを向こうへ放りやってしまった。

「さてと、こちらは……」

言いながら、今度はエマのほうへ寄っていき、尖がり帽をひっ掴んで取ると、それも放ってしまった。

エマは、あらわになった面を伏せて、必死に涙をこらえているようであった。

「お、こっちの娘もなかなか、かわいげな面つらをしているじゃねえか。ほれ、よく見せてみる」

頭は、エマの小さい顎先をつまんで、ぐいと持ち上げる。

「ひっ……！」

と、小さく声を漏らして、エマは恐ろしさに、うち震えながら、ぎゅっと目をつむる。

「その子に手を出してみろ……ただでは済まないぞ」

ミルウーダが、呪うような目で頭を睨めつける。頭は、その醜惡な笑みをさらに歪めて、

「心配すんな。こんなガキに興味はねえ」

と、いつてから、ミルウーダのほうへ向き直る。

「おれは、あんたくらいの女が、いちばん好みでね……」

「なにを……」

「しかも、そこらの安宿なんかでは、とてもお眼にかかれねえ上玉ときた」

そういつて、卑猥な眼を、ミルウーダの肢体に這い回らせる。取巻ケダモノきの獣たちも、その本能に取り付かれたような眼を、自分の肉体に向けているのを感じて、ミルウーダは、女の、もっとも触れられた

くない部分をひた隠すように、戦慄した。

「しかしまあ、小汚いこと」

頭は、ミルウーダの股座またぐらの前で、わざとらしく顔をしかめると、ひらひらと掌を扇いだ。

「なっ……！」

取巻きたちが、どっと沸き、ミルウーダは、怒りと、羞恥とで、顔を染めた。目の前の下郎を、打ちのめしたいという衝動は、しかし、両手足に絡みついた蔦の枷に阻まれた。

「貴様……！」

「まあまあ、そう噛み付きなさんなって。なに、おれたちだって、犬畜生じゃあないんだ」

そういいながら、ミルウーダの姿を見る頭の中には、もはや人間の持つ理性など、欠片も残されてはいないように見えた。

「女子供を手打ちにしたりはしねえよ。丁重に扱ってやるから、その間、ちょっと、おとなしくしてくれてりゃあいいのさ」

頭が、なにやら粉のようなものの入った巾着を取り出し、それを、ミルウーダの鼻面に近づける。――眠り粉か、痺れ粉か。いずれにせよ、それでミルウーダを手籠めにしようとするものらしい。

ミルウーダは、それを拒んで、あらん限りの力を振り絞る。

「くっ……！」

刺激臭が、巾着の口から漂い出る。

もう一度、腕に力を込める。

――と、にわかに、今まで彼女の四肢を縛して離さなかった蔦が、するりと外れた。

「！」

「なっ――」

頭が、反射的に身を護ろうとするより早く、ミルウーダは、素早く屈めた両の足をバネに、頭の懷に、強烈な体当たりを見舞った。

どうん！

と、頭の巨体は弾き飛ばされ、背から地面に叩きつけられた。

「やつ！」

と、取巻きたちも、一息遅れで臨戦態勢に入る。

——が、その眼の前を、昼間のように明るい閃光が掠め通って、賊どもは怯みをみせる。蔦地獄から解放されたエマが、雷属性の黒魔法《雷撃》^{サンダー}を放ったのである。

「小癪な……！」

賊の一人が、曲剣を振りかざして、エマに向かって突進する。

「まばゆき光彩を刃となして……」

エマは慌てて次の詠唱を始めるが、間に合わない。振り落とされた白刃は、しかし、エマの肉を切り裂くことなく、寸前で、静止していた。

「……!?!」

エマ自身はもちろん、他の賊どもにも、何が起こったのか分からなかった。エマに仕掛けた男は、その姿勢を保ったまま、石と化していたのである。

「貴様らっ！ 他人^{ひと}のねぐらで何をしているっ！」

大声がして、木立の間から、一人の騎士が躍り出た。その手に握られた拔身の長剣は、何やら異様な、青白い光を纏っている。

「か弱き女人に、かくも不埒な行いをしようとは……捨ておけん！」などと言って、その長剣を構えるのである。

それを見て、

「あいつが先だ！ やっちまえっ！」

と、二三の賊がまとめて掛かったが、騎士は余裕の笑みすら浮かべて、

「喰らえっ！ 《石化》^{ブレイク}!!!」

長剣の切っ先から、それと見て魔法と分かる光弾が発せられ、その直撃を受けた賊の体は、みるみるうちに冷たい石と化していく。

「な……」

物言わぬ石塊となって、地面に転がっている仲間の姿を、賊たちは

呆然と見つめている。

「こいつはまずい……退くぞ！」

直ぐにわが身の危険を察したのか、残りの賊どもは、脇目も振らずに逃げ出した。

「助かった……」

賊の姿が見えなくなると、エマは、緊張の糸が解れたように、ペたんと、その場にへたり込んでいた。

ミルウーダはというと、ひとり取り残された賊の頭に剣先を向けて、月のように青白い顔をしていた。

「たのむ、命だけは……」

「……………」

彼女の、その静かな怒りは、直ぐにでも、頭の喉下を突き刺しそうなものであった。

それだけ、彼女の受けた恥辱は大きい。

——ややあって。

「……いけ」

ミルウーダは、そう云った。

「へ？」

「失せろといっている。二度はいわんぞ」

ずいと、切っ先を押し付ける。

頭は、「わっ！」と、まろび出るように、その場から逃げ出した。

「……………」

頭の図体が闇間に消えるのを見届けてから、ミルウーダは、静かに剣を納めた。が、怒りまでは、なかなか収まりそうになかった。

「なんで逃がしたんだい？ ……ミルウーダ嬢」

「……………」

ミルウーダは、思いがけず、聴きなれぬ声音に自分の名を言われたので、ちょっと驚いたように、そちらへ顔を向けた。

助太刀があったのには気づいていたが、それからのどさくさで、助っ人の顔にまでは注意がいていなかったのである。

が、今改めて、その助っ人の面立ちを窺えば、なるほど、どこかで見知った顔には違いない。

「あ……あなたは」

「覚えていてくれたかい？ そいつはうれしい」

「マンダリアの砦で」

「そうそう、あんたに縛り上げられた」

その騎士は、ミルウーダたちがマンダリアの砦に立て籠もっていたあの日、同士の者が捕らえた、二人組のうちの一人なのであった。
「ウルフだ」

名乗って、騎士は手を差し出す。

「ウルフ……助けてくれてありがとう」

礼を言って、ミルウーダはそれに応じる。

「あれ、お仲間は？」

ウルフにそう問われて、ミルウーダは、はっと表情を曇らせた。

「いや……あれから、いろいろあってな」

そう言葉を濁しているところへ、尖がり帽をかぶり直したエマが来て、

「あ……先ほどは、危ないところを、どうも、ありがとうございます」

と、丁寧に礼を述べた。それから、なにやらウルフの剣のことが気になるらしく、

「あの、その剣は、いったいどうなっているんです？」

と、今は鞘に納まっているそれを、しげしげと観察しながら、訊くのである。

「ああ、これかい？」

ウルフは、ベルトの留め金具から剣の鞘を取り外すと、それを、エマの目の高さに掲げ持った。

「この剣は、その名もずばり、”魔法剣”という」

「へえ、それで、さっきみたいな魔法が打てるんですか？」

エマは、じつくりとそれを検分する。特別、意匠が凝っているとい

うわけでもなく、見てくれは、ごく一般的な鉄のロングソードである。

「そういうことだ。もっとも、誰にでも扱える代物ではないがね」

「ふうん……古い魔導書で見かけたことはあるんですが、まさか、実物があるとは思いませんでした。たしか、古のテンプルナイトの長が身につけていたとか」

「う、うむ」

「そんなものを、どうしてあなたのような、さすらい人が持っているんです？」

「いや、それはだな」

ウルフは、なにか不自然な焦燥をみせてから、剣を、元の金具に留め直してしまった。

「あなた、もしかして盗んだんじゃない……」

「まさか！ これは、れっきとした、おれの持ち物だ」

と、ウルフが奇妙に大きな声で言ったのを、エマはいつまでも訝しんでいた。

「とにかく——もう、だいぶ暗くなってきたし、お前らには特別に、おれの寝床を貸してやるから、野営の準備を手伝ってもらおうぞ」
そういつて、向こうへ歩いていつてしまった。

「……怪しい」

エマが、ウルフの背を見ながら、呟く。

「いや、悪人ではないようだ」

と、ミルウーダはいう。

「でも、なんか怪しいですよ！」

「たしかに、素性はよく分からないが……それでも、危ないところを助けてもらったんだ」

「そりゃあ、そうですか」

「それに、いちおう顔見知りだし」

「え、そうなんですか？」

「覚えていない？ マンダリアで、ベオルブの坊ちゃんと一緒に、

あの騎士も捕らえられていたのを」

「そういえば……そんな騎士がいたような」

「まあいい、万が一、あの騎士が妙な考えをおこしても、こんどは、さつきみたいな下手は打たないから」

「う……」

エマは、例の山賊どもに、ミルウーダがひどいことをされたのを思い出して、口をつぐんだ。

ウルフは、どこからか大量の柴葉を運んできて、それを纏めて、石榴まりの上に置いた。

「おい、その黒魔道士」

「エマです！」

「ああ——エマ君、ちょっと、お得意の黒魔法で火を熾してくれんか」

「そんな薪を燃やすのに、黒魔法なんていらないますよ」

「いいから、そう、もったいぶらずに」

「……………」

エマは渋々、詠唱のいらぬ簡単な炎魔法を唱えると、柴葉の山は、あっという間に燃え上がった。

「へえ、便利なもんだ」

「魔力だって、限られているんです」

「使い切ると、どうなるんだ」

「あなた、魔法剣を使うくせに、そんなことも分からないんですか？」

「おれのは、魔法というよりかは、剣術に近いからな。で、どうなるんだ？」

「すぐく、疲れます」

「それだけ？」

「そうですよ！ それはもう、歩けないくらいに」

「へえ」

「だから、こんなつまらないことに使いたくないんです！」

「あはは、そうかそうか」

「……………」

ウルフは笑いながら、岩陰に隠れてあったらしい兎の死骸を引張り出すと、慣れた手つきで、それを捌き始めた。

第一章 持たざる者ゝ9・さすらい人・下

地も、草木も、今はひっそりと眠っている。

星ばかりが明るい夜天だ。

野営の残り火が、ときどき、ぱちつと爆ぜて、羽虫みたいな火粉を舞わせていた。

エマだけが、尖がり帽を両の手に抱いて、無垢な寝顔をみせている。そこにひとときの平穏を感じながら、ミルウーダは自分のマントを脱いで、エマの体にそっと掛けていた。

「それで——その娘を、どうするつもりなんだ？」

ウルフが、赤熱した石溜めを木の枝で引っ掻き回しながら、訊いた。ミルウーダは先ほどまで、ウルフに、これまでのいきさつを端的に話していたところであった。

「……………」

ミルウーダは、片手を眠っているエマの背中に置いたまま、押し黙ってしまった。

無論、このままエマを争いの渦中に巻き込むつもりはなかった。

エマがなんと言おうが、彼女には、戦争にかかわらない、まっとうな人生を歩んでほしいと、ミルウーダは切に願っていた。

しかし、エマはまだ幼すぎた。この荒んだ世に、独りきりの少女が心安らかに暮らせる場所など、あろうはずもなかった。かといって、ミルウーダの傍にいる限りは、争いの影は、どこまでもついて回るのであった。

「私の田舎に預けようかとも思った」

「ご両親のもとへかい？」

「ああ。しかし、私が兄とともに骸旅団に参加したことを、両親は快く思っていない。縁を切られた、といってもいい。そんなところへ、今さらおめおめと頼っていくわけにもいかない」

「……………」

「孤児院へとも考えたが……下手なところへやって、身売りに出されるようなことがあってもかなわん」

「こんな世の中じゃあな」

ウルフはそういって、深い溜息をもらした。

「……………」

その姿を横目に見ながら、こんなさすらい人でも、俗世を憂うことがあるものかと、ミルウーダは、感心ともなんともつかぬ気持ちを抱いているのであった。と同時に、

——ただものではあるまい

という、直感めいたものも、彼女の内にはあった。当のウルフはというと、しかしそんな素振りは微塵も見せず、よくよく見れば涼しげな目元も、今はだらしなく緩みきっているのである。

ミルウーダの眼差しに気づいたのか、不意にこちらに流したウルフの目と合ってしまい、「あっ」といって、ミルウーダは慌てて視線を横に逸らした。

彼女のそんな仕草に、なにを思ったのか、ウルフは、微笑みを口元にたたえて、

「おれにいわせりゃ、あんだだって、戦場に身を置くのには、まだ若すぎると思うがね」

「……………」

「それに……」

そこで言葉を途切って、コホンと、小さく咳払いをする。

「きれいだ」

「え？」

ミルウーダは、何を聞き違えたのかと、眉を寄せた。

「いや、おれの目は確かだぜ。マンダリアで、ひと目見たときからおれはあんたに惚れていた」

すまし顔で、言うのである。

「は……？」

「ははは、そんな顔しなさんなって。おれは、真心から言ってるん

だ。星の数ほど女を見てきたが、その中でも、あんたは飛びぬけて美しい」

「な……なにがしたいの？」

「いったとおりのことさ。あんたはきれいだ。もつとも、まだ自分の魅力には気づいていないようだが」

そう語るウルフの眸は、潔いほどに真っ直ぐである。ミルウーダは、啞然と、その眸を見返していた。

「それに、あのベオルブの坊ちゃんも、相当あんたに惚れ込んでいたと思うぜ」

「え……？」

「それも、かなりマジでな。あいつは、若造のくせして、おれ以上に女を見る目があるらしい。初^{うぶ}だが、あれはきつとモテるぜ」

「……………」

ミルウーダには、ウルフという騎士のことが、ますます分からなくなっていた。本気なのか、それとも、人をおちよくっているのか——判然としない。

一方で、彼女の純粋な部分は、確実に、この一騎士の人となりにより、惹かれ始めてはいた。

「……あなたはいったい、何者なの？」

との質問に、ウルフは黙って焚き火の火を見つめていたが、

「おれは、一介の浪人にすぎない」

と、答えただけであった。それでも、納得のゆかぬげなミルウーダの表情を見て、ひとつ笑みをこぼすと、

「べつに隠すつもりはないが……」

手に持っていた枝を二つに折って、それを、だいぶ火の乏しくなっていた焚き火に放り込む。

「そんなこと、訊いてどうする」

「あなたのことを信頼したいだけ」

「そうかい」

ひとつ、溜息をついてから、

「たしかに、昔は、それなりの地位にあった。自分でも、優秀なつもりでいたらしいし、心に決めた女性^{ひと}もいた。それが……あるとき、上司の不審を買ってね」

どこか、他人ごとのような口ぶりである。

「きっかけは、本当にくだらないことだったんだが……おれは、お役御免とあいなって、地位も名誉も失って……でも、そんなものは正直、どうでもよかったんだ。おれには、もっと大切なものがあつた。その大切なもののために、おれは名も捨てて、放浪の旅に出た」

「……………」

「ホーリー・ドラゴンって、知ってるか？」

「え？」

「ホーリー・ドラゴン——この国のどこかにいて、”巡礼者”として認められた者の願いを、ひとつだけ叶えてくれると云われている、幻の聖竜さ。おれは、そいつを探しているんだ」

ミルウーダは、いよいよ、この男の正気が知れなくなっていた。そんなお伽噺を、本気で信じているというのか——

「おいおい、おれは真面目な話をしているんだぜ？」

ミルウーダの表情を見て、ウルフは言うのだった。

「……まあ、信じるという方が、無理な話だけだな」

「……………」

「でも、おれは信じている。こうしてレウスの山に入ったのも、この山のどこかにあるらしい古い遺跡に、聖なる竜の伝承が残されていると聞いたからだ」

「……………」

「おれは、ぜったいにホーリー・ドラゴンに会って、願いをかなえてもらう。そして、”大切なもの”を取り戻すと、神に誓ったんだ」

そういつて、ウルフは拳を握り締める。どうやら、ふざけているのではないらしかった。彼の眸は、まだ見ぬ聖地を見据えるかのように、爛々と輝いていた。

「ちよと、熱くなりすぎたな」

照れ隠しに、後ろ頭を掻く。

「おれという人間は、だいたいそんなところだ。もう、眠ろう。疲れが残ってはいかん」

「……ありがとう」

それは、ミルウーダの口から、自然と、こぼれ出たものだった。

「……？」

「いや、話してくれて」

「なに、つまらん話さ」

「ふふ……」

「お……それだよ、それ」

「なにが？」

「その、笑顔だ。それが見たかったんだよ」

「え……」

「女の子は、そうやって笑っているのがいちばんだ。いつも、しかめっ面ではいかん」

「……余計なお世話だ」

ぷいと、そっぽを向くと、ミルウーダは、ウルフに背を向けて寝転んでしまった。

「あ……」

取りつく島もない背中を向けられて、ウルフは焚き火のほの明かりに、困り顔を浮かべていた。

——女というものは、どうもよくわからん。

どさっ、とその場に仰向けになって、彼は瞬く星空を見上げていた。

——それから、どのくらい眠ったであろうか。

ミルウーダが目を覚ましたのは、ようやく夜が白みがかった頃であった。

山の空気は澄み切って、草木は、朝露に濡れている。

焚き火はすっかり燃え尽きて、黒い炭ばかりになっていた。エマは、その側で、まだくうくうと寝息をたてている。

「よう、お目覚めかい」

ウルフだった。片手で書物を捲りながら、梨にかぶりついている。

「ほれ、食いなよ」

といって、荷物から梨をもう一個取り出し、ミルウーダに放つてよこす。

「すまない」

といって、それを受け取る。ウルフは、口をもぐもぐいわせながら、なおも書物に没頭している。

「それは？」

ミルウーダが訊く。

「ん？」

「その、本だ」

「ああ、これ」

ウルフは、芯だけになった梨を放り捨てると、本を閉じて、ミルウーダに手渡した。

「バイブルだ」

「教典？」

「そう」

端の擦り切れた頁を捲りながら、ざっと、目を通す。相当古い言語で書かれているらしく、内容は読み取れなかった。

——が、表紙の見開きに戻ると、そこには、見知った一節が書かれていた。

”黄道十二宮ノ勇士”
ゾディアックブレイブ

黄道十二宮ノ勇士、混沌ヨリ、出デキタリテ、悪ヲ除キ、世ニ、
ルカヴィ
再ビノ平安ヲ、モタラサン

敬虔なキルティア教徒でなくても、畏国民ならば、おそらく、だれもが知っている一節である。

——ゾディアック・ブレイブの伝説。黄道十二宮を司る、十二人の勇者の物語。

世が乱れるたび、星々に選ばれし十二人の勇者が現れ、”ルカヴィ”と呼ばれる悪の根源を取り除き、地上に平安をもたらす——と、そう伝承は語っている。

しかしそれは、神話や伝説というよりも、半ばお伽噺として、庶民の間には受け入れられていた。文字もろくに読めぬ農村の小童でも、さまざまに節をつけて、これを諳んじているほどである。

「その本に書かれているのは、聖アジヨラの遺した長大な奇跡の記録の、ほんの一部にすぎない。おれは殊に、聖アジヨラと、ゾディアック・ブレイブに関する説話を気に入っていてね。こうして、教典の写本を、持ち歩いているわけだ」

ウルフは、大事そうに、その冊子を懐にしまいながら、
「こんな世の中だしな。」ゾディアック・ブレイブ”の出現だって、信じてみたくもなるのさ」

「本当に世が乱れていたら、彼らは現れるものなのか？」

「さあな。所詮は伝説、だ。世の中は、やっぱりおれ達人間の手で、何とかするしかないと思うが？」

「……………」

ミルウーダのすぐ脇で、エマが、大きく伸びをした。

「あれ、みなさん、お早いですね」

などと言って、ねぼけ眼をこすっている。

ミルウーダは、ひとつ嘆息して、梨の皮に、新しい歯形をつけていた。

三人は、仕度を済ませると、窪地を出て行った。

その淵に行き着いたところで、エマが、「キャッ！」と、小さい

悲鳴をあげていた。

尻もちをついたエマの前には、彼女とちょうど同じくらいの高さの岩があった。よく見るとそれは、”人間”そのものであった。地べたに両の手をついて、見開いたままの目は、窪地のほうを凝視している——昨日、エマとミルウーダを襲った山賊の、今は冷たい石像となった姿なのである。

ウルフは、その石像と向かい合うようにしゃがみ込んで、

「——昨日、君たちを蔦で縛り上げていた風水士さ」と、いった。

「死んでるんですか……？」

恐る恐る、エマが訊ねる。

「いや、そのうち魔法が解けて、もとの姿に戻るさ。こうなっている間に、鎚か何かで叩き壊してしまえば、それこそ、お終いだけだな——といっても、魔法で作られた石だから、そう簡単には壊れないが」

「……………」

エマは、その恐ろしい術に掛かった人型を、尖がり帽のつばの影から、じっと見つめている。

「魔法ってこわいですね」

「ははは、黒魔道士たるものがなにをいう」

「私には、まだこんな魔法は扱えませんが……これからは、もっと気をつけて使いたいと思います」

「ウム、それにこしたことはない。剣も、魔法も、人を傷つけるが、護ってくれもする——ようは、扱いようだからな」

ウルフは、立ち上がった、

「とにかく、今はここを離れよう。こいつらの仲間が、また懲りずにやってくるかもしれんしな」

そういつて、深い緑の中へ、先だっていくのだった。エマは、その背にくっ付いてゆく。

「……………」

が、ミルウーダだけは、その場に突っ立ったままにいる。

「ミルウーダ、どうしたんですか？」

エマが呼ぶと、彼女は鳥にでもつつかれたように、

「いや、なんでもなし……行こうか」

硬い笑顔をみせてから、エマの横に並んで歩き始めた。

今日はなにやら、浮かぬ横顔のミルウーダである。

「昨日はよく眠れました？」

エマが、その横顔に訊く。

「ああ。おまえほどじゃないが」

「……私だって、疲れていたんですよ」

「そうか」

「ほんとに大丈夫？」

「うん。なんともない」

「……なら、いいんですが」

それきり、二人は黙ってウルフの後について行った。

道はらしい道はないが、柴草に覆われた斜面は、ずっと下っていくようだった。

そのまましばらく行くと、急に視界が開けて、一行は眩しさに、目を瞬かせていた。そこは、山肌から突き出た崖のてっぺんであった。目下に広がる大平原は、中空に漂う断雲の影を映して、まだらに流れている。

一行は息を吞んで、つかの間その絶景に見とれていた。

「——いま目前に開けているのが、ルザリア平原。そして、あれが……」

ウルフが、地上の一点を指差す。

「王都だ」

その指す方を見れば、地上の遙か彼方に、王都ルザリアの白亜の城壁が、午前の陽光を受け、真珠のように輝いている。

「……すごい」

エマが、感嘆の息を洩らす。

「おれは、このまま山を下りずに、遺跡を探すつもりだ。あんた達はどうする？」

「……………」

「どこか、行く当てはないのか」

ミルウーダが、静かに首を横に振る。ウルフは、むうと唸って何か考えていたが、

「この峰のふもとに、ハドムという街がある。とりあえず、そこへ行ってみてはどうか」

と、言うのである。

「さすがの北天騎士団も、そんなところまで出張ってはいないだろう」

「……………」

「不安なのか？」

「……いや」

「ならば、行ってみるといい。いちど、きちんとした宿で休んだほうがいい」

「……………」

「なに、黙ってんのさ。なんなら、このままついて来たって構わないんだぜ？」

「……なぜだ」

「え？」

ミルウーダは、何か思いつめたような眼差しを、ウルフへと向けていた。

「私たちは、国家に追われている身。このまま、北天騎士団に引き渡すことだってできる。それなのに、どうして……」

「ははあ、そんなことで、ミルウーダ嬢はウジウジしなさっているのか」

「あなたも、罪に問われるかもしれないのよ？ 加担者として……」

「別にかまわんさ」

「え……………」

「あんたが何者だろうが、知ったことか。おれは、ミルウーダという、一人の女に惚れたんだ」

「わ、私は」

ぽん、と、ウルフの大きな掌が、ミルウーダの頭の上に乗った。呆氣にとられて、ミルウーダは、心なしに潤んだ眸で、騎士の顔を見上げていた。

間近に見ると、思っていたよりも、ずっと高い背丈。

そして、どこか、兄の面影を思わせなくもない、目と眉――

「いい顔してるぜ」

「なっ……!」

ミルウーダは、その手を払いのけて、自然と零れ落ちてきたものを、拭っていた。

「素直じゃないなあ」

「……………」

――この、胸に焼きつくような気持ちは何なのだろう。それは、彼女がいまだかつて味わったことのない、たしかに、一個の感情であつた。

「なにイチャついてんですか!」

見ると、エマが腰に手をあてて、頬を膨らませている――のは、帽子と襟に隠れて見えないのであるが。

「ハハハ、すまんすまん。そんなつもりはなかったんだが」

「何しらばっくれてんですか! 惚れたの腫れたのいっておいて」

「ま……それは、挨拶みたいなもんでな」

「そんな挨拶があつてたまるもんですか!」

「誤解してくれるなよ? おれには、心に決めた女性ひとがいるんだ」

「なら、とんだ浮気者ですね」

「いや、これは参ったな」

ウルフは、うなじを掻きながら、暢気に笑う。その朗らかな笑い声を聴きながら、ミルウーダは、長い間、心の奥底で冷え固まっていたものが、すうっと溶けていくような、そんな感覚を味わっている。

た。いつしか、その口元にも、柔らかな笑みがこぼれていた。

結局三人は、そこからしばらく下ったところの分かれ道で、進路を別にする事となった。

——その、別れぎわ。

「こうして再び相まみえたのも、アジヨラのお導きか——あるいは、世の中というものは、存外狭いものらしい」

ウルフが、もったいぶって言う。

「まあ、これを最後といわず、縁あらば、またどこかで会おうとしよう」

そういつて、手を差し出す。

「ありがとう」

「なんの、礼には及ばん」

ミルウーダとウルフは、固く手を握り交わす。

「それから、お譲ちゃん」

ウルフは、次にエマのほうを向いて。

「君は歳のわりに、しっかり者のようだ。この頑固者を、どうか支えてやってくれ」

「言われるまでもないことです！」

エマが得意げに、尖がり帽の先をぐいと持ち上げる。

「しかし、君はまだ若い。くれぐれも、命だけは粗末にしてくれるな」

「もちろんです！」

「ウム、頼んだぞ」

ひとつ頷いてから、

「では」

と一言、片手を掲げると、二人に背を向けて、彼は山の奥へと続く道を歩き始めた。それを見送ってから、

「……それじゃ、私たちも行きましょうか」

と、エマが先立って、麓へ向かう道を下り始めた。——が、ミルウーダは、その場にじっと佇んだまま、動かない。

「……ミルウーダ？」

「……………」

彼女の目は、去っていくウルフの姿を、まだ見つめているようだった。——やがて、

「ウルフ！」

と、間もなく木々の合間に消えようとしていたその背を、ミルウーダの声が追っていた。

ウルフの姿が、はたと歩みを止めて、振り返る。ミルウーダは、少しためらうように息を吞んでから、

「名を……あなたの本当の名を教えてはもらえないか？」

と、その姿へ向かって、言った。

「……？」

彼女の意外な質問に、ウルフは戸惑いの色をみせる。風に誘われて揺らめく木漏れ陽の下で、目と目で繋がった糸だけが、ぴんと張り詰めていた。

「あなたは、名を捨てて、さすらい人となったと……そういった」

「……………」

「その名を、私に教えてほしい」

曇りない、ミルウーダの眼を見つめて。どこか、憂いを秘めたような笑みを浮かべながら。

「……………」

ウルフは、しばしの間逡巡していた。

——やがて、

「……ベイオウーフ」

と、彼はそう名乗っていた。

「ベイオウーフ・カドモス。それが、おれの本当の名だ」

第一章 持たざる者 10. 隠れ家

レウスの東の麓、アズバール伯統治下の城下町・ハドム——
全人口にして五千人ほどと、王室領ルザリア内では、それなりに
大きな街である。

そのはずれにある酒場”角笛館”は、旅籠屋も兼ねており、上質な
麦酒も出るというので、旅人や、その日暮らしの傭兵たちの溜まり
場となっていた。

その人いきれとパイプ草の煙に曇った薄暗い店内の隅で、怪しげ
な風体の男が二人、小さい丸机を挟んで座っていた。

「兄者」

と、若いほうの男がいう。その見た目も、落ち窪んだ眼窩と、灰色
のねっとりした髪のせいで、年齢よりもだいぶ老けて見える。

「……………」

兄者と言われたほうは、むっとり黙って、麦酒の入ったマグを傾け
て、茶色い口髭を濡らしている。

「兄者、聞いてますかい？」

「ん？ ああ、聞いてるとも」

「こっちは、大事な話をしてるんです」

「……………」

「ちと、今日は飲みすぎじゃありませんかね」

「そうでもないさ。これっぽちで……」

ひとつ、汚い音を鳴らすと、空になったマグを脇に置く。

「んで、何の話だったか」

「……はあ」

若いほうが、大げさに、深いため息をつく。

「先ほどから、何度も申し上げてますがね」

「ん」

「聞いておりますかい？」

「聞いとるがな」

どうにも、酒のほうに吞まれているらしい兄者の耳に近づくようにして、若いほうはひじをつくと、ぐいと前に身を乗り出す。

「それで、ひげの親父どのは何をしておるのかと、このごろ若い衆が騒ぐのですよ」

「そうだってな」

「だから、何をお考えなんです」

「何をとは……」

「兄者は、今は機を待てという。……ウィーグラフどのが立たれるのを」

「そうだ」

「しかし、その機というのは、レアノールでの敗北以来この二月あまり、待てど暮らせどやってこない」

「……………」

「いつまで、死人の旗揚げを待たねばならんのかと、みな業を煮やしているんですよ」

「死んだかどうかは、まだ分からんだろうが」

「そう言われますがね、たとえどこかで生きていたとしても、彼にはもう、かつての熱意も志も無くなっちゃったのではと、皆が口をそろえていうのですよ」

「ううむ？」

「なにせ、あの大敗北のあとです。流石のウィーグラフのも、ぼつきり折れちゃったのだらうと、そう思われても不思議ではありませんぜ」

「……………」

「兄者が、騎士団にいた時分から、ウィーグラフどのを慕っておられたのは、よく分かります。ですがね、どんなに立派な人物でも、死んでしまっただけはおしめえなんですよ」

「だから、死んだとは……」

「諦めちゃったのなら、そいつは死んだも同然です」

「む……」

「いつまでも、そんな幻を追っていないで、目を覚ましてほしいと、皆そう言ってるのです」

若いほうは腹立ち紛れに、椅子に寄りかかると、マグの麦酒を一息に飲み干した。

「目なら覚めとるがな」

「そうですかい？」

「……………」

「何か遠大な計画でも、あるといわれるなら、お話をうかがいます
がね」

「……………」

「あの隠れ家に籠りつきりでは、なにひとつ、始まりもしませんぜ」
「それくらい、分かっとるさ」

「……………」

兄者のほうは、手招きして店主をこちらに呼び寄せると、さらに
大きなマグを二つ、持ってきてさせた。

「……今は、まあ飲まんかい」

といって、そのひとつを、若いほうに差し出す。

「……………」

若いほうは何も言わず、勧められるままに、マグを受け取る。が、
それを抱えたきり、口にしようもしない。

「ところで兄者は、エルムドア候誘拐の話を聞かれましたかい？」

ごくごく、豪快に咽を鳴らしている兄者を暗い目でみながら、若
いほうがいう。兄者のほうは、マグを下ろすと、袖で口をぬぐって、
「なんだって？」

と、その太い眉を寄せて、伏し目がちな弟分の顔を見やる。

「ランベリーのエルムドア侯爵が何者かに攫われたって、三日ほど
前から、その話題でもちきりでさあ」

「……………」

「知ってましたかい？」

「いや、初耳だ」

「今、北天騎士団が血眼になって下手人の搜索中だって」

「うむ、それが？」

「で、その下手人というのが……」

ここで、若いほうは一段と声を低くすると、周囲を見やりながら、

「どうも、ギスタヴと、その一派らしいんで」

「……………」

兄者のほうは、さっきまでになかった真剣な面持ちをみせて、

「確かなのか？」

と、訊き返していた。

「ええ。他にも、ガリランドの都督の身柄を狙って都督府を襲ったとか、何かと物騒な話を聞きましたがね。どれもギスタヴが一枚噛んでいたようなんです」

「ふうむ……」

「で、兄者はどう思われます？」

「何が？」

「ギスタヴのことですよ」

「いや、貴人誘拐とは……大きく出たな」

「まったくです。大した人数もおらんでしょう。よくまあ、そんな大それたことをやってのけたもんです。さすがは、”狼”のギスタヴというべきか」

「つまりお前さんは、ギスタヴの一派に加わりたいと」

「そのとおりです！ どこかにいつちまったきり音沙汰なしのウィーグラフとちがって、ギスタヴは行動を起しているんです！ そして、現にうまくいっている」

「そりゃ、そうだがよ」

「てまえらも、ギスタヴに協力すべきです！ 人数が増えれば、もっとでかいことだってできる」

「しかし……人攫いなどは、ウィーグラフどのが認めんだろうな」

「他になにがでつきるってんです？ ギスタヴのやり方は理にか

なっている。違いますかい？」

「……………」

——カランコロン

店の扉に掛けていたベルが、来客を知らせたのだった。兄者は、何とはなしに、今しがた店に入ってきた客のほうを見やって、次の瞬間、あっと目を丸くしていた。

「……？」

弟分のほうは、兄者の様子が変わったのに気づいて

「どうしたんで？」

と、眉をひそめていた。

「今来た客」

「へい？」

「あそこに立ってる……見てみる」

兄者が指すほうを、弟分も肩越しに見やると、入り口付近に、外套を纏った旅人らしい姿がひとつと、その連れとみえる、黒魔道士の尖がり帽が目に入った。

「女……ですかい？」

他の客からも注がれる視線の合間を縫うようにして、カウンターへと向かう二人の姿を目で追いながら、弟分が囁く。

「見覚えはないか？」

「ええと……」

「ありゃ、ミルウーダだよ」

「えっ！」

と、兄者のほうを振りかえる。

「ミルウーダってえと……ウィーグラフの妹の」

「そう」

「レアノールで死んだとばかり」

「いや、俺の目に狂いはねえ」

「しかし、どうしてまたこんな所へ」

「事情は知らんが……おそらく、ガリオンヌから落ち延びてきたの

だろう」

「……………」

二人は、それきり無言でカウンターのほうを見ていたが、ひしめく客の陰にミルウーダの姿は隠れていた。

「……………」

兄者が、何を思ったか、ふいにのっそり立ち上がったので、弟分が、どうしたのかと質すと、

「外で待つ」

とだけ言い置いて、兄者のほうは店を出ていってしまった。

酒場は、獣の群れのように、どやどやと、息苦しい熱気に包まれている。そこへ急に現れたミルウーダとエマの姿は、岩の上に花でも咲いたみたいに、周囲の目を惹きつけていた。

「あんたら、旅の人かい？」

カウンター越しに立ったミルウーダに、店の主が訊いていた。

「部屋をひとつ借りたい」

ミルウーダは聞かぬふりをして、要件だけを述べた。店主は目を細めて、

「一泊十ギル」

と、いったとおりの額を、ミルウーダは無言で手渡す。

「こういっちゃナンだが……………」

店主は受け取った硬貨を数えながら、

「女の二人旅ってのは……………感心しねえな」

「どうして？」

「どうしてって……………」

金を懷に納めて、カウンターに身を乗り出す。

「奴らの目を見てみる」

「……………」

店主は客席のほうを顎でしゃくったが、ミルウーダは振り向くまで

もなく、店に入った時からその汚らしい視線を体じゅうに覚えていた。

「奴らは飢えた獣だ。……用心棒はつけられねえぜ？」

「その必要はない」

ミルウーダが、腰のモノをカチャリと鳴らしたのを目端にとらえて、店主は眉を吊り上げた。

「ほう、心得はあるようだな」

「部屋は？」

「別棟だ。店を出て裏手に回ったところにある」

「ありがとう」

礼だけいってニコリともせず、ミルウーダはカウンターを離れた。店に充満した客は、女二人だけの姿を見ながら、にやけ顔をうかべたり、額を寄せてひそめき合ったりしている。

「目を合わせるな」

傍のエマだけに聞こえるように、ミルウーダがいった。エマはすっかり怯えた様子で、ミルウーダの後を黙ってついてゆく。

酔った客が、卑猥な言葉を投げかけるのを無視しつつ、ミルウーダとエマは、店の入り口を指して、ひた歩く。

——ッ！

「ギャッ！！」

刹那、何か物凄い音がして、何事かと、音のしたほうを見れば、店の真ん中で客の男がひとり、仰向けにひっくり返っていた。

男の手首はミルウーダに捻り上げられて、危うい方向へひん曲がっている。苦痛に歪む男の顔を、ミルウーダの鋭い軽蔑の眼が見下ろしている。

「は、放して……」

男が、情けない声を洩らすと、ミルウーダはその手を、乱暴にはたき落とした。

「うう……」

男は自分の手首を庇いつつ、その場にうずくまっている。その姿を

尚も見下しながら、ミルウーダは、怒りに息を荒げていた。

「その……汚い手を……私に……触れてみる……」

ミルウーダの吐き出す言葉のひとつひとつが、刃の鋭さをもって、男に降りかかる。

「次は……その腕を……切り落としてくれる」

彼女の全身から湧き立つものは、もはや殺気に近い。

「ひっ！」

と、その棘に触れたように、男が小さい悲鳴をあげる。

ミルウーダはエマの手を牽くと、踵を返して、店から出ていった。店内は水を打ったように静まりかえって、後には、男のすすり泣く声と、扉のベルだけが、空しく響いていた。

「ちよち、そこをゆくお嬢さんがた」

「……！」

店を出た途端、そう呼びかけられて、ミルウーダは反射的に、剣の柄に手を掛けていた。

「お……おい、そんな物騒なもんはしまつとくれ」

見れば、口髭を生やした五十がらみの男と、それよりはいくらか若く見える、人相の振わない、長髪の男の二人組がある。両の手を晒して、丸腰であることを強調してはいるが、警戒の眼差しを、ミルウーダは緩めようとはしない。

「あんた、ミルウーダだろう？」

「……！」

ミルウーダは、見知らぬ人間に自分の名前を呼ばれて、さらにその態勢を低くした。口髭の男が、そんなミルウーダを宥めでもするように、ひきつった笑みまで浮かべて、

「まあ、まずはお互い、信頼しようじゃないか」
そういつて、おもむろに近づいてくる。

「何者だ」

という、ミルウーダの問いには答えず、男は、二の腕に巻いた麻布をするすると解き始めた。

「ほれ」

男は、周囲の眼を気にしながら、太い二の腕を、ミルウーダに見えるように、ぐいと近づけた。

――刺青がある。角付きの兜を被った、髑髏の紋章。その下に、交差した二振りの剣。

「最近、堂々とこれを晒して歩けんようになったからな」

「同志の者か？」

「いかにも」

男は、すぐに腕を引っ込めると、麻布をもとのように、晒しに巻きつけてしまった。

「おれはハマ。んで、こっちがルーファスだ」

紹介されて、若いほうの男が軽く頭を下げる。ミルウーダは、ようやく警戒の糸をほぐして、話を聞こうという態を見せた。

「で、貴女はウィーグラフどのの妹、ミルウーダ嬢とお見受けしてよろしいですか？」

「……………」

ミルウーダは、無言で頷く。ハマと名乗った男は、その返答に、とりあえずは満足したものとみえ、

「いちおう、兄君とは知己の間柄にあったつもりだが……まあ、妹のあんたが知らんでも無理はない」

こんどはエマのほうを向いて、

「そっちのお嬢さんは？」

と訊くので、エマは人見知りするようにミルウーダの背に隠れたまま、

「エマ」

と、小さく答えた。

「エマくんね。君も同志の一人かね？」

「そうです」

「ほう、若いのに大したもんだ」

感心したように鼻を鳴らす。

「とにかく、こんなところでおしゃべりするつもりはないんでな」
いいながら、懷から羊皮紙の切れ端のようなものを取り出して、

「こいつを」

と、ミルウーダにそれを手渡した。見れば、簡単な地図と、その下に、汚い字で何か走り書きされている。

「そいつには、おれらの隠れ家の場所と、合言葉が書いてある。もし、協力してくれるというなら、明日の朝一番、そこに書いてある街外れの小屋まで来てくれ。その小屋にいる爺さんに合言葉を言えば、隠れ家に通してくれるはずだ。爺さんには、こっちからも話しておくが……このごろ、どうも忘れっぽくてな。いちおう合言葉を忘れんでくれ」

言うだけ言って、ハマはルーフアスと離れたって、夜の街へ消えていった。

「どうします？」

先ほどハマに渡された紙切れと、にらめっこしているミルウーダの横顔を見て、エマが言った。

「今は、とにかく味方が欲しい。それに、兄のことも何か知っているかもしれない。行く価値はあると思う」

紙切れをポーチにしまってから、ミルウーダはそう答えた。

「さて……宿に向かうか。地べた以外の場所で眠れるのは久しぶりだ」

翌朝は、まだ明けきらぬうちに、二人は連れ立って、昨日渡された羊皮紙の切れ端を頼りに、ハドムの街区を抜け、うっそうとした森が覆う山の裾づたいを歩いていた。

「この辺りのはずだが――」

視線を上げた先に、ゆらゆらと、白い煙がたなびいている。間も無

く、やや開けた場所に古ぼけた樵小屋を二人は見出していた。細い炊煙は、その屋根の煙突から吐き出されている。

小屋の入り口に立って、ミルウーダが、コツコツと戸を叩いて訪いを告げたが、返事はない。もう一度、今度はさっきよりも強く叩いたが、相変わらず、誰かが出てくるような気配もない。

「留守……みたいです」

エマが、ミルウーダの横顔を見上げていった。

「煙は出ているが？」

「あ、たしかに変ですね。合言葉を言ってみるとか？」

「それなら、むこうから言ってくるのが道理だろう」

「ですよ……」

「山羊の好物は何だったかの」

「……？」

不意に背後から、しわがれた声がして、二人は同時に振り返っていた。そして、その声の主を確かめるのに、二人はやや視線を下げる必要があった。

そこには、やけに小柄な爺が一人、自分の背丈くらいの斧を支えに、ぽつんと立っていた。小さい目は白いふさふさとした眉にほとんど隠され、顎には、すすけた鼠色の長い髭をたくわえている。

ミルウーダとエマの二人は、呆けたようにその爺の姿を見つめていたが、

「聞こえなかったかの。もいちど言うぞ、山羊の好物はなんだったかの？」

と、爺がいうのを、二人はわけも分からず答えに窮していたが、やがてエマが、「あっ」といって、

「合言葉ですよ！」

ミルウーダに囁くと、

「ああ、そうか」

ミルウーダは、思い出したように、手に持っていた羊皮紙の切れ端を横目にちらと見て、

「ええと……豆のスープに、羊のミルク？」

確かめるように言うと、

「いかにも」

爺は満足げにうなずいて、

「ついて来なさい」

といって誘うので、二人はひよこひよこ歩く樵の爺の後を、黙ってついて行った。

小屋をぐるりと巡って裏手に出ると、爺は手に持っていた斧を小屋の壁に立てかけて、

「こっちよ」

と、小屋の背後に迫る森の暗がり指して言った。よくよく見れば、確かに細い獣道が一本、森の奥へ伸びている。

爺は、見てくれの歳からは想像できない軽快な足取りで、ずんずん先を歩いていく。途中から道は途絶え、ほとんど胸の高さにまで達する下草を掻き分けるようにして——すっかり下草に隠されてしまっている爺の姿を見失わぬように——二人は、必死になって歩いた。

そんな調子でしばらく歩き続け、やっと、目の前に岩壁が立ちはだかったところで、爺は足を止めた。

「まさか、ここを登るとかいうんじゃないでしょうね」

エマが、息を切らしながら、そそり立つ岩壁を見上げた。爺は、何も言わずに岩壁に絡まる蔓草を掴んで、それをつたって岩壁をよじ登るのか——と思えば、そんなことはなく、蔓草を払いのけるようにして、

「ここが、”隠れ家”の入り口だよ」

と言うので、見れば、いつのまにか、むき出しの岩肌に頑丈な木の扉が出現していた。同時に、ミルウーダの傍らで、エマが安堵の息を洩らすのが聞こえた。

「どうもありがとう」

ミルウーダが爺に向かって礼をいうと、爺は聞いているのかいない

のか、むにゃむにゃと何やら呟きながら、もと来た森の方へ消えていった。

「……………」

「いったい何者でしょう」

「さあ……しかし話しかけられるまで、正直、まったく気配に気づけなかった」

「ただ者ではなさそうですね」

「ああ。それじゃあ、行こうか」

ミルウーダが両の手で押すと、思いのほか容易に、両開きの扉は開いた。そこから先は、石の階段が、ひたすら地下へともぐっている。トンネル自体は人工のものらしく、等間隔に木の支柱が組まれており、その脚の部分に、松明がついているので、足元は十分に明るかった。そのまま少し歩くと、右手の壁が消えて、眼下には、巨大な竪穴が穿たれている。天然の石の柱に、木の足場が組まれ、そこここに、隠れ家の住人たちの姿が蠢いているのが見える。

「ずいぶんと立派な隠れ家ですね」

階段を下りながら、エマが正直な感想を述べた。ミルウーダは黙っていたが、明らかに、目の前の空間に圧倒されているようであった。階段は、竪穴の底に達したところで終わり、そこで、二人を待ち構えていたように、若い男が歩み寄ってきて、

「ミルウーダさんですね？」

と訊くので、黙ってうなずくと、

「お頭がお待ちです。どうぞ、こちらへ」

丁寧な物腰で、二人を奥へと誘っていく。途中何人かとすれ違ったが、誰も彼も手持ち無沙汰な様子で、物珍しげな視線を二人へ向けてくる。しかし中には、昂奮した様子で、議論を交わしている者たちもあるし、脇目も振らず、武器の手入れに徹している者もある。

「なかなか大きな所でしょう？」

案内役の男がいった。

「うちのお頭が、廃棄された資源採掘場を貰い受けたんです。一か

ら、こんな大きな隠れ家は作れませんからね」

男の説明を聞いて、なるほど、と、ミルウーダは得心していた。よくよく見れば、採れた鉱物を運ぶのに使われていたものらしい荷車や滑車が、そこいらに、そのまま放置されている。が、そこに積まれているのは、今や鉱物ではなく、食料や、武器の類であった。

二人は導かれるまま、竪穴の壁に無数に開いた横穴のひとつに入っていた。少し進むと、案内役の男は、髑髏の紋様を縫い付けた深緑の旗が、両脇に掛けられている扉の前で立ち止まった。彼はノックをしようと扉に近づいたが、内側から、思いがけず扉が開かれたので、とっさに、脇へ退いた。

部屋の中から現れたのは、昨日、ハマと一緒にいた若い男——ルーファスであった。簾のような髪の間から、今来たばかりの客人の方にその暗い眼を向けたかと思うと、何も言わず前に向き直って、大股で歩き去っていった。

その様子から、何かただならぬものを感じたのか、案内役の男は、しばし呆然と、去っていくルーファスの背を眼で追っていたが、やっと、役目を思い出したように、

「あ、すみません。こちらです」

慌てて二人を中へ誘った。ミルウーダは、微妙な空気を感じつつも、黙って部屋の中に足を踏み入れた。

長方形の室内には、二十人掛けほどの細長い木の机が置かれ、その上座で、ハマが独り、腕組みして座っていた。二人が入ってきたのに気づくと、ハマは渋い顔を無理に明るくして、

「やあやあ、よくぞおいでくださった！」

立ち上がると、両手を大きく広げて、二人を迎え入れた。エマとミルウーダは、招かれるままに長机の席に着き、ハマは、案内役の男に何か飲み物を持ってくるように言いつけてから、上座に着かせたミルウーダの脇の席におさまった。

「昨日は、あのような形で、きちんとしたご挨拶もせず、まことに失礼をいたしました」

ハマはまず、そう申し置きしてから、ハマと、その一味の身の上を、ぽつぽつと語り始めた。

ハマという男もまた、ウィーグラフらと共に骸騎士団の一志士として、前の大戦に参加した者であった。戦後、恩賞の不行き届きと度重なる増税に堪えかねた不平騎士を集い、ウィーグラフの旗揚げに際しても、いち早くその旗下に参じたという。

そして、此度のレアノールでの敗戦後、落ち延びてきた者どもをこの隠れ家に匿い、以来、ここで再起の日に備えているものである――

「しかし、かの決戦よりこの二月あまり、いま再びウィーグラフ立つとの音も聞かれず、一同、行く末も定まらぬていでして……。そんな折、角笛館であなたさまを見た時にはもう、身も奮えん思いがいたしましたもんで」

ハマは、やけに興奮した様子で、どんぐり眼をぱちぱちさせている。ハマの話聞くうちに、ミルウーダも、今やすっかり彼とその一味を信用する気になっていたが、自分にかけられた期待の想像以上に大きいことに、やや戸惑いを感じてもいた。

「ご覧のとおり、今は女の二人身ばかり。たいした力になれるとも思えないが」

「とんでもない！ わしらにしてみれば、万の兵を得たも同じ心境です！」

「そんな……」

「うちの若い連中を見たでしょう？ レアノールでの敗戦以来、どいつもこいつも意気消沈しちゃって、再起の旗揚げに備える者なんぞ、これっぽっちもいやしない。しかし、今日、ここに英雄ウィーグラフどのの妹君が舞い戻った！」

「そういつてももらえると嬉しいかぎりだが……私には、兄のような達見もなければ、武勇もない。あなた方の期待に添えられるとは……」

「ご謙遜を言いなさる！ 人を惹きつける才能というものを、あな

た方ご兄妹はお持ちである。わしのような凡下の身には、それが無い。レアノールの戦いに、あれほど多くの義兵が集うたのも、ご兄妹のお力無くば、到底叶わなかったことです。ハドムにミルウーダ在りと聞けば、地方に落ち延びた同志たちも、きっと我らの旗下に馳せ参じることでしょう！」

どこまでも前向きなハマの言葉である。少し大仰ではあるが、ミルウーダも、聞いていて悪い気は起きなかった。

かといって、骸旅団を取巻く情勢の今や安からぬことは、ミルウーダ自身重々承知しているし、同志たちとて、一枚岩ではないことは、この眼で嫌というほど見てきているのである。

そうした種々の懸念を踏まえたうえで、ミルウーダは、あくまで冷静に、ハマと意見を取り交わした。

早々に再起を図るべきとするハマを抑え、今は兄ウィーグラフとの合流を果たすまで、力を蓄え、また、ギュスタヴ派の動静も見極めるべきだとした。

ギュスタヴの名を出した所で、ハマの表情が曇ったのを、ミルウーダは見逃さなかった。

ハマの話を聞いて、ギュスタヴ一派によるエルムドア候誘拐の事実を、彼女は初めて知ったのだった。

「まさか、本当にやってのけるとは」

「わしも、その話を聞いた時は正直驚きました」

ハマは、運ばれてきたばかりの豆茶をひといきに飲み干した。

「ギュスタヴの計画はご存知だったんで？」

「ああ。レアノールの戦いのあと、私はいちど彼に会っている。そのときに、要人を誘拐するという計画を持ちかけられた」

「そうでしたか。知恵者だということは知っていましたが、あの狼のような男が、ここまで大それたことをしでかすとは、夢にも思いません。実をいいますと、うちの若い衆にも、ギュスタヴに協力すべきだという者が、少なからず出てきとるもんで」

「無理もないだろうな」

ミルウーダの脳裏に、先ほどのルーファスの顔がちらついた。彼との間で、一悶着あったであろうことは、ハマの様子からも容易に想像できた。

「ギユスタヴとて、私利私欲であんなことをやったんではないでしょうが……しかし、やり方がちといただけない。我らの志は、まず戦——すなわち、人間同士、命を懸けて果たすべしというのが、ウイーグラフどのご意思でもありませんよう」

「異論は無い」

「しかし、こういっちゃあナンですが、若い衆には、それが綺麗事に聞こえるようでして。なにせい、明日の生活をも知れぬ状況です。目前の大金に眼が眩んじまうのも、人間として仕方のないものでさあ」

「……………」

「ですが、人攫いをしてまで、わしは貴族どもに勝とうとは思わんです。畏国の民も、そんなやり方は認めてくれんでしょう」

兄ウイーグラフとともに、五十年戦争を戦い抜いた戦士らしい、実直さであった。兄も、ギユスタヴのやったことを聞けば、怒り狂うであろう——人攫いなどは、武人として、騎士として、恥ずべき行為であると。しかしそれは、ウイーグラフという男の甘さであるとも、思えなくはないミルウーダであった。

現実には、想像以上に厳しい。人間は動物のようにはなれない。が、時として、人間は獣のように食欲に、生にしがみつこうとする。それを当然のものとするか、忌むべきものとするか——この分裂を引き起こした根本には、そういった思想的相違があるようにも思える。この日から二週間あまりを、ミルウーダは、ハマの同志たちの説得に費やした。あえて非道を用いずとも、必ず勝利はもたらされると。

多くの者は、彼女の言葉に耳を傾け、協賛の意を表してくれた。そこに、ミルウーダ自身の人間的魅力というものが、多分に作用していたことは疑いない。もちろんそれは、彼女の外見的なものだけ

ではなく、言葉のひとつひとつに自然と勇気づけられるような、ある種の魔力とでもいえるべきものであった。

大方が、ミルウーダとの再起という方向に傾く中、ただ一人、ルーファスという男は、やんごとなき思惑を引っ提げて、単身、ハドムの街を治めるアズバール伯の館に赴いていた。

後日、ルーファスの出奔を知ったハマも、あえてそれを重大な裏切り行為とはしなかった。

ルーファスが、思想は異なるにせよ、同志には違いないギュスタヴのもとにではなく、”国家”という、真正正銘の”敵”のもとに下ろうなどとは、この時、彼も夢想だにしていなかったのである。

第一章 持たざる者 11. 疑心の剣

ガリオンヌの成都、イグーロスの城壁は、高い。

今は北天公ラーグ公爵の住まいとなっているイグーロス城は、もとは、アウレスという小山に立つ城郭であった。千年の昔、その天然の絶壁を人の手で固め、足元に整然たる街区が形成された。その街区をまるまる囲って、珊瑚石を百エータも積み上げた分厚い城壁が聳え立っている。

王都ルザリアの白亜の城壁にも劣らぬその威容を、古の詩人は”珊瑚の都”と称えた、そのままのたたずまいを、イグーロスの都は現在に伝えている。

はたして、勇者ザハラムの代よりこの地に根を下ろした名門ベオルブ家の館は、山の頂に立つイグーロス城よりは少し下がってもなお、成都イグーロスを眼下に一望する山肌に建っていた。

広々とした前庭にはアウレスの山から湧き出る天然の流れをを引き、飾り気のない石の館は、武人の家にふさわしい素朴な趣をみせている。

この庭と館とを営んだのは、先代バルバネスの曾祖父にあたる人物だといわれている。やはりこの家には、単なる武骨者の一族にはない、貴人の風格ともいえるものが、昔から備わっているらしいことが、こういったところにもよく顕れている。

「……………」

月下、その歴史ある庭に一人佇むのは、今やこの家の主となったダイスダーグ・ベオルブであった。

一瞥しただけで並の人間を竦み上がらせるその眼光は、今は瞼の裏に隠され、長髯^{ちようぜん}を涼やかな夜風に遊ばせている。イグーロス執政官としての一日の政務を終えた彼は、床に就く前にここにこうして足を運んで、せせらぐ水の流れに耳を傾け、日中の暑さも冷めやらぬ夜に、ひとときの涼をとっているのであった。

とはいっても、彼の表情には、まったく、くつろいだ感じはない。眉間には深く縦皺が刻まれ、何かしきりに思案しているふうであった。

「……まだお休みにならないのですか？」

そこへ、艶のある声がして、ダイスダーグは静かに瞼を持ち上げた。

「アリーシャ……まだ寝ていなかったのか」

「寝室に姿が見えなかったものですから」

ダイスダーグの正妻アリーシャは、寝間着姿のまま夫の傍らに歩み寄ると、化粧が落ちて眉の薄くなった顔をダイスダーグの横顔に向けた。

「お風邪を召しますよ？」

「まさか。暑くて眠れんくらいだから、こうして夜風に当たっているものを」

「夜風は思いの外冷たいものです。疲れたお体には障りもありましよう」

「……心配ない」

「そうですか。このところ、ろくにお休みになられていないようでしたから、ご心配申し上げたのですが」

「……色々と混み入っておるのだ」

ダイスダーグは、気の進まぬ会話を断ち切るように、いい加減な応えを返した。

アリーシャの指摘するとおり、彼はいささか疲労を覚えてはいた。先日のガリランド襲撃事件と、立て続けに起きたランベリー領主エルムドア候誘拐事件は、積み重なる平常の政務の上に乗っかって、彼の頭を大いに悩ませているところである。

しかし、それを偽って強がりをしてみせても、十年付き添った正妻の眼は誤魔化せない。

「……あまりご無理をなさらぬように」

素直になれない夫の態度をからかいでもするように、アリーシャは口元に微笑すらたたえている。

ダイスダーグは、そんな妻の顔をちらと横目に捉えてから、再び両の眼を閉じた。

——正直なところ、彼はこのアリーシャという女が苦手であった。およそ他人に弱味というものを見せないダイスダーグであるが、あえて彼の弱点を挙げるとするならば、それは正妻アリーシャということになるかもしれない。

夫として当然の愛情は今だ褪せていないし、恐妻家といわれるほどではないが、彼は心のどこかで、アリーシャに対する恐怖心に近いものを感じているのである。

王室とも所縁ゆかりの深い名門ミル家の出で、妻としてはこの上なく美しく聡明であったが、同時に、彼女が相当な野心家であることをダイスダーグは夫婦めおととなつて間もない頃から見抜いていた。

ベオルブ家の奥方という地位には納まらず、実家の縁を使って、中央の官吏とも密接な関係を持つており、権威を毛嫌ひしていた先代バルバネスの存命中に、その多くを失ってしまったベオルブ家の政治的地位を取り戻そうと、いろいろと暗躍しているようである。

また、ダイスダーグ自身に意見することもしばしばで、王室の継嗣問題が浮上してからは、後見人の座を狙うラーグ大公からも大いに頼りとされている。

文武両道にベオルブ家の栄華を取り戻さんとしているダイスダーグにとって、アリーシャは強力な武器となりえたが、同時に、その威力の過ぎたるを大いに警戒してもいた。

その昔、時の畏国王に取り入って戦乱を招いたシヴァ山の魔女の例を取り出すまでもなく、女が政治に深入りしすぎることを良しとしない風潮は、今でも根強い。それだけに、外聞を憚るところでもあるし、何より、女の本来持つ欲深さというものを、ダイスダーグは恐れているのである。

「……お前もたいがいにしるよ」

ダイスダーグが溜息混じりに、こう本心の一角を覗かせると、
「何をです？」

と、この女はすつとぼけている。抜け目の無いダークブラウンの瞳は、夫の心の内を見透かしているかのように、妖しげな光を湛えている。

「いや……なんでもない」

ただでさえ疲れているところに、またあれこれ言われては敵わんと、館のほうへ戻りかけたその背中を、

「あ、そうそう」

と、妻の声が追った。

「ラムザ坊ちゃんがお戻りだそうですよ。なんでも、北天騎士団の任務を仰せつかったそうで、士官学校のお仲間たちと一緒に、ガリランドで捕らえた骸旅団の捕虜を護送してきたとか」

「……ああ、聞いている」

またこんな話を、いったいどこから仕入れてくるのか。畏国じゅうに”目”と”耳”を持つと言われているダイスダーグでさえ、妻独自の情報網の広さと伝達の速さに、驚かされたこと一度や二度ではない。

「……そうでしたか、いらぬおせっかいをいたしましたね。今日はお城の兵舎に泊まるそうですから、お許しが出たら、明日お会いになってあげてくださいいな。お父様のご葬儀からこっち、お顔を会わせていらっしゃらないのでしょうか？」

「そうだったな……まあ、あっちから顔を見せるだろうよ」

弟の顔を思い浮かべて、ダイスダーグはまたひとつため息を洩らした。彼の苦手とする人間は、父バルバネスと正妻アリーシャであったが、いま一人、亡き父の生き写しともいえるこの胎違いの弟の存在は、近ごろ彼の中で大きなものとなってきていた。

「また厄介ごとが増えたな……」

ベッドに身を横たえながら、ダイスダーグは、そう独りごちていた。

翌日、イグーロス城でラーグ公爵との昼食を兼ねた談義を終えて

から、ダイスダーグが城内の執政官執務室に戻ってくると、そこには、待ち構えていたかのように、弟のラムザの姿があった。秘書官の不在を見計らって、ここにもぐり込んだことは明らかであった。

「……何の用だ」

ダイスダーグは、弟の顔を見ようとせず、机の上に山積みになれた書類に目を通し始めた。まず目に入ったのは、司法局からの上申書であった。

「お久しぶりです。兄上」

「ああ」

話す気はないという語気を言外に滲ませてみても、目の前の頑固者は、そう簡単に引き下がりそうもなかった。

「お忙しいところかとは存じますが、早急にお話したい儀がありましたので、無礼を承知で、ここでお待ちしておりました」

「……………」

ダイスダーグは、執務眼鏡ごしに多少威圧感を含めた視線を送ったが、全く動じていない弟の顔が、そこにはあった。父の葬儀いらい久しく目にしていなかった弟の顔は、急に大人びたように見え、その面影が、ますます父に似てきたことに、少なからぬ動揺をおぼえた彼は、すぐさま書類の上に目を戻していた。

「……これを、見たのか」

ダイスダーグは、今日にしている羊皮紙を少し持ち上げた。

余白の多い書面には、ガリランドから護送されてきた骸旅団の捕虜の名前と出身地、年齢などの情報が羅列され、その下に、本日に全員の公開処刑を行う旨が簡潔に記されており、すでに司法局長による認印が押されていた。

「はい」

ラムザの表情には、悪びれた様子もない。

「……お前というやつは」

ダイスダーグは執務眼鏡を外すと、おもむろに席を立った。そのま

まラムザに背を向けるようにして、執務室の長窓の前に立つと、真昼の逆光を受けて、その姿は切り取られたように黒い影となった。

「まず言うておくが……」

そこに毅然たる態度を装いながら、

「イグーロス執政官として、本日 of 処刑を中止する意向はない」

「……………」

こう鎌をかけてみるまでもなく、弟がここに來た理由は明らかであった。

ガリランドの警備体制強化にともなう人手不足を補うため、捕虜の護送任務に士官候補生を当たさせたという報告は、すでにザルバツグから受け取っていた。そのときから、弟のラムザがその任に抜擢されるのではないかという予感はしていたのである。

案の定、ラムザは指揮官に任せられ、初の実戦にして捕虜の護送という難しい仕事をやってのけた。

それだけのことなら、兄として大いにその労をねぎらってやりたいところなのだが――

「いかなる理由であれ、捕虜と言葉を交わすのは重大な軍規違反だ……それは分かっているような？」

「分かっています」

「では、なぜそのような軍規が定められているのか……分かるか？」

「……………」

目を向けないでも、弟の挑むような視線を背中にぴりぴりと感じる。狡猾な元老院議員を前にしても臆することを知らぬダイスダーグの鉄の心が、どういうわけか、この若い弟を相手どると、小さくさざ波を立てている。

「……無用な情け心を起こさぬようにするためだ」

ダイスダーグはゆっくりと振り返り、弟の視線をまっすぐに受け止めた。ラムザの表情に、あからさまな感情の顕れは見取れない。おそらく彼の感情のすべては、一個に、その眼光に凝縮されているのであった。

その眸が父と重なるのを、はつきりと意識しながら、ダイスダグは弟の口上を待った。それくらいの余裕はあった。

「……父上なら、別の道を選ったでしょう」

やがて、落ち着きを払った声で、ラムザが言った。

ダイスダグはその言葉を咀嚼しながら、口元で嘲っていた。

「そうであらうな……」

——亡き父、天騎士バルバネス・ベオルブならどうしたか。

あらゆる罪を赦し、等しく罪人つみびとに語りかけ、その大いなる徳をもって、救いようの無い邪心をも更正してしまったであらうか——

「が……私は父ではない」

ダイスダグは、自分自身に言い聞かせるように、そう言った。

「私は……父とは違う」

「ならば、赤の他人だと言われますか」

「……！」

バチン、と火花が爆ぜたように、二人の視線と視線がぶつかり合う。常は穏便なラムザの口から出たとは思えぬ、棘のある言葉であった。

「兄上もベオルブの子であれば、誇り高き者には、等しく誉れをもつて報いるべしと教えられたはず」

「……ならず者に与える誉れはない」

「ならず者と言われる、その人間たちのことを、あなたは少しでも知ろうとなさいましたか？」

「知っているとも。徒に人心を乱し、国家の転覆を図る逆賊どもだ」

「それは彼らの罪だ！ あなたは人間を見ていない！ 知ろうとしない！」

「その罪を犯したのは人だ！ 人を裁くをもって罪を裁く——そこに何の誤りがあるう！」

「それは人の傲慢です！ 本来人は、話し合わなければならぬ——もっと分かり合おうとしなければ……！」

「まだそのような絵空事を言うのか！ 我々は時に、厳然たる正義

を示さねばならぬ。それは我ら——万民を導く者の努めでもある！」

「権力を振りかざして無実の人間を裁くことを、兄上は正義だといわれるのか！」

「だまれっ！」

「……っ！」

これ以上の反論を許さぬ、渾身の一喝であった。怒気は濛々と、ダイスターグの全身から立ち上っている。

「貴様の言うことは、単に父の言葉をなぞっているにすぎん！ この私に口答えるのなら、せめて自分の言葉でものを言えるようになることだ！」

その気迫を前にして、兄を相手に普段にない強気を張っていたラムザも、さすがに口を噤まざるをえなかった。

「………」

「………」

にわかに日が翳^{かげ}ってきて、部屋の中を薄暗くする。不気味な沈黙が、狭い空間を満たしていた。

「……話はこれでおしまいだ」

しばらくして、ダイスターグは何事もなかったかのように執務機の椅子に戻った。彼は鷺羽のペンを手に取ると、その筆先をインク瓶に漬けた。

「軍規違反に関しては、兄弟の情けによって沙汰なしとしよう」

言いながら、例の上申書に、さらさらとサインを施す。

「その代わり、一ヶ月の謹慎を命ずる。……存分に頭を冷やすことだ」

ラムザは、呆然と、兄の挙動を見つめていた。

彼の脳裏には、蛇の口で言葉を交わした、レッドの顔がちらついていた。

——君は我らに希望をあたえてくれた——

あの時のレッドの言葉が、幾重にも木霊して、やがてそれは落石となって、ラムザの心を塞いだ。

そのわずかな隙間を、どうしようもない無力感が泥水となって流れ込み、浸していくようであった。

非情な兄を憎む気持ちはなかった。

ただひたすらに、彼は己の弱さを噛み締めていた。

この日の午後、イグーロス城下の中央部に位置するオークランド広場にて、レッド以下二十四名の公開処刑が行われた。

ラムザは、処刑場を取り囲む群衆に紛れて、その一部始終を見届けていた。

広場のシンボルである巨大なオークの木の隣に絞首台は設置され、執行人の司法局長官が、朗々と罪状を読み上げたあと、六名ずつ、計四回の処刑が淡々と執行された。

レッド・アルジールは、その最後の一組に入れられ、他の者が祈りの詞を呟いたり、絶望の涙に暮れたりする中で、運命を受け入れたように、最期まで安らかな笑みを浮かべていた。

公開処刑場が撤収され、群衆が引いてからも、ラムザはオークの木の根元に立って、青葉の茂る梢の合間から、暮れなずむイグーロスの空を見上げていた。

不思議と、その目に涙はなく、何か決然とした意思の表れが、彼の表情に浮かび上がっているようだった。

——ラムザは、今一度考えていた。

亡き父は、自分という人間に何を託したのか。

それは、真の後継の証たる本物のレオハルトの剣だけではないはずだ。

優秀な兄ではなく、自分にしか託せなかったもの。

それは、ベオルブ家の後継ぎ以上に重みのある、”何か”には違いなかった。

父は、ついにその真意を明らかにしてくれなかったが、ラムザは今、その”何か”を、自身の手で見出さねばならぬという使命感に駆られているのであった。

彼は、少しずつ変わろうとしていた。

当人にも気づかれないような大きな変化が、訪れようとしていた。この日、その変化の一端が始まったのは、間違いない。

——その夜。

ダイスダーグ・ベオルブは、ベオルブ家の館の自室で、伝家の宝剣レオハルトに相對していた。

それは、壁面の飾り棚に掲げられ、拔身の刃は、室内の明かりを映して、鈍い光を放っていた。

半エータに達するアダマタイト製の刀身には傷ひとつ無く、刃の付け根に彫られた獅子頭の紋が、剣の格式の高さを物語っている。それは紛れもなく、ベオルブの祖・勇者ザハラムが、時のイステインヌス帝より下賜され、以来、この家に代々伝わる後継の証であった。

ダイスダーグはその柄に片手をかけると、もう片方の手を刃に添えて、これを慎重に、飾り棚から下ろした。

ずっしりとした剣の重みが両の手に伝わり、大剣といっても差し支えないその姿は、一見してこの上なき業物わざものであった。

ダイスダーグは利き腕に剣を預けると、おもむろに八の字を切った。刃が空を切る音が耳元を掠め、数回振りぬいたあと、刀身と向き合うようにして剣を掲げ持つ。

鏡のように磨きぬかれた刃が剣の持ち主の顔を映し出し、ダイスダーグは、剣の向こう側の自分と、しばしの間見つめ合っていた。

「……………」

やがて何を思ったか、ダイスダーグは部屋の壁に取り付けられた燭台を外すと、その炎でもって、レオハルトの刀身を炙りだしたので

ある。

そのままじっと経過を見てみると、やがて、炎に撫でられていた部分に、薄っすらと、黒い煤のようなものが浮かび上がってくる。

（やはりな……）

ダイスダークは、その結果にさして驚いていないようであった。が、明らかに、その表情には落胆の色が窺えた。

「この剣は贋物だ……」

黒い染みのように酸化した部分を恨めしげに見つめながら、彼はそう呟いた。

アダマントイトは、多量のマナを含んだレアメタルと、アダマントイマイ万年亀の成獣の甲羅から採れる天然物質を合成することによって得られる、きわめて貴重な合金であるが、あらゆる金属に勝るその強度はもとより、耐火性能において、これを凌ぐ物質はこの世に存在しないと言われている代物である。

アダマントイトで鍛えられた剣をベルベニア活火山の火口に投げ入れても、その刀身を保ったという逸話が示しているとおり、並の火力では、熱も持たないような金属なのである。

まして、燭のともし火に炙られた程度で、反応が現れるはずもない。

——それが本物のアダマントイトならば。

ダイスダークは偽のレオハルトを元の飾り棚に戻し、頬杖をついて、その姿を見上げていた。

（この剣は偽物ではないか？）

こう直感したのは、父の葬儀が執り行われた日、継嗣の儀の場にてラーグ大公から剣を賜った、まさにその時であった。

はつきりとした根拠があるわけではなかった。

初めてこのレオハルトを目にした時、彼はどういうわけか、この剣に全く魅力を感じなかったという、それだけのことである。

この程度の得物なら、もっと良いものをいくらでも見てきた。天下一の名品と伝えられるレオハルトの剣が、こんなに”安っぽい”

はずがない――

剣を見る目には自信のあるダイスダークである。審美眼ならば、武骨者のザルバッグや老臣マルコムにも、けっして引けを取るまい。そう自負するほどなダイスダークの眼をもつてしても、この剣からは、アダマンタイトの煌ききらめとか、千年の歴史の重みというものを、微塵も感じられなかったのである。

――あえてひとつ、根拠を挙げるとするならば。

彼は生まれてこの方、伝家の宝剣レオハルトの姿を、一度も目にすることがなかった。無論、その存在自体は父バルバネスより聞かされていたが、父は、この剣を飾るということはせずに、天命を終えるその日まで、館の宝物庫に、これを納めたままにしていたのである。

歴代のベオルブ家当主は、このレオハルトを身边に置いておくのを慣わしとしていたが、バルバネスだけは、家督を継いで間も無くすると、家来に命じて、レオハルトを宝物庫の中に納め入れてしまったのだという。

当主の行動をいぶかしんだ家来の者が理由を尋ねても、バルバネスは、「傷をつけたくないから」などという、いい加減な返事をするばかりで、家名に関わることだから、どうか飾っておいてほしいという近臣の懇願にも、まったく聞く耳を持たなかった。

稀代の変わり者と言われてきたバルバネスの行動にしても、これはあまりに奇怪に過ぎると、当初は大いに物議を醸したものらしいが、年を経るにつれ、周囲の者もあまり気にしなくなってくると、将来、この宝剣を受け継ぐこととなる嫡男のダイスダークには、逆にこのことが気になりだし、それとなく父に剣を見せてくれるよう頼み入れること数度に渡ったが、そのたび適当にはぐらかされ、ついに今日に至るまで、これを拝見する機会を得なかったのである。

ところが妙なことに、弟のラムザが誕生すると、父はルザリアの刀匠に命じて、レオハルトそっくりな剣を鍛えさせたのだ。この得物は、バルバネスの出征に際しても携行され、戦地においては、贗

作にも関わらず、本物のレオハルトを思わせるような冴えを見せたのだという。

戦地より帰還してからは、「なに、わしの扱いが良かったからよ」などと嘯うそいていたが、並の剣ならば、五十年戦争の、あの激戦を耐え抜けるはずがない。

今にして思うに、父と五十年戦争を共にし、前線を退いてからもその腰に提げられていた偽のレオハルトこそ、実は”本物”で、父が鍛えさせたという”偽物”は、密かに、宝物庫にあった”本物”と入れ替えられていたのではないか。

そして、父の言うところの”偽物”は、彼の死の三年ほど前、ドーターのさる貿易商に「譲った」のだという。

”本物”の方は、館の宝物庫にあるわけだから、誰ひとりとしてこのことを気に留める者はなかった。が、おそらくダイスダーグだけは、父のこの行動にどこか引っかけりを覚えていた。

——そして、今。

目の前にあるレオハルトは、”偽物”であるという確証を得た。家督を継いで以来、何度も試そうとして、「もし本当に偽物だったら？」という恐怖心から試せなかったものが、今日にしてようやく思い切ることができたのは、やはり、改めて弟ラムザの存在を意識してのことである。

（どうする……？）

この事実が知れば、ダイスダーグの信用は地に墜ちる。いや、それどころか、ベオルブ家の名に傷がつくことも免れない。

このことはおそらく、遺言か何かの形で、ベオルブ家の内の誰かに伝えられているはずである。おそらくはラムザに——

（どうして？ なぜ？）

——どうにも腑に落ちない。

たしかに、父バルバネスとは意見がぶつかることもしばしばであったし、ことに晩年は、自身の多忙もあって、疎遠になっていたところもあった。

かといって、名実ともにベオルブ家の家督を継ぐに相応しい者として、主家の公爵家にも、父自身にも認められていたはずの自分が、よりにもよって、胎違いの三男坊に、その”実”を奪われようとは。ダイスダーグにとっての父バルバネスは、最期まで、乗り越えるべき巨大な壁でしかなかった。その一方で、年が離れているとはいえ、ラムザに対する父バルバネスの一方ならぬ愛情は、素直に妬ましく思うこともあった――

静かな黒い焰は、メラメラと、ダイスダーグの中で燦り始めていた。

これは、あまりにひどい仕打ち。

この火種を捨て置けば、厄の炎はダイスダーグ一人の身に止まらず、必ずや千年の歴史を有する家門の上にも燃え広がることとなるだろう。

父バルバネスにどんな思惑があったかは知らないが、武門のベオルブの名を、たった一代の当主の気紛れで失うわけにはいかない。”実”はなくとも、ベオルブ家の現当主として、この火は何としても消し止めねばならぬ。

たとえば、血を分けた弟と相争うこととなっても――

第一章 持たざる者 12. 忠心

庭に面した書斎の窓は開け放たれ、午後の陽光とともに若草の薫りが柔らかな風に運ばれてくる。

耳を澄ませば、どこからともなく笛の音がしている。

その調子のいい音色にあわせて、鈴を鳴らすような唄が楽に興を添えていた。

——春は今日この日

陽は朝を向かえ

朝はふたごの刻

丘は露にみちて

ひばりは春の歌をうたう

蝸牛枝は朝露に

星々はそらに常夜を想う

「暢気なものだな」

出張った長窓の縁に寄りかかるようにして膝に置いた書物を捲って
いたラムザは、不意にした声のほうに顔を向けた。

書斎の入り口に、いつの間にかディリータの姿があった。

「ディリータとアルマかな」

いいながら部屋に足を踏み入れる。もともと浅黒い彼の肌は、日中の任務を経て、さらに黒く日に焼けていた。

「今日のお役目はもう終わり？」

「なに、衛兵長の気紛れで早めにあがらせてもらったのさ」

ディリータは執務椅子の背を引くと、見習い騎士の軽鎧姿のまま、そこに深くもたれかかった。

「平和なもんさ、こんなご時勢に。喧嘩話のひとつでもあれば張り合いもでるんだが」

「楽でいいじゃないか」

「そうだねえ。真昼間からこんな所でのんびり書物を漁っているご隠居さまほどじゃないけどな」

「言ってくれるなよ。好きで謹慎してるわけじゃない」

「ハハハ、そうだったな」

皮肉たっぷりといった表情で、ディリータは白い歯をむき出しにした。

ディリータを始め、先月骸旅団の捕虜をイグーロスまで護送してきたガリオヌ王立士官学校の面々は、引き続き北天騎士団の支援任務を命じられていたのである。といっても、彼らの主な役割は、骸旅団の殲滅作戦のために出払っている正規軍に代わって、イグーロスの都城の警護と治安維持に当たるというものであった。

その中でひとりラムザだけが、先日的一件のあと、こうして自宅謹慎に甘んじているのである。

「人手不足じゃなかったのか？」

「うん……まあ実を言うと、先日ザルバツグ將軍の大部隊がイグーロスに帰還してな。それで警備の人員にも余裕ができたのさ」

「兄上が？ 聞いてなかったな」

「そうなのか？ そりゃあ、ひがなこんなところに引き籠もっていれば、聞いてなくても無理ないか」

「庭に出て稽古するくらいはできるさ」

ラムザはいちいち突っかかってくるディリータの顔を横目でジロと睨んだ。その反応を面白がるように、ディリータは「いやあ、すまんすまん」などと空謝りをする。

「何か変わったことは？」

「まあ相変わらず、といったところさ」

ディリータは、嘆息して両の眉を吊り上げた。

「北天騎士団は骸旅団の残党狩りに八面六臂の大活躍だが、いまだ賊軍を根絶やしにするには至ってない。ザルバツグ將軍の部隊もまた大勢の捕虜を連れてきたが、その大半は食いあぐねた地方のごろ

つきどもが盗賊に身をやつたような素人連中ばかりで、この前エ
ルムドア侯爵を攫ったギユスタヴや、首領のウィーグラフといった
骸騎士団時代からの中心メンバーは、残念ながらまだほとんど捕ま
っていない」

「で、その捕虜たちの処分は？」

「ん？ ああ」

ラムザの面に、にわかには影が差したのを見て取って、ディリータは
少し言葉を詰まらせた。

ディリータは、ラムザが実の兄から謹慎処分を受けたといういき
さつを耳にしてはいたが、その詳細については、まだ直接本人に訊
かずにいた。

が、長年連れ添った友の心情は、誰よりもよく理解しているディ
リータなのである。

おそらくは、先月にイグーロスの城下で行われた捕虜の公開処刑
について、立場をわきまえずに意見でもしたのだろう——と、大方
の想像はついていた。

「ほとんどは鉦山送りだろう。罪状は乱暴狼藉らしいしな。貴人誘
拐とか、国家転覆の謀事とか、そんな大それたことをしてかしたわ
けじゃあない」

「そうか」

「……………」

なおもラムザの表情は晴れない。ディリータは内心で、「やっぱり
な」と、彼の考えが正しかったことを確かめつつ、

「兄上との間に何があったか知らないが、またあんまり気負いすぎ
るなよ」

そう言って、鬱屈しがちな友の気を何とか紛らわそうとした。

「べつに気負ってなんかいないさ」

「そうかい？」

「ああ。ただ、厳しく罰するばかりじゃ駄目だと思っているだけだ。
……兄上にもそう申し上げた」

ラムザは溜息とともに書物を閉じると、窓外の庭に目を流した。

「聞き入れてもらえなかったけど」

窓の外では、先ほどの歌声はいつの間にか止んで、二人の少女の可憐な笑声が聴こえてくる。

若い二人は、しばし無言でその声に耳を傾けていた。

「ティータとも久しく話してなかったな」

ディリータが、遠い目をしてポツリと呟いた。

「時間もできたことだし、修道院のエリザにでも顔を見せに連れて行ってやるかな」

ディリータは立ち上がると、間接をパキパキ鳴らして大きく伸びをした。

「そうするといい」

ラムザは、ふと、以前女学院でのことについてアルマから聞いたことを思い出した。――アルマの知らないところで、ティータが陰湿ないじめをうけている――同じ兄としての気持ちを考えると、ラムザは針を飲み込むような思いがした。無論、そんなことを面と向かって言うことなどできるはずもなかった。

「そういえば、お前はまだ謹慎中の身なんだっけな」

「ああ、うん、気にしないで」

「心配すんな。アルマの面倒も見てるさ」

「任せたよ」

「おう。着替えたらさっそく行ってくるよ」

「あ……」

「ん？ どうした？」

「ティータの話、よく聞いてやってね」

「それはもちろんだが……ティータがどうかしたのか？」

「いや、なんでもないさ」

「……そうか。たまには体も動かせよ」

ディリータが書斎から出て行くのを見送ってから、ラムザは再び書物を開いたが、とうに興は削がれていたのか、すぐに閉じてしまう

と、それからは、いつまでもぼう々と窓外の景色を眺めていた。やがて、山の斜面に続いている庭の木立のほうから、小さくディリータ、アルマ、ティータのものと分かる姿が、館の正門に向かって歩いていくのが見えた。

北天騎士団の本営はいま、イグーロス城の郭内に位置する近衛士府に置かれていた。

先日ザルバッグ將軍が帰還していらい、衛士府の建物には昼夜を問わず人の出入りが絶えなかった。その多くは、ザルバッグ直々の命を帯びて各地に散っていた伝令や隠密——”草”と呼ばれる者たちであった。

彼らがもたらした情報は全て幕内に集められ、審議され、すなわち新たな命令となって再び彼らの頭上に下った。

「なかなかありませんな」

また一人、“草”を送り出したところで、溜め息混じりにそうつぶやいたのは、ザルバッグの右腕、老臣マルコムであった。

「……………」

ザルバッグは腕組みして、円卓上に広げられたガリオンヌ領の略地図を睨み付けている。その表情は、常になく険しい。

「が、先ほどの伝令がもたらした情報は、ちと気になりますな」

「うむ、ハドムのアズバール伯からであったか」

「左様で」

「ふうむ……」

作戦地図上の視点は、ガリオンヌ領内から東、ベルベニア山系に沿って引かれた王室領ルザリアとの境界線に移っていった。

南北に長い山脈のちょうど真ん中あたり、レウスという峰の東側のふもとに、ハドムの街は見いだされる。

そこはルザリア領内でも有数の宿場街として知られるが、先月末、その街を治めるアズバール伯のもとに行商人を名のる一人の男が現

れ、いわく——ハドム近郊の廃鉱跡に骸旅団の残党が潜伏している——とのことであった。

さらに詳しく話を聞くと、その残党軍を率いている者というのが、骸旅団の首魁ウィーグラフ・フォルズの妹と称する、女騎士であるらしい。

さっそく、この報告が審議の皿の上に乗った。

「はて、ただの旅商人のもたらした情報にしては、妙に詳しいような？」

誘きだしのための風説にちがいない、という声がまずあがった。それに対しマルコムは、

「いやいや、これは骸旅団内部に分裂が起こった証。離反者による密告であろう」

との見解を示した。

レアノール野の決戦以降、骸旅団は明らかにその統制を欠いていた。

前のエルムドア侯爵誘拐事件も、ギュスタヴら一部の構成員による単独行動とみえる節がある。そんな非常手段に訴え出ねばならぬほどに、骸旅団を取り巻く情勢は逼迫していると、マルコムはそう考えたのである。

ザルバッグも、これに意を同じくした。

「やつらはそうとう切羽詰まっているのだろう。己の身をかわいがる者が一人くらいいても不思議ではない」

その声に、多くの者が納得したようであった。ザルバッグ自身もうなずいて、

「組織がバラバラとなってしまうっては、彼らの行動規範にもはや一貫した思想性はない。したがって、ウィーグラフの妹なる人物も確かに大物にはちがいないが、侯爵誘拐事件の線に繋がっているとは考えにくい。その者はその者の意志に従って行動しているものと思われる」

とりあえず、この件に関してはこういう方向でまとめられた。

ハドムへは調査隊を遣ってしばらくは動静を窺うこととし、主題は、目下最優先事項とされる侯爵誘拐事件へと移った。

この案件についてはまだ有益な情報が集まっておらず、捜査も行き詰まりをみせていた。

「まだアジトは割り出せそうにないのか」

ザルバッグはかなり苛立っていた。諸将も、これには閉口するしかなかった。

「北天騎士団の総力を挙げて捜索中ですが……いかにせん数が多すぎるものでして」

捜索部隊の指揮を任されている騎士アルマルクであった。彼の他にも、各主要都市の治安維持部隊を率いていた者の多くが、侯爵の捜索任務に駆り出されていた。

事件発生以来、北天騎士団はガリオンヌ領内から北はフォボハム、東はルザリアに至る広範囲に捜査網を敷き、骸旅団の潜んでいそうな場所を虱潰しに探してきたが、依然として主犯と目されるギュスタヴの足取りを掴めずにいた。彼らは、ときに敵の流した偽の情報に翻弄され、無駄足を踏まされること幾度にも及んだ。

「増員はまだ可能だ。この件には我ら北天騎士団の面子がかかっている。そのことを忘れるな」

「は」

アルマルクは青い顔をして面を伏せた。

これはガリオンヌ領だけの問題ではなかった。攫われたのは、他領の、それも領主である。非公式訪問中であつたとはいえ、領内の治安を司る北天騎士団の負うところは決して小さくはない。

「もとより身代金を支払うつもりはない。我らの手で、なんとしても逆賊の首級を挙げるのだ。……おのおの心してかかれよ」

ザルバッグの眼光を受けて、一同、決意を新たにしたところで、いったんこの場は解散となった。

諸将が退出していく中、入れ違うようにして一人の騎士が幕内に馳せ参じた。その騎士は、“草”の者ではなかった。

「城衛門に詰めておる者ですが」

騎士は何やら困惑の色を浮かべている。

「何事か」

マルコムが応対すると、騎士は「は」とかしこまってから、

「エルムドア候の近習と申す者が詰所に来ておりまして」

「なんだと？」

マルコムは不審に眉を寄せた。

「アルガス・サダルファスという名です。身なりは騎士ですが……私の見る限りではまだ子どもです」

「サダルファス……ランベリーの旧家に、たしかそういう名があったような気もするが」

「他にも、ベオルブ家のラムザさまとも面識があるといっております」

「なに？　ラムザ坊ちゃんと？」

「は、なんでも、マンダリア平原で命を救われたとか」

「で、何用あって將軍の陣所へ？」

「それが、北天騎士団の搜索部隊に加えてほしいというのです」

「エルムドア候の搜索にか？」

「は」

「……………」

マルコムは髭を撫でつけながら思案していたが、

「とりあえず詰所に留めておけ。追って沙汰いたす」

騎士が退出すると、彼は早速ザルバッグにもこの次第を告げた。

「素性は確かなのか？」

ザルバッグは円卓に頬杖をついて、片方の手は地図に置かれていた騎兵の駒を弄んでいる。

「尋問してみないことには、なんとも」

「何か情報が得られるかもしれんな」

「ですが、まだ子どもだといっております」

「ラムザに会ったと言っていたのだろうか？」

「左様で」

「ならばラムザに素性を検めさせよう」
あらた

「坊ちゃんはイグーロスにいらっしやるので？」

「ああ。人員補填のために士官学校の生徒を駆り出したのだ。……
実戦訓練という名目でな。今は館にいるはずだ」

「ははあ、左様でありましたか」

コッソ、と固い音を立てて、象牙製の騎兵が地図の上に立った。そこはちょうど、イグーロスの真上であった。

「今日のところは下がらせておけ。ラムザには私が直接話をつけておく」

「承知いたしました」

マルコムは本営を後にすると、チョコボに跨って城衛門の詰所へと向かった。

城門を出てすぐの所にある詰所の前には、見慣れない臙脂の皮鎧に身を包んだ若い騎士が一人、手持ち無沙汰な様子で立っていた。

「貴公がアルガス・サダルファスカ」

マルコムが騎上から問うと、アルガスは不意を衝かれたように佇まいを直し、その場に跪いた。

「ランベリー近衛騎士団少年挺身隊所属、アルガス・サダルファスであります」

「見習い騎士か？」

「は」

「搜索部隊に加えてほしいと申し出たそうだな」

「不肖の身ではありますが、必ずやお役に立ってみせます。何とぞ、行軍の端に加えていただきたく……」

「それについては後ほど命が下ろう。今日のところは下がちなさい」

「……は」

「故郷くにに帰る気はないのか？」

「エルムドアさまの御身を取り戻すまでは……故郷の者に顔向けできません」

「ふむ……」

アルガスは目に涙を湛えて肩を震わせている。その切実なる想いは、マルコム的心にも確かに響いていた。素性を検めるまでもなく、目の前の少年がエルムドア候の近習として、誰よりも主君の身を案じているということは、言わでも伝わってくるのであった。

（あっぱれな忠心よ）

マルコムは素直に感心していた。彼の古臭い騎士道精神は、純粹にアルガスの殊勝ぶりに共感を覚えるのであった。

「案ずるな。將軍は今、益有る情報を求めておられる。そちの証言は必ずや將軍のお耳元に届くであろう。そののち、場合によってはお取立ということもあるかもしれぬ。わしからも、よく申し上げておこう」

「あ……ありがたき幸せに存じます！」

アルガスは、地面にすがりつかんばかりに深く拝跪した。

マルコムは目を細めてひとつ頷くと、チョコボの横腹を蹴った。

マルコムが去ってから、アルガスはその場に跪いたまま、いつまでも立ち上がりとはしなかった。

第一章 持たざる者 13. 將軍直命

宵の口に差しかかったイグーロス城下でも、昼間の賑わいの衰えないのがこころマル商業区である。

殊に中央広場は、連日お祭りのような活況をみせている。

管弦楽隊の即興演奏は止むところを知らず、若い男女が番いになって踊りまわる様子があちこちで見られる。それを囲んで、麦酒や葡萄酒の注がれたマグを手に手に持ち、酔った市民が大声で囃し立てる。

隙間無く立ち並ぶ露店をちょっと覗けば、色とりどりの野菜や果物、肉の燻製、妖しげな香料にいかがわしい装飾品の数々。どれもこれも、べつだん大した品ではないだろうが、それでも、黄昏時に浮き立つ夜店の店先に並ぶと、どういうわけか、こういう品々でさえ煌びやかに映えて見えるのだから不思議なものである。

ディリータもいま、数ある飾り物屋のなかでも、賑わっている広場の中心からは一步外れて、ひっそりと品物を広げている露店の前に立っていた。

べつに彼自身は、身飾りなどに興味はないのである。

先刻、アルマとティータを連れて城下の修道院を訪れたとき、この修道女のエリザが、ティータに誕生祝いの贈り物をした。それは修道院の所蔵する貴重な書物で、幼いころから学問好きなティータの性分をよく知る司祭の好意によって、特別に譲り受けたものであった。

で、兄たるディリータはというと、妹の誕生日のことをすっかり失念していた。親友のアルマからはとくに贈り物がされていたように、彼はその場で遅ればせに祝いの言葉を述べ、贈り物を準備できなかったことを素直に詫びた。

「べつにいいのよ兄さん……」

ティータはそう言ったが、兄たる身としては、この上ない恥に思え

るのであった。

「ほんとうに……ほんとうに、すまなかった」

そう何度も繰り返しながら、多少値は張っても、今年は良いものを買ってやろうと心に決めたのである。

何がいいだろうかとあれこれ考えて、年頃の娘にはやっぱり何か身を飾るものが必要だろうと、露店をあちこち歩き回ったがあげくふと目にした品が気になって、この店の前に足を止めたのである。

「これはいくら？」

ディリータは、絨毯の上にこまごまと並べられているアクセサリのひとつを指差して、店主に値段を訊いた。

「……………」

店主は、ぼろきれのように擦り切れた灰色の外套をはおり、フードを目深に被って、黙然と座している。それだけ見ても、客寄せに愛想を振りまいている他の店のあきんどとは、明らかに様子がちがっていた。

並べられている商品も、市井の女が好んで身につけるようなキラキラした飾り物はひとつも無く、どれも古代の呪術でも掛けられていそうな、禍々しい雰囲気醸し出している物ばかりなのである。

そんな品々の中でディリータの眼を惹いたのは、ひとつの首飾りであった。

その首飾りだけが、骨董品店のような品揃えの中にあって一際浮いていたというのもある。

銀製の首掛け部分の真ん中に、小指の先ほどの宝石が付いており――それが何という石なのかはディリータには分からなかったが――ただ、彼はその海のように深い青色が、格別に美しいと思ったのである。小洒落た意匠などは無いが、この控えめな美しさが、何より妹に似合うに違いないと、彼はそう確信した。

そして、財布の中身などは深く考えずに値段を訊いたのだが、

「……五千ギル」

といった店主の応えに、ディリータは思わず「うっ……」と声を洩

らしてしまった。小銭袋の口を開けてみるまでもなく、今の彼には手の届かない値である。

「もう少し安くできないのか？」

「……………」

「……無理か」

店主が応えないのを、ディリータはそう受け取った。

肩を落として、なお名残惜しげにその場でもたついていると、

「あれ、兄さん？」

背後で声がしたので、振り返ると、ティータであった。アルマも一緒である。

「やぱり。姿が見えないと思ったら……」

「ん、ああ……」

ディリータは、落ちつきなく眼をきよろきよろさせる。

「何を見てるの？」

「いや、ちょっと……」

「あら」

二人して、身飾り屋の前にしゃがみこむ。ディリータは髪を撫でつけながら、何気ないふうを装っている。

「ディリータって、こういう趣味があったの？」

アルマが、棘々しい飾り付けのされた売り物の一つをつまみあげながら、しげしげとそれを眺めている。

「意外ね」

「べつに……ちょっと見ていただけさ」

「ふうん……」

悪戯げに笑みをこぼしながら、アルマは品物をもとあったところに戻す。賢しい少女の瞳には、何か含んだものがみえる。一方のティータはというと、こちらは黙って、瞳は一点を見つめていた。

「ティータ、何か気に入ったのがあった？」

「これ……」

「え？」

ティータが指差したのは、ディリータが今しがた値を訊いた、まさにその首飾りであった。

「これ、きれいだなって思ってた」

「まあ、ほんとに」

首飾りに付けられた蒼い宝石が、何か見えざる力に反応したかのように、妖しく煌めいて見えた。その光が、魔女の瞳のようにも思えて、ディリータはうすら寒いものを感じた。

「……もう日も暮れたし、ぼちぼち帰ろうか」

ディリータは、二人の背に向けていった。

「そうね。ティータ、帰りましょ」

「うん」

二人は立ち上がると、もう歩きだしているディリータの横に並んだ。宵の街の喧騒が、路地の先の明るいほうから漏れてくる。石畳の路面に落とされた三人の影法師が、長く引き伸ばされて揺れている。

「何も買わなかったのか？」

ディリータが、二人の荷物の増えていないのに気づいて言った。アルマは手ぶらだが、ティータは両手に修道院でもらった分厚い書物を大事そうに抱えている。

「ラム肉の串焼きをティータと分けて食べたわ」

アルマが、にこやかに答えた。

「それがティータったら、もう一本食べようっていきかなかったのよ」

「アルマ！」

ティータが、頬を赤らめて、アルマを肘で小突く。

「余計なこと言わなくていいの！」

「だって、本当に食べたそうだったじゃない」

「それは……おいしかったもの」

「ははは、ティータは普段そんなものは食べないからなあ」

「そしたらディリータ、いつの間にかいなくなっちゃうんだもの」

「いやあ、すまんすまん」

ディリータとしては、妹に気取られずに誕生日の贈り物を手に入れようと考えていたのである。首飾りには手が届かなかったが、それには見切りをつけることにして、あとでもっと手頃な品を探すことにした。

「……………」

でもどういうわけか、あの首飾りのことが、彼の頭から容易に離れないのであった。

美しい首飾りを身につけて、少し大人びた妹の姿が幻のように、ふわふわと彼の額に浮かんでいるのであった。

なんとなく後ろ髪引かれるような思いで、来た道をちらと見やるも、先ほどの露店商の姿はとくに建物の陰に隠れていた。

そんなわけで、彼は前方から足早に近づいてきた人影をとっさに避けることができなかった。

——あつ、

前を向いたときには、すでに肩と肩がぶつかりあっていた。

「失礼……………」

「……………」

すれ違いざまに目に入った横顔に、ディリータは見覚えがあった。

「あ、おまえは……………」

「あれ？」

先方も、ディリータの顔を見て立ち止まっていた。

「アルガス……………サダルファスか？」

「ディリータ・ハイラル……………」

アルマとディリータが、急に立ち止まったディリータのほうを振り返って、

「お友達かしら？」

と、アルマが訊いた。

「……………護送任務の途中で一緒になってな。ランベリーの見習い騎士だ」

「まあ……………そんなに遠くから」

ディリータに紹介されると、アルガスは無愛想を緩めもせずに、アルマとティータに向かって軽く会釈した。

「アルガス・サダルファスだ。そちらは……」

アルマとティータは、ちよつと顔を見合せたが、ディリータが二人の返辞を引き受けて、

「こっちは僕の妹のティータだ」

紹介されると、ティータが、片ほうの手でスカートの端をつまんで、チョンと軽くひざを折る。

「で……こちらのお嬢さんが、アルマ・ベオルブ嬢。北天騎士団を率いる、ベオルブ家の御息女だ」

アルマもティータと同じように淑女の挨拶をすると、アルガスはあからさまに怯みをみせた。

「え……では君も、ベオルブ家の？」

「ええ、そうですけど。ハイラル兄妹だって、ベオルブ家の一族よ？」

アルマは、大多数の人間がみせるこういった反応に慣れているのか、しらとして受け答える。

「一族……？」

釈然としない様子で、アルガスがディリータにいう。

「まあ……なんだ、昔、色々あってな」

「下人とかではなく？」

「失礼な方ね！」

アルマが、憤然とアルガスの前に進み出る。

「ディリータもティータも、私の兄妹よ！」

「いいんだアルマ。名門ベオルブの一族などとは、そんなに容易くかたれるもんじゃない。アルガスがそう思うのも無理ないさ」

ディリータは、ことハイラル兄妹の身分のこととなると、弁護に熱くなりがちなアルマを抑えて言った。

こういう傾向は、アルマの兄、ラムザにもしばしば表れるのである。士官アカデミーなどで級友たちと喧嘩沙汰になりそうになると、

そのたび、彼は友をなだめる必要があった。同時に、ベオルブ家の養子とはいえ、一平民にすぎぬ我が身をここまで気にかけてくれるアルマとラムザに、心から感謝してもいた。

「詳しい事情は知らないが……失礼を言ったようならお詫びする」
可憐な少女にあるまじき剣幕に少々気圧されながらも、アルガスは素直に非礼を詫びた。

「おれは君たちの兄上に命を救われたんだ」

「え、ということは、ラムザ兄さんとも会ったの？」

「ああ……兄君には何度か見舞にも来ていただいた
アルガスはやっと、表情をほんの少し弛めた。

「怪我の具合はもういいのか？」

ディリータが訊くと、アルガスはぐるぐると肩を回しながら、
「おかげさまで、この通りだ」

「それは結構だが……今日はまたどうして、そんな格好で？」

「北天騎士団の本宮に行ってきたところだ。……搜索部隊に加えて
もらおうと思ってな」

言ってから、ディリータが、さっと表情を硬くしたのを見て、アル
ガスは「あっ」と不味い顔をした。

エルムドア侯爵誘拐事件は、まだ公にはされていないのである。
領民の不安を煽らぬためでもあるが、大方は、北天騎士団に対する
不信を増長させぬためであった。ようは、彼らの面子である。

それでも、耳賢いアルマは不審に眉を潜めたが、深く詮索するよ
うなまねはしなかった。まだ幼くとも、彼女は武門の家の子として
の分をしっかりとわきまえていた。

「……じゃあ、おれはこれで失礼するよ。機会があれば、またここ
かでな」

そう言うと、アルガスはそそくさとその場から立ち去ってしまった。
彼の背が見えなくなってから、

「行きましよ」

と、アルマは何事もなかったかのように再び歩き始める。

まもなく、三人はルマールの街区を抜けて、ベオルブ家の館へ続く上り坂に差し掛かった。

（思っていたよりも忠義に厚い男のようだ）

ディリータは、アルガスという人間の一面を垣間見た気がした。

今日ばかり出会うまで、とうに故郷のランベリーに帰ってしまったものと、勝手に思い込んでいたディリータなのである。

護送任務の道中、手負いのアルガスから事情を聞いたとき、彼がラムザの家柄に目の色を変えたのをディリータは見逃してはいなかった。

「主人思いではあるが、程度のしれた男」

これが、正直な第一印象であった。

他所の土地から来た見習い騎士など、この期に及んではあまりに無力。ベオルブ家という強力な伝に^つすがろうとするのは無理からぬことではあるが――

いちおう侯爵誘拐事件の現場に居合わせた生証人として、イグーロスに到着してから一通りの尋問を受けたようだが、本人が気絶していたというからには、これといって有力な情報は引き出せなかったであろう、その後の彼の音沙汰はとんと耳にしていなかったのである。

風説の流布を防ぐため、北天騎士団に身柄を拘束されていてもおかしくないものだが、事件の噂が広まるのも時間の問題であろうし、騎士団にしても、他領の見習い騎士ごときにそこまで手を回す余裕も無かったであろう。

「――へえ、大したもんじゃないか」

翌日、ディリータがアルガスに会ったことを話すと、ラムザは感心したようにそう応えた。

「見舞に行ったというじゃないか」

「ああ、兄上と喧嘩する前に何度か――ねっ！」

言うなり、訓練用の棒剣を握った利き手が素早く下段の突きを繰り出す。

ディリータはそれを器用に受け流しながら、淀みない足運びで元の間合いをとる。

謹慎中に体が鈍るのを防ぐため、ラムザは毎朝の鍛錬を怠らなかった。本日非番のディリータは、こうして友の稽古に付き合わされているのである。

「どうしてまた？」

「どうしてといっても……」

ディリータが踏み込むと同時に、こんどは正面からまっすぐ降り下ろす。ラムザは、さっと受けの構えをとる。

カン、と小気味よい音をたてて、二人の棒剣が交わる。

「……心配だったからさ」

「あ、そう」

ディリータが、呆れたように嘆息し、ぐいと相手を引き離す。

ラムザという人間には、おそらく打算というものがない。彼の行動原理は、何時もきわめて純粹であった。

「ダイスダーク殿に会わせてくれてせがまれたけどね……それは出来ないって言ったんだ」

「仕方ないさ」

「弟の僕だって、執務中には会わせてもらえないんだから。あの日だって、秘書官の目を盗んで忍び込んだくらいだし。でも、冷静に立場をわきまえて自分にできることをやろうとした彼はすごいと思うよ」

「頭に血が昇って謹慎をくらった誰かさんとはえらい違いだな」

「……はいはい」

ラムザは首を振って、棒剣の構えを解いてしまった。

「もういいのか？」

「十分だよ……喋りながらやっても意味ないし」

「あ、そう」

「……」

棒剣を放り出すと、二人は並んで庭の隅の木陰に腰をおろした。二

羽の雲雀が、無邪気に囀りながら二人の頭上を飛び回っている。

「ティータには何か買ってあげたの？　誕生日はとくに過ぎたよね？」

「……いや、まだ」

「だらしのない兄貴だなあ」

「……うるさい」

皮肉を言い返せたのに満足して、ラムザは仰向けに脚を投げ出した。

「搜索部隊、か……僕らにも何かできないかな」

「政が絡んでいるからな……見習い騎士なんぞが関わらせてもらえ
るとは思えないな」

「そうか……そうだよなあ」

二人の座っている場所からは、館の裏側と、召使いが主に用いる勝手口が見える。

今しがた、その木戸を押して、日ごろ館に出入りしている顔馴染みの商人が、食材を載せた荷車を引いて敷地内入ってくるのが見えた。厨房の煙突からは、朝餉の支度の煙がもうすでに立ち昇っていた。

「ぼちぼち朝食の時間だな」

ディリータが、その白い炊煙を遠目に見ながら言った。

「そうだね……あれ？」

ラムザの視線の先では、先ほどの商人が、ちょうど館のほうから歩いてきた人物に向かって、低く頭を垂れて挨拶をしているのであった。その人物は、片手を挙げて快活にその礼に応えていた。

「毎朝ご苦労！」というように言ったのであろうその声は、ザルバッグ・ベオルブのものに違いなかった。

「兄上……散歩かな？」

ザルバッグは、そのまま大股で裏庭を横切って、二人のいる方へ歩み寄ってきた。

「朝から精の出ることだな！」

広い庭に、彼の声はよく響く。

「おはようございます。兄上」

「館からお前らが稽古をしているのが見えたのでな……もう止めてしまったのか？」

「いや、その……そろそろ朝食かなと思って」

「今商人が来たばかりだ。もう少し間があるう」

ザルバッグは、二人が放置していた棒剣を拾い上げると、くると回して先端をラムザの方へ向け、

「どれ、久々に私が稽古をつけてやろう」

と、言い出した。

「えっ……よろしいのですか？」

「もうじきアカデミーも卒業だろう？ どれだけ腕を上げたのか見てやるから、二人ともこっちへ来い」

「は……はいっ！」

思いがけず北天騎士団総帥と手合わせすることとなり、二人は嬉しさ半分、恐ろしさに身もすくむ思いで、ザルバッグのもとに駆け寄った。

「二人同時に相手してやりたいところだが……あいにく剣は二本しかないからな。ほれラムザ、お前からだ」

ラムザが棒剣を拾い上げると、ザルバッグは、きつ、と鬼の目を剥いた。戯れの試合とはいえ、決して手を抜かないのがこの男の信条である。

「……よろしくお願いします」

「うむ。どっからでもかかってきたまえ」

刹那の睨み合いの後、「やあっ！」と掛け声一番、躍りかかったラムザの剣戟^{けんげき}は、疾風に巻かれたように、あっけなく弾き返された。「どうしたっ！ もう一本っ！」

ラムザは二の腕の痺れを押さえながら両手に持ち変えると、大きく息を吸い込み、

「はっ！」

と吐き出した勢いで、低めの構えから二撃目を繰り出す。

「おうっ！」

今度は、二合、三合と撃ち合うも、やはり太刀筋を見切ったザルバツグの方が、あっという間にラムザを死に体にもっていつてしまう。
「……まあ、こんなものか」

全身にみなぎる気を抜くようにして、ふう、と一息ついてから、ザルバツグは剣を下ろした。あっという間の出来事であったが、ラムザのほうは額に汗し、息を切らしていた。

「ま……参りました」

「筋はなかなかよろしい。あとは地力パワーをつけることだな」
「……はい」

ラムザは肩を落として、ディリータに棒剣を手渡した。

「よろしく願います」

次はディリータが構える。

「よし、来い」

ザルバツグの剣が、再び気を纏う。

ラムザに比べると、ディリータの型はやや大振りだが、一撃一撃には力があつた。

それでも、所詮はザルバツグ・ベオルブの相手ではなかった。力を以ては、そのさらに上の力でねじ伏せられる。

「……恐れ入りました」

数合撃ち合ったのち、ディリータの棒剣は真つ二つに叩き折られてしまった。

「ディリータはちと力みすぎだ。だが、剣にはこのくらい殺気があつてもよい」

「……は」

「ははは、二人ともしばらく手合わせせぬうちにずいぶん腕を上げたな」

「お恥ずかしいかぎりです」

「なに、このまま鍛練を怠らねば、いずれよい働きができよう。柔と剛、この上なき組み合わせだ。伝説の双剣、ファールシスとビロ

「もかくありなん——だがいかんせん、二人ともまだ血を知らぬ剣と見える。本当の命の駆け引きにおいては、稽古ごとなど役にたたぬものだ」

言いながら、ザルバッグは持っていた棒剣をラムザに手渡す。木の棒切れが、鉄の剣のように熱を帯びているように感じるのは、気のせいではあるまい。

「剣に魂を奪われぬこと。常に理を以て刃を制すること。狂気に囚われた剣は無用な殺生をはたらくばかりでなく、使い手の命を奪うこととなる」

「父上の教えでありますね」

「そうだ。父の教え——それすなわちベオルブの教えだ。心せよ」

「はっ！」

ラムザとディリータは背筋を伸ばして敬礼した。ザルバッグは、期待の籠った目で若い二人の顔を交互に見やりながら、

「こんなに活のいい剣を錆び付かせておくのはもったいないな……どうだ、北天騎士団のためにひと働きしてみる気はないか？」

「えっ、それは……」

意表を突かれたように、ラムザが目丸くする。

「城の警護など退屈であろう？ 謹慎などではなおさら」

「骸旅団殲滅作戦に加えていただけなのでしょうか？」

ディリータが黒い瞳を輝かせる。

「……と、言いたいところではあるが、見習い騎士を戦場に送らねばならぬほどには、我らもまだ困窮してはいない。貴様らにやってほしいのは、そうだな……情報収集だ」

「情報収集……でありますか」

「うむ。こういう仕事は、子どもにやらせると思わぬ成果を生み出すものだ。何人も、子ども相手には気を許してしまうものだからな」先ほどの鬼のごとき気迫はどこへやら、ザルバッグは無邪気な笑みを浮かべている。若い二人は、北天騎士団総帥直々の命令ということに心踊らせる反面、緊張で顔面を強張らせていた。

「二人だけで行かせるつもりはない。イグーロスにいるアカデミーの面々と……あと一人、ランベリーから来たという見習い騎士も一緒に行かせよう。先日、北天騎士団の本営に現れて、侯爵の捜索部隊に加えてほしいと申ししてきた者だが……ラムザ、お前とは顔見知りだと言っていたが？」

「はい、アルガス・サダルファスという者でしょうか……」

「たしか、そういう名であったな。諜報部が尋問をしたそうなのだが、私のもとへは報告が来ていなかったようだ——よもや、侯爵の近習の者が生きているとは思ひもなかった。年少ながら忠義厚き者としてマルコムから是非にと言われている。捜索部隊に入れてやることはできないが、お前たちと行動を共にすれば、侯爵をお救いするのに有力な手掛かりが得られぬとも限らない。歳も近かろうし、協力して任務に当たってくれ」

「承知いたしました」

「ラムザの謹慎処分については、ただちに解除していただくよう私から兄上に申し上げておこう。次に活動地域についてだが——」

近頃、骸旅団と見られる不逞の輩の動きが活発化しているのは、

一つ、貿易都市ドーター周辺域

一つ、王領ルザリアとの領界

定かではないが、ドーターでは骸旅団の首領ウィーグラフの目撃情報もたらされている。また、ルザリアとの領境にあるハドムという宿場町では、ウィーグラフの実妹と称する人物の消息が確認されており、こちらは敵の内通者からの情報とされているから、より確かなものであった。この両者が合流を果たすようなことがあれば、再び反抗勢力の増長を招く恐れがある。

「部隊長はラムザ・ベオルブ、副長はディリータ・ハイラル、任務開始は三日後とする。報告は、アラグアイ方面に展開する第八遊撃隊に随時行うように。やり方は一切任せるが、北天騎士団の一員たることを自覚したうえで任務に当たれ。以上だ」

第一章 持たざる者 14. 形見

——コンコン

「どちらさま？」

「ディリータだ」

「どうぞ」

応えを聞いてから、ディリータはおもむろに扉を開ける。

小奇麗に片付いた寝室はいかにも乙女の部屋らしく、調度に染みついた甘い香りが鼻腔に心地よい。二つ並んだ小型のベッドの端に、寝間着姿のアルマとディリータは向かい合いに腰掛けて、アルマは解いたブロンドを櫛で梳いていた。

「あ、やっぱりまずかったか？」

「なにが？」

「いや、その……」

どぎまぎしているディリータを訝って、アルマが眉をしかめた。

生地の薄い夏の寝間着は、いよいよ花開こうとする乙女の輪郭をびったりと映し出しているのであった。その絶妙な顕れに無自覚なもの、またこの年頃の少女らしい。

それとなく視線を遊ばせながら、ディリータは手に持っていた小さな箱を妹に差し出した。

「これ、遅れてすまなかった」

ディリータが、兄から受け取った箱を開けると、そこには見覚えのある首飾りが収まっていた。それは、先日、ディリータが目を惹かれながらも手の届かなかった、蒼い宝石の首飾りであった。

「あ、これ……」

「誕生日おめでとう、ディリータ」

ディリータが首飾りを持ち上げると、その宝石は月夜の湖面を思わせる青白い妖光を湛えた。

「きれい……」

アルマが、櫛を動かす手を止めて、その光に見入る。

ティータは、ゆっくりと首の後ろに手を廻して、鎖をつなぎとめた。彼女の胸の上に落ち着いた宝石は、その鼓動に合わせるように、ひとつ、生物的な揺らめきをみせた。

「すごくきれいだよ。ティータ」

「この光……魔法？」

「ティータがそれを身につけるにふさわしいってことさ」

ディリータは満足げに笑みを浮かべる。

こうして見ると、我が妹ながら、もうすっかり一人の女であった。親を持たぬディリータの中では、早くも兄妹愛を越えたある種の父性ともいえるものが、芽生えつつあるのだった。

（いずれ良い人を見つけてやらんとな）

——もうそんなことまで考えているディリータなのである。

「兄さん、ありがとう」

「大事にしてくれよな」

「うん、一生の宝物にする」

「いいなあ、ティータは。私のお兄様方なんか、そんな気のきいたもの、くれたためしがないわ」

アルマが呆れたように嘆息する。無論、本心からの羨望ではあるまい。彼女なりに、兄としてディリータを立ててやっているのである。五千ギルの首飾りなど、ベオルブ家の財からすればものの数にも入るまい。大事なのは、ディリータ自身の手で贈り物を用意することであった。——が、実のところ、彼はこの首飾りを手にするのに一ギルも落としてはいなかった。

ザルバッグから直々の命を受けた翌日、彼は旅支度もほどほどに、再びルマールの街区へと赴いていた。

イグーロスを発ったら最後、次に妹と会える時はいつになるかわからない。妹への贈り物を手に入れられる日は、この日において他になかった。

彼は、城の警護番で支給された、わずかばかりの手当てをかき集

め、財布の許す限り高額な品を買ってやろうと、目ぼしい店を見て回った。

「本にするか……いや、エリザと同じでは兄として面目が立たない。アルマは服を贈ったというし……となると、やっぱり身飾りしかないか」

ぶつくさ言いながら、彼は、一昨日、あの蒼い石の首飾りを売っていた露店のあったところまで来ていた。

「あれ、たしかここだったよな？」

あの、みすばらしい身なりの身飾り屋の姿は、そこにはなかった。人気の少ない路地を見回しても、他に店を広げている者はなかった。（刻が悪かったか……？）

今は昼間である。が、仮にあの身飾り屋がいたとしても、だいぶ値切ってもらわなければ、首飾りにも手が届かぬ懐具合に変わりはない。

逡巡して、しばしその辺をうろうろしたのち、

（あまりこだわっても仕方なし——！）

やっと踏ん切りをつけて、その場を立ち去ろうとすると、

「——もし、そこのお若い方」

と、どこからか声を掛けられたので、ディリータは思わず踏みとどまって、振り返ると、路地の両側に建ち並ぶ建物の隙間の闇から、煤けた鼠色のローブを纏った姿が、音もなく現れた。

「えっと………僕？」

「いかにも」

フードからはみ出している薄汚れた長い髭を見ても、相当な年寄とわかる。そそ、と此方に歩み寄ると、フードの陰から濁った黄色い瞳が覗いて、ディリータの顔を見上げる。

「あ、ひょっとしてあんた、一昨日ここで店を出してた身飾り屋か？」

「うむ」

「ちやうど探していたんだ。あの蒼い首飾り、まだ持っているのか

？」

「やはりあの時のお客さんでしたか」

「そうだ。ぜひあの品を譲ってほしいんだが、あいにく手持ちが少なくてな……もう少し値切ってはもらえないだろうか」

「……………」

「せめて、三千」

「……あの娘さん」

「え？」

「お客さんと一緒におられた……あの黒髪の娘さんは？」

「ティータのことか？　僕の妹だが……」

「ほう、ティータといわれるのですか」

「そうだけど……妹がなにか？」

「あの首飾りは、贈り物かなにかで？」

「そうだ。誕生祝いに、妹へ贈るつもりだった」

「ふむ……」

身飾り屋は背負っていた荷を下ろすと、売り物が入れられているらしい革袋をこそごそやってから、両の掌に乗るくらいの小箱を取り出した。それを無言で差し出すので、ディリータはわけもわからぬまま小箱を受け取る。

「これは？」

「開けてみなされ」

「……………」

蓋を開けると、小さな群青色の宝石が、目に入った。海のように深い青。紛れもなく、あの首飾りであった。

「持っておきなさい」

「いいのか……………」

老人は、静かにひとつ頷く。ディリータは、にわかには信じられず、
「でも……いったい、どうして？」

「どうしてかのう」

「……………」

「あの娘さんに、石が反応したんだよ」

「はあ」

「その石は古い靈石の欠片でな。さる魔導師からそいつを譲り受けたときには、もう本来の力を失っておった」

靈石とは、より純度の高いマナ鉱物のことをいう。マナそのものの結晶をクリスタルというならば、きわめてそれに近い物質ということになる。その高密度のマナを媒介として、身につけた者の魔力を増強したり、協力的な魔法を石自体に封じ込めたりすることができる。当然、マナの失われた靈石は、そこらに落ちている石ころと何ら変わりない。人為的に精製する技術もあるが、長い年月をかけてマナを蓄えた天然の靈石は、より貴重なものと言われた。

「——わしも、見たことのない光だった。どうしたもんかと思ったが、あんた方はすぐに行ってしまったんでな」

あのととき、ディリータが目を付けていた首飾りに、ティータも興味を示したのだった。

それがティータに反応したものであったのかは定かではないが、その蒼い寶石が、不思議な光を宿したように見えたのは、気のせいではなかったらしい。

「ただの石ころだと思っと思ったもんが、あんたの妹さんに見留められて、にわかに息を吹き返した。つまり、そりゃわしの持ち物じゃないってことよ。案の定、その首飾りを求めて、あんたはまたここへもどってきた。それなら、わしは石の本望に従うまでよ」

「しかし、無料^{ただ}というのでは……」

「なに、気にしなさんな」

「でも……」

「それじゃあの」

身飾り屋の老人は荷を背負い直すと、いつの間にか、少し離れた場所^{ところ}に立っていた用心棒らしき大男と連れだって、さっさと広場のほうへと歩いていく。

「あっ……」

ディリータは、しばし呆然とその背を見送っていたが、すぐに思い出したように、

「ありがとう、妹もきつと喜ぶだろう！」

そう大きな声で言ったのを、聞いたか聞かずか、その低い背中は、連れの男とともに街区の建物の角に消えていった。

ディリータは、今しがた自分のものとなった首飾りを手にとって見ながら、

「まさか、呪われているんじゃないだろうな」

などと、埒も無いことをつぶやいた。蒼い石は、底知れぬ魔魅を無垢なる表情の裏に潜めて、ほくそ笑んでいるかのようであった。

なんにせよ、兄としての務めを果たしたディリータは、足どりも軽く、妹たちの寝室をあとにした。

（これで、任務に集中できるな）

今の彼は、もうそのことしか頭に無いのであった。

――一方、その日のまだ昼ごろ。こちらはイグーロス城下の修道院。その裏手にある墓地に、ラムザの姿があった。

彼はベオルブ家の立派な墓石の前に膝を屈し、先ほどから黙祷を捧げているのである。その静寂を紛らわさぬよう、細心の注意を払いながら、質素な修道衣を纏った年若い修道女が、手に持った白いリーンの花束を墓石に献じている。

その後、彼女もラムザの傍らに膝を屈し、黙祷を始める。

「……………」

修道院に隣接する孤児院から、童^{わらべ}のはしゃぎまわる声が、かすかに聴こえる。そのほかは、野鳥の囀^{かしま}りばかりが喧^{かしま}しい昼下がりの墓所である。

――四半刻あまり経って。

ラムザが黙祷を終え、おもむろに立ち上がる。

その目もとには、なにか水で濯いだような爽やかさがある。

「エリザ、すまないな」

墓石に花が献じてあるのを見つけて、ラムザが足元に跪く修道女エリザにいった。

「いいえ、私も、ラムザさまの御身をお守りくださるよう、お祈りしたのです」

彼女も立ち上がり、ラムザの声のするほうへ、その盲た瞳を向ける。

「北天騎士団の仕事を任されたと言ったら、父上はたいそう喜ばれたよ」

「そうでしたか」

「明日、出発する」

「お帰りはいつごろに……？」

「まだわからない。場合によっては、一年以上先になるかもしれない」

その声音に、エリザの耳は不安にも似た揺らぎを感じ取った。

彼女は光を通さぬ瞳を閉じると、全身に、若草の青い匂を吸いこんだ。そこに、青年の瑞々しい香りが、ほのかに混じる。

「このあいだ、ディリータさまがいらっしゃいましたよ。アルマさんとティータさんを連れて」

「そうだってね……僕は行けなかったんだけど」

「ディリータさまったら、誕生日の贈り物を用意し忘れたといって、何度も何度も、ティータさんに謝っていたんですよ」

「ははは、あいつらしいなあ」

「ほんとうに。お変わりないようで、なによりです」

「今ごろ、必死になって贈り物を探しているよ。発つ前に、父上にご挨拶申し上げようって誘ったんだけど、どうしても大事な用があるからってね」

「それほど、ティータさんを大切に思っているんですよ」

「あいつはもう、兄貴というより、父親みたいなものだからね」

「ラムザさまだって、アルマさんを愛しておられるのでしょうか？」

「そりゃそうだけど……最近、あいつも小生意気になってきたから

な」

ラムザは鼻づらを搔きつつ、はにかんでみせる。エリザも、口もとに手をあてて、くすりと笑う。

「孤児院うちの子どもたちが、ラムザさまに会いたがっています。お顔をみせてやってください」

「もちろん！　そういえば、この頃あまり遊んでやれてなかったね。みんな元気？」

「それはもう。司教さまと私の手には、とても負いきれません」

「アルマとティータが手伝いに来てくれるさ。今は休暇中だからね」「ほんとうに、助かります」

「いいんだよ。どうせ暇なんだろうし」

孤児院は、この修道院が今よりもずっと大きかった時代に、修道士たちが寝泊まりしていた宿舎をそのまま転用して、ここの司教が営んでいるものである。

それだけに、石造りの建物はなかなか立派みなしこなものだが、長い戦争と流行り病、飢饉や増税による困窮から、孤児みなしこの数は増える一方で、この建物にもそろそろ収まりきれなくなっていた。

ベオルブ家の墓を守っているということもあり、先代のバルバネスも、この孤児院には格別な支援を施していた。ハイラル兄妹も、ベオルブ家に迎え入れられる準備が整うまでの一時期を、ここで過ごしていたこともある。

見込みのある者は、ベオルブ家の取り立てで騎士に叙されることもあり、エリザのように、修道を志す者もあった。

彼らは、世間一般からすればまだ恵まれているほうで、畏国では、孤児院と称して平然と人身売買を行っているような所も少なくないのである。

「あ、ラムザさまだ！」

その姿を孤児院の門前に見出して、庭で遊びまわっていた孤児たちが、一斉にラムザの周りに寄り集まってくる。

「ラムザさま！　ラムザさま！」

「おいおい、一度にそんなに大勢とは遊べないよ」

すっかり囲まれてしまったラムザは、困り顔で後ろ頸を掻いている。エリザは、子供たちの嬌声に耳を傾けながら、くすくすと笑っている。

「よしっ！ 最初の相手は誰だっ！」

そう言って、だっと駆けていくラムザを追って、子どもたちも我先に走り出す。

「わーい！ わーい！」

「おい、こら、一人ずつだって言ってるだろ！」

首やら肩やら、思い思いなところへぶら下がってくる子どもたちを慣れた所作であしらいながら、ラムザは鬼っこをしたり、ちゃんばらの相手をしてやったりする。

庭の隅にたたずんで、子どもたちの笑い声を聞いていたエリザは、しばらくすると、何か思い立ったように孤児院の奥へ引っ込んでしまった。

やがて彼女が戻ってくると、遊び疲れたラムザが庭の真ん中にへたり込んでいた。

「もうだめ、降参！」

「えー、もっと遊んでよおーラムザさまあー」

「痛い痛い！ 腕を引っ張らないで！」

「アハハハ！ ラムザさま、おもしろーい！」

さすがのラムザも、子どもたちのあり余る元気の前では押されぎみである。エリザは、ため息をついてそこへ歩み寄り、

「みんな、ラムザさまは明日から大事なおしごとがあるのです。無理をいってはいけませんよ」

そう言うと、子どもたちは、

「はーい」

と、気のない返事をして、渋々ラムザから手を離す。すると、五つくらいの女の子が、

「じゃあエリザ、お歌うたって！」

「え？」

「ほら、いつもうたってくれるやつ！」

「ああ……」

ラムザの存在を意識したのか、少し恥じらうような表情を見せたエリザに、

「僕も聞きたいなあ」

と、ラムザがいうと、子どもたちは、もう期待に無垢な瞳を輝かせている。

「わかりました」

喉を整えてから、やがて、その唇から不思議な旋律が紡ぎだされていく。

——アリーアーダモルテ……イル・アヴェーラ・ル・モルテ……ヴィーアエーラ・ウム・ゴリーナーテ……

呪文のようにも聞こえるその詩は、遙かな異国の言葉であろうか、あるいは、失われた古い言語であろうか。

美しく尾を引く韻律は、やがて子どもたちを安らぎの極致へと誘い、どこか懐かしさにも似た感情を、聴き手の中に呼び起こすのであった。

ラムザの意識は、悠久の時を越え、無窮の宇宙そらに、解き放たれていくかのようであった。

「……………」

歌が終わってから、しばらくはその余韻に浸って、声を発するものはない。

「ありがとう」

ラムザが言うと、しんみりしていた子どもたちも、

「エリザ、ありがとう！」

といって、惜しめない拍手を贈る。エリザは、ちょっと照れたように頬を赤らめながら、その瞳には、子どもたちの弾けんばかりの笑

顔が、しかと映し出されているかのようであった。

「それじゃあみんな、遊んでいらっしやい。夕食時になったら、また呼びますからね」

やがて子どもたちは、それぞれの遊び場に戻っていく。

ラムザとエリザは、庭に面した孤児院の入口の石段に腰掛けて、無邪気に駆けまわる子どもたちを見守っていた。

「ラムザさま、ありがとうございました」

エリザが、こう慇懃に礼すると、ラムザは、とんでもないとばかりに、エリザの手をとる。

「子どもたちのおかげで、こっちが元気づけられたよ。僕のほうこそ、ありがとう」

エリザと話す時、ラムザはこうして、彼女の手に触れることがある。それは、盲目の相手に対しての、彼なりのいたわりであった。そうとは分かっていても、年頃の娘には、やはり気にするところもあるのだろう。

エリザは少し俯き加減に、指をそわだたせている。惜しいかな、こういうことに疎いラムザは、そういった微妙な乙女心の顕れに、まったく気づいていないのであった。

「……あの子たちは、ラムザさまのことが、ほんとうに、大好きなのです。ラムザさまのお話をする、みんな喜んで聞くのです」

「へえ、なんだか照れくさいなあ」

「……………」

ラムザが手を離すと、彼女は胸の鼓動を抑えるように、両手をぴったりと合わせる。ラムザのほうは、相変わらず能天気な顔をして笑っている。

「あの歌、とっても良かったよ。誰に教えてもらったの？」

「それが……よく覚えていないんです。物心ついたときから知っていて、詩の意味を調べたりもしたんですが、今でもよく分かっているのです。司教さまは、とても古い歌のように聞こえるとおっしゃっていました」

「古い歌、か。でもそういう歌って、母親が教えてくれるものじゃないのかな」

「私もそう思うのですが……。私がここに預けられたのは、三つか四つのところですから。もうほとんど、母の顔は覚えていないんです」

「ふうん……それじゃあ、僕と同じだね」

ラムザの母ローサも、彼が五つになる前に病死している。彼もまた、母親というものをよく分かっていないのだ。

——カーン、カーン……

獅子の刻を告げる鐘が辺りに鳴り響く。日は西に傾きはじめていた。

「じゃあ、僕はそろそろ行くよ。明日の準備もあるしね」

「あ、……」

立ち上がったラムザの手に、こんどはエリザのほうの手を探り寄せてくる。ラムザは、その動きに気付いて、そっと彼女の手を取った。

「ん、どうしたの？」

「あ、あの……これ」

そういつて、エリザは手を離す。

「？」

ラムザが掌を開いてみると、そこには、人差し指ほどの長さの小刀があった。薬師や錬金術師が、調合の材料を刻むのに使うような物であろう。年季の入った木製の鞘には、精緻な彫刻が施されており、なかなか、良さそうな品である。

「これは……」

「私からの、選別です。そんなものはありませんが、よろしければ、旅のお供に添えてやってください」

「でも、大事なものなんじゃないのか？」

「私が、ここに来た時から持っていたものです」

「……ってことは、母親の形見かもしれないじゃないか。そんな大切なもの、受け取れないよ」

ラムザが、薬刀をエリザの手に握らせようとすると、彼女はそれを

押し返して、

「……いいんです。どうか、わたくしの気持ちと思って、受け取ってくださいまし」

「しかし……」

「では、差し上げるのではなく、お預かりする、ということにしてください。その小刀とともに、どうかご無事に、イグーロスへお帰りください」

これ以上言っても聞かなげなエリザの頑なさである。ラムザは容易に受け取りかねて、掌に置いたまま、その小刀をじっと見ていた。
「……？」

よくよく見ると、小刀の柄の部分に、小さく文字が彫られている。模様のようにも見えたが、はっきりそれは、

—— D・から F・へ

と、読める。ラムザが、これは何かと訊くと、最初から、そこへ彫られていたものだという。

「この D・ と F・ というのは、名前の頭文字イニシャルかな」

「おそらくこの小刀は、その D・ という方から、私の母に贈られたものなのでしょう」

「ということは、この F・ というのが、エリザのお母さん？」

「ええ……ですが、母は私を司教さまに預けたとき、自分の名を名のらなかったのだそうです。それどころか、子どもの名前も伝えずに、去って行ってしまったのだといいます。私のエリザーベトという名も、司教さまがくださったものなのです」

「そうだったのか……長い付き合いなのに、ぜんぜん知らなかった」

「私は、自分がどういう生まれの人間なのかも分からないのです。そんな怪しい身分の者が、ベオルブ家のような貴いお家柄のお方と、こうして親しく言葉を交わすことなど、本来許されぬことなのです」

「そんなこと言わないでくれ。君と僕は、こんなに小さいときからの友だちじゃないか」

「お友だちなどと……畏れ多いことでございます」

「畏れ多いことなんて何もないさ。これは受け取るから、今まで通り、友だちでいてくれるかい？」

「ラムザさま……」

澄んだ瞳に、涙が溢れ出る。ラムザは、エリザの小さい肩を抱き寄せてから、

「ここの子どもたちと、それから、父上のことを頼んだよ」
そう言い置いて、門へと歩いていく。

「ラムザさまー！ またねーっ！」

「みんなも、元気でね！」

子どもたちが、その姿へ向かって手を振り、ラムザも、大きく振り返す。

（ラムザさま……どうか、ご無事で）

爽やかな風が吹き去っていった方を、エリザは、いつまでも見つめていた。

第一章 持たざる者 15. 家の名

「無茶しないでね」

出発の日の早朝、館の門の前で兄たちを見送るティータの胸には、ティータから贈られた首飾りが、仄かな青い光を放っていた。

「ああ、留守は頼んだ」

ディリータは妹の小さい肩を抱き寄せ、その額に軽く口づけする。

「ディリータ、兄さんのこと、くれぐれも頼むわよ」

アルマが妙に真剣な顔をして言うので、ラムザは癪に障ったのか、

「僕は部隊長なんだぞ！……いちおう」

「はいはい。いつもみたいにボーッとして、そのへんの石ころに躓かないようにしてくださいね、部隊長さん」

「かわいくないなあ。ティータみたいに、ちよつとは素直になったらどうなんだ」

「あら、十分心配しているつもりだけど。私にも、お別れのキスをしてくださる？」

「まったく……生意気なやつ」

嘆息しつつ、ラムザも妹の額に口づけする。

年頃の兄妹にありがちなそんな光景を横目に、ラムザの世話女房役をいいつかったディリータも苦笑する。

「前線に駆り出されるわけでもなし、そんなに危ない目には合わないはずだが」

「だといんだけど。でも、相手はあの骸旅団だしなあ」

「前に奴らに捕まった時は、うまく切り抜けたそうじゃないか」

「あれ、ディリータ、あの事件のこと知ってたの？」

「ザルバッグどのから、しかと聴取済みだ」

「流石だな……父上にも、あえて言わなかったのに」

「父上はむしろそういう話、お聞きになりたかったんじゃないのか」

「……………」

ラムザの胸に、レッドの最期の姿と、マンダリアの砦跡で手を握り交わした、あのミルウーダという女騎士の顔が思い起こされた。

「彼らがただの盗賊だったら、僕は人質にされていたか、なぶり殺しにされていたさ」

「ねえ、さっきから、何のお話？」

会話の要領を得ないアルマが、すかさず首をつっこむ。

「いや、なんでもないさ」

ラムザが、後ろ首を掻きながら答える。

「気になるじゃない」

「帰ったら、話してあげるよ」

妹の頭に、ポン、と手を置いて、

「ティータ、こいつのこと、よろしく頼むよ」

「はい、ラムザ兄さんも、どうかお氣をつけて」

「アルマ、ティータにしっかりと勉強を教えてもらえよ」

「余計なお世話です！ まったくもう」

「お目付役がいないと、すぐサボるくせに」

「そんなことないわよ」

「そうかい？　じゃあ僕らが帰ってくるまでに、教典の一冊くらいは覚えておけよ」

「わかってます！　もう、早く行ったら？」

「はいはい」

最後までそんなやりとりをしてから、もう一度抱擁を交わし、兄妹たちは、ようやく別れた。

去っていく二人の背中へ、いつまでも手を振っているアルマに、ラムザも、その姿が見えなくなるまで、手を振り返していた。ティータは、あえて振り返るということはせずに、黙々と足を運んでいた。

それから、集合場所に定められている北天騎士団の兵舎まで、ラムザとティータは並んで歩いていった。

「あの首飾り、よく似合ってたじゃないか」

「ん？ ああ、……」

「君にしては、なかなかいいセンスだと思うよ」

「そりゃ、どうも」

「ティータ、嬉しそうだったね」

「そうかな？」

「うん、アルマみたいに、やかましくないからね、あの子は。でも、本当に嬉しそうだったよ」

「かわいい妹のためさ」

「言うじゃないか、兄貴」

「まあね」

やがて二人は、イグーロスの巨大な城門を通り抜け、城の外郭に置かれている北天騎士団の兵舎に到着する。

青地に白獅子の軍旗のもとに、護送任務を共にしたアカデミーの面々と、彼らからは少し距離を置くようにして、兵舎の壁に寄り掛かっているアルガス・サダルファスの姿があった。

「やあ、遅くなってすまなかった」

ラムザが、手を挙げて遅刻を詫びる。といっても、出発時間の白羊^{アリエス}の刻までは、まだ余裕があるはずだった。

「妹が、なかなか離してくれなくて」

「大丈夫ですよ。われわれも、今しがた揃ったところですから」

サドランダ地方の莊園領主の息子で、ラムザとディリータとは同期生でもあるラッド・オールビーが答えている。

「イグーロス出身の者以外は、みんな兵舎泊まりでしたからね。のんびりさせてもらいましたよ」

「急な召集だったから、驚いたんじゃない？」

「いえ、城の警備で退屈していたところですから、みんな張り切ってますよ」

「それは、何よりだ」

構成員が勢揃いしたところで、北天騎士団の騎兵長、マック・アルマンが、改めて総帥の指令を言い渡す。

「諸君に当たってもらうのは、ドーター地区における諜報任務である。近頃、ドーターのスラム地区およびその周辺区域において、略奪行為を盛んにしている一集団の動向を探り、逐次情報をアラグアイ方面第八遊撃隊を率いるミランダ・フェッケラン隊長に報告してもらう。また、万一目標と遭遇した場合は、これを討伐することを許可する」

ここへきて初めて実戦を意識したように、一同の面が強張る。討伐を許可する——ということは、敵と命のやり取りをすることもあり得るのだ。全員、一通りの訓練を受けてきた者たちではあるが、実際に命をかけるとなると、そこではまた別の覚悟が必要となってくる。

そんな若者たちの中で、アルガス・サダルファスという男は、堅い表情の内にも、何かギラギラしたものを宿していた。

彼は、一歩前に進み出ると、マック騎兵長に相對して、

「ドーターでは骸旅団の首領、ウィーグラフ・フォルズを目撃情報があると聞いております。こちらについては、どのように対処すればよろしいでしょうか」

差し迫ってくるような眼をして、こう進言してくる異国の見習い騎士を、訝しむように見てから、マック騎兵長は全員に向かって言い渡す。

「確定情報ではないが……もし、彼の消息について何らかの手掛かり掴んだ場合は、速やかにフェッケラン隊長に報告するように。しかし、諸君の目標は、あくまでドーターに潜伏している不逞集団である。ウィーグラフは、君たちの手に負えるような相手ではない。くれぐれも深入りはせぬように。……以上だ」

諜報活動時の組分けなどを決める最終ミーティングを終え、イグロスの南門に向かう道中、ディリータは、それとなく最後尾に付いていくアルガスに歩調を合わせて、彼の胸中を問うた。

「どういうつもりだ？」

「何が？」

「ウィーグラフのことさ。僕たちのような半人前が関わっていい問題じゃないことは、お前にだって分かっているだろう？」

「ああ」

「もしかして、ウィーグラフの筋から、侯爵どのの情報を得ようとして？」

「それもあるが……」

アルガスは、半ば睨むようにして、ディリータの目を見る。

「……お前は、手柄が欲しいとは思わないのか？」

「手柄？」

「そうだ。お前については、ガリランドのアカデミーの連中から、色々聞いているぞ。……お前、平民出身なんだってな」

「……………」

ディリータは、感情を表に出さぬように、静かな黒い眼を、アルガスの褐色の瞳に向けていた。

やがて、ゆっくりと前を向き直ると、

「その通りだ。僕も、妹のティータも、生まれはガリオンヌ領内の貧しい農家だ。ベオルブ家の世話に与れたのは、父のわずかばかりの奉公に、先代のバルバネス公が、ご慈悲をもって報いてくださったおかげだ」

「ベオルブ家の一族だと言ったのは、そういうわけか」

「一族などと、言うつもりはない。どうあがいたって、僕も妹も、所詮は貧民の子。お前の言った通り、下人として仕えさせていたただくだけでも、喜ぶべきところだ。それをバルバネス公は、我が子同然に迎え入れてくださった。僕はラムザと机を並べて学び、同じ屋根の下で眠った」

「……それで、お前は どうするつもりなんだ？」

「どうするつもり、とは？」

「これから先のことだ。貴族には、平民どもを家畜ほども思っていない人間がたくさんいる。ベオルブ家の者がなんと云おうと、多くの人間は、お前とラムザを対等には扱ってくれないだろう。この

まま、末っ子でうだつのあがないラムザの下にくっついて生きていくのか、それとも、ラムザを利用して手柄をたて、自らのし上がっていくのか、ということだ」

齒に衣着せぬアルガスの物言いに、ディリータは閉口した。彼の目は、前を行くラムザの背を追っているようで、遙かその先を見据えているようでもあった。

黙りこくったまま、いつまでたっても答えないディリータに、アルガスが問い直そうとしたところへ、

「フ、……フフ」

ディリータは唇の端を歪めたかと思うと、

「ハハハハ！」

突然、大きな声で笑いだした。前に行く者たちが、いったい何事かと振り返り、アルガスもディリータの心境を測りかねて、

「おい、どうしたんだ？」

と、その正体を疑ったが、ディリータは尚も、くつくつと腹の中で笑っている。

「いや、なに、あんまり面白いことを訊かれたんでな」

「べつに、おかしいことを言っただけじゃないぞ！」

「すまない。自分からのしあがろうなんて、考えもしなかったことだ。……お前は凄いや」

「おれは、真剣な話をしているんだ」

アルガスは、神経質な眉尻をいっそうピリピリさせて、プイと、そっぽを向く。

「“家の名”の重みがない者には、分からないだろうな」

「どういうことだ？　今の身分では不満なのか？」

「平民と一緒にするな。おれは、歴史ある家の子だ。……サダルフアス家も、昔はベオルブ家みたいに、皆から尊敬される家柄だったんだ」

「昔は？」

「……そうさ。おれが生まれる前、祖父の代までは、サダルファス

家はエルムドア侯爵家随一の旗本として、三千騎を任されていたんだ。家柄の格としては、侯爵家にもけっして引けを取らなかった。

——それが、五十年戦争の時、？国の術中に嵌った祖父さんは、あろうことか、自分だけ助かるために味方を敵に売ったのさ」

「……………」

ディリータも、耳に覚えのある話であった。

五十年近く拮抗してきたゼラモニア※五十年戦争の主戦場。二百年以上にわたり？国の属州であったが、統治権を争う内紛に畏国が介入、宗主国たる？国と対立したことが五十年戦争（ゼラモニア戦役）の直接の契機となった。同、是領。における勢力図が、にわかに畏国側不利の形勢に塗り替えられてしまった原因のひとつとして、当時、是領南部に一大勢力を保持していた薔薇騎士団の内部分裂があったとされる。

薔薇騎士団は、エルムドア侯爵家の私設軍団で、侯爵家の親族のみで固められた精鋭部隊である。その歴々たる名家の中に、サダルファス家も名を連ねていた。

内部分裂というのは、どうやら、親族同士の内輪揉めに端を発するものであったらしい。それも、単なる見栄の張り合いであったようで、？国軍は、これを好機とばかりに餌を撒き、功を焦って突出してきたサダルファス家の軍団を難なく包囲、アルガスの祖父で、当主のアドルノ・サダルファスの身柄を拘束した。

ここからの話は、揣摩臆測を多分に含んでおり、未だ一致した見解を得られていないのであるが、一説に、アドルノは味方の救援を待たずに敵に恭順の意を告げ、自身の解放を要求したのを、末端の兵士が「サダルファス將軍は己の身かわいさに味方を売った」と曲解し、解放され自陣に帰還したアドルノを狂剣のもとに斃した、というのである。

事実関係はともかく、多くの者にはおよそこのように受け取られたとみえ、サダルファス家の名は失墜、所領の大半を没収されたあげく、薔薇騎士団からも除名されてしまう。

この事件を境に、親族間の不審感が高まり、結果として、薔薇騎士団の結束を弱めてしまったというのが、事のあらましである。

後年の史家の言説に、サダルファス家と主座を争っていたマーズ家の陰謀であるとするものもあるが、それも定かではない。

「父上の尽力のおかげで、おれもエルムドアさまの近習にお仕えるくらいまでにはなったが……それでも、かつてのサダルファス家の栄光を取り戻すためには、もっと名をあげ、父祖の汚名を濯がねばならない。エルムドアさまをお救いできずに故郷へ帰るようなことになれば、おれは、また自分だけ生き残ろうとした卑怯者だといわれ、後ろ指をさされることになる」

腹いせ紛れに、アルガスが、コーンと蹴っ飛ばした石ころが、数人の頭上を飛び越えて、ラムザと並んで先頭を歩いていたラッド・オールビーの後頭部に当たった。

「痛っ！」

石の当たったところをさすりながら、ラッドが振り返っても、アルガスは悪びれた様子もなく知らぬふりをしている。

「……そんな事情があったなんて知らなかったんだ。笑ったりしてすまなかったな」

ディリータの詫びに、アルガスはむつつりと黙って答えない。

ディリータは、ひとつ肩を上下させてから、足を速め、先頭のラムザに歩を並べる。すると、さきほどアルガスに石を当てられたラッドが、

「なあ、ディリータくん」

と、ディリータのもとへ言い寄ってくる。

「なんだい」

「あのよそ者は、なんでまた僕たちに付いてくるんだ？」

「ザルバッグ將軍の命令だ。しかたあるまい」

「だとしても、なんか、感じ悪いんだよなあ」

「そうか？」

「護送任務のときだって、助けてもらったのに、妙に態度が大きか

ったじゃないか？ そのうえ、あっさり人を殺しちゃうし……」

「実戦というものを、きちんとわきまえているんだろ」

「にしたって、もう少しうち解けようとはしないもんな。これから共に戦う仲間なんだしさ」

そこへ、ラムザが口をはさむ。

「物見遊山に行くわけじゃないんだ。それに彼だって、主君のエルムドア候をお救いしようと必死になっているんだろう。そういう覚悟は、僕たちも見習うべきだ」

ラムザの口からこう言われてしまうと、ラッドも口を噤まざるをえない。

ディリータは、その言いぶりにちよつと驚いたような目をして友の横顔を見ながら、

（へえ……こいつも言うようになったな）

などと、感心していた。

護送任務の時は、少し頼りなげに見えたその横顔が、ここへきて、急に逞しくなったように思えた。

幼い時分より、その温厚な性格をよく知るディリータも、友の中で、何かが急激に変化しつつあるのを感じていた。

「……？ ディリータ、僕の顔になんかついてる？」

「いや、なんでもないさ」

ディリータは慌てて目を反らす。

見上げれば、晴れわたった晩夏の空に、巨大な鷲が悠然と羽を広げている。

（のし上がる、か……）

ディリータ・ハイラルは、空の王の雄姿に、しばし見とれていた。

第一章 持たざる者 16. 革命の火

乾ききった砂を敷き詰めた大地が、延々と続く。

夜天の砂丘は星明かりに照らされて、表は白く、陰は暗い。その暗いほうを縫うようにして、荷を満載した二頭の黄チョコボが、砂塵を撒いてひた走っている。

騎手は二人。厚手の外套を着こんでいるのは、夏とはいえ夜は冷え込む砂漠を渡るうえでは必須の装備であった。

しばらくは一定の距離を保っていた二騎であるが、にわかに、後ろに付いていたチョコボが速度をあげて、前をゆくほうに並んだ。その騎手が、フードを少し持ち上げて、もう一騎のほうへぴったりと寄り添う。どうやら、言葉を交わそうとするものらしい。

「旦那、聴こえますか」

後ろを走っていたほうが、フードの陰に黄色い目を覗かせて言う。

彼は向かい風に、鼠色の長い顎髭を靡かせている。

「チョコボではあるまい。もっと大きい」

一方の男は、喉を潰したようなだみ声でこう呻く。

「臭いもしますな」

「面倒だな。相当速い」

そうこうしているうちに、二騎の後方から砂を蹴る爪音と、荒々しい鼻息とが、すではっきり聞こえてきている。

男が、肩越しに後ろを見やる。二騎とは、二十エータと隔てていまい。巨大な魔物の影が、双の白眼をギラつかせて猛然と差を縮めてきている。

身に迫りくる脅威を目にしても、男は大して驚きもせずに、視線を前に戻す。

「おそらくチョコボを狙っているのだろう。とっ捕まれば我らとて、骨も残されまいが」

「どういたします?」

「おっぱえ。ギユスタヴに”土産”を持ち帰らねばならん」

「ちと目立ちますがの」

「かまわん」

「そいなら……」

髭の男は、チョコボの背にくくりつけられている荷の中から拳大の玉を三つほど取り出すと、それにフツと息を吹きかけた。玉はにわかに白煙を上げ出して、香木を焦がしたような匂いが辺りに立ち込める。

魔物の影は、もうひとつ飛びで爪の届きそうな距離にまで近づいてきていた。彼は、その鼻づらめがけて、手に持った三つの玉を「えいっ」とばかりに投げつけた。

——カッ

まずは閃光がほとばしり、続いて耳をつんざくような爆音が炸裂する。

突如として発生した巨大な火球は、魔物の耳やら鬣たてがみやらを灼やいたが、それよりも魔物を驚かせたのは、音と光であつたらしい。

「グオオオオオオン！！！」

腹の底を震わせるような雄たけびをあげたかと思うと、瞬間的に視力を奪われた魔物は前後の足をもつれさせ、のけざまに一回転してから、あとはがむしゃらに、あさつてのほうへ逃げだしていた。

「やりましたぞ！ 旦那！」

白い煙と粉塵を残し、魔物が逃げ去って行ったのを確認すると、髭の男は高らかに喜声をあげた。もう一人の男も満足げに笑みを浮かべている。

「ベヒモスを退がらせるとは……こいつはいい土産になりそうだ」
ベヒモスは砂漠に棲息する魔物の中でも、ひととき凶暴なことで知られる。手だれの者でも、十人が束になってかからねば歯が立つまい。

そのベヒモスをあっけなく撃退した”爆弾”が、チョコボに載せられた荷物いっぱい詰められているのだった。

髭の男は、この異端の武器の扱いと製法に長けた異国の妖術師で、老ヤンと名乗っていた。

骸旅団の参謀ギスタヴ・マルゲリフの片腕、ゴラグロス・ラヴエインは、イグーロスでの仕事の最中に、遠くロマンダ大陸から海を渡ってきたという、この妖術使いの噂を聞きつけた。そして、城下の商業区で異国の装飾品を商っている老人こそが、その老ヤンである人づてに知り、自ら行って声をかけたのである。

ゴラグロスの必死の説得ののち、北天騎士団に売り込むつもりでいたというその爆弾を、骸旅団に提供してもらったこととなった。騎士団はそうした異端の技術を快く思っていないから、売り込みに行ったところで相手にしてもらえないだろう、と諭したのである。老ヤンは、

「それもそうか」

と、利益よりは、ギスタヴという男のほうに興味を抱いたらしく、ゴラグロスとともに骸旅団のアジトのひとつ、ここゼクラス砂漠にある”砂ネズミの穴ぐら”を目指して、こうしてやって来たのである。

目前に”爆弾”の威力を見せ付けられ、ゴラグロスは今、期待に胸を高鳴らせていた。

（これで侯爵の身代金が手に入れば……）

彼の仕事とは、イグーロス行政府に宛てた身代金要求の最終通告を高札に掲げてくることと、北天騎士団を率いるベオルブ家の館を偵察してくることであった。これらの仕事は、常に一步先の手を読んでいるギスタヴの指示に従ったまでのことであるが、”爆弾”の収穫は、自らの手柄として盟友に誇れるものと、彼は考えていた。先には、ガリランド都督の誘拐を成しえなかった身でもある。この収穫を、自らの失策の償いとするだけでなく、骸旅団再起の一助にしたいものと、ゴラグロスは望んでいるのであった。

やがて二騎は、岩場の中へ分け入っていく。

左右には巨大な岩壁がそそり立ち、その狭間を砂利を含んだ風が

唸りをあげて吹き抜けていく。

迷路のように入り組んだ岩石地帯をしばらく行くと、少し開けた場所に出る。周囲を岩山で囲われた空き地の真ん中に、半ば砂で埋もれた集落がある。

「あれだ」

ゴラグロスが老ヤンに告げる。

「ほお、こんなところに」

「数ある我らの根城の中でも、かなり大きなものだ」

「でしような」

かつては、このあたりの小部族が暮していたものらしい。集落の中ほどに古い井戸があり、まだ清水が湧いていた。

周囲の岩山には洞窟が穿たれ、ところどころに木の足場が組まれている。こういった施設は骸旅団があとからつけ足したものである。松明の灯火の影に、夜番の見張りの姿がうごめいていた。数こそ多くないが、弓弩を手にした見張りの目に油断はない。

ゴラグロスが片手をあげると、櫓上に立っていた見張りもそれに応える。集落の門がわずかに開かれ、二騎はその隙間を通り抜けていく。

ここで二人がチョコボを降りると、廃墟の一つから松明を手にしたモンク風の男が迎え出る。

「ご苦労様で！」

「おう」

ゴラグロスは外套に付いた砂埃をはたいてから、革袋に残っていた水をいっきに飲み干す。

「どうでしたか」

「うむ、イグーロスの役人どもは今ごろ顔を青くしていることだろう」

「そいつはよかった」

モンクの男は、ゴラグロスに伴われてきた人物に目をとめ、「そちらは」と問う。

「ん、妖術師老ヤンという者だ」

ヤンは軽く頷いて、

「よろしく」

とだけ言った。

「どういった御仁で？」

「妖しの術を心得ている商人だ。なに、おもしろそうなモノを作れるというから、取引に来てもらったまですよ」

「あ、ひよつとすると、先ほど西の方で怪しげな光が見えたと言張りの者が言っていたのは、その方の術だったのでは？」

「まあ、そんなところだ。……で、ギュスタヴは？」

「今、”あのお方”とお話しします。自分から報告しときますから、ゴラグロスさんは、ゆっくり休んどいてください。……妖術師さんも」

——”あのお方”とは。

集落の中でも、ひととき大きな建物——かつては部族の集会所か、礼拝堂であったのだろう——そこは、屈強な戦士たちによって周囲を物々しく警備されている。

その建物の地下の一室に、”あのお方”——今は囚われの身となったランベリー領主、メスドラーマ・エルムドア侯爵の姿があった。戦時には”銀髪鬼”の異名を馳せていた美丈夫も、長引く幽閉生活のうちに、今は見る影もなくやつれきっていた。

手足こそ自由を許されているものの、日も当たらず地下の小房は、けっして彼の身分に相応しいものではなかった。

部屋にあるものといえば、大小の木箱と棚、埃を被った長机に、彼が腰かけているような丸椅子くらいなものである。

他に都合の良い監禁場所がなかったというのもあるが、盗人同然に牢獄に繋がれるよりは、はるかに文明的な扱いであると——ふてぶてしくもそう言っただけなのは、彼の目の前に立っているギュス

タヴ・マルゲリフという男であった。

「イグーロスの政府に最終通告をいたしました」

無駄な挨拶などはせずに、こういきなり本題から入るのは、ギスタヴという男の流儀らしい。口調は淡々と事務的で、取りつく島もないが、必要最低限の礼節は欠いていない。

「七日以内に芳しい返答なき場合、お命を頂戴することになる」

「それで？」

メスドラーマは、未だ冴えを失っていない切れ長の眼をギスタヴの深い眼窩に向ける。睨みつけたのではない。醒めたような、どこか余裕すら感じさせる眼なのである。

「覚悟しておけ、とでも？」

「……………」

メスドラーマとて、決してギスタヴという男を軽んじているのではなかった。

彼自身に油断はあったにせよ、スウィージの森での襲撃時、ギスタヴは”銀髪鬼”メスドラーマ・エルムドアをして、かの名刀”正宗”を抜かしめる隙を与えなかった。

その見事なまでの手際に、メスドラーマは賊の手に絡め捕られるという屈辱を味わいながらも、正直に、

——おもしろい

と思った。彼の治下ランベリー領にまで、「骸旅団」の名は聴こえていた。なるほど、その規模だけでなく、ギスタヴのような人物を擁しているからして、凡百の盗賊団ではあるまい。

「……お心置きを」

それだけ言って立ち去ろうとするギスタヴに向けて、

「まあ、待たんか」

と、メスドラーマは彼の性急をたしなめた。

「何か？」

ギスタヴは怪訝な眉をする。メスドラーマは薄ら笑みを浮かべながら、

「ここに連れ込まれてから、ろくに言葉も交わしていないではないか。私とて、このまま黙って貴様らの剣下に首を晒すのも面白くないからな。かかる大事をしでかしたからには、貴様らにも相当の覚悟があることだろう。その心内を聞いてやるから、この際、貴賤の立場なく懷を割って語らおうではないか」

そういつて、机を挟んで彼の正面にある椅子を顎でしゃくるのであった。ギユスタヴは囚人めしうどからの意外な提案に去就を決めかねていたが、やがて、固い表情のまま椅子に就いた。

「よろしい」

メスドラーマの様子を見るに、この期に及んで命乞いをしようというのではないらしかった。彼は宵の酒席にでも臨むかのように、綽々としている。

「我がランベリー自慢の葡萄酒を振舞いたいところだが、あいにくこんな場所なのでな。いささか口寂しいが……君は酒を嗜むかね？」

「多少は。この頃は滅多に口にしていませんが」

「こんな状況ではな。君も一度、本物の味というものを知るといい。物の見方が変わる」

「……………」

「もっとも、今の君たちの手には届かぬであろうが、真の名品は、一国一城にも換えられる値打ちがある。本物とは、そういうものだ」「いつか拝んでみたいものですな」

「ハハハ、まさか君らとて、美酒美食のために金を得ようというのではあるまい。首尾よく私の身を売ったとして……いったい、いくらになる？」

「我らが要求した額は、総じて五千万ギル」

「ふむ、私の値打ちとはそんなものか。はたして、ガリオンヌのお歴々はその額を受け入れるかな？　？　国との戦で、どこの台所も大そう厳しいと聞く。むろん、我がランベリーとて例外ではないが」

「おそらく、彼らは要求を呑むものと思われます」

「そう思うか」

「必ず」

「もし呑まなかったら？」

「ですから、先ほど申し上げたとおり、お命を頂戴することになります」

「私を殺したとして、君たちに何の得がある？」

「金は手に入りませんが……あなたは領民からの信望も厚く、もし他領の地で領主が命を奪われるようなことになれば、民の怒りの矛先は当然、その為政者に向けられるものと思われます。我らはもとより無法者ですから、この責任は、すなわちガリオンヌの法を司るイグロス行政府と、治安を司る北天騎士団の負うところとなる。そうなれば、古くからランベリー領主とのよしみ深き南天公も、肩を持つ形で、北天公を大いに煽り立てることでしょう」

「南北両大公が王室の後見人の座を争っていることを、お前は知っているのか？」

「はい。今は互いに、敵味方を見極めているところかと思われます。あなたが前触れもなしにガリランドに向かっていたのも、ラーグ大公との会見の席に招かれていたからでしょう？　ラーグ公は来る決戦の時に備えて、今のうちにゴルダーナ公寄りのあなたを懐柔しておく腹だったのでしょうか、その目論見は、我らによってあえなく挫かれてしまった」

「いかにも、私はラーグ大公から、個人的な会談を申し込まれてれていた……が、こうなってしまうえば、彼らは多少無理をしてでも身代金を用意し、ランベリーに恩を売っておこうとするわけだな」

「ご明察です。エルムドア侯がガリオンヌ領内で命を落とすようなことになれば、ランベリー領を敵に回してしまうばかりでなく、南天公に格好の口実を作らせてしまう。南北の対立が表面化すれば、北天騎士団も、骸旅団などに構ってはいられなくなる。二大勢力が睨みあっているうちに、我らはじつくりと戦力を蓄えればよい」

「……お前は、全て計算していたと？」

「まさか。あなたは我らの目標リストには入っていないかった。スウ

イージの森で、よもやこんな大魚をすくい上げようとは思ひもしていなかった。我らの計画では、ガリランド都督あたりを拐かどわしておけば、イグロス行政府もそここの額をあっさり支払ってくれるだろうと踏んでいたのです。しかし作戦は失敗、スウィージの森に潜伏していたところへ、なんと一国の領主様が大した護衛も連れずにやってきた。おかげで随分と話がややこしくなってしまったが、結果としては、我らの有利に事が運んだわけです」

「なるほどな……」

メスドラーマは、値踏みするようにギスタヴの顔を見ていた。

彼の率いる薔薇騎士団にも兵法に明るい将は数多あるが、机上の兵談は得意でも、実際の戦場ではまるで役に立たぬ者ばかりであった。

比して、目前の、この狼のような男はどうか。

目的のためなら手段を選ばぬ。いかな汚い手を用いようとも、もっとも合理的な方法を編み出し、自らそれを実行する。

一軍の将たるべきは、本来こういう男なのではないか。彼の薔薇騎士団が往年の実力を失くしてしまったのも、将たちが各々自己の体面を引きずってばかりで、将として為すべきことを為さなかったからではないか。あるいは、将自ら手を汚さずとも、こういう役回りの者が傍らにあれば、軍隊はより有効に機能するはずである。

「フフ……」

省みて、その男に捕えられたのだという事実思い至り、メスドラーマは自嘲した。

しかし、こうしてギスタヴの脳内の版図を垣間見たからには、いま少し、彼の見識を検めてみたくなった。

「それで、身代金を得たとして、兵を調べて、そのあとは？」

「貴族議会と、あらためて対等な交渉の場を設けます」

「ちがう。もっと先のことだ」

「……は？」

「今の議会などをあてにしているのは、何も変わらんぞ。傾いた王政

を正し、自ら政を執るのか、さもなくば、王室を廃し、まったく新しい治世を築くのか」

臆面もないメスドラーマの物言いに、さすがのギユスタヴも狼狽の色をみせた。

「……侯爵どのお言葉とも思えませんな」

「真面目な話をしている。なに、かかる牢屋なれば、憚る耳目もあるまい」

「あいにく、そこまでの先見は持ち合わせておりませぬ」

「何も考えていない、というわけでもなからう」

「私に、天下を治める器量などはありません。今一人、その資格ありと見込んでいた男がおりましたが……今は袂を分っております。私は舞台を用意するのみ。あとは天命に従い、しかるべき役者が王道を歩むことでしょう」

「分をわきまえているということか」

「そのつもりです」

「ならば訊くが、今その王道を歩む者とは、誰と心得るか」

「私には、なんとも」

「ラーグ北天公か、ゴルダーナ南天公か。あるいは、天騎士バルバネスの子ダイスダーク・ベオルブか、雷神シドルファス・オルランドウか。それとも、草莽に伏す名もなき英雄か」

「人の身ではないかもしれせん」

「ほう、ならば聖アジヨラの再来を期するか、はたまた天上のオキユーリアに、再び人の世を託すのか」

「侯爵ご自身はどうなのです」

「私か？ 私も貴様と同様だ。その器ではない」

「そうですか」

「ハハハ、少し話が過ぎたようだな。もうよい、このあたりで終いでしょう」

「ですな」

ギユスタヴは、相変わらずその固い表情を崩さずに、席を立った。

「イグーロスからは良い返事を期待しているぞ」

「……………」

その言葉には応えずに、ギュスタヴは部屋をあとにした。彼が出て行ったあと、すぐに鉄の扉に門の掛けられる音がした。

狭い部屋を照らしているのは、机上に置かれた蝋燭の小さな灯だけであった。その薄明かりに、メスドラーマ・エルムドアの青白い面は、幽鬼のように浮かび上がっていた。

岩場に囲われた砂地に、真新しいチョコボの死骸が置かれている。その血の臭いに誘われて、蠶を黒く焦がした一頭のベヒモスが、岩のてっぺんにのっそり姿を現した。

腹を空かした魔獣は、涎を垂らしながらゆっくりと獲物に近付いていく。未知なる兵器の威力がよほどこたえたものか、用心深く周囲を窺いながら、ようやく、獲物に到達する。

——と、反対側の岩山の影で、何かがうごめく気配がして、同時に、香木を焦がしたような臭いが、辺りに立ち込める。

もともと知能の高いベヒモスは、その臭いだけで、瞬時にあの爆弾のことに思い至ったらしい。獲物を口にくわえて、すばやく身を翻そうとしたところへ、轟音とともに、大地がめくれ上がった。

——ゴオオオオオオン！！

砂と火と煙が入り混じり、間もなく、空き地はもとの静寂をとりもどす。

そこらに、大小の赤黒い肉の塊が転がっていた。巨大な猛獣の姿は跡型もなく、煙ったい空間に、肉の焦げる臭いと、火薬の臭いが充満している。

やがて、岩場の隙間から、松明を手にした人影がいくつか這い出てきた。

「すばらしい破壊力だ！」

爆弾が炸裂したあとの光景を目の当たりにしながら、こう感嘆の声

をあげたのは、ギユスタヴであった。彼の両隣りにあるのは、ゴラグロスと、妖術師老ヤンである。他の者は、音と光のすさまじさに腰を抜かしていた。

「これさえあれば、城攻めをするのに、もはやバリスタや投石機などとは用を為さなくなるというわけだな」

ゴラグロスも唸る。砂ネズミの穴ぐらへ向かう途中、彼が目にした、たった二、三個の爆弾の威力でも大したものであったが、それを今度には木樽いっぱい詰めて、地面に埋めておいたのである。あとは、導火縄に火打ちで点火すればよかった。

「どうやって作る？」

ギユスタヴが、傍らの老ヤンに訊く。老ヤンは応えて、

「材料だけならば、ボムの欠片と、黒灰石、それに硫黄があればよい。そこから火薬をうまく精製するには、ちょっとした秘術が必要ですが」

「ボムの欠片はともかく、黒灰石と硫黄の多く採れる場所は知っている。ガリオンヌの北方に、ジークデンという山がある。そこに、たしかうち捨てられた古い砦があったから、そこに人を遣ってさっそく作らせよう。ヤンどの、協力してくれるか？」

「もちろんですとも。資金とお時間さえいただければ、より強力な爆弾を作れるやもしれませぬ」

「金なら心配ない。時間はたっぷりあるから、明日にでもジークデンに向かってくれないか」

「承知いたしました」

ベヒモスの肉は、その日の夕餉となった。固くて臭みのある肉だが、今の彼らにしてみれば馳走にはちがいない。

久々の夜宴を横目に見ながら、ギユスタヴは爆弾を手弄いでいた。兵法家として、新たな材料を手に入れた男の脳内には、これを有効に用いるための戦術が、盛んに思い描かれているようであった。

ゴラグロスも、盟友のそんな様子を見るにつけ、髭面に満足げな笑みを浮かべていた。

翌早朝、老ヤンは数名の供を連れて、砂ネズミの穴ぐらを発った。それを見送りながら、ギユスタヴは独り物思いにふけていた。

——我は舞台を用意するのみ。

そう己の天分をわきまえながらも、彼の心に点いた革命の火は、容易に消えそうもなかった。

第一章 持たざる者 17. 白雪・上

イグーロスを発ってから五日あまり、ラムザ一行はスウィージの深い森に入っていた。

スウィージの森は、ガリオヌ領南部を東西に走るサドランダ街道の途中、魔法都市ガリランドからみれば東方に広がる大森林地帯である。

整備された街道を通っていけば、貿易都市ドーターの港口までは一日とかからない距離。が、この度は少しばかり事情がちがっていた。

街道が、森林を東西に分かつコロヌル川の渡しにぶち当たったところ。そこには本来、頑丈な石橋が架かっているはずであった。その石橋が、今は橋脚の石材だけを川面にのぞかせて、無惨に破壊されているのであった。

「修理中」

の立看板がみえるが、工事が行われている様子もない。

「どうしてこうなった？」

ラムザが、立看板の隣で暇をもて余している衛士に事情を聞けば、いわく、

「一月前のことさ。ガリランドで襲撃事件があったろう？　ここを通るキャラバン隊を足止めするために、骸旅団の工作員が橋をぶち壊したのさ」

思えば、ガリランド襲撃の際。北天騎士団の治安維持部隊を陽動するために、ギユスタヴ・マルゲリフ一派の工作員が、ここで破壊活動を行っていたのである。

それなりの規模の橋であったが、風水士の術をもってすれば、頑強な石材もたちまち風化させることができる。

このために、街道を利用するキャラバン隊や旅人は、川に沿って大きく北へ迂回するを余儀なくされていた。

「それにしても、まったく普請が進んでいないように見えるが？」
ディリータが、わずかに残った橋端部を見ながら言った。一月もあれば、仮の吊り橋くらいは架けられそうなものである。それが、工事の跡はおろか、作業に当たる人夫の姿もみえない。

「命令が下っていない」

と、衛士は説明する。

「普請を始めるには許可が要る。この橋の管轄はガリランドの都督府だが、普請の命令どころか、修繕の必要なしのご沙汰だ。……なあ？」

と、もう一人の仲間の方へ振り返る。こちらは、切り株に腰掛けて、ひとつ大あくびを呑んだところであった。

「ああ。俺たちはこの近くのコロヌルって村の自警団の者だが、北天騎士団から、ここで旅人の案内役をするよう仰せつかっているのさ。川を渡るんだったら、少し街道を戻った所にある枝道から北へ十キュータあまり行くと、やがて小さい吊り橋に出るから、そこを渡ってくれ。あと、魔物が出るから気をつけな」

そう言いながら、彼らが率先して道案内をする様子はない。二人の衛士の役割は、あくまで通行人に迂回路を教えるだけのことらしい。

ラムザは、ディリータに目配せして、肩をすくめた。

速い流れを泳いで渡るわけにもいかず、言われたとおり、一行は川岸から街道をニキュータほど戻った。そこから、整備された街道からすると、ほとんど獣道のような枝道に入った。

「どういうわけだ」

道を遮る柴草を剣で打ち払いながら、アルガスが愚痴をいう。

「侯爵どのお供してガリランドへ向かっていた時も、あの橋で足止めを食らったんだ。あれからだいぶ経つのに、まだ修理していないなんて」

ランベリー領主メスドラーマ・エルムドア侯爵を乗せた馬車が骸旅団の兇徒に襲われ、侯爵自身、誘拐の憂き目に遭ったのは、まさにこの森の中でのことであった。

その忌まわしい事件の当事者であるアルガスにとって、このスウィーヂの森は嫌な思い出の場所にはちがいなかった。

「それで周り道を強いられて……街道をそのまま行っていたら、賊に襲われることもなかったはずだ」

こういう時には、どうしようもない運命すら呪ってしまうのが、人間の性というものらしい。アルガスは、腹の底に溜まった鬱憤を吐き散らすように、通行の邪魔になっていない枝木までも、片っ端からぶった切っていた。

「おい、刃を痛めるぞ」

ディリータにそう言われてから、アルガスはやり場のない憤りを噛みしめるようにして、やっと剣を収めた。ディリータは、やれやれといった具合に、肩を落とす。

この日も、アルガスとディリータは隊のしんがり殿を歩いていた。二人がこの位置を任されたというよりは、ガリランドの士官学校仲間と微妙に距離を置くようにして歩いているアルガスが、隊から孤立してしまわぬよう、自然とディリータが付き添っている格好なのである。さらには、功を焦って、アルガスが先走った行動をとらぬとも限らないので、目を付けておこうというディリータの心づもりもあった。それからしばらくの間、二人は黙って歩いていたが、やがてディリータが口を開いた。

「おそらく橋を架け直さないのは、交通をなるべく不便にして、骸旅団の残党が領外に逃げにくくするためだろう」

アルガスはその推論を鼻で笑って、

「単に普請の金がないだけじゃないのか？」

にべもない物言いに、ディリータは眉を吊り上げた。

「まあ……それもあるかもな」

「だいたい、ちゃんとした道があったって、蛇の道に行くような連中だろう」

「まったくだ」

「が、どこへ逃げようと関係ない。一人残らず炙り出して、主君を

辱めた罰を与えるだけだ」

そういつて、アルガスは強く剣の柄を握りしめている。その所作を見ながら、

——面白い奴。

と、ディリータは思うのだった。

功だの何だのと言っておきながら、アルガスという男は、結局のところ純粹に、主君への忠誠心で動いているように見えた。少々感情的になりすぎるくらいはあるものの、それも、強い忠誠心の裏返しと見えなくもない。

（僕は、どうだろうか）

省みて、ディリータは自身の胸に問う。

己の主君とすべき人間は誰か。我が命を賭してまで、守るべき主君とは。

それは、ラムザ・ベオルブにはちがいがなかった。二人は義によって結ばれた兄弟であるが、同時に主従でもあった。

「あれの傍そばにあつて、支えてやってくれ」

亡きバルバネスにも、託された役目である。その役目を今日まで、忠実に果たしてきたという自負が、ディリータにはあった。ラムザが窮地に陥った際は、それこそアルガスのように、なりふり構わぬであろう自分の姿を容易に想像することができた。

一方で、ディリータ・ハイラルという人間には、もうひとつ大切なものがあつた。

他でもない、それは妹のティータであつた。

ラムザとは、義で繋がってはいても、血の繋がりはない。この世で、血を分けた肉親は、ティータを置いて他にないのだ。血の繋がりとというものは、人間としての役割以上に、特別なものである。早くに親を亡くしたディリータには、なおのことその思いが強い。

その意思を胸に確かめたところで、彼は懷のうちに、また、物質的な重みを感じてもいた。

（ティータ……）

それは五日前、イグーロスを発つ日の朝。

騎士としての初陣に臨む兄の袂に、ティータは、使い込まれて表面のてかった、牛革の鞘に収められた一振の短剣を寄せていたのである。

「これは……！」

長さにして握りこぶし三つ分ほどの刀身を両の掌に載せて、ディリータは、驚きと、さらに幾ばくかの懐かしさを込めた目で、この古い短剣を見つめていた。

「そう。私たちの、お父さんのものよ」

私たちの、お父さん――

ハイラル兄妹が父と仰ぐ人間は、二人ある。

一人は、身寄りのない幼い兄妹を引き取り、実の子らのように育ててくれた、今は亡き養父バルバネス・ベオルブ。

いま一人は、言わずもがな、先の大戦時、平民の義勇兵として骸騎士団に参加し、バルバネスの旗下にその命を散らした実父オルネス・ハイラル。

そしてこの短剣は、実父オルネスのものであった。

ティータが、「私たちの」といったのは、まさにその通りの意味であった。オルネスは、ハイラル兄妹だけの父親であり、ラムザや、アルマの父親ではない。

ティータに託された短剣は、ガリオンヌ北部の片田舎にある牛小屋よりも小さな生家とともに、父オルネスが我が子らに遺した物であった。

この短剣の存在だけは、ラムザもアルマも知らぬはず。ティータとディリータとのあいだに、密かに共有されていたものである。

べつに隠していた、というわけではない。ディリータは父の残した、この唯一の面影をなかなかに使え難く、なるべく人の目に触れぬよう、長い間仕舞っておいたに過ぎない。最近では思い出すことも少なくなっていたが、久々にこれを手にとってみると、さまざまに思い出やら感慨やらが、彼の中に湧きあがってくるのであった。

ティータはまだほんの赤子であったから、実父の顔や人となりなどは、ほとんど記憶にあるまい。かくいうディリータも、それほど数多くの思い出があるわけでもなかった。

ただ、おぼろげながらも、その大きな背中^{せな}と、朴訥とした人柄は、父オルネスを形作る像^{イメージ}として、今でも、たしかにディリータの脳内に張り付いている。

もう一人の父であるバルバネス・ベオルブの、超人的な武勇と、圧倒的なまでの存在感などとは比ぶべくもないが、一人の人間としては、オルネスは、はるかに自分に近い存在であると、ディリータには思えるのだった。

「見習いではなくて、騎士としての、初めてのお仕事でしょう？」
ティータは言った。騎士として、などというのはあくまで名目上のことにすぎないのだが、それでも、愛する妹の口から”騎士”と言われては、兄たる身として悪い気は起こらない。

「だから、お父さんに、護ってもらって」

ディリータは迷わず、父の形見を帯びてゆくことにした。

「必ず、帰ってくるよ」

ディリータは妹の肩を抱き寄せて、そう誓ったのだった。

初陣といっても、偵察任務や後方支援が主であるから、はたから見れば大げさな選別に見えるかもしれない。それでも、まだ若いディリータにとっては、一代の大仕事には違いなかった。また、

（あわよくば……）

とも、今のディリータは思っていた。

——手柄が欲しいとは思わないのか？

アルガスの言葉に、触発されたところも少なからずある。たとえばそれが、ディリータ自身のものとならずも、ラムザの名を上げるような勲功を立てることができれば、それは大いに後生の頼みとなることだろう。

立身出世などという考えは、まだ頭のないディリータではあるが、
——僕はどこまでやれるのか？

自身の可能性を、この機に試してみたいという気持ちも、あるにはある。

そんな思考に耽っているところへ、

「もし、仮にだぞ」

アルガスが、急に真剣な顔をして言う。

「何がだ？」

またこいつは、何を言い出すのかという期待半分に、ディリータは訊き返した。

「もし仮に、ウィーグラフの消息を掴んだら、どうすべきだと思う？」

「どうすべきって……」

なるほど、やはりアルガスという男は、偵察や後方支援だけで、安易に今回の任務を終えてしまうつもりはないらしい。

ディリータは、まさに自分と同じようなことを考えていたアルガスに親近感のようなものを覚えつつ、また同時に、つまらない冗談を言われたみたいに口元を歪めながら、

「とっつかまえて、主君を辱めた罰を与えるんじゃないのか？」

と、ついさっきアルガス自身が言った詞をそのまま借りて、皮肉めいた物言いを返した。

「真面目な話だ」

アルガスは、あからさまに気を悪くしたような眉を寄せた。

「そんな簡単に扱える相手ではないだろう」

「なんだ、分かっているじゃないか」

「しかし、報告するというだけではな……」

「下手に探りを入れたりして、警戒されたらどうするんだ。それどころか、反撃されて皆殺しにされるかもな」

「そんなに強いのか？ ウィーグラフという男は」

「とるに足らない人物なら、聖騎士ザルバグ・ベオルブが北天騎士団を総動員したりはしないさ」

「う、うむ……」

「だいたい、お前は知っているのか？ ウィーグラフの人相を」

「知るわけがないだろう。ラムザか、お前は、どうなんだ」

「僕は……」

当然、「知らぬ」と言うべきところを、何かつかかりを覚えて、ディリータはその言葉を呑みこんだ。

(……?)

——実に、奇妙な感覚であった。

知るはずのないものを、知っているとこの感覚。骸旅団の首領ウィーグラフ・フォルズと、その悪名は天下に轟いているといえど、一見習い騎士にすぎぬ自分やラムザなどに、そんな大物との接点があるはずもない。

「どうなんだ？」

ディリータがはっきり言わないので、アルガスが問い直すと、

「いや、知らん。たぶんラムザも」

と、ディリータは一応答えた。が、彼の心に引っかった何かは、容易に取れなかった。

「なんだ、誰も知らないんじゃないか」

アルガスは、さもつまらんとばかりに粗野な言葉を吐いた。ディリータは上の空で、この奇妙な感覚の正体を突きとめようとしていた。
(どこかで人相書を見たのか……?)

——いや、違う。

自分はたしかに、ウィーグラフに会っている。まさか、夢に見たというわけでもあるまい。それは砂粒のような記憶にすぎないが、おそらく、幼い頃の記憶だろう。

(いつ? どこで?)

ウィーグラフという男の、目と、眉を見、そして彼は自ら名乗った。が、その時と場所とを、ディリータはどうしても具体的に思い出すことができなかった。では、顔だけは鮮明に覚えているのかといわれると、そうではなかった。おそらく、実物と突き合わせれば、そうと判るかもしれない、という程度の記憶である。

（なぜだ？ どうして思い出せない？）

ひとつ、思い当たることがある。

彼の記憶に靄をかけているのは、ウィーグラフに会ったその時、どうも彼は、全く別な事象に気を取られていたらしいということである。

ウィーグラフという男の素性などは、その事象の前では些細な情報にすぎなかった。それは、何だ。

無心に、胸元に手を宛がったところで、

――あ、

ディリータは一条の光を見た気がした。宛がわれたその手は、皮の胸当ての向こう側に、父の形見の短剣を感じ取っていた。

確信が、はっきりとした形となる前に、騒々しい物音が彼の思考を遮った。

「なんだ!？」

それは何か、鳥獣の喚き声のように聴こえた。一同は、その場に踏み留まり、周囲に警戒を走らせた。先頭のラムザがさかさ手を挙げると、事前に示し合わせたとおりに、全員がそれぞれの得物を手にした。

物音は前方からする。思えば先刻、壊れた橋を守っていた衛士から、「魔物がでるから気をつけな」などという、甚だ無責任な忠告を頂いていたのではあった。

ラムザが前方を指差すと、一行はやや腰を下げるようにして、ゆっくりと前進を開始する。

街道の枝道のはずが、すでに道らしい道は姿を消していた。きちんと舗装されていないのはもちろんのこと、背の高い柴草やら木の枝やらが行く手を阻み、人が踏みならした跡らしい、かろうじて道と判る地べたも、太い木の根っこがあちこち顔を出しており、足元に注意を向けていないと、うっかり躓いてしまいそうなものである。道はやがて、木立のまばらな原っぱに入っていく。その少し手前で、ラムザは茂みの陰に身を屈めて、原っぱの様子を窺っている。

他の者たちもラムザに倣い、野草の合間から目を覗かせる。

彼らのすぐ目の前を、大きな生き物の影が横切っていった。巨大な趾^{あしゆび}を持ち、白っぽい羽毛に覆われた姿をみれば、すぐにチヨコボとわかる。独特の甲高い鳴声をさかんに発していたのは、どうもこのチヨコボらしかった。

チヨコボがこういう声を発するのは、身の危険を感じ取った時である。すなわち、周囲の木立から、この白羽チヨコボを追ってきたものらしい数匹の小鬼^{ゴリン}どもが、次々と姿を現した。

体長にして、人間の子どもくらいしかない小鬼どもは、それぞれが、小弓だの槍だの石斧だの、一丁前に武装している。群れのリーダーらしき者は、どこで拾ってきたものか、身の丈に合わぬ人間用の胸当てなど付けて、腰には小ぶりの角笛を提げ、額には、動物の頭蓋骨のようなものを被っている。

小鬼の頭領は、言語と聴こえなくもない喚き声を発して、子分に指示を出しているらしく、子分どもは、それなりに統制の取れた動きをみせて、あっという間に白羽を囲んでしまった。

そこへ、デイリータがラムザの隣に寄ってきて、

「どうやら小鬼の縄張りに踏み込んでしまったらしいな」

「そのようだ。それに、あのチヨコボ……」

「うむ、野生ではなさそうだな」

見れば、小鬼に囲まれている白羽チヨコボの背には、なかなか立派なものに見える鞍が置かれている。人間の足代わりとして、すっかり定着しているチヨコボとはいえ、野生のものまで背に鞍を置いているなどという道理はない。おそらくは、ごく最近まで誰かに飼われていたのが、主人の手を離れ、森に迷いこんでしまったものらしい。

「どうする？　ラムザ」

「助けよう」

「助けてどうするんだ」

「荷物運びにでも、なってもらうさ」

友の横顔を見るに、反論を挟む余地はなさそうだ。ラムザはすでに、弓使いのイザーク、カマール、イアンに指示を出している。

「あっ、あのチョコボ！」

と、アルガスが、ラムザとディリータの肩越しに顔を突き出した。

「どうした？ アルガス」

ラムザが訊くと、

「まちがいない。あの白羽、侯爵さまの、”白雪”だ！」

第一章 持たざる者 18. 白雪・下

アルガスいわく、”白雪”は、五十年戦争をエルムドア侯爵とともに戦い抜き、以来、どこへ行くにも連れて行かれるほど、寵愛されていたチョコボであった。一月前のガリランド訪問の際もお供に加えられ、スウィージの森で襲撃を受けた時に、はぐれたのだという。

「それから一月もの間、森の中で生き抜いていたというわけか」
ディリータが、感心したようにいった。

「傷を付けてくれるなよ」

アルガスが、ラムザに向かって言う。

「承知した」

ラムザは、頼もしげな笑みを浮かべて、弓使いの三人に目で合図を送った。

——ヒュンッ！

と、風を切る音がして、狙い澄まされた三本の矢は、一度に三匹の小鬼^{ゴブリン}を仕留めた。

「よし、行けっ！」

掛け声とともに、剣を抜いたラムザたち白兵部隊が飛び出していく。奇襲をうけて怯みをみせている小鬼どもに反撃の隙を与えず、見習い剣士たちは、鮮やかに小鬼の首や胴を払っていく。

白雪は、瞬時にラムザたちを味方と判断してか、すぐさま攻勢に転じ、

「クエッ！」

と一声、反撃の蹴りを小鬼の頭領に見舞っていた。一倍体の大きな頭領も、これにはたまらず吹き飛ばされ、地面の上を毬のように一つ二つ跳ね転ぶはめになった。

「さすがは、侯爵さまの愛鳥だ」

アルガスが白雪のほうへ駆け寄っていき、怪我がないか確かめる。

純白の羽毛のあちこちに枝葉がくっ付いていたり、土埃で汚れていたりはあるが、目立った傷はなさそうだ。

白雪に蹴り飛ばされた小鬼の頭領は、ガバと起き上がると、猪のように上を向いた鼻を荒げて、腰に提げた角笛を口元へもっていった。

——ブオオオオオオン……

角笛の音は、長く尾を曳いて、森に木霊す。

「なんだ!？」

他の小鬼との鬨いに気を取られていたラムザたちは、不意に鳴った音の出処へ注目した。

「仲間を呼んだのか!」

咄嗟に、イザークが放った一矢が喉元を射抜き、小鬼の頭領は角笛を咥えたまま倒れて、動かなくなった。

「こいつは面倒なことになったぞ」

目の前の小鬼を勢いよくなぎ倒してから、デイリータが言った。間もなく、周囲の森の中からただならぬ物音が聴こえてくる。

「多いな」

隊の中でも一番耳のよいカマールが言う。

「どうするんだ、隊長!」

白雪にくっ付いているアルガスが、ラムザに判断を仰ぐ。

ラムザは、周囲に意識を集中させていた。

「たぶん、もう囲まれている」

彼がそう言ったのとほぼ同時に、木立の一角から、先ほど倒された小鬼の頭領と似たような格好をした、やや身体の大い小鬼が現れた。右手に石斧、左手に大きな岩石のようなものを引きずっている。続けざまに、ざっと見ただけでも三十四匹はあろうかという数の小鬼が、あちこちから、わらわらと湧いて出てきた。中には、飼い慣らされたクアールの姿なども見える。

小鬼どもは、口々に何か罵りながら、手に手に持った得物を打ち鳴らしている。そうすることで、仲間を害した敵に対して、彼らな

りの義憤を表しているのらしい。

(どうしたものか……)

ラムザは、冷静に状況を見極めようとした。かくなる上は一点突破を図るしかないが、そのためにはまず、最適な箇所を突き崩すきっかけが必要であった。

そして、ふと目を遣った先に、アルガスと白雪の姿があった。

——よし、と心に決めてから、

「アルガス！」

ラムザは大声で呼ばわった。

アルガスは、隊長からの意外な指名に驚いて、

「な、なんだ？」

「一点突破を図る。先鋒を頼む！」

「俺が！？」

「そうだ！ 白雪に乗って、行けっ！」

「しかし……」

「ぐずぐずするなっ！ 行けっ！」

普段のラムザとも思えぬ気迫でこう言われると、

「わ、わかったよ」

さすがのアルガスも、素直にならざるを得ない。主の愛鳥に傷をつけることに懼れもあったのだろう。

とはいえ、ひらりと白雪に跨れば、彼も騎上の勇士であった。

「皆っ！ 俺に続けっ！」

気合い十分に、白刃を煌めかせて、一番手薄そうな処へ突っ込んでいく。小鬼どもは、あわててそちらに手を廻すも、”白雪”の猛進撃を前に、あっけなく蹴散らされていく。

そこへ出来た綻びに向かって、ラムザたちも、突破を試みる。行く手に塞がる小鬼の身体を剣で薙ぎ払いながら、必死に駆けていけば、思いの他あっさりと、全員が囲いを抜けることができた。

人間が相手ならば、こう簡単にはゆくまいが、兎も角も、若い戦士たちは木々の間を走り続けた。当然、小鬼どもは後から追っかけ

てくる。小鬼の短弓から放たれた小さい矢がときたま傍をかすめていくが、ろくに狙いを定めていないので、当たる様子もない。

すると、逃走する一行の頭上を、何かが、ポーンと飛び越えていき、先頭を走るアルガスの前に、それは、ボトツと落ちた。アルガスはかわし損ねて、咄嗟に手綱を引き、白雪を急停止させた。後から付いてきた者たちは、アルガスが立ち止まっているのを見て、何事かと、その場に足を留めた。

それは、小鬼の頭領が引きずっていた岩石のようなものだった。最初は黒い炭の塊のように見えたそれは、ボンッと爆ぜるようにひとつ黒煙を上げると、にわかには燃え盛る炎を纏ったのだ。そのまま、ふわりと宙に浮かびあがると、真っ赤な炎の面に、それと見て目や口と分かる破れ目が生じて、その隙間から、黒い炭の部分を覗かせるのだった。

「ボムか」

ディリータが、目の前に立ちふさがった異形の魔物を見て、その名を口走った。ボムは、古い世紀に人の手によって作り出された、生物兵器だという。それが、今や自律する魔物となって、方々で爆発による被害を出していた。

「下手に刺激するな!」

ラムザが注意を喚起しつつ様子を窺っていると、ボムは一段と炎の衣を燃え上がらせて、火の粉を撒き散らしながら、猛然と体当たりを仕掛けてきた。

「あぶないっ!」

見習い騎士たちは、すんでのところでそれを回避する。と、同時に、木の幹に体を思いきりぶつけた反動で、ボムが地面を転がっている隙をみて、

「今だ!」

とばかりに、再び駆けだした。間もなく態勢を立て直したボムも、再び宙に浮きあがり、追跡を開始する。

「もう少しで吊り橋に出るはずだ。そこまでがんばれ!」

ラムザがそう言って、皆を励ます。すぐ後ろには、地形の起伏に影響を受けない追跡者が、ぴったりとつけている。どのみち、この厄介な追手を上手く巻く方法を考えねばならなかった。至近距離で自爆でもされたら、ひとたまりもない。

やっと、前方に吊り橋が見えてくる。高さ十エータはあろうかという溪谷の上に、それは架けられていた。木製で、全長は五十エータほど。幅は、大人二人が並んで歩けるくらいにはあった。

まずは白雪に乗ったアルガスが、吊り橋を渡りきる。アルガスと白雪が渡る間じゅう、木の吊り橋はいやな軋みを立てていたが、今にも落ちてしまうという気配はなかった。

続いて、ラムザたちが吊り橋を渡り始める。

なおも、ボムはしつこく着いてくる。そのまた後ろには、小鬼の軍団が、まだ追いかけてきているはずだった。

ラムザは、橋を落としてしまおうかとも考えたが、それでは小鬼どもを巻くことはできても、謎の浮力で、宙に漂っているボムを出し抜くことはできない。

（さて、どうするか……）

と、思案しているところへ、見習い騎士の一人で、フィリップという者が、自分に任せてほしいと言ってきた。フィリップは、黒魔法の心得のある戦士であった。

「黒魔法でうまくやれそうなのか？」

「はい、ポポと協力して、なんとかしてみます」

ポポというのは、こちらは体術の秘伝を代々受け継いでいる名家の跡取りで、武器に頼らない武術を身につけている者である。

ラムザはフィリップの申し出を頼りとして、この場を二人に任せることにした。

橋を渡り終わると、ディリータが、

「どうするつもりだ」

と訊いてきたが、ラムザは、

「フィリップとポポに任せる」

とだけ言って、足を止めようとはしない。デイリータが走りながら背後を見やると、その二人が、橋を渡りきったところで、ボムを待ち構えていた。

「二人だけで大丈夫なのか？」

「ああ、僕は信じているよ」

万が一、二人がボムの排除に失敗した時のことを考え、ラムザたちはできるだけ距離を稼いでおく必要があった。フィリップとポポの足止めが上手くいっているのか、今のところボムが追ってくる様子はない。

さて、^{しんがり}殿を任された二人は――

まずフィリップが前に一步進み出、黒松の杖を構える。

「ポポ、いいね」

「おう」

あらかじめ手筈は整っているらしく、短いやりとりのあと、フィリップは魔法の詠唱を始める。ポポはその後ろで、精神を集中させる。

「岩砕き、骸崩す……」

ボムは、すでに橋の中ほどに迫っている。さっきよりも、一回り体の大きくなっているように見えるのは、気のせいではない。ボム類の一貫した特性として、ある程度の大きさに達すると、周囲のものを巻き込んで大爆発を起こす。それを知らぬフィリップでもあるまいが、詠唱の詞を聞けば、明らかに炎系のもの^{ファイブ}である。氷や水系ならば、ボムの纏う炎を弱める効果も期待できようが、炎をもってこれに当たれば、結果は推して知るべしである。この至近で自爆されたら、二人とも爆発から逃れることはできない。

彼岸には小鬼の軍団が続々と集まってきていて、我先に吊り橋を渡ろうと押し合い圧し合いしている。途中で群れに加わったものもあるらしく、黒い集団はさらに膨れあがっていた。

ボムは二人の目前で、体当たりを仕掛けようとするものか、ボンボンと弾みをつけている。

――そして、

グワツと跳びかかってきたところへ、

「……赤き炎となれ！ ファイア！」

フィリップの突き出した杖先から、紅蓮の炎がほとばしる。

もとより炎の弾丸と化しているボムに対しては、薪たきぎに松明を放るがごとく。全く効き目がないどころか、いよいよ炎の衣は厚みを増し、口と見える破れ目が無益な抵抗を嘲笑うかのように両側へ引き裂ける。

（きた……！）

フィリップは、ギリギリのタイミングで脇へさつと避けた。思ったとおり、ボムは膨張の臨界点に達しても直ぐには爆発せず、数秒間は点滅を繰り返している。

彼の背後に控えていたポポは、この時を待っていたとばかりに、重心を下半身に沈め、両脇を閉めて、深く息を吸い込み、

——破ッ！！

気合いとともに、渾身の横上段蹴りをボムの黒い破れ目部分に叩き込んだ。

慣性と抗力との、刹那のせめぎ合いは、やがて大きな反発力となって、明滅するボムの体を中空高く吹き飛ばした。

それが弧を描きながら、彼岸から此岸へ、溪谷の上空を越えてくるさまを、小鬼どもは呆然と見上げていた。そして、彼らが凄惨な結末を予感した時には、すでにボムの体は集団のど真ん中に着弾し、最期の閃光を発していた。

地を震わすような轟音が背後にしたところで、ラムザたちは同時に走ってきた方角を振り返った。

「しくじったか？」

ディリータが食いしばった歯の間からこう漏らすと、ラムザは息を切らしながら、

「いや……」

今しがた上がり出した黒煙を見つめる目は、二人の無事を確信しているようだった。

しばらくすると、ガサガサと草むらを掻き分ける音がして、そこから、フィリップとポポの顔が覗いた。

「やってくれたか！」

ラムザが真っ先に駆け寄り、アカデミーの級友たちは、喚声をあげて殿の二人を迎えた。

「ポポが決めてくれました。もう追ってくることはないはずです」
フィリップがそう言うと、

「なんの、フィリップくんの知識のおかげです」

ポポはあくまで譲って、フィリップの機転を褒めた。

魔獣学に精通しているフィリップは、知っていたのである。旧世紀において、ボムが兵器として活用されていた時代は、わざとこれを火中に投じて、点滅し始めたところを敵陣に投擲するという戦法が、しばしば採られていたということを。そして、ボム類の、この兵器としての特質が、ほとんどが野生化した今でも個体に残されているということ。

さらには、ボムの自爆攻撃がある程度は時限式であり、点滅を開始してから爆発するまでのおおよその時間までも、彼は心得ていた。殿二人の英雄的なまでの扱いを遠目に見て、白雪から降りたアルガスは、不満げに眉をしかめていた。

（どいつもこいつも……。血路を開いたのは、この俺じゃないか）
それが、ラムザに指示されての行動であったことや、彼自身というよりは、名鳥白雪の武威に頼るところ大であったことなどは、棚に上げているらしく。

遡れば、ことの発端であったはずの白雪はというと、彼女は我関せずともいうふうな、薄桃色の嘴を地面に突っ込んで、蚯蚓みみずを引っ張り出すのに余念がない。

「もとはといえば」

いつの間にやら、デイリータが白雪の横に立っており、その白く柔

らかい羽毛を撫でつけている。

「こいつを助けようって、ラムザが言いだしたんだけどな」

「ああ、おかげで、危ない目にあった」

アルガスは腕組みして、そばの木の幹に寄りかかる。デイリータは小首を傾げて、

「侯爵さまの愛鳥を助けなくてもよかったのか？」

「いや、それは……」

「侯爵さまをお救いするんだろう？ 幸先いいじゃないか」

「……なんとでも言えるさ」

そうは言ってみても、白雪がたくましくも生き延びていたという事実は、この上ない吉兆である——そう思えなくもないアルガスであった。

ただその心情を、人前で——なんとなく、鼻もちならない存在であるデイリータの前ではなおのこと——素直に表出できないのが、アルガスという人間の性質であった。

ドーターへの行程は、皮肉にもこの逃走劇のおかげで、一段と早まる結果となった。当初は森の中で一夜を明かす予定であったが、完全に危険が去ったわけでもなし、足を速めれば日没前には森を抜けられるものとして、ラムザは引き続き隊を率いていった。

ようやく、枝道がもとの街道に合流したところで。アルガスは、おそらく出発以来初めて、自らラムザの横に並び、言葉を交わした。「感謝する」

アルガスから、ぶっきらぼうにこう謝辞を述べられると、ラムザは返答に迷った。

「ええと……一隊を率いる者としては、軽率な判断だったかなと、反省しているところなんだけど。みんなを危ない目に遭わせてしまったし」

「いや、普通なら、無視していてもいいところだ。お前たちが協力してくれなかったら、白雪は小鬼どもの晩飯にされていた」

「あの様子では、君一人でも助け出すつもりだったんだろう？」

「当然だ。侯爵さまが、心底大事にしておられたチョコボだからな」

「だよ。どのみち、あの事態は避けられなかったようだ」

「まあ。でも、いい肩慣らしにはなったさ」

「そう言ってもらえるとありがたいよ」

二人は、どこかきこちなくも、笑みを交わした。

道中、白雪はアルガスの手に牽かれていった。鞍には、逃走中に足をくじいてしまったという、見習い騎士の一人で、ローラという者が乗っていた。

「すごい、ふかふかね！ このチョコボ」

騎上では、ローラが白雪の首に抱きつき、顔を埋めている。

「私、チョコボの臭いってどうも苦手なんだけど、このチョコボは、なんだかいい匂いな気がするわ」

「侯爵さまが愛をこめて、御自ら飼育してこられたからな。そこいらの野チョコボなどとは、わけが違う。血統も、純粋な白羽種だ」アルガスが、我が事のように物語る。

「本来ならば、お前のような者が跨るなど、許されぬところだ。気高き白雪姫に振り落とされないだけでも、ありがたいと思えよ」

「はいはい。……まあ、ほんとにいい子ね！」

ローラは、アルガスの言うことなどまるで意に介さず、絹のようにしとやかな羽毛に頬を擦りつけている。当の白雪は、まんざらでもない体で、嘴をツンと上に向けていた。

第一章 持たざる者ゝ19・花売り

季節は、まだ夏であつた。暦は変わり、処女月ヴァルグに入っていた。收穫リーフの月である天秤月にもなれば、ようやく冬の入口が見えてくる。

イヴァリースは、わりあい季節のはっきりした風土である。広い世界には、夏ばかりの国だとか、年中地面の凍っている国などがあるらしいが、そういった土地に比べれば、三方を海に囲われ、暖かく湿った海洋性の風が吹き渡るおかげで、極端に寒くも暑くもならないのがイヴァリース半島の気候であつた。

自然、人の住みやすい処へは、さまざまな人種が集まり、文明が起こり、国が生まれる。

畏国もそうだ。まだ十数もの王が並び立ち、互いに覇を競っていた遙かな時代より、言葉も宗教も違う人々が、大陸から海から、こぞつてこの土地を目指した。その結果、幾たびも衝突し、血で血を洗う戦争の歴史を繰り返してきた土地でもある。

そして今日も、たくさんの人間が、海を渡ってやってくる。

商人、雇われ戦士、異教の宣教師――

皆それぞれの目的を持って、この土地にやってくる。ことに近年では、戦の臭いを嗅ぎつけて、異国の言葉を操る怪しげな風体の武器商人やら、赤銅色の鎧のような肉体をテカらした南方出身の闘士やらの姿が、ここドーターの港にも目立つようになってきた。また、民の不安に付け込んで、いかがわしい辻説法を開く旅の坊主みたいなものもあつた。

「世はまさに、無窮の闇に覆われんとしております！」

何某の預言者だという、汚らしい法衣を纏った坊主の周りには、ちよつとした人ばかりができていた。人々は息を詰めて、その説法に聞き入っている。

「天魔は人心の暗がりにつけ込み、疑心を植え付け、やがて果てなき争いを引き起こすでしょう。天魔に心を許してはなりません！」

甘い吐息のような囁声が聴こえたら、念じるのです！　そして唱えなさい！　メイ・ファート！」

こう高らかに言い終ると、袈裟に提げた布袋の中に、布施が投げ込まれる。坊主は当然の報いのようにそれを受けながら、今度は一人一人の言葉に耳を傾けはじめる。

「……ばかばかしい」

そんな光景を遠目に見ながら、板張りの屋根の上に脚を投げだしている一人の騎士の姿があった。

放浪の騎士ウルフ——もとい、ベイオウーフ・カドモスは、梨の実にかぶりつきながら、巨大な幌を張った貿易船の往来に目を移す。荷や人を満載した船は、澄み切った青空のもと、ドーターの鉤状の湾を悠々と滑っている。栈橋は人でごった返し、人混みはベイオウーフのいる港町の入口付近まで続いている。

「さて、ついに海に出ちまったが、これからどうしたものか」

ベイオウーフがドーターに着いたのは、つい先日のことであった。レウスの山でミルウーダという骸旅団の女騎士に再会し、名残惜しい別れをしてから、彼は聖竜に所縁ありと伝わる古代の遺跡を探して、レウスと、それに連なる山々を七日あまり彷徨ったのである。ようやく、それらしいものを見出すも、さしたる収穫は得られず、落胆していたところへ、ミルウーダと、その連れの少女を襲った、あの山賊の一味に再び出食わし、その猛烈な復讐をかわして、命ながら山を下りてきたのであった。

そんなわけで、ドーターにこれといった宛てがあるわけでもなく、ここにこうして、無為に時間を費やしていたものである。

当面の目的を失ったベイオウーフの眼は、一段高い場所から。海を見、空を見、人を見、船を見——

変化に事欠かない国の玄関口であるが、さすがに半日も見ていると飽きがくる。その目はいつの間やら、人混みに紛れた花々を物色していた。

「おっ、」

一輪の花に目を留め、思わず彼は半身を前に乗り出していった。

小さな花束をいっぱい詰めたバスケットを腕に提げ、地味な色合いの上下に、薄汚れた白い前掛けといった姿。しかしその容貌は、明らかにその辺の野暮ったいのとは違っていた。

品性というか、それも宮殿の庭先にあるようなものではなく、路傍にひっそりと咲くような、そういった類のものである。

まだ十五、六といったところであろう。長い栗毛を結び、雪のように白い肌は、およそ町娘とも思えぬ無垢な美しさをみせていた。その姿は行き交う人々の間を縫い、港町の方へ抜けていく。

よっぽど声をかけようかとも思ったが、変に人目を引くのも憚られ、ベイオウーフは屋根の上から跳び降りると、見失わぬよう、ほどほどに距離を置きながら、花売りの少女の背を追った。

ドーターに花売りは多い。それも、うら若い乙女ばかりである。

まさか、花を売るだけで得られる利益などは、たかが知れている。つまりところ、彼女たちは花売りという身を借りて、己が春を鬻いでいるのである。

夕暮れ近くになると、花籠をぶら下げた少女が宿場街に繰り出し、道行く男たちの袖を引いて、「花はいかが？」という。心得ある男は、言い値の額を支払い、その花を買う。もちろんそれは、花一束どころの額ではない。男のほうはそれも了承済みで、この上辺の手続きのあと、連れだって、そこらの安宿や、人目のつかぬ路地裏の暗がりに入ってゆく。

こうしたやりとりが、ドーターだけでなく、主要な都市部の下町などでは、よく見られた。花売りの少女は、おおよそは戦災孤児か、貧しい農村から出稼ぎに来たような娘たちであった。戦争のあと、その数は増える一方で、行政の手にも負えない状況であった。

むろんベイオウーフも、花売りの実情はよく心得ていた。

しかし彼にも、一騎士としての矜持がある。

年端もゆかぬ乙女の純潔を金で買うような男も、また、そういう商いそのものの存在も、良しとはしていなかった。

彼は無類の好色ではあるが、女を金で買った例はない。これと見
定めた女には、敬意をもって、自らの言葉を捧げる。女の方から要
求されても、けっして金は支払わない。言葉と言葉のやり取りのみ
で、あとは惚れさせるにしても、体よくあしらわれるにしても、彼
は自分なりのやり方を曲げたことはない。

「待たれよ、そこをゆくお嬢さん」

混雑の途切れたあたりで、ベイオウーフは少女を呼びとめた。少女
は、ちらと後ろを振り返ったが、自分が呼ばれたとは思わなかった
のか、足を止めようとはしない。

「その、花籠を持った、君だよ！」

もう一声呼び掛けると、少女はようやく歩みを止めた。振り返って
ベイオウーフの姿を見とめると、彼女は、

「何か？」

と、短く応えた。

その瞳に射とめられて。ベイオウーフの心臓は、ひとつ、大きく
跳ね上がった。そして、

「なんと美しい……」

無意識に、こう言っていた。

「は？」

「いや、その、美しい花だね」

少女が警戒するように眉をひそめるので、ベイオウーフは、あわて
て訂正した。

「買ってくれるの？」

「いやっ、断じて、そんなつもりはない！」

当然、それを花売りの通例に則る口上として受け取った彼は、強く
否定した。けっして、汚らしい野心があって、声掛けした彼ではな
い。

「たった一ギルよ」

「な、なにっ!？」

が、こう返されると、彼は己の耳を疑った。この道の習いに従えば、

それは彼女の春をたった一ギルで買うことになる。どんな事情があるにせよ、そんな理不尽な商売が成り立ってよいはずがない。

「君は、普段からそんな額で売っているのか？」

「そうだけど」

「しかし、いくらなんでもそれじゃ……」

「だって、花束ひとつじゃない。こんなものでしょう？」

「え？」

その言葉を聞いて、ベイオウーフは思い直した。少女の言葉を聞く限り、どうやら、彼女は本来の意味で”花売り”をしているものらしい。

「じゃあ、君は、つまり、その……」

「あなたが何を欲しがっているのかは知らないけど、花を買ってくれないのなら、もう行ってくださる？」

少女は男の下心を見透かしたように、冷たい目をベイオウーフに投げかけると、さっさと行ってしまおうとする。

「待ちたまえ！」

ベイオウーフが、少女を引き留めようとして、急に腕を取ったので、「キャッ」と、彼女は小さく声をあげて、ベイオウーフの手を振りほどこうとする。

「あ、すまない」

あわてて手を離すと、少女は今度こそ警戒心を剥き出しにして、ベイオウーフの顔を睨め据えた。

「人を呼ぶわよ」

「誤解だっ！」

ベイオウーフは憤慨して、身の潔白を訴える。

「もういちど言うが、断じて、そんなつもりはない！」

彼は懷から小銭袋を取り出すと、その中から、一ギル硬貨を取り出して、少女に差し出す。

「ほら、これで、一ついただこう」

「……………」

少女は、なお疑り深く、差し出された硬貨と、ベイオウフの顔を交互に見やる。

「花束だけよ？」

「むろんだ」

少女はようやく、ベイオウフから硬貨を受け取ると、交換に、籠の花束を一つ、彼に手渡した。

「どうもありがとう」

少女は、機械的に礼を述べる。

「君……」

「まだ、何か？」

少女から買った花を見つめながら、ベイオウフは釈然としない表情を浮べている。

「失礼を承知で訊くが……君はどうして、花売りなんかをしているんだ？」

女性の身には、あまりに不躰な質問であつた。が、彼がどうしても分からないのは、巷で”花売り”という名の身売りが平然と行われている事実を知らながら、何故あえて、こんな商いをするのか。その上、これほどの美貌の持ち主なら、そういう商売をしている者と思われても、文句はいえまい。

野菜売りでも魚売りでも、女の身ひとつでやっていける商売はいくらでもある。生活の必需品でもない花などを売って、それだけで糊口をしのぎ得るとは考えにくい。

「どうして……」

少女は言い淀み、目を伏せる。

「花が、好きだから」

あまりに単純明快な理由に、ベイオウフは拍子抜けしたように、目を丸くする。

「花が……好きだから？」

「そう」

「それなら、自分で育てていればいいじゃないか」

「そうなんだけど、でも、この花はね、とっても珍しい花なの。私だけが知ってる、秘密の場所にしか咲かない花なの」

「これが……？」

ベイオウーフは、手に持った花をもう一度よく見てみた。白く小さな花弁には、まさに少女のような、ひかえめな美しさがある。かといって、草花には詳しくないベイオウーフにも、この花がさほど特別なものには思えなかった。その辺の野山にでも生えていそうな、ありふれたものにしか見えなかった。

「何という花なのだ」

「私は、ルマって呼んでいるわ」

「そんなに珍しい花なのか」

「そうよ。だから、たくさんの人を買ってもらって、世界中にルマの花を咲かせてほしいと思っているの」

そう言って微笑んだ少女の顔は、純粹に、輝いて見えた。それはたしかに、穢れなき処女おとめの笑顔であった。

「だから、大事にしてね。水をやらなくても、三日はもつわ」

「ああ、……」

「それじゃ」

去っていく花売りの少女の背を呆けたように見送りながら、ベイオウーフの網膜には、可憐な一輪の花の綻んだ絵が、いつまでも焼き付いて離れなかった。

「しまった、名を訊くのを忘れた」

しょんぼりと萎れて、ベイオウーフは来た道に戻っていく。少女から買ったルマの花は、彼のベルトに挟まれて、たおやかに揺れていた。

が、再会の機は、早くもその翌日、彼のもとへ訪れることとなった。

朝一番、下町の安宿を出たベイオウーフは、ドーターの朝市通り

をぶらぶら歩いていた。

そして、ふと目にした屋台の軒先に、見覚えのある栗毛と、白い頬があった。

「あっ、昨日の！」

草花には疎いが、ことこういう識別においては、彼の目は冴えている。急いで駆け寄るものの、その姿は、すぐに雑踏の中に紛れてしまった。

「どちらへ……」

爪先立ちに、彼は人混みの合間を探した。すると、今しがた、脇道に入っていく栗毛頭を目端に捉えた。

「あそこか」

人波を掻きわけ、彼は脇道の入口を目指す。やっと辿り着くと、彼は迷わず薄暗い路地に踏みこんでいく。

下町の路地裏は、迷路のように、土地勘のない者を惑わせる。途中、道端にうずくまっている乞食を踏みつけそうになったり、家々の裏庭の塀を乗り越えたりしながらも、彼は少女の残した芳香に導かれるようにして、淀みなく足を運んでゆく。

会ってどうするつもりもなかったが、この男は昨晚、少女から買った花を自らの体重で押し潰さぬように、枕元に置いて眠ったほどなのである。それだけに、ベイオウーフにとっては、忘れ得ぬ出会いであったに違いない。

「きゃああああ！！！」

かすかに、悲鳴と分かる声を聴いたのは、もう何度目かわからぬ角を曲がった時であった。

嫌な予感に胸を突かれ、ベイオウーフは声のした方へひた走っていく。

少し行ったところで、木造の家屋の間に引っ込むようにして、ひっそりと佇む小さな礼拝堂がある。

「やめてっ！　お願いだからっ！」

先ほどよりも、そうはつきりと聴こえた声は、半ばに開かれた礼拝

堂の扉の内から、外に漏れ出ていた。

「おのれっ」

ベイオウーフは、内部を検めるまでもなく、礼拝堂内に踏み込んだ。まず目に入っただのは、緑色の頭巾を被った数名の男たちの姿であった。その足元で、両の手に顔を埋めて、へたり込んでいるのは、かの花売りの少女であった。

状況判断などという辞句は引かれる余地もなく、ベイオウーフには、それが恐ろしい暴力の凶に見えていた。

「貴様らあああ！！！！」

血に任せて、ベイオウーフは鉄拳を振りかざしていた。「あっ！？」と、手前の男が振り向いたときには、その拳は、男の下あごにめり込んでいた。

「げあっ！！」

骨の碎ける鈍い音がして、男の体が、ふわりと宙に浮く。

刹那、時が止まったように、凍りつく面々と、雪のように舞い散る白い花卉。

そのまま、すさまじい物音をたてて、男の上半身は脆い板張りの壁に突っ込んだ。

「野郎っ！」

それを合図に、男たちは懷に収めてあった短剣を抜き払う。

「おう、どっからでもかかってこい！」

ベイオウーフも両手を構える。

「その腰のものは飾りかーっ！」

一人が、勢いよく突きだした短剣をギリギリでかわしつつ、ベイオウーフは男の腕をひっ掴むと、捻りざまに投げ飛ばした。男は床に落下して、不様に手足を伸ばしたまま気絶してしまった。

「ごろつき相手に、わが秘剣を抜くまでもないわ！」

ベイオウーフはボキボキと指を鳴らしながら、余裕の笑みを浮かべる。

「こいつ、なめやがって！」

続いて振り抜かれた白刃を後ろ跳びにやり過ぎ、反撃の拳を男の顔面にめり込ませる。

「ぐはっ」

たまらず、この男も床面を転がる。さらに二人が一度に飛びかかったが、これも唸る鉄拳を前に、あっさりと伸されてしまう。

あまりに一方的なやられっぷりに、さすがにこの闖入者の実力を思い知ったものか、

「おい、待て」

リーダーと思しき者が、まだ諦めつかずに噛みつかうとしている他の数人を押しとどめる。そして、ベイオウフのほうへ向かって黄色い歯を覗かせながら、

「どこのどいつか知らねえが、ムアンダ一味にたてつくたあ、いい度胸をしてやがるじゃねえか」

言葉だけで凄んでみせても、体の方が追っついていないのは目に見えて明らかである。他の者も退き際を察知したとみえ、そそくさとベイオウフの反撃を喰らって伸びている者たちを介抱しだした。

「ムアンダ？」

聞き覚えのない名を出されて、呆けたような顔をしているベイオウフを見て、

「狙った獲物は決して外さねえ”必中”のムアンダの名をご存じねえとな？」

リーダーらしき男は、こめかみに青筋を立てながらいう。

「知らんなあ。聞いたこともない」

「……まあいい。じきにその名を思い知ることになるだろうさ」
ペツと床に唾してから、「退くぞ！」と一声、男たちは荒々しい足どりで礼拝堂から出て行った。

「非道い連中だ」

男たちが去ったあとの床には、白い小さな花卉が散乱していた。花売りの少女は、へたり込んだまま、まだ啜り泣いている。

よく見ると、少女の膝元には床板が無く、そこだけ円状に地面が

むき出しになっている。そして、その地面を埋め尽くしているのは、昨日、ベイオウーフがこの少女から買った、あのルマの花であった。建物の中に花畑があるという光景自体驚くべきものだが、さらにこの花畑は、暖かい光の輪に包くまれているのである。不思議に思っ
て目を上げてみれば、礼拝堂の屋根には、ぽっかりと大きな穴が口を開けており、そこから、花々の上に燦々と陽光が降り注いでいるのであった。

「なるほど、君の言っていた”秘密の場所”とは、ここのことだったのだな」

その言葉を聴いて、少女は両手に埋めていた顔を上げ、ここで初めて、見覚えのある男の容貌を、その視界に収めていた。

「あ、あなたは……」

「先日はどうも。怪我は無いかい？」

こくりと頷いてから、少女が目をやった先には、無残に踏みにじられた花々があった。ベイオウーフもそれを目にして、痛々しげに眉を寄せた。

「いったいどういう連中なのだ。さっきの奴らは」

「ムアンダという男の一味よ。最近になってドーターの下町を仕切り出した、やくざものなの」

「なぜこんなことを」

「知らないわ。いきなり踏み込んできて、地代を払えって。それで、払えないのなら、その……」

「それ以上は言わなくていい」

「……………」

ベイオウーフの気遣いを受け入れて、そのまま言葉を吞んだ少女は、白い手の甲で涙を拭った。

「……ありがとう。助けてくれて」

「礼には及ばん。なに、たまたま通りかかったところで、悲鳴を聞いたものでな」

咳払いをして、実のところ彼がここまで少女の跡をつけてきたこと

などは、無かったことのように誤魔化した。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。おれの名はウルフ。さすらいの騎士だ」

「エアリスよ」

「エアリス、か。良い名だ。聞き慣れない名だが、生まれはこの辺りなのか？」

「よく覚えてないの。物心ついたときには、もうこの辺りの孤児仲間と一緒に暮らしていたわ」

「そうか。なんにしても、君の身体が無事でよかった」

「ええ。お花はこんなになっちゃったけど、ルマは強い花だから、きっと元通りになってくれるはずよ」

ようやく、エアリスと名のつた少女の面^{おもて}に笑顔が戻った。その可憐さに、ベイオウーフの目はまた、無意識のうちに惹きつけられていた。

——ふと、こちらに向けられた視線を感じ、彼は我に返って、緩んでいた頬を引き締めた。

礼拝堂の入口とは反対側に、もうひとつ、小さな勝手口がある。

そこに、いつの間にやら一人の男が佇んでいた。視線は、この男から発せられたものであった。

「あ、おじさん！」

エアリスがそう言ったのからして、その男とエアリスとは、既知の間柄にあるらしい。しかし、さすらい人の目にも、その男の姿はいかにも胡散臭く見えた。

歳は、ベイオウーフとさして変わるまい。かなりやつれており、髭なども伸びきっているせいか、実際の年齢よりかなり老けて見えるのかもしれない。

眼光ばかりがギラギラとしていて、全身に、ただならぬ雰囲気^{きふき}を纏っている。放浪のうちに多くの人物を見知ってきたベイオウーフにしてみても、

——油断ならぬ男

と、瞬時に思わせるほどの何かが、この長身の男からは感じられた。と同時に、その面影にどこか見覚えのあるような気もしたが、男の発する威圧感によって、この僅かな感覚もすぐに消し飛んでしまった。

「何者だ？」

男は、探るような視線をベイオウーフに向けたまま、エアリスに訊く。

「さっきムアンの手下が押しかけてきて、乱暴されそうになったのを、この人に助けてもらったの」

「……騎士か？」

男が言ったのを、こちらに訊いてきたものと受け取って、

「そうだ」

と、ベイオウーフは一言で答えた。

「北天騎士団か？」

「ちがう。放浪の騎士だ」

「……………」

男は、なおも疑り深い視線を向けてくる。そうしてしばらく男の目を見返しているうちに、ベイオウーフは無性に腹がたってきた。

だいたい、大の男がすぐ近くにありながら、なぜエアリスを助けに出てこなかったのか。あの騒ぎが聴こえなかったわけでもあるまいし——と、きわめて妥当な疑念が浮かんでくる。

そして、思ったとおりのことを問い正すと、男は目を反らして、

「すまなかった」

と、小声ながら素直に謝った。

「いいのよ。おじさんは怪我をしているんだし」

こうエアリスが擁護するのも、かえってベイオウーフの嫉妬心のよくなものと呼び覚ましたらしく、

「もし、おれがいなかったら、どうしたんだ」

などと、感情に任せて、恩着せがましいことを口にしていた。

「エアリスも稚児ではない。こういう場所で生きていくためには、

自分で自分の身を守る方法くらい、きちんと心得ていなくてはならん」

男のほうも、もっともらしい言い分を返す。

「あんなに大勢の男に、少女一人で立ち向かえらなくても思っているのか？」

「貴様は助けてやったつもりだろうが、奴らに因縁をつけられたら、困るのはエアリスのほうだ」

「なに……」

「一時でも手を差し出したからには、自分の行動に最後まで責任を持つのが道理というものだろう」

「……………」

今になって、のこのこ現れた得体の知れぬ男に諭されるのも癪だが、そう言われてみると、そうとしか思えないベイオウーフであった。

おそらく奴らは、今度はもっと大勢を引き連れて、ここにやってくるに違いない。現に自分は危害を加えてしまっているわけだし、その分、彼らの復讐も苛烈なものとなるだろう。

こうなっては、ベイオウーフとて引き下がってはいられなかった。

「いいだろう。この件に関しては、しっかりと、このおれが落とす前をつけてやる。剣に誓って、エアリスはこのおれが護ってみせる」

第一章 持たざる者 20. 記憶の糸

ドーターに到着してから一晩、宿で旅の疲れを癒し、翌日、ラムザたちはさっそく聞き込みを開始すべく、ドーターのスラム地区へ赴いた。

——ドーターのスラム地区およびその周辺区域において、略奪行為を盛んに行っている一集団の動向を探り、逐次情報をアラグアイ方面第八遊撃隊を率いるミランダ・フェツケラン隊長に報告せよ。

これが、彼らに与えられた任務であった。

貿易都市ドーターは、対外交易や海運業を生業とする商人の街である。

この街では、在ドーター執政官よりも、商人ギルドの総元締めとして絶大な発言力を有するヴァイス商会のほうが、実質的な権力を掌握している。また、富裕層は、そのほとんどが貿易海運業で財を成した商家であり、他の都市のような貴族階級の名家ではなかった。つまり貿易都市ドーターは、平民階級による自治支配を実現した数少ない都市の一つなのである。

——というと、少しばかり聞こえが良いが、実際には、他のどの都市よりも厳しい格差社会が、そこにはあった。

富は集まるところに集まるばかりで、競争に敗れた負け犬は、どこまでも負け犬という社会。しかも、他の都市にあるような、権力者による弱者の庇護なども、ここでは望めない。

生まれという超越不能な障壁は無いまでも、財力というものも、そう簡単に覆せるものではなく、そうした実情は、街全体の約七割をスラム地区が占めるというドーターの都市構造そのものがよく物語っている。

そしてスラム地区には、街の治安を守る衛兵団の目も届かない所が多く（そもそも彼らは商家の金で雇われた私兵である）、そうした場所は、略奪や人身売買といった犯罪の温床となっているという。

そんな中、近頃ドーターのスラムで勢力を伸ばしつつあるのが、
”ムアンダ一味”だという。

ムアンダという男は、先の大戦で功があったという傭兵崩れのご
ろつきで、彼に従う大勢の子分が、「地代」と称して、貧民たちか
ら金やら何やらを巻きあげているのだという。

「どうか、私がこの話をしたことは、ご内密に」

街の酒場で、ムアンダ一味についての情報を提供してくれた店の主
人は、ラムザに保身を訴えた。

「先日も、一味の機嫌を損ねた男が吊るし揚げられましたね……よ
そから来た者らしいのですが、奴らの恐ろしさを知らなかったの
でしょう。勇敢に立ち向かっておりましたが、数にはかないません
が。殺されはしなかったようですが、ひどいもんでしたよ」

「できれば、その男から詳しい話を聞きたい。彼は今どこに？」

ラムザが訊くと、店主はさらに声を潜めて、

「北天騎士団の方といっても、奴らにたてつくのはお勧めしませ
んがね」

「これが務めだ。居場所は分からないのか？」

「しかし、お若い騎士さんが、しかもそんな人数では」

「分からないのなら、他を当たるが」

「……………」

ラムザがまったく怖気づいた様子をみせないので、店主は感心した
ようにその柔和な面立ちを見ていた。

（どう見たって、よいとこのお坊ちゃんにしか見えんが）

彼らを頼りとしてよいものかどうか、値踏みしている様子であっ
た。

しかし、年老いた酒場の店主にも、この若者の眼差しに向こうに、
力強い意志のようなものが感じ取れた。それはたしかに、彼が普段
から接している人種には無いものであった。この辺りに住む人間は、
老いも若きも、皆一様に死んだような目をしているのだ。

やがて店主は、観念したように嘆息してから、話そうというそぶ

りをみせた。

「いくらだ」

ラムザの傍らに立っていたディリータが、最初にもそうしたように、情報料の硬貨を取り出そうとするのを、店主は手で押しとどめた。

「いや、けっこうですわい」

「いいのか？」

ラムザが、意外そうに言う。この街の住民は、嘘か真かも分からぬような些細な情報にも、いちいち金をせびってくるのだ。

「はい。ですから、この件はきつと、あなた様方にお頼みしますぞ」
「もちろんだ」

「では、紙などいただければ」

店主は、ラムザの差し出した羊皮紙の切れ端に、簡単な地図を書き記した。

「ここに行ってみてください。昔から、よからぬ者が集まる地域の一角ですわ。一味の者が自慢げに話しておったのを聞きましたのでな。たしかな情報ですわい。今はうち捨てられた古い礼拝堂がありますがな」

ラムザはそれを受け取り、

「協力に感謝する」

と札を述べ、酒場を出た。外では、アルガスや他の士官候補生たちが待っていた。

「何か掴めたのか？」

アルガスが問うと、ラムザは頷き、

「今からこの地図にある場所へ向かう。みんな、ついてきてくれ」
そういうと、路地を歩き始める。一行も、その背に続く。

ディリータはラムザに並んで歩きながら、

「どうするつもりだ」

と、友の横顔に訊いた。

「できれば、僕らの手で解決したい」

「任務は報告までだぞ」

「目標に遭遇した際の交戦は認められている」

「しかし、この人数では……」

「相手の勢力を把握したうえで、判断するさ。だが、僕は潰す気でいく」

「本気か？」

「めずらしく弱気じゃないか、ディリータ。君も見てきただろう？
このスラムの惨状を」

「……………」

「ほうってはおけない。それに、アラグアイの部隊に報告したとしても、彼らが協力してくれるとは思えない」

「たしかに、彼らはアラグアイの森に潜伏する骸旅団のゲリラにてこずっているというから、こちらにまで手を廻す余裕はないだろうな」

「だから、僕らだけでやる」

「そうか、わかった」

ディリータは、友の意志を確認し、それ以上は口出ししなかった。

ディリータとて、けっして弱気になっているわけではない。が、それ以上に、ラムザの変わりように少し戸惑っていてもいた。

（貧民の救世主にもなるつもりか？）

ラムザが積極的に功を上げようとしてくれることは、ディリータにとっても喜ばしいことではある。だがラムザの場合、それは明らかに彼自身のためではなく、虐げられた民のための行動であった。

救民の志士というのも、それはそれで良いのかもしれない。

そう思う一方で、ディリータは恐れてもいる。

ことによれば、ラムザは自身の名を汚してまで、民に尽くそうとするのではないか。ディリータは、ラムザの純心を良く知っている。それだけに、ラムザが、なんとなれば苦しむ民のために、平気でその身を捧げようとするのではないかと、そのことを恐れているのだ。
（やはり、こいつは父上の子だ）

先代バルバネスが、まさにそういう人であった。

バルバネスは、家門の繁栄を度外視してまで、民に尽くした英雄であつた。おかげで、ベオルブ家に対する民の信望は今も厚いが、引き換えに、他門との関係性をないがしろにしてしまったことで、ベオルブ家の政治的地位は、バルバネスの存命中に大きく揺らぐこととなつた。

その安定を取り戻そうと、当主ダイスダーグは必死にラーグ大公の信頼を得んとし、バルバネスの意見を聞かずに、中央と繋がり、強い名門貴族の息女、アリーシャを妻に娶つた。

反面、「先代様に比べ、ダイスダーグ様は徳の浅いお方」という民の声もしばしば耳にすることがある。

これを見ても、民の信頼と、政治的権力とを一手に握ることの困難が、良く分かる。

家名を取るか、民心をとるか――

この思想の相違が、ラムザとダイスダーグを対立させた背景にはあつたのかもしれない。

一方で、

（あるいは、ラムザなら――）
とも思うディリータであつた。

ラムザの振る舞いが、いつしか平民からも貴族からも、認められる時がくるかもしれない。

そのどちらでもない者として、ディリータは、今しばらく友の歩みを見守ることにした。

「ここか」

半刻あまり狭く入り組んだ路地を歩いて、ラムザたちは、ようやく酒場の店主の示した礼拝堂の建物に辿り着いた。

礼拝堂は相当に古いものらしく、外装の板張りはあちこち剥げ落ち、長らく手入れされていなかったのであろう門前は、雑草が伸び放題になっている。

「行こう」

ラムザが古びた両開きの扉を手で押す。嫌な軋みをたてて、扉は徐々に開いていく。

内部を見ると、そこには異様な光景が広がっていた。

「花畑……？」

アルガスが、啞然としている。

床板が剥がれて地面がむき出しになっているところに、白い小さな花が無数に敷き詰められている。そこらの床には、白い花卉が、さながら雪のように散らばっている。

「なんだか、不思議なところね」

工術士のリリアンが、ほっと息づく。なるほど、建物の中に花畑があって、屋根の破れ目からその上に燦々と陽光が注がれているさまは、ある種現実離れした神秘的な雰囲気醸し出している。

「誰かが世話しているのかしら……？」

白魔道士のローラが花畑の隅にしゃがみこんで、奇異の目で花々を観察しながら言った。

すると、

「うう……」

奥の方から、かすかな呻き声が聴こえる。皆、一斉に声のした方へ顔を向ける。

「誰かそこにいるのか？」

ラムザが問うと、礼拝堂に並ぶ長椅子の一つから、むくりと人影が起き上がるのが見えた。

「……何者だ」

人影が、警戒心を含んだ声を発する。

「北天騎士団だ。先日、ムアンダなる者の一味に私刑を受けたというのは、そこにいる者か」

「……………」

人影はおもむろに立ち上がると、屋根から差し込む光のもとに、その姿を晒し出した。

騎士らしき格好をした男は、片腕を布で釣っており、片足も引きずっている。顔には青黒い痣ができているが、その面立ちに、ラムザは見覚えがあった。

「あれ……あなたは」

「ん？ ……あ、お前は」

手傷いの騎士——ベイオウーフと、ラムザは互いを指さす。

「たしか……ウルフさんでしたか」

「そういう君は、ベオルブの御曹司！」

かれこれ、もう二か月以上前になる。

放浪の騎士ウルフとラムザは、マンダリアの丘で、あらぬ疑いから骸旅団の女騎士、ミルウーダの手に捕らわれたのであった。

状況が呑みこめずに戸惑っている周囲に向かって、ラムザは簡単に二人の出会った経緯を説明した。マンダリアでの事件について知っていたのは、ザルバッグの口から直接事件のことを聞き出していたディリータだけであった。

「本当に、世界は思いのほか狭いものらしい」

リリアンとローラに怪我の手当てをしてもらいながら、ベイオウーフは感慨深げに言う。

思えば、彼はレウスの山中でミルウーダとも再会している。

ベイオウーフがそのことについて触れると、ラムザはことのほか驚いた様子で、

「あの騎士は生きていますね！」

「ああ、彼女に会ったのはつい十日ほど前だ」

ラムザは、立場を異にする者と少しでも分け合いあえたあの瞬間を、今一度胸に思い描いていた。同時に、最期までミルウーダの事を想いながら死んでいった、騎士レッドのことも思い出された。

「そうか……彼女はまだ生きて……」

「で、骸旅団の女の命を助けた上に、逃がしたわけか」

その話を傍で聞いていたディリータが、鋭い指摘を入れる。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ おれは別に、骸旅団に肩入れしているわけではないぞ」

ウルフが両手を振って否定する。

「あの、じっとしていてくださる？」

足の傷に回復呪文をかけていたローラに注意されて、ベイオウーフは慌ててその場に居直る。

「なら、その女騎士の行方を教えてもらおうか」

「う、うむ……」

ディリータの理に押されて、ベイオウーフは黙りこむ。

「ディリータ、この件については、あとで詳しく聞くことにしよう」
「……………」

ラムザに言われて、ディリータは不満げに腕を組みながらも、さらに迫及しようとした口を噤んだ。

「……それで、どういうわけで、ムアンダという男を敵に回したんです？」

ラムザが問うと、ウルフは苦しげな表情を浮かべて、面を伏せた。

「全ては、このおれの責任なんだ」

過日、花売りの少女エアリスを少々荒っぽい方やり方で窮地から救ったベイオウーフであったが、あの後、一味の報復からエアリスの身を守るために、彼は用心棒としてエアリスの行く先々に同行することにした。

エアリスは、「そこまでしてもらわなくていい」と遠慮したが、「エアリスを護る」などと宣言してしまった以上、彼は彼なりに、行動で示そうと考えたのである。それに何より、彼は自分の腕に自信を持っていた。

——が、圧倒的多数を相手としては、ベイオウーフの秘剣も及ばなかった。

「ゆうに五十人はいただろう。しかも全員が完全武装ときたもんだ」
ドーターのスラム街で一番広い通りの真ん中で、ムアンダの手下どもは、ベイオウーフとエアリスの二人をすっかり囲んでいた。

むろん助太刀などとは無く、彼は孤軍奮闘したが、数の暴力に対しては、さすがのベイオウーフも防戦一方にならざるをえない。

どう見ても勝ち目のない戦いを見せつけられ、ついにはエアリス自ら、

「私が質になるから、どうかこの人の命はとらないで」と、申し出た。

「なにを馬鹿なことを！」

ベイオウーフはエアリスの無謀を咎めたが、彼女は聞く耳を持たない。

ムアンダ勢のほうも、なかなか屈服しない相手に焦っていたところであった。仇はもう十分に痛めつけたことだし、エアリスということの上ない戦利品を獲得したところで、彼らは意気揚々と引き揚げていった。

「おれが不甲斐ないばかりに……」

ベイオウーフは歯噛みして、拳を震わせている。その様を見て、ラムザたちも、やるかたない思いに目を伏せる。

結局、ベイオウーフひとりが立ちはだかったところで、寄る辺を持たぬ少女の、無力なことに変わりはない。彼らの魔手にかかった時点で、もはやどこにも逃れようはなかったのだ。

それが、このドーターという街の、理不尽な現実であった。

「……事情はよく分かりました」

長椅子に腰かけてベイオウーフの話を聞いていたラムザは、静かに立ち上がる。

「助けるつもりか？」

隣に座っていたディリータが、友の姿を見上げて言う。

「当然だ。それに、ムアンダには相当の報いを受けてもらうことになる」

毅然としたラムザの態度に、ベイオウーフもすがるような眼を向ける。

「本当か！ 協力してくれるか！」

「これが我らの務めです」

そして、仲間の顔を一通り見渡してから、

「みんなも、協力してくれるか」

若い隊長の意志を受け止め、全員が力強く頷く。

「隊長殿の、ご指示とあらば」

アルガスも、不敵な笑みを浮べつつ、乗り気をみせる。

——と、そこへ。

礼拝堂の扉が軋みを立てて開かれたかと思うと、外の光を背に受けて、一人の男の姿が、白い隙間に浮かび上がった。

一同、何事かと、そちらへ目を向ける。

「あ、貴様！」

すかさず、そう言ったのはベイオウーフである。男は無言のまま礼拝堂に踏み込むと、ラムザたちの前で足を止めた。

「こいつらはなんだ」

男が訊いたのに構わず、

「今までどこにいた！ エアリスがムアンダの一味に捕まったんだぞ！」

ベイオウーフが責めるように言い放つ。

「……エアリスが？」

「そうだ！ あれからお前は姿を見せないし、結局おれ一人で戦って、それで、エアリスは奴らの手に……」

「……………」

男は険しい表情をして、黙りこんでしまう。

その眼を、眉を。

ディリータはただ一人、愕然として瞳に映していた。

——この男は……！

スウィージの森で、アルガスからウィーグラフの人相について尋

ねられた時。彼は、知るはずのないウィーグラフという男の人相を、何故か知っている気がするという奇妙な感覚に襲われた。

——どうしてだ？

己の胸に問ううちに、彼は幼いころの記憶に行きついていた。

懐に収められた、父オルネスの形見の短剣。

そこから導き出されたのは、彼の生家のある、ガリオヌの農村の光景であった。

牛小屋よりも小さな家の前で、幼いディリータは呆然と立ち尽くしている。

彼の前には、背の高い騎士の姿がある。

騎士の身につけている鎧や、深緑のマントは、泥や黒い染みで汚れている。騎士はベルトから革の鞘に収められた短剣を引き抜くと、それをディリータに手渡した。

「騎士オルネスは、最期まで立派に戦った」

騎士は言う。

「オルネスは同志である私に、この短剣を託した。故郷に残してきた息子と娘に、きっと届けてくれるようにと」

幼いディリータは、父の短剣に眼を落したまま、微動だにしない。すると、家の内から、妹のティータが出てきて、

「ねえ、ねえ、このひと、だあれ？」

兄の服の裾を引っ張りながら、無邪気に問いかける。父の永遠に帰らぬことを理解するのには、彼女はまだ幼すぎた。

「お兄ちゃん……泣いてるの？」

いつしか、ディリータの頬には涙が伝っていた。

騎士はティータの頭をやさしく撫でてから、

「妹を、大切に」

それだけを言い残して、その姿は、索漠とした寒村の景色の内に消えていった――。

男はふと、ただならぬ視線を感じて、それが発せられている方へ顔を向けた。そこには、ディリータの顔があった。

「……？」

男もまた、不思議な感覚を覚えていた。

（この少年は……）

しばしの間、見つめ合う二人。二人の間には、かすかな記憶の糸によって結ばれた空間が、たしかに存在した。

「ディリータ、どうかしたか？」

友の異変に気付いたラムザが訊くと、

「いや……なんでもない」

ディリータは、どこか上の空で、そう答えた。

一方で、彼の中では、もやもやとしていた疑念の渦が、確かな形をとろうとしているのだった。

彼は無心のうちに、胸に手を宛がっていた。

――父の死を告げられた、あの日。

その衝撃のあまり、頭の隅に追いやられていた記憶。

あの時、騎士は確かに、こう名乗った。

「……ウィーグラフ・フォルズ」

小さく呟いたその声は、その場にいた誰の耳にも届くことは無かった。

第一章 持たざる者 21. 関門

夢を見ていた。

ミルウーダの故郷、王領ルザリアの南部にあるレダリア庄の懐かしく穏やかな風景だ。

——はたして、こんなにも美しい場所であったか。

今の彼女には遙かな異郷の地のようにも思え、そこには、もはや帰るべき家もない。それは、今や離れ離れとなり、お互い消息も知れない兄ウィーグラフにとっても同じことであろう。

村の門前には、見送りの住人たちが小さな人だかりを作っていた。見送られているのは、そう——兄のウィーグラフと、他に二、三人の村の若者であった。

平民の義勇軍、骸騎士団に志願することとなった彼らは、一丁前に鎧を着込んで、腰には、なかなか見栄えのする鉄製の長剣ロングソードまで提げている。

しかしそんないでたちも、村を見下ろす丘の上に建つ領主の館からは、具ぐさには見えないのであった。

ミルウーダは小さなバルコニーに立ち、兄たちの見送りの様子をじっと見つめていた。今すぐにでも兄のもとに駆け寄っていきたかったが、この時のミルウーダには、兄の肩を抱いて見送りのキスをするこすらす許されていなかった。

あの人だからの中には、父母の姿もあるはずだ。妹である自分も、これで最後となるやもしれぬ兄の雄姿を、この目に焼き付けておきたい——そう願っても、籠の中の小鳥に等しい彼女の身には、かなわぬ望みであった。

さりとて、戦地に赴く兄の無事を祈る彼女の思いまでもが、伝わらぬ距離ではないはずだ。

（兄さん、どうか生きて帰ってきて）

どれほど遠くにあっても、深い絆で結ばれた兄妹の心は、いつで

も互いに通じ合っている。

そう、今だって――

思い出とも幻想ともつかぬ夢はやがて途切れ、ミルウーダは静かに瞼を開く。まどろみの中で、現実が、ゆっくりと立ち上がって目の前に現れる。

そこは、ルザリアとガリオンスの領境に横たわる森の中であった。急ごしらえの雨よけの内から這い出ると、朝靄に包まれた小さな野営地に、他にも数個の寢床が設えてあるのが目に入る。見張りの者が、ミルウーダの姿をみとめて、軽く会釈する。

「おはよう」

と、ミルウーダは短くそれに応え、大きく伸びをする。

その姿も、今や骸旅団の剣士の装いではなく、長めのスカートに歩きやすい皮のブーツ、上は草木染めの麻布服に地味な色合いのスカーフを巻きつけている。どこをどう見ても、そこらの百姓娘か、市場の売り子にしか見えない。

それらは全て、半月もの間、ミルウーダとエマが身を寄せていた、ハマ一味の隠れ家で調べたものであった。

親分のハマと一味の指針について意見を違えたルーファスが、ハドムのアズバール伯を通じて隠れ家の所在を北天騎士団に密告したらしいということが分かってから、一味はやむなく旧採掘場にあった隠れ家を放棄することとなった。

では、どこへどう逃れるかという段になって。

「一味はいちど、解散することでしょう」

ハマは、これまで信じて疑わなかった同志の裏切りに打ちひしがれながらも、こう提案してきた。

逃げるにしても、一味の者全員が一緒に行動すれば嫌でも目立つから、一旦数人ずつに分かれて、所定の場所で再結集しようというのであった。ミルウーダも、彼の意見に賛成の意を示した。

ルーファスが出奔してからも、数名が、やはり密かに隠れ家を抜け出したらしいことが分かった。それでも、全体からすれば出奔者

はごく少数に止まったといえる。ミルウーダの声掛けが功を奏したわけだが、ひとまずは、現段階で残っている者は信用してよいと思われた。

一味は四、五人単位に分かれ、それぞれ行商人などに扮して、再結集地を目指し順次ハドムを発つ運びとなった。

再結集地をどこに定めるかについては少々意見が割れたが、ガリオンヌの南西に位置する蔓草砦を集合の地とすることで、最終的に一致をみた。そこは一時、レアノール野の決戦に敗れたミルウーダやギュスタヴたちが、落ち延びていた場所であった。絶対安全な隠れ家とはいえないものの、仮に北天騎士団に見つかったとしても、籠城してある程度持ちこたえられそうな基地は、ここより他にないというのが現状であった。

ガリオンヌ領内ではさらに北天騎士団の警戒も厳しくなるが、骸旅団の根拠地のほとんどは今もガリオンヌにあることだし、さらには、貿易都市ドーター周辺に旅団長ウィーグラフの消息ありとの未確認情報も、もたらされていたところである。

かつてほどの求心力は失くなったとはいえ、ウィーグラフ・フォルズここにありと聞けば、今でも馳せ参じる同志の数は決して少なくないだろう。再起の旗を掲げるのは、やはり彼の手にこそふさわしい。

今朝がた故郷の夢を見たのは、もしかすると吉兆かもしれない。そう思わずにはいられないミルウーダであった。

おそらく兄は、今も自由に身動きが取れないでいるのだろう。なんとしても、こちらの動きを伝えたいところであるが――

「あ、ミルウーダ。おはようございます」

間の抜けた声のしたほうへ目をやれば、エマが、今しがた寢床から抜け出てきたところであった。

「ああ、おはよう」

相変わらず緊張感の足りない連れに愛想をつかしつつ、ミルウーダはため息交じりに答えた。

エマも今は、ミルウーダと似たような格好をしている。どうしても人目につく尖がり帽子や長いローブといった黒魔道士の装束は我慢してもらおう他なく、これにはエマも渋々承知したのであった。

「うーん、いい朝だ」

ミルウーダと同じように、エマも小さな体を存分に引き伸ばしている。その姿を横目に見ながら、彼女の今後についても、そろそろ真剣に考えなくてはいけないなど、ミルウーダは内心で考えていた。ミルウーダは朝食の最中、エマの今後について、それとなく本人の意思を検めてみた。

「なにいつてるんですか！ 地獄の果てまで、お供しますよ」

「……………」

やはり、エマの考えは変わっていない。それどころか、以前にも増して、その従順ぶりを強めているように思える。

これから先の戦いは、より熾烈を極めることとなるだろう。はたして、年端もゆかぬ少女が、己の命の危険を、どの程度現実として受け止めているのか。

この場にいる者は皆、運命共同体である。死なばもろとも、という覚悟で動いている。

エマの存在が、その覚悟を鈍らせるということも考えられる。

そうなる前に、無理やりにでも、誰か信用に足る人物のもとに預ける必要がある。それは何より、エマ自身のためでもある。

しかし、その信用に足る人物というのが、すぐには浮かんでこないのであった。

同志ですら信用ならないということは、ミルウーダ自身、身をもって実感している。その上で赤の他人など、どうして信ずることができるのか。国家を敵に廻している身では、なおさらのことである。（では、誰に……）

ふと、彼女の脳裏に、いつしかマンダリアの丘で出会った、少年の顔が浮かび上がってきた。

「ラムザ……ベオルブ」

思わず口からこぼれ出たその名を、隣に座っていたエマが拾い聞きして、「え、何ですか？」と訊いてきた。

「いや、何でもない」

ミルウーダは慌てて誤魔化す。

「そうですか」

エマはとくに気に留める様子もなく、兎肉のスープをすすりだした。ミルウーダも、兵糧用の乾パンをひとつかじる。

——ラムザ・ベオルブ。ミルウーダたちが、最も憎むべき敵としている一族の子。

しかしあの時、彼は揃って討ち死にしようとしていたミルウーダたちを抑え、彼女たちを窮地から救い出すために、自ら人質となった。そして、見事に北天騎士団の包囲を解かせしめ、最後には、彼にとっても敵であるはずのミルウーダと、固く手を結びあった。

その手の感触から伝わる熱と、強い意志を秘めた碧い瞳を、ミルウーダは今なおはっきりと覚えている。そう、それはまさに、彼女の理想とする騎士^{ナイト}のような——

（何を馬鹿な）

そこまで思い至ってから、ミルウーダは頭^{かぶつ}を振る。ひよつとしたら、彼となら分かりあえるかも——という可能性の光明を、彼女はただちに揉み消していた。

（所詮は彼も貴族の子。奴らはいつも気まぐれで、私たちの生死を弄ぶ）

そう、あの時だって。彼は思いつきの偽善で、死にぞこないの鼠を逃がしてやったくらいにしか思っていないだろう。ああして善人ぶって民に媚を売る貴族が、もっともたちの悪い連中だと——兄もそう言っていたではないか。

乾パンの最後の一欠片を口に放り込むと、恨み言と一緒にそれを噛み砕いて、胃に収める。それから立ち上がって、

「出発だ。今日中には街道に出たい」

ミルウーダの号令を聞き、全員が各々の食事を片づけ、野営の後始

末を始める。

「あ……ちよつと待ってください」

残ったスープを慌てて掻き込んでいるエマを一瞥して、

「何をしている。早く支度を始めろ」

常よりも少しきつい口調で言い放つと、ミルウーダは行李のまとめにかかった。

ミルウーダ一行はそのまま森を南下していき、日が西に傾き始めたところで、ようやく街道に出た。街道を西に行けば、その先に領境の交通を監視する北天騎士団の関門がある。

山肌に小規模な砦を構える関門には平時より多数の衛士が詰めているが、骸旅団殲滅作戦に北天騎士団がその全戦力を注いでいる今、それを越える人員が配置されているであろうことは容易に想像できる。

ここを避けて通るには険しい山越えをせねばならず、現在のミルウーダたちの装備では現実的な選択肢とはいえなかった。

そもそものが、この関所をどう越えるかに重点を置いた装いである。要は、旅の商人一行に扮して衛士の目をやり過ごそうという、きわめて単純明快な作戦であった。検視の目は厳しかろうが、こうするより他にガリオンヌへ出る道はないというのもまた、現実である。

「うまくいきますかね……」

エマが不安げな声を洩らすのを、ミルウーダは意に介さず聞き流していた。

「お前が余計なことを言わなければな」

そう毒づいてみせることで、彼女自身、きっと上手くいくと、自らに言い聞かせているようでもあった。

あからさまにお荷物扱いされたエマは、ムツと頬を膨らませて、「わかってますよ！ おとなしくしてればいいんでしょう？」

そう返して、傍らを歩くミルウーダの横顔から目を反らした。そん

な常からのやり取りでさえ、今のミルウーダには小さな励ましに思えた。

（さて、ほんとうに上手くゆけばよいが……）

実際のところ、苦し紛れの策であることは重々承知していた。北天騎士団はもはや、「怪しきは罰せよ」という態勢で動いている。最悪、身の潔白が証明されるまで拘束されるということもあり得る。しかし、兄ウィーグラフとの合流という大目的を果たすまで、ここで歩みを止めるわけにはいかない。

遠目に、関門の上にそびえる砦の石壁が見えてきた。辺りはすっかり夜の闇に包まれているが、そこだけは大量の篝火に照らし出されて、黒い山肌にぼんやりとほの赤く浮かび上がっていた。

「夜中を通るのは怪しまれる。ここで夜を明かすぞ」

ミルウーダの指図通り、一行の者はその場で木に寄りかかってつかのまの眠りに就き、翌早朝、さっそく関門に向けて歩き始めた。

果たして、関門を守っていたのは、騎士アルマルク率いる部隊であった。

先日まで魔法都市ガリランドの治安維持部隊を任されていた彼であったが、スウィージの森でエルムドア侯爵が誘拐されたことに痛く責任を感じ、まっさきに搜索任務に名乗り出たのであった。しかし、一向に成果を上げられず、間もなくガリオンヌールザリア領境の関門守備に補され、泣く泣くこの任に就いたところであった。

ガリランド襲撃事件の際も後手後手に回ってしまったこともあり、ここへきて、アルマルクはめっきり落ち込んでいた。

かといって、仕事の手を緩めるほど、歴戦の兵は甘くはなかった。あわよくばこの地で大きな首級をあげてみせんと、かえってその眼は炯炯としていた。

部下へも、

「関門を通る者は全て私自ら検分する。勝手に通すことはまかりな

らん」

と厳命し、朝から晩まで、ひっきりなしに連れてこられる通行人を一人一人尋問し、少しでも素性の怪しい者は、素っ裸にして徹底的に調べ上げた。

そしてアルマルクのもとへも、ハドムのハマ一味の情報は届いていた。さらには、その一味の中に骸旅団の主要メンバーが含まれているらしいということも伝わっており、

「あるいは、ガリオンヌの勢力と合流するために、ここを通ることもあるやもしれん」

こう予測した彼は、いよいよ警戒を厳にしていた。

今日もまた、朝一番、検問所となっている砦の一室に座し、今日最初の通行人が連れてこられるのを待ち構えていた。

さっそく、衛士の一人が、

「商人の一行が通行許可を求めています」

と報告してきた。

「よし、通せ」

というと、間もなく四、五名の旅商らしき姿の者たちが連れてこられた。ざっと面子を極めてから、

「代表のもの、前へ」

と彼が指示すると、思いのほか、若い女が前に進み出て、自分が代表だと名乗った。

アルマルクは、しばらくの間、じつとその女の面を観察していた。その場にいた他の衛士も、アルマルクとは違った好奇の目で、女の顔を見ていた。

装いこそ、ありふれた市井の娘のそれであったが、誰の目にも、女の器量の際だって良いことがわかった。男ならば、一目見て、胸を高鳴らせざるをえないほどの魅力が、確かにその女には備わっていた。

惜しむらくは、その長い栗毛はほとんど手入れされておらず、白い肌も、旅の垢ですっかり汚れていた。が、かえってそのことが、

男たちの中に潜む奇妙な嗜好を刺激する向きすらあった。

生来の堅物であるアルマルクにも、女の容姿には、正直に目を惹かれるものがあつたが、けっして心まで奪われるようなことはなかった。その観察眼は、よこしまな下心をひた隠しにしている部下たちとは違つた部分を見ていた。

しばしの観察の結果、

（この女はただものではあるまい）

彼の直感には、こう告げていた。その上で、あくまで事務的に、まずは女の名を問う。

「名は？」

「ルザリア領コルムのミーラ・カナイと申します」

もちろん、一行の者以外に、ミルウーダ・フォルズという彼女の本当の名を知る者はいない。アルマルクはさして関心を払わずに、訊くべきことを淡々と尋ねていく。嘘であれば、このような情報は何の意味も為さない。

「用向きは？」

「毛皮と織物を少々、ガリオンヌの問屋商に卸おろしに参りに」

「公認の通行証はあるか？」

「ここに」

ミルウーダから差し出された領主発行の通行許可証を受け取ると、アルマルクはざっとそれに目を通す。偽装の跡のないことを確かめてから、ミルウーダの手に戻す。

ここまで聞けば、とりあえず旅の商人として疑いの余地はない。

一方、アルマルクの方は、一層ミルウーダへの疑念を深めていた。

そこらの街娘らしからぬ美貌はさておき、その眼つきからして、まず隙がない。いふなれば、鍛えられた剣士のそれだ。商人特有の愛想良さのようなものは、微塵も感じられない。あきんど

衣装を変えてみても、人間に染みついた癖というものは、なかなか誤魔化せるものではない。並の人間ならばともかく、それなりの場数を踏んできたという自負のある戦士には、そういった戦

士にしか分からぬ”臭い”とでもいうべきものがある。目の前の女は、まさにその”臭い”を発していた。

無論、彼女が偽装しているということを裏付ける客観的な事実があるわけではない。以上のものは、アルマルクが経験で培った勘にすぎない。

「……ふうむ」

アルマルクは指で硬貨を弄びながら、どうしたものかと、思索に暮れていた。その時、荷物を調べていた衛士が戻ってきて、

「怪しい物は、これといって見当たりませんでした」

と報告した。アルマルクは頷いただけで何も答えず、なおも考えに耽っている。

検問所内にいる他の衛士は、彼女たちを”徹底的に”調べよという指示が出されることを、密かに期待しているようであった。ミルウーダは、自身の体験から、検問所内に立ち込める淫靡な雰囲気や、敏感に感じ取ったものか、ややいら立ちを露わにして、

「これで、もう通していただけますか？」

先ほどから何の沙汰もよこさないアルマルクに向かって、問いただした。

「そういえば、前にも、こんなことがあったな」

「は？」

「いや、こっちの話さ」

過日、アルマルクが失踪したキャラバン隊の捜査に当たっていた中、コロナルという村で骸旅団の一団を捕えて尋問した時のことを思い出して言ったのである。その時捕えられたのが、ミルウーダのかつての同志、レッド・アルジールであったことなど、今の彼女は知る由もない。

戸惑いの色を浮べるミルウーダの顔を見ながら、アルマルクは、ひととき高く、弄んでいた硬貨を弾きあげた。その場にいる誰もが、無心に、宙を舞う硬貨の方へ惹きつけられる。

「！」

次の一瞬の一部始終を、意識が散漫していた者たちは、すっかり見逃していた。見れば、ミルウーダが片手を顔の前で握りしめており、ほぼ同時に、アルマルクは先ほど弾き上げていた硬貨を右手で掴み取っていた。

「おみごと」

ミルウーダの手にも、いつの間にか硬貨が握られていた。アルマルクは右手で一枚の硬貨を弾き上げている最中に、左手で、もう一枚の硬貨をミルウーダ目がけて打ち放っていたのである。ミルウーダは迫りくる物体を視認するまでもなく、反射的に硬貨を掴み取っていたのだ。

この早業には、周囲の衛士だけでなく、エマたち一行の者もまた、舌を巻いた。と、同時に、この若い娘がただの商人ではないということが、誰の目にも明らかとなってしまった。偶然にしても、手際が良すぎる。

ミルウーダは、反射的に手を出してしまった自身の愚かしさを噛みしめるようにして、アルマルクの顔に鋭い視線を注いでいた。

その様子を見て、

「こ、硬貨の扱いには慣れているんです！」

エマが苦し紛れを言ったが、誰も耳を貸そうとはしなかった。衛士たち全員が、呆然とアルマルクの方を向き、無言で処断を仰いでいる。

「そっちは君にやろう」

アルマルクは口元に苦笑を浮べつつ、硬貨を懐に収める。ミルウーダは、アルマルクの顔を睨めつけながら、硬貨を強く握りしめていたが、つとめて平静を保とうとしていた。

「何か、問題でも？」

「いやなに、物騒な世の中だからな。商人にだって、それなりの心得はあって当然だろう」

「……………」

「構わん、通ってよし」

アルマルクの言葉に、衛士たちは我が耳を疑った。

「よろしいのですか!？」

「ああ、通行証もあるし、特に咎めるべきところはない。……君は良い剣士になれそうだ」

アルマルクは、そう言ってミルウーダに微笑みかけた。含みのある言葉に何事かを読み取ったらしい衛士たちは、互いに目配せしてから、ミルウーダたちに退出を促した。ミルウーダはアルマルクに向かって軽く会釈してから、衛士の誘導に従い、検問所から出て行った。

一行が退出してから、アルマルクはさっそく衛士の一人を手招きした。

「草を遣って、後をつけさせろ」

衛士の方に顔を寄せ、小声でアルマルクがいう。

「は、……」

「大物かもしれん」

「……しかし、この場で捕えなくてもよろしいので？」

「ああ。大物は、大物を引き寄せる。しばらく泳がせてみて、他の大物の尻尾も掴めたところで、まとめてしょっぴく」

「……なるほど。ただちに草を呼びます」

「頼む」

衛士が出て行ってから、すぐに次の一行が検問所に招き入れられた。

アルマルクは検問に当たりながらも、先ほどまでには無かった確かな手応えを感じていた。

(今度こそ、”当たり”かもな)

彼の表情は、近頃すっかり失調していた自信を取り戻しつつあった。

第一章 持たざる者 22. 闘技場

巷に傭兵と呼ばれる戦士たちが、畏？大戦後どうやって暮らしているのかといえ、騎士団に取り立てられて碌を食めるようになった者などは、かなり幸運な部類の人間であった。そこから外れた大多数にしても、まっとうな者は、商人に身をやつ賣して日々の糧を得たり、寒村の自警団職に収まったりしていた。

が、大抵の者は、そう上手くはいかなかったということが、ドーターの街の実情だけ見てもよくわかる。

ムアンダ一味なる不逞の衆がドーターの下街を荒らしだしたのは、世に”河原の口約束”などと揶揄される「アロー河の講和条約」が成り、実質的な畏国の敗退という形で、バルバネス・ベオルブ將軍率いる北天騎士団の大軍団が是領より故国凱旋を果たした後の事である。

依然アロー河の西岸一帯に軍を留めている南天騎士団につき従う兵たちは別として、北天騎士団の戦力に加えられていた「骸騎士団」を含む平民の義勇兵は、帰国後、満足な恩賞も与えられず、その多くは職も失い、路頭に迷うこととなった。

政府の救済措置も功を奏さず、半ば自暴自棄となった彼らは、あるいはウィーグラフ・フォルズの呼びかけに応じ、「骸旅団」となって政府に反旗を翻し、あるいは匪賊と化して、暴虐を欲しいままにした。

政府はこれら不満分子を力でもってねじ伏せ、結果、当初は義軍として一応のまとまりを見せていた骸旅団を解体に至らしめ、以降、彼らの活動は匪賊の行いとさして変わらぬものとなっていた。

そうした中、

「ドーターでうまいことやっている連中がいるらしい」

との噂が、「骸旅団」という最後の寄る辺も無くした者たちの耳を掻きたてたのは必然のことであった。

すなわち、その”連中”というのが、”ムアンダ一味”である。
”必中のムアンダ”なる通り名を、大戦に従軍した者の中には耳にしたことのある者もいた。

畏？大戦における骸騎士団の戦いぶりは諸史録に詳しいが、ウィーグラフやギスタヴといった骸旅団の中核をなしていた人物をはじめ、このムアンダという男も、しばしば諸戦の記録に登場している。

それを見れば、

「千エータ隔てた騎上の敵將の冠を射落とした」
とか、

「千本の矢を立てても斃れぬといわれたトロール兵の喉笛を射抜き、一撃で仕留めた」

とか、嘘だか真だか分らぬ類のものではあるが、そうした伝説が作られるからには、それなりの使い手であったろうことが推察される。彼の得物は、「クロスリカーブ」と呼ばれる大型の弩いしゆみであった。

余人の手にはおよそ扱えぬであろうこの巨大な弩は、ムアンダという男そのものであるかのように、畏怖と崇敬の対象となっていた。もつとも、ムアンダはどこへいくにもこの「クロスリカーブ」を背に負っていくから、それ自体が彼の体の一部といってもよさそうなものではある。

はたして、この南方人が、どのようなきさつでドーターダウンタウンの下街を牛耳ることとなったのか。

そもそも、ムアンダはギスタヴ・マルゲリフと縁深く、戦地においても、互いに命を預けあう仲であったという。

戦地より帰還したのち、骸旅団旗揚げの際には、ギスタヴより真っ先にその意中を問われたのだが、同時に彼は、北天騎士団傭兵部隊からも、その腕を見込まれて、「是非にも」という誘いを受けていたのである。すなわち、この選択は、戦友であるギスタヴの敵となるか、同志となるか、の選択でもあったともいえる。

結論から言うと、ムアンダはどちらの誘いも受けなかった。

「国のために死ぬのも、義のために死ぬのも、やっぱり俺の柄じゃないね」

そう言って、若い時分に世話になった船乗りのつてを頼り、単身、港町ドーターへと向かった。この時はまだ、船の用心棒職にでもありつこう、というくらいの腹であった。

そもそも、骸騎士団に参加したのも、恩賞目当てであって、国のために死のうなどという気はさらさら無かったムアンダなのである。

また再び傭兵となって、泥沼の戦地に狩りだされても堪らぬし、かといって、友に義理立てするつもりもなかった。彼が自慢のクロスリカーブを引き絞るのは、いつ何時も金のためだけである。

ムアンダが「親父さん」と呼んで慕ったかつての船乗りは、大戦により需要の高まった武器交易で財を成し、街を取り仕切るヴァイス商会の中でも重きを置くほどの豪商となっていた。

彼は船乗り時代よりかわいがっていたムアンダとの再会を大いに喜び、ムアンダを彼の私兵団の長に推挙した。

思わぬ形で自由に扱える駒を手にしたムアンダは、さっそく、形ばかりとなっていた都督府直属の自警団を下町から追い出してしまふ。また、他の商人の有する私兵団も次々と吸収していき、瞬く間に、一味の人数は膨れ上がっていった。

さらには、下町に一味の根城を構え、そこで自治めいたことまで始めたのである。

後見人の名を振りかざし、”地代”と称して、貧しい民から巻き上げた金を、彼は”闘技場”^{サークル}なるものの建設費用に充てた。

”闘技場”^{サークル}とは、つまり、人間の命を賭けた賭場のことである。

頑丈な鉄製の網を周囲に張り巡らしたリングに魔物も人間もいっしょくたにぶち込まれ、血みどろの殺し合いが演じられる。見物人は誰が生き残るかを賭け、眼下に繰り広げられる殺戮ショーに熱狂する。

”闘技場”^{サークル}は、開設から一月もたたぬうちに商人の間で大人気の娯楽となった。近頃では、闘技場目当てに市外からわざわざお忍び

で訪れる貴族の姿すら見られた。

ここで産出された利益は、街を牛耳る豪商たちと、商家と癒着した都督府の役人の懐に流れ込み、ムアンダの悪逆非道は、まったく看過されている形であった。

はたして、ドーターの下町のほぼ中央に位置する闘技場^{サークル}は、今日もその盛況ぶりを場外にまで響かせていた。

時刻は双子^{ジェミニ}の刻を少し過ぎたところで、薄曇りのドーターの下街は昼間なのにもかかわらず、そこらの路地や民家の軒先は、じめじめとして薄暗い。

闘技場の建物自体は、周囲の家屋とは比較にならないほど巨大な木造建築物であった。今しがた、外套に身を包んだ男が一人、その門をくぐろうとしたところを門番が引きとどめた。

「おっと、旦那。何かお忘れじゃありませんかね？」

「……………」

男が黙っているのを門番は訝って、

「入場料！ きっかり5百ギル、元手も払えないならお帰り願うが、それとも闘士として出場するんなら、登録は裏手でやってるぜ？」
男の身なりが浮浪者のごとくみすばらしいのと、腰に長剣を佩いているところを見て、案内を付け加えたのである。行きずりの浪人が食うに困って、人間の最後の元手である命まで捧げにこの闘技場に來ることなど、最近では珍しくもなかった。

男はやはり無言であったが、懐から布袋を一つ取り出すと、門番の胸にそれを押し当ててていた。

「うおっ」

門番が両の掌でそれを受け取ると、袋の中身がジャリと鳴って、その重みからしても、相当な額であろうことが察せられた。

門番は浮浪者のような男の懐から出たとは思えない金袋の中身を確かめながら、

「よし、通んな」

と、二言もなく男に道を空けた。

「ムアンダは中にいるか？」

男が突然そう訊いたので、金を数えるのに夢中だった門番は、びっくりとして顔を男に向けた。

「何者だ……あんた」

「ムアンダはいるのかと訊いている」

フード越し覗いた眼光に射られ、門番は獅子に睨まれた野鼠のように身をすくませた。

「し、仕合を見てらっしゃると思うが……」

「結構」

颯爽と賭場に入っていく男の姿を見ながら、門番はうすら寒いものを背筋に感じていた。と、同時に、妙な感覚にとらわれてもいた。

（さっきの男、どこかで……？）

門番の頭上で、またひとつ獣の雄叫びがあがり、その上にばかりか、い喚声（まごかり）がのっかって、それはまさに今始まった”仕合”の熱狂ぶりを外に伝えていた。

大の大人の身長、ゆうに三倍はあろうかという体軀を捻りあげたかと思うと、”牛鬼”と呼ばれる魔物は、手に持った巨大な鉞（まさかり）を振り落とした。その攻撃を受ける方かというと、こちらは裸に皮の腰巻と鉄製の兜を身に付けただけの、生身の人間なのである。

慌てて盾を構えるも、自分の体重の何倍もある相手から繰り出された渾身の一撃をまともに受けては、どんなに屈強な闘士とてひとたまりもない。金属のぶつかり合う鈍い音がして、闘士の体は、あっけなく吹き飛ばされ、闘技場を囲む金網に叩きつけられた。

その瞬間、ひとときわ高い喚声が発せられ、仕合場を見下ろす観客席は熱を帯びた狂騒に包まれた。

先ほどの闘士を見れば、盾は無残にひしゃげ、それを持つ手も力

なくぶら下がっていることから、腕の骨も粉々になっていることがわかる。それでもなんとか立ちあがろうとしているところへ、牛鬼は追撃の鉞を容赦なくを叩き込む。

——二度、三度、四度。

鉞が振られるたび、金属音とは異なる生々しい音が上がる。牛鬼の足もとで、かろうじて闘士の姿とわかる塊がピクリとも動かなくなっただけから、ようやく仕合終了を告げる鐘が打ち鳴らされた。

再び喚声が巻き起こる。勝者となった牛鬼は、興奮した様子で二対の角を振り回している。

誰の目にも明らかな、一方的な殺戮劇であった。

観客たちは安全な場所にいて、無力な人間が引きちぎられていく様を見、嗜虐的な喜びに酔いしれる。賭けといっても、余興のついでといったものでしかなく、あるいは、この地獄絵図を間近に見るための謝礼的な意味合いも、その中には含まれていた。

こうした絵を、実際の戦場の血生臭さを知らぬ者たちは、つまらぬ日常に程よい刺激を与えてくれるものとして、尊重しているらしかった。

仕合後の余韻に浸る観客席をざっと見渡せば、海洋民風の派手な装束を身に付けた豪商らしい姿がほとんどで、わずかに、瀟洒な衣服に身を包んだ、どこぞの領主の放浪息子といった風情の若い連中の姿が目をつけた。

やはりそうした連中の一人で、いかにも上流市民といった感じの若者が、彼の隣席の妙に物静かな男が気になり、声をかけていた。

「あんた、ここは初めてかい？」

気さくに話しかける若者に答えるそぶりも見せず、男は金網に囲まれた目下の仕合場をじっと見つめている。さっき門番に金袋を突き付けた時と変わらず、薄汚いフードを目深に被り、腰に佩いていた長剣は観客席の椅子に立てかけられている。

若者は、「耳が遠いのだろうか？」とでも言いたげに首を傾げてから、なおも言葉を続ける。

「いやあ、やっぱり異種戦はいいね。人間のほうが勝つことは滅多にないけど」

「……………」

「ていうか、ここ（サークル）では一度もないかな？ たまに強そうなのがいたらそっちに賭けることもあるんだけど、結局駄目だなあ……………」

「……………」

「この前なんか、三人掛かりでベヒモスに挑んでたけど、まったく歯が立たなかったからなあ」

「……………」

若者は横目を使って、ちらちらと男の反応を窺っているらしかったが、依然男はむっとりとしたまま口をきかないので、だんだん不機嫌な色をにじませてきた。大人を相手に通ぶりたいのが、この年頃の青年らしい。

「あんた、随分汚い格好をしているけど、浪人か何かかい？」

「……………」

「あ、それともあれか、仕合に出る前に下調べをしているんだな？ その剣は、見せかけじゃないんだろう？」

「……………」

「そうなら、さっきも見ていた通り、異種戦だけはやめときなよ。配当は人間相手とは比較にならないくらいデカいけど、まあ、まず勝てないだろうからね」

「……………」

「そうそう、今日はこれから”餌場”をやるらしいんだ」

「……餌場？」

そこで男がようやく食いつきをみせたので、若者は得意になって話を続ける。

「知らないのかい？」

「ああ」

「ふふーん、”餌場”とはその名の通り、魔物の餌場のことさ。こ

れも異種戦の一つなんだけど……」

若者は、不気味な光を湛えた眼を男の方に向け、にやりと口元を歪める。

「女が出るんだ」

「……女？」

「そう、若い女。正直、僕はまだ直接見たことはないんだけど、すごいらしいんだ」

「……………」

「友人から聞いた話なんだけどね、丸腰の女に、人食いグールを襲わせるらしいんだ。ほら、分かるだろ？ グールはきちんと調教されていて……その……” やっちまう ” こともあるらしいんだ」

若者はうっとりとして、闘技場に目を移す。

「それを今日やるらしいと聞いてね……故郷から、一晩で飛んできたのさ」

「……………」

男は、フードごしに、若者の横顔をじっと見据えていた。何を考えているのか、どこことなく、憐れみのようなものを含んだ視線ではあった。

「どうだい？ あんたも見てみたいだろう？」

「どうかな」

「何だよ、こんな所にまで来ておいて、堅気ぶるつもりかい？ ムアンダは、本当に最高の男さ」

「……ムアンダを知っているのか？」

「え？ そりゃあここじゃ知らない者はいないだろう。こんな素晴らしいショーを拝めるのも、彼のおかげなんだし」

「今日は、ここへ来ているのか？」

「ああ、いつもいるよ、あそこに」

若者は向かいの観客席の、さらに上の方を指さす。そちらへ目を向ければ、四階分くらいの建物の一番上の階にバルコニー席が設けられており、確かに、遠目からも数人の人物がそこに置かれた席に座

っていることが分かる。

その中でも、際立って図体の大きい、肌の黒い南方人の姿がある。この人物こそが、“必中”の名を巷に轟かせているムアンダその人であろうことは疑いようもない。彼の名と共に名高いクロスリカーブの所在までは、この距離からしかと認めることはできないが、おそらくは、彼のすぐ手元に置かれてるとみて間違いなかった。その気になれば、彼の大弩は、あの高みからこの闘技場のどこへでも狙いを定めることができそうなものである。

「なるほどな……」

男はそう呟いて、しばしムアンダのいます高御座たかみくらを見つめていた。

若者はそんな男の様子を不思議そうに見ながら、

「あんた、彼とは知り合いなの？」
と訊ねた。

「古い仲間だ」

「……へえ、やっぱりあんた、堅気じゃないね」

若者は、男がなんとなくただならぬ雰囲気きふきを漂わせていることに今さら気付いたとみえ、

「じゃあ僕はこれで。もっと近い席に友人がいるのが見えたから、そっちへ行くことにするよ」

慌ただしく、観客席の前の方へ去って行った。

ちようどその時、何やら観客がぞよめきだし、全員の視線が、金網の中へ注がれた。

見れば、砂の敷かれた仕合場の真ん中に、小さい人影が、よろよろと進み出たところであった。

粗末な麻布服に包まれた身体は先ほどの闘士などとは比較にならないほど小さく、か細いものであった。長い栗毛はぼさぼさにかき乱れ、白い肌に汚れが目立つ。

誰の目にも、その人物は、まだ子どもといっていい年齢の少女にしか見えなかった。

「”餌場”だ……」

「餌場」が始まるぞ……」

周囲の観客は歓声をあげることもせず、これから繰り広げられる狂宴の卓上を固唾をのんで見守っている。

（あの娘は……！）

先ほどまでとはうって変って静まりかえった客席に在り、文字通り”餌”として送り出された少女の姿を見る男の目は険しかった。

ムアンダの特別席から、騒々しく鐘の打ち鳴らされる音が聞こえ、その調子に合わせるように、徐々に観客は熱気を取り戻していった。やがて、それは大きな歓声となって会場全体を包み込んだ。

間もなく、二つある仕合場の門のうち、少女が出てきた門とは反対側の門から、彼女の”相手”となるグールが、その姿を現した。

グールは、前の牛鬼よりずっと身体が小さいものの、容貌はより人間に近く、潰れた鼻に尖った耳、額にはこぶのような一角、太くて長い腕には、櫂の棍棒を持っていた。

醜悪な面相に並ぶ黄色い二対の目が獲物を捕え、だらしなく開かれた口から、点々と唾液を滴らせている。

一方の少女は、恐怖に顔をひきつらせ、じりじりと後ずさっている。その様子を見て、狂騒はいよいよ高まる。

——いつの間にか、男の姿は観客席から消えていた。仕合場では、すでにグールが少女を金網まで追いつめていた。

「犯れ！」

「喰う前に犯っちまえ！」

恐ろしい野次が飛び交う。グールは彼らの言葉を理解しているのか、いきなり食らいつくようなことはせず、少女の細腕をひっ掴むと、容赦なくその場に引き倒した。

同時に、悲鳴とも喜声ともつかぬ声があちこちからあがり、場の興奮はいよいよ最高潮に達しようとしていた。金網にへばり付くようにして観戦する客の姿もあって、その中には先ほどの若者の姿もあった。彼の表情もまた、狂喜に歪んでいた。

少女は、このまま好きにされては堪らないと、必死にグールの手

から逃れ出ようとする。グールの面にも、明らかに笑みと分かる表情が形作られていた。逃げようとする少女の足を掴んで力任せに引き寄せると、麻布服が足元からめくりあがり、白い両脚が露わになった。その上に、グールの唾液がぼたぼたと落ちる。

グールは、ついに少女の上に覆い被さった。少女は観念したのか、きつく両の脚を閉じて、目を瞑っていた。

——と、にわかに、仕合場で行われている狂事に対するものとは、全く別な声が上がリだした。観客の内の幾人かは立ち上がって、グールと少女のいる方とは全く違う方向を指さしている。

次の瞬間、”餌場”に夢中になるあまり、会場の、そうした一部の変化に気付かなかった者たちも、状況を理解することとなった。

何かと思えば、グールは恐ろしい悲鳴をあげており、圧迫から解放されたと分かった少女は、すぐさまその身体をグールの陰から逃がしていた。

見れば、棍棒を持っていたグールの腕は肩口から切り落とされ、真新しい切り口から赤黒い血が噴き出している。すかさず振り返ったグールの眼は、何かが素早く動いたのと、きらりと光が一閃したのを捉えたが、その刹那、彼の視界は宙に舞っていた。

仕合場の真ん中に、ぼとり、とグールの首が落ちると、離れ離れたとなった胴体は、地面に引きつけられるようにして、その場に倒れた。

「エアリス！ 逃げろっ！」

一部始終を見ていた少女は、突如乱入してきた剣士に自分の名を呼ばれ、また、フードを脱いだその顔が見知った男のものであることを確認すると、大きく頷いてから仕合場の門へ走った。

闘技場内では、罵声の嵐が吹き荒れていた。宴を台無しにされた腹いせに、酒瓶やらマグやら石ころやら、金網の内へ次々と物が投げ込まれていく。

そんな中、男はというと、観客の発する怒気とは全く別の、あからさまな殺気を周囲から感じ取っていた。

そしてその殺気が、自分に向けられたものだけでないことを、すぐに悟った。

「伏せろっ！」

門に辿り着き、ちらとこちらへ振り返ったエアリスに向かって、男は叫んでいた。

間一髪、頭を下げたエアリスの頭上を、太いボルトが、ひょうと掠めていった。外れたボルトは仕合場の地面に突き刺さり、矢羽を震わせている。

確認するまでもなく、それはムアンダの特別席から放たれたものであった。ムアンダは特別席のバルコニーから身を乗り出し、逃げ出したエアリスめがけてクロスリカーブより一矢を放っていたのである。

ムアンダは指を鳴らし、悔しがるような素振りをみせた。エアリスは自分が狙われたことも分からず、その場に頭を抱えて縮こまっている。

弩はその構造上、次の一矢をつがえるまでに時間がかかる。それとて、弩の達人であるムアンダの手にかかれば、僅かな間でしかない。

男はこの隙にエアリスの方へ走り寄り、彼女の頭を胸に抱き寄せると、その身を庇うようにして門を潜った。

——が、二人の向かわんとする先には、すでに立ち塞がるものがあった。

”餌場”の前の異種戦において、人間の闘士を一方的に虐殺した、かの牛鬼であった。鉞を構え、鼻息荒く二人の方へにじり寄ってくる。

「くそっ……」

彼一人ならまだしも、今はエアリスを庇った状態であり、仕合場に引き返せば、今度はクロスリカーブの的にされてしまう。

しかしその最悪な状況も、闘技場に現れた新たな闖入者のおかげで、すでに一変していた。

男が異変に気付き仕合場の方を見ると、数人の弓使いが、バルコニーのムアンダに向かって矢を浴びせかけていた。さすがのムアンダも、弓の数と速射性を相手どっては、一人では抗しきれず、周囲にいた子どもと共に建物内へ身を隠してしまった。

にわかには始まった場外戦を前にして、観客たちは大混乱に陥り、我先に闘技場外へ避難し始めていた。男はクロスリカーブの脅威の無くなった仕合場へ引き返すと、エアリスを引き連れ、今度は反対側の門へと向かった。

そちらからは、さらに数人の剣士たちが駆け込んできていた。どれも男には見覚えのある顔だった。彼らは先日、エアリスの礼拝堂に突然現れた北天騎士団の若者たちに違いなかった。さらにもう一人、エアリスを窮地から救ったがためにムアンダ一味から恨みを買った、私刑を受けたウルフとかいう名の放浪の騎士の姿もあった。

彼は男の腕に庇われたエアリスの姿を認めると、

「エアリス！」

と叫び、まっさきに駆け寄ってきた。

「怪我はないか？」

ウルフの問いに、エアリスは頷いて、

「ええ、おじさんのおかげで」

「そうか、よかった」

「おじさん、助けてくれてありがとう！」

男はエアリスからの感謝にも眉一つ動かさず、

「……あとは頼んだ」

とだけ言って、ウルフの手にエアリスの身を預けた。

「お前……」

ウルフは一瞬戸惑いの色をみせたが、すぐに頷くと、

「今度こそ、任せておけ」

エアリスの肩をしっかりと持ち、大きく頷いて見せた。男は無言でそれに応え、今度はラムザの方を向いて、

「あの魔物を頼む。私はムアンダに用がある」

と、親指を後ろへ向けた。反対の門から出てきた牛鬼は、角を振り上げて雄たけびをあげている。さらに牛鬼の背後から、ムアンダの子分たちと思しき戦士たちが、仕合場に続々と繰り出してきている。ラムザはひとつ頷き、

「協力感謝します。どうやら先にアジトへ踏み込んだ我々の見込み違いだったようですね。ことが済んだら、また後ほど」

「……ああ」

男は曖昧に答え、ちょうど、仕合場に駆け込んできたデイリータと眼を合わせた。

「……………」

「……………」

先日、礼拝堂で二人が対面した時の感覚が、そのまま再現される形となった。目を見合わせたのもつかの間、互いに黙ってすれ違おうとしたところで、

「あなたは——」

と、デイリータが何か言いかけたのを無視して、男は足早に仕合場の門へ歩き去って行った。

第一章 持たざる者 23. ドーターの乱

ドーターに突如現れた若い騎士の集団が、ムアンダ一味の行いに
ついてあれこれ訊き回ったあげく、ついにその根拠地に踏み込むら
しいという噂は、瞬時に下街全体に広まった。中でも騎士の一隊を
率いるラムザ・ベオルブという若者の名は、特別な響きを伴って人
々の関心を集めていた。

「ベオルブっていやあ……北天騎士団の、あのベオルブ家か？」

そう尋ねるのは、朝から酒の注がれたマグを傾けている飲み屋の客。
そのラムザから直々に聞き込みをうけたという店主は、うむうむと
頷いて、

「たしかに、そう名乗った。ぱっと見は、いかにもよいところのお坊
ちゃんにしか見えなんだが、よくよく見りゃあ、なるほど、スツと
筋の通った凛々しい面構えは、あの天騎士バルバネスさまの御曹司
に違いねえ」

「しかし、大した人数でもないのに、あのムアンダにたてつくつも
りかよ。いくら北天騎士団とはいえ……」

「それがよ」

店主は周囲を気にしながら、一段と声を落とす。

「鍛冶屋のボロヴィンが、結構な人数を募っているらしい」

「まさか……ムアンダ相手に吹っ掛ける気かよ」

「うむ」

「もう幾度、奴に歯向かおうとした奴らが血祭りに上げられたか知
れねえというのに」

「だがよ、あのバルバネスさまの御曹司が大将となりゃ、これまで
とはわけが違う。大義はこちらにある！」

「……………」

「ボロヴィンの嫁さんが、あの闘技場でグールの餌にされたという
のはお前さんも知っておるだろう」

「ああ、うむ」

「あいっただけじゃない。ムアンダの手に掛けて憂き目に遭った人間は数知れねえ。今こそ、悪行の数々の報いを受ける時が来たのさ」

「大義……そうか、大義か」

そう呟いた客は、酔いもすっかり覚めた様子で、真剣な眼差しをマグに注いでいた。ちょうどその時、騒々しい物音をたてて男が一人、店に飛び込んできた。

「たいへんだっ！」

何事かと、店にいた客は一斉に入り口の方に視線を集める。男は興奮にせき込みながら、今しがた見聞きしたことを早口に伝えた。

「ボロヴィンの奴らが、ムアンダのアジトに殴りこんだぞ！ 例の若い騎士たちも一緒だ！」

ざわと、男の興奮が伝染したように、狭い店内はどよめき立つ。もっと詳しい話を聞こうと、様々な声があちこちからあがる。人数はどれほどか、ムアンダは捕まったのか――。

その熱気の中であって、カウンターで店主と会話しながら立ち飲みしていた客は、マグを一息に飲み干すと、何か決然とした面持ちで、飛び込んできた男のほうへ歩み寄っていく。そして、茫然としている周囲をぐるりと睨み渡してから、

「おれは行くぞ！」

酔いに任せたとも思えぬ口調で、こう宣言した。一瞬の間を置いてから、あちこちの席を蹴って、

「おれもっ！」

「おれも行くぞ！」

次々と、客の宣言が続いて、終いにはその場にいた全員が、一個の決起集団となって店を後にしていた。

こうした動きは、この酒場に限らず、下街のあちこちの辻で見られた。皆一様に興奮した面持ちで、手に得物を持った者も少なくない。集団は一気に膨れ上がり、目標のアジトを指して、大通りを行進していく。

大勢の人間が目指していく方向には、ちょうど戦いの狼煙が上がったかのように、黒い煙が立ち上っていた。どうやら、先にアジトに踏み込んだボロヴィンたちが火をつけたものらしい。木造の建物がひしめき合うドーターの下街だけに火災が心配されたが、もはやそんなことに気を留める余地もない暴徒の勢いである。

これまでバラバラに埋もれていた憤懣の芽が、ベオルブの名の下に、一挙に実を結んだ形であった。

——が、当のラムザはというと、彼自身は、自分の家名がドーターの窮民たちにかくも絶大なる影響を与えていることなど、まったく自覚している様子はない。ムアンダの悪行を正すべく、また、捕らわれたエアリスの身を取り戻すべく、彼は純然たる正義を掲げ、巨悪の巢食う根城に赴かんとするのである。

そのラムザの傍らにあって、ディリータは当初の偵察任務からはおよそかけ離れた隊長の決定に難色を示した。

「本気か？　ラムザ」

アジト立ち入りの前日、ディリータはいま一度ラムザの意志を問い糺した。ラムザは礼拝堂の石床に胡坐を搔いて、手前にドーターの地図を広げている。

「本気だよ、ディリータ」

地図から離れ、ディリータに向けられたラムザの蒼眸に惑いの色はない。

「僕らの任務はあくまで偵察だぞ」

「わかっているさ」

「ザルバッグどのには何と説明する気だ」

「騎士として為すべきことをするまでだ」

「だが、僕は軍隊の一部でもある。与えられた役割はきちんと果たさねばならない」

「当然だ。だが、役割を果たしさえすれば、それでいいのか？」

「それは……」

礼拝堂の古い長椅子に背をあずけ、ディリータは深くため息をついた。ラムザは再び地図に目を戻し、思考を再開している。

ディリータはそんな友の姿を視界から外し、目を瞑って握りこぶしを眉間に押し当てていた。

普段は花のように穏やかなくせに、一度こうと決めたら揺るがない岩のような一面をも併せ持つ友の性格を、ディリータはよく心得ていた。

それだけに、友の決定を曲げる気などは端からないし、今までもそうしてきたように、彼の役割は、ラムザにとって最も良い結果を導くために、最善の助力をすることである。

「なあ、ディリータ」

ラムザは地図に目を落としたまま話しかけてくる。ディリータは、なおもぐりぐりと拳で眉間を揉みながら片目を開く。

「どうした？」

「ムアンダはアジトにいると思うか？」

「そうだな……市民の話では、奴は闘技場サークルとかいう賭場で仕合を観戦していることもよくあるらしい」

「アジトか、闘技場かということか……隊を二手に分けて当たってみようか？」

「いや、ただでさえ少ない人数だ。どちらかに的を絞るべきだと思う。奴の取り巻きはほとんど奴から離れることなくどこへでも付き従っていくというから、どちらかにまず当たってみて、外れならもう一方へ当たるといいうやり方でも大丈夫だろう。あと、できれば増援も欲しいところだ」

「増援か……しかし、この下街の自警団は、ほとんどムアンダに買収されているというから、期待はできないね。むしろ敵と捉えるべきだ」

「その通りだな。できれば武力に訴えたくはないが、やはりいざというときの戦力にどうしても欠ける」

二人が考えこんでいるところへ、

「私も協力しよう」

と、意外な声が出て、その方へ目をやると、例の正体不明の剣士が、腕にさらしの布を巻いているところであった。

「エアリスには随分と世話になった……それに、ムアンダには個人的な用向きもある」

「……………」

男の顔に、デイリータは嫌疑の眼差しを向ける。

——この男にも、訊きたいことが山ほどある。”^{アリエス}牡羊”などと一応名乗りはしたが、もしかすると、ウィーグラフ・フォルズその人かも知れない男なのである。

が、安易にその正体に迫るようなことをして、万一敵に廻せば、まず自分たちの手には負えない相手である。手傷いとはいえ、皆殺しにされてもおかしくはない。一方で、それほどの実力を持っているかもしれない剣士が自ら協力を申し出てくれたのだから、ここはひとまず利用しておくに越したことはないという考え方もある。

「牡羊どの、協力には感謝しますが……怪我の具合はよろしいのですか？」

そう言うラムザのほうは、よも牡羊と名乗るこの剣士が、ウィーグラフ・フォルズであるかもしれないなどという疑いは微塵も抱いていないようである。とはいっても、牡羊が、相当な実力者であることは、彼もまたしかと見抜いていた。

「心配には及ばん。エアリスの手当てが効いて、もうだいぶよくなってきた。剣を振うのに何ら差し支えはない」

「それはよかった。でも、無理はしないでください。私たちと共に来てもらって……」

「いや、私は一人で行動させてもらう。闘技場の方へは私が向かう。騎士が大人数で踏み込むようなことがあれば、徒に混乱を招くことになる。もしムアンダを見つけたら、お前たちが合流するまで逃がさぬよう見張っておこう」

「……………」

ラムザとディリータは無言で目と目を見合わせる。それを返答と受け取ったものか、

「では、アジトの方は任せた」

と、勝手に結論づけて、牡羊はそのまま礼拝堂から出ていってしまった。

腑に落ちない表情のディリータに対して、ラムザは案外にさっぱりとした顔で、その場に立ち上がる。

「よし、闘技場は彼に任せて、僕らはアジトに踏み込もう」

「あの剣士、信用できるのか？」

「一人でも味方が欲しい今は信用するしかないだろう？ 君も牡羊どのが相当な使い手であることは分かっているはずだ」

「それは、そうだが……」

まさか、牡羊はウィーグラフかもしれないなどは口に出せないディリータである。

「それに、彼はエアリスに助けられたと言っている。その恩に報いることは、騎士として当然の態度だ」

ラムザのお人よしは今に始まったことではない。もう少し他人を疑うということを知ってもよさそうなものではあるが、そこを咎めてみても詮ないことなので、ディリータは、ひとまず牡羊に対する疑惑は棚に上げておくことにした。

「君の考えはよく分かったよ、ラムザ。皆を呼んで、今後の方針を確認しようじゃないか」

その日の夕刻、ディリータは工術士のニールに偵察任務の報告書を託し、アラグアイに展開中の北天騎士団の遊撃隊を率いるミランダ・フェツケランへの早馬を任せた。スウィージの森で拾ったエルムドア侯爵の愛鳥“白雪”の足ならば、ドーター・アラグアイ間は往復に一日と掛らない。

報告書の内容としては、ムアンダ一味の動向とそれへの対応について、ドーターの惨状を鑑みるに早急なる処置が必要と判断した旨に加え、未確認ながら、骸旅団長ウィーグラフ・フォルズらしき人物と遭遇、今後慎重に監視を続ける旨を記した。

後述の案件については、実のところ隊長のラムザにもまだ伝えていないのであるが、ディリータとしては、北天騎士団本営の指示を仰ぎたいこともあったし、また後々確証が得られれば、ラムザにも牡羊なる剣士の正体について早々に知らせる心づもりではあった。

ディリータとウィーグラフとの、本人にしてみても意外な繋がりについて、すぐにでも親友であるラムザに伝えてもよかったのではあるが、現状貴重な戦力と頼んでいる牡羊に対してこれ以上余計な疑惑を植えつけるのも憚られるし、今は彼の胸の内にのみ秘め置くこととした。

「お、来たな……」

夜も更けてから、ディリータの姿は、礼拝堂近くに流れる小川に掛けられた小さな石橋の上に見出される。

欄干に寄りかかったその影に向かって、橋の両端から二、三の影が近づいていく。月明かりに照らし出された面子を見れば、剣士ラッドと闘術士^{モンク}のポポ、それにアルガスの顔もある。

「言われた通り——」

アルガスが無愛想な表情のまま言う。頬がほんのり紅みがかかり、少しばかり酒臭いのは気のせいではない。

「天騎士バルバネス・ベオルブの子、ラムザ・ベオルブどのが明日旗揚げし、ムアンダ一味を叩き潰す作戦においでになると、そこらじゅうの酒場で言いふらしてきたぜ——ヒック！」

豪快にげっぷをかまして、そのまま体重を欄干に預ける。

「ご苦労だったアルガス。その様子からして十分な働きぶりのようだな」

「そいつは——ヒッウ！——どうも」

ディリータは苦笑いを噛みつつ、他の二人に目を向ける。こちらの

二人は、アルガスほど酔った様子もない。

ポポの話では、街なかのある酒場で飲んでいた鍛冶屋の一集団が、ムアンダに対し相当な恨みを募らせていたという。

「中でもボロヴィンという男は、つい最近、自分の妻を例の闘技場で見世物にされた上、大衆の面前で無惨に殺されたそうです。ほかの鍛冶屋たちも、店であげた利益をムアンダ一味に地代として取り上げられているようで、相当に恨みをもっているようでしたよ」

「——で、ラムザの旗揚げには食いついたか？」

「それはもう、下街じゅうの鍛冶屋に呼び掛けて、明朝にも決起するそうです」

「そいつは脈ありだな。……他には？」

ラッドからも、以前に一度ムアンダへの反抗に加わったことのある人物に話を通せたと聞き、ディリータは満足げに頷いた。

「よし、ここまで煽っておけば十分だろう」

ベオルブ家の名を利用し、ムアンダの暴政に虐げられてきたドーター市民の反抗心を実際の暴動に結びつけようという考え——むろんこのアイディアは、ディリータ一人の頭から出てきたもので、ラムザ本人の指示によるものではない。

家名を勝手に利用された当人はいないと、作戦に先んじて親友がこうした根回しを行っていることなど露知らず、ディリータほか数名は、万一の戦闘に備えてポーションなどを買い揃えてくるのだという話を信じている。

ディリータは、このアイディアがラムザの耳に入れば、まず咎められると分かり切った上で、内密に工作活動を行ったまでである。

結果として、ディリータのこの事前工作は、抗ムアンダ戦線に十分すぎる戦力を加えることとなる。

翌早朝、礼拝堂の前には、昨晚の話に上がっていた鍛冶屋のボロヴィンを中心とした一団に、「ラムザ・ベオルブ旗揚げ」などという大仰な宣伝文句に釣られた男女が随分と加わり、その時点で五十名を超える勢力となっていた。

「これはいい……」

その光景を目にして、一番驚いているのは他ならぬラムザである。

「あんたが、ラムザ・ベオルブさんかい」

集団の先頭に立っている、がたいのいい中年男が、ラムザの前に進み出る。ラムザは、自分より頭一つ分高いところにある男の顔を見上げながら、こわばった笑みを面に張り付けている。

「そうですが……あなた方は、いったい？」

「おれは鍛冶屋のボロヴィン。ここにいるのは同じギルドの連中で、日頃からムアンダの野郎に一矢報いたいと機を窺ってきた者たちだ。昨晚、いつものように仲間と自棄酒^{やけ}飲みをしていたら、あのベオルブ家の御曹司が、ムアンダ相手にひと戦起すと聞いてな。いてもたってもいられなくなったというわけよ」

「そんな話を、いったい誰から聞いたのです」

言いながら、ラムザは傍らに立っているディリータをジロりと睨みつける。ディリータは知らぬ振りを決め込んで、すっとぼけた表情をしている。

「——んで、戦を起すというのは本当なんだろうな？」

すでにやる気満々といった態のボロヴィンと他の大勢を見、ラムザはやれやれと深いため息をつく。

「あなた方がどういうつもりでここへ来たのかは存じませんが、いきなり戦などというのは、早まり過ぎではありませんか。まずはムアンダという男と話をして、行いを改めるよう説得する必要がある——」
ラムザの言葉を聞き終わらぬうちに、ボロヴィンは、馬鹿馬鹿しいとばかりに鼻を鳴らし、指先をラムザの鼻先に突きつける。

「説得するだど？ フン、話して分かる相手なら苦労はしねえさ。

俺たちの受けた仕打ちはなあ、どんな暴力を使っただって、足りねえくらい酷いもんだ！」

血走った眼に涙まで浮かべて抗弁する男の姿は、悲壮というより他ない。ボロヴィンの同志たちの表情にしても、同情だの共感だのという、安直な感情の顕れでは決してない。

「お前さんに分かるか？ 金持ちの道楽に、かみさんを髑り殺しにされた夫の気持ちがつ！」

「……………」

ボロヴィンは滂沱の涙に肩を震わせ、無念の情を食い縛っている。聞き込みから得られた情報には無い、当事者の熱の籠った陳情であった。

「あなた方の訴えはよく分かりました。しかし、恨みに任せた暴力によって失うものはあっても、得られるものは何ありません。そのことをどうか、忘れないでください」

そうは宥めてみたものの、一度火のついた人々の復讐心をこの一言で抑えきれるとは到底思えない。

一行がムアンダのアジトへ向かう道中、ラムザはディリータを追及していた。

「彼らをけしかけたのは君だろうか？」

先頭に行く若い騎士団の後ろに付き従って、ぞろぞろ歩いてゆくボロヴィンら反抗勢力の一団は、出発した時よりもさらに数を増しているようである。

「僕はただ、ベオルブ家の御曹司がムアンダを相手に一戦起こすらしいと吹いて廻っただけさ。彼らは自らの意志で決起したままで、こちらが協力を仰いだわけじゃない」

ディリータは何食わぬ顔で言う。

「それをけしかけたというんだ。僕は戦を起こすなんて一言もいっていないぞ」

「じゃあ聞くが、いったい君は、どうやってムアンダの勢力を潰す気だったんだ？ まさか、本当に説得が通じるとでも？」

「やってみなければ分からないじゃないか。それに、もっと穏便にムアンダの身を捕えて、民に裁きを委ねることもできた」

「そう簡単に捕まる相手とも思えないが」

「君はアカデミーで何を学んできたんだ？ これでは本当に戦になっってしまう！」

「なに、その時はその時さ。多少の痛みを伴うことになっても、彼らに自らの手で自由を勝ち取ってもらおうじゃないか」

そこへ、二人の後ろで会話を聞いていたアルガスが口を挟む。

「ディリータの言うとおりだな。まったく、”ベオルブ”の名を聞いただけで、これほどの人間が動くんだ……大したもんだよ」

最後の一言は、どこことなく皮肉めいた響きをもっていた。アルガスもまた、改めてベオルブの名の持つ影響力の大きさを実感したものらしい。自身の境遇と比較して、多少卑屈を感じてしまうのも無理ないことではある。

「おい！ この集団はいったいなんだっ！」

出し抜けにそう言って、ラムザたちの前に立ち塞がる一団がある。ちょうど用水路に掛る板橋を渡ろうとしたところであった。

ラムザが先日見た地図によれば、この板橋を渡った先にムアンダのアジトがある。どうやら、用水路の向こう側は全て一味の縄張りとなっているらしい。

そのいでたちを見れば、ベイオウーフと一戦を交えた末、エアリスの身を攫っていった者たちに違いない。

「貴様ら……」

「ウルフさん！」

あの時一方的に打ちのめされた借りを返さんと、剣を抜こうとしたベイオウーフをラムザが制す。さすがにベイオウーフは踏みとどまったが、その目は爛々と燃えている。

「我らはムアンダという人物に会いに行くところです。そこをどいてください」

ラムザの要請を、先頭に立った男は鼻であしらって、

「お前みたいな小僧がムアンダと会って何を話そうってんだ？ 物騒な奴らを一勢連れやがって」

「私は……」

「話すことなんてありやしねえ！ 俺たちは戦をしに行くんだ！！」
ラムザの返答を遮ってボロヴィンが大声をあげると、それに同調す

るように、周囲の者たちも口々に喚きだした。こうなると、もはや威嚇しあう獣のの集団に異ならず、人間らしい言語による交渉は望めそうもない。

罵倒の応酬の末、ついに相手が剣を抜いたのを合図に、ボロヴィン始めとするドーターの民たちは、堰を切ったように立ち塞がる集団に打ちかかっていった。

（こうなっては……）

ラムザたちも、やむなく剣を抜く。彼らの目前では、すでに大乱闘が始まっている。

「ラムザ、どうする？」

ディリータが判断を仰ぐ。こうして武力衝突が起ってしまった以上、混乱を鎮めるためには、怒れる民の面前にムアンダを引きずり出さない。

「ここを突破し、アジトへ向かう！」

「了解！」

姿勢を低くして、若い騎士たちは暴動のさなかを突き進んでゆく。

敵は思いのほか多く、用水路の向こうからも騒ぎを聞きつけたムアンダの一味が数名駆け寄ってくる。

「このっ！」

「！」

ラムザが、斧を振りかぶってきた戦士の手首をすかさず剣で薙ぎ払う。バランスを崩した戦士は、頭から用水路へ落ちていったが、ラムザは目もくれずに次々と迫りくる剣戟をかわしていく。

合間に、目にもとまらぬ速さで彼の黄金の髪をかすめるものがある。

「矢に気をつけろっ！」

周囲の家屋の屋根や窓から、弓兵が弩で狙っているのである。目に見える敵には弓使いたちが対応するも、走りながらではなかなか当たらない。

物陰に隠れてしばしやり過ごしながら、ラムザは遠距離攻撃可能

な弓使いや黒魔道士をこの場に留まらせ、弩を引きつけるよう命じた。そして頃合いを見計らい素早く物陰から飛び出すと、白兵部隊はラムザを先頭に、木造家屋を何層にも積み上げたような形をした建物を指して走ってゆく。

アジトの建物は、元は貿易商の共同倉庫だったものをムアンダが引き受け、好き勝手に増改築したものである。地上に限らずあちこちに開いた入口の一つから用心深くその内部に踏み込むと、そこは木の丸テーブルと椅子代わりの樽が置かれた食堂のような部屋であった。

「——っ！」

一瞬、机の陰で人影が動いたのをラムザは見逃さなかった。ラムザが反応するよりも早く、空気を割るような音とともに視界を奪う閃光が放たれたが、雷撃はわずかに外れ、入口の横の壁を少し焦がしただけであった。次の瞬間には、ディリータが机を飛び越えて人影に跳びかかっており、やや揉み合ったあと、彼は相手に馬乗りになってその襟首を押さえつけていた。

「こ、殺さないでくれ……」

ディリータに組み伏された魔術師らしき風体の男は、情けない呻き声をあげて命乞いした。

「殺しはしない。質問に答えろ」

ディリータは、あくまで事務的な調子で詰問する。

「ムアンダはどこにいる」

「お、お頭は、今はいねえ」

「いない？ アジトにはいないということか」

「そうだ。今朝、さ、闘技場サークルに行かれたのよ」

「仲間も一緒か」

「ああ、取り巻き連中はほとんどくっ付いていったよ。いつものことさ」

「間違い無いな？」

男は何度も頷いてみせる。ディリータは、掴んでいた襟首を掴みあ

げると、男をその場に無理矢理起たせ、強引に壁に押し付けた。すかさず工術士のリリアンが駆け寄ってきて、男の手足を頑丈な縄できつく縛りあげてしまった。

男が身動きとれなくなったのを確認してから、デイリータはラムザの方を振り返って、

「……ということだ」

と、眉を吊り上げてみせた。ラムザの指示を待つまでもなく、次の目標は闘技場ということになる。

ドーターの下街には、すでにベオルブの御曹司がムアンダのアジトに踏み込んだという噂が広まっているにちががなく、暴動をこれ以上広げないためにも、一刻も早くムアンダの身柄を確保する必要があった。現にアジトの外では、先ほど始まった乱闘にさらに人数が加わり、手がつけられないほどの激しさとなっていた。

しかしラムザたちには、今一つ為さねばならぬことがあった。それは他でもない、ムアンダ一味の理不尽な要求に抗い、ベイオウーフの奮闘むなしく奪い去られた、かの花売りの少女エアリスの身の奪還である。

ラムザがベイオウーフに目配せすると、彼はひとつ頷いてから、手足を縛られ床にうずくまっている男に近寄る。

「おい」

「……？」

「エアリスが……エアリスという少女が先日ここに連れ込まれはすだ」

「エアリス……？ はて、ここに連れ込まれる女は多いからなあ」

「減らず口をたたくな。栗毛の、十五、六かそこの目を見張るような美しい娘だ」

「ああ、あの花売りの娘か」

男は、何か思い出したように顔を上げ、不敵に唇をゆがめる。

「お頭は一目見て気に入ってたみたいだよ……いやあ、俺もおこぼれにあずかりたかったもんだが」

「貴様……」

「へへ、えらい強情な娘だな。――素直に股開いてりゃあんな目に遭わずにすむものを」

「……！」

人間性を疑うような発言に周囲が息を飲む間に、男の身体は二、三エータばかり吹っ飛んでいた。

「ぐあっ！」

壁に叩きつけられ、男は思いきり蹴りあげられた痛みにもせかえっている。「ウルフさん、落ち着いてください！」というラムザの声も、おそらく今のベイオウーフの耳には届いていない。

「エアリスは……エアリスはどこにいるっ！」

「闘技場さあ。へへっ、今ごろグールの餌にされてらあ」

「なに……！」

「お頭は嫌がる女を無理矢理犯すのはお好きでねえ……あの娘はお頭のご不興を買ったのさ」

「……下種どもめ」

エアリスのことにに関して、誰よりも重く責任を感じているベイオウーフである。彼は身を翻すと、真っ先にアジトを飛び出してしまった。

「ウルフさん！」

ラムザたちも、急いでその後に続いてゆく。

どの道、目標は闘技場にある。アジトからはさほど離れていないが、そこへ向かう道々にも、自警団（という名のムアンダの私兵）とドーター市民との小競り合いがそこで演じられていた。石ころやら甕やら鍋やら、さまざまな物が飛び交う下を潜り抜け、しばしば乱闘現場を回避するための迂回を余儀なくされながら、ラムザたちは何とか闘技場に辿りついた。

「牡羊どのが、この中にいるはずだが……」

闘技場の前にも、すでにいくつかの市民の集団がたむろしており、攻め時を窺っているようであった。この状態では、ムアンダとてた

やすく逃げられそうもない。たとうまく逃れ得たとしても、彼のアジトが市民たちに制圧されるのも時間の問題であろう。その証拠に、アジトの方角から黒煙が上がり始めている。

「いくぞっ！」

ベイオウーフの合図とともに、若い騎士たちは闘技場への突入を開始した。

第一章 持たざる者 24. 取引

つい先ほどまで、獣の狂宴に色めきたっていた闘技場の様相は一変していた。

”餌場”を演じるはずだった食人鬼グールはすでに斃され、仕合場では、今や人獣混然となった戦闘が繰り広げられている。

観客たちは、自分たちの席にも流れ矢が飛んでくるのにたまらず、そのほとんどが場外に逃げ出していたが、中には、これもまた一興と、ふてぶてしくも観戦を続ける者もいた。

謎の剣士と、続いて踏み込んできた騎士の一隊によってショーを台無しにされたあげく、矢まで浴びせかけられた狂宴の主催者はいくと、彼は、彼の子分ともども特別観戦席の奥に緊急退避を余儀なくされていた。

狂宴の主催者——ムアンダは、脇に愛用のクロスリカーブを抱え、渋い顔をして座っていた。

「なんてこった……」

そう独りごつ彼の表情は、楽しみを邪魔されたことに対する苛立ちのほか、少なからぬ驚きもはらんでいた。

「おれの目に間違いがなければ、あの剣士は……」

「おい、ムアンダ」

彼の取り巻きの一人が、いつまでたっても逃げる素振りも見せない首領を訝っている。

「見たところ、奴らは騎士だぞ。ひとまずアジトに引っ返そうぜ」

「……もうお遊びもしまいか」

「え、何だって？」

「逃げたいなら好きにしろ。おれはここに残る」

「……？」

首領の意外な言葉に、取り巻きどもは訳もわからず目を見合わせる。それから口々に、

「なに弱気を吐いてるんだ！ あんたらしくもねえ」

と、一人が言い、

「そうだっ！ あのくらいの人数、なんてことはない、思い知らせてくれようぜ！」

と、また一人が言う。

ムアンダは、そうした取り巻きどもの熱弁にも意を介さず、

「だから、好きにしろと言ってんだろ。おれも好きなようにやらせてもらう。いつもどおりにな」

「……………」

常は怖いもの知らずで通っているムアンダが、こうして何物かに対して気後れするような態度を見せていることに、取り巻きたちは言い知れぬ不安を覚えたようである。彼らは、それ以上ムアンダの去就にこだわることなく、めいめい観戦席から降りていった。

結局、ムアンダの取り巻きどもは、闘技場を出たところで、場外にたむろしていた市民の集団に取り囲まれ、袋叩きにされることとなったが、独り特別観戦席に残ったムアンダは、そんな身内の不幸を知るよしもない。

やがて、みしり、みしり、と梯子を登ってくる音がして、ヌツと姿を見せた人影を目端に捉えたムアンダは、おもむろにクロスリカーブを構え、その人影に矢先を向けた。

「――歓迎されていないようだな」

人影が言ったのに対し、ムアンダは口端をわずかに持ち上げて、

「乱入したまでは、よかったんだがな。ああいうのは、いつでも歓迎だ。だが、せっかくの”餌”を持ち逃げされちゃあ困るのよ……こっちも商売でね」

「貴様の汚い商売など知ったことか。私は騎士としての務めを果たしたまでだ」

「あんたの”騎士さまごっこ”に付き合ってやれるほど、おれもお人好しじゃあないぜ」

「……………」

「しかしまあ、本物の騎士さまのお友達ができたようで何よりじゃねえか……盗賊の親玉がよ」

「貴様は相変わらずのようだな、ムアンダ」

「おれは、今も昔も自分の好きなように生きているだけさ。そっちはずいぶんと無様になっちゃったようだな——ウィーグラフ」

人影の眼窩で、相眸がギリリと光る。並の人間ならば、竦み上がってしまいそうな気迫である。——が、流石、かつては骸騎士団の義勇兵として五十年戦争の死線を潜り抜けてきただけのことはあり、獅子を前にしても、ムアンダは臆することを知らない。

それでも、彼のクロスリカーブはウィーグラフの心臓にしっかりと狙いを定めており、そこからは一寸の油断も隙も感じられない。

「さっきは外したが、今度はこの距離だ——あんたの首を北天騎士団に差し出せば……さて、いくらになるかな」

「悪い冗談と受け取っておくぞ」

「どうかな？ たしかに、あんたはかつての戦友でもあるし、義理も無いではない。だが、おれは誰よりも手前のために生きているもんでね……手前が良い思いをするためなら、友の首を売るくらい、なんてことはないぜ」

「貴様がそうしたいのならば、そうすれば良い」

「なんだと……？」

「だが私の首をとったところで、貴様はここから逃れることはできんぞ」

「どういうことだ」

「ドーターの市民が暴動を起こしている。彼らの目標は——ムアンダ、貴様だ」

「市民が……」

「そうだ。しかも、彼らの旗印となっているのは、あのベオルブ家の御曹司だ。この上ない大義を得て、反乱軍の士気も尋常ではない。貴様の命運もここで尽きたというわけだ」

「……………」

ムアンダの眉間が、いつそう険しくなる。むしろ、弩を向けられているウィーグラフの方が、平然と構えているようにすら見える。

「私はなにも、衆前にその身を晒して懺悔しろと言いに来たのではない。昔のよしみと頼み、貴様に協力を願い出に来たのだ」

「協力？　言っておくが、あんたの道楽に付き合うつもりはないぞ」

「結構。私が求めているのは情報だ」

「情報？」

ウィーグラフは、大弩の存在など気にもとめず、堂々とムアンダの方へ歩み寄る。ムアンダは警戒して手に持つクロスリカーブをぐいと持ち上げたが、ウィーグラフはその矢先の真ん前で立ち止まり、ムアンダの汗ばんだ顔を見据える。

「ギユスタヴ一派に支援を行っていること、間違いないか」

「……………」

その問いに、ムアンダは答えない。そのまましばらくウィーグラフの眸を見つめていたが、

「フッ……フッフ」

何がおかしいのか、くつくつと笑い出したかと思うと、

「なるほどな、あんたがわざわざこんなころへ姿を現したのは、そういうわけか」

どういう料簡か、今までウィーグラフに突き付けていたクロスリカーブをあっさり下ろしてしまう。ムアンダの心変りに、ウィーグラフも怪訝な眉をする。

「私の首を取るのではなかったのか」

「もう、どうでもいいわ」

「……………」

「あんたが、どういうつもりでここへ来たのか、確かめたまでだ」

「貴様を殺すつもりで来た、とでも？」

「まあな。さんざん、ここの貧乏人から巻き上げてきたからな……ウィーグラフ・フォルズともあろうお方が、見逃してくれるとは思えんさ」

「貴様を誅するのは市民の手だ。私の手ではない」

「そうさな……少し遊びが過ぎたようだ」

ムアンダは、つがえていたボルトも外して、それを、トン、と床板に突き立てる。

「いかにも、おれはかつての戦友ギユスタヴにいくばくかの支援を行っていた——もっとも、おっぴらに骸旅団への支持を表明したことはないが。つまらんことで騎士団に目をつけられてもかなわんからな——いたって内密に、物資やらなにやらを遣っていたのは事実だ」

「ギユスタヴから頼まれてのことか？ それとも何か見返りが？」

「いや、おれにしては珍しく、純粹に義理でやっていたことだ」

「……ほう」

「戦争の時から、おれは奴に一目置いてきた。骸旅団からの誘いを一度は断ったが、それはあんたの掲げる正義やら何やらが鼻についたからさ」

ムアンダの齒に衣着せぬ言い方に、ウィーグラフは眉の端をピクリと反応させる。が、彼の気分を害していることなど気にもとめず、ムアンダは言葉を続ける。

「ギユスタヴは純粹に戦を楽しんでいる。思想だの何だのは一旦置いて、自分のやり方がどこまで通用するのかを確かめようとしていた。おれは奴のそういうところを気に入っていた——だから、あんたらが北天騎士団に大負けしたときも、ギユスタヴの消息を尋ねて支援もしたし、奴の下にいた輩をうちで預かりもした」

ウィーグラフ本人を前にして、ギユスタヴを一方的に擁護するような口振りである。

よりにもよってムアンダのような無頼漢が、ギユスタヴに相当容れこんでいるという事実を知り、ウィーグラフは内心で複雑な感情を蠢かせているようであった。そうした彼の心の機敏を目ざとく見抜いたムアンダは、何か得心したようにほくそ笑んでいる。

「どうやら、獅子と狼が仲違いしたというのは本当らしいな」

ウィーグラフは表情を固くして答えない。その反応だけで、十分な答えとはなっているが。

「……ギユスタヴは何処に潜伏している？」

「奴に会って、どうするつもりだ？」

「貴様には関係のないことだ」

「そうかい。ま、それもそうだな。おれは所詮、部外者にすぎん」
言いながら、ムアンダは一度下ろした矢無しのクロスリカーブを構えなおし、こんどは彼の目の前にある木の支柱を的に見立てて狙いをつけている。

「いちばん最後に物資を送り届けた先は——アザラーンの異人村の北、ゼクラス砂漠のど真ん中にある”砂ネズミの穴ぐら”だ」

「砂ネズミ……？」

「いくらあんだでも知らんだろうなあ。脚の強いチョコボと、地元民の案内は必須だぜ」

——砂ネズミの穴ぐら。

そこは、ウィーグラフにとって、全く心当たりのない場所、というわけでもなかった。

いつしか、彼は骸旅団の中心拠点をどこに置くかということについて、ギユスタヴと議論したことがあった。ギユスタヴは、浪人時代の諸国遍歴の経験から、軍事拠点としての運用に適した場所を数多く知っていた。中でも砂ネズミの穴ぐらは、北天騎士団の主要拠点からも離れており、砂漠のど真ん中という立地の特性も手伝って、隠れ家としても、また天然の要害としても、申し分ない機能を備えていた。反面、補給に難があるため、あまり多くの兵をここに留め置くことはできないとして、候補から外されたものではあるが。

「その物資を送ったというのは、いつの話だ」

「ほんの五日前さ。まだ動いちゃいないと思うがね」

「案内というの？」

「アザラーンに一軒だけある酒場にロウっちゅう傭兵がいる。おれの名を出せば間違いない」

「……………」

「なんだよ、嘘じゃないぜ？」

「ずいぶんと素直なものだな」

「あんたが協力してくれていうから、素直に協力してやってるのに、その言い種はないだろ」

「まあいい。……それから、いまひとつ」

「……？」

まだ何かあるのか——とでも言いたげに、ムアンダは眉をひそめる。ギユスタヴに関すること以外に、ウィーグラフにとって有益な情報があるとは思えない。

「貴様、ヴァイス商会のもとで働いていたことがあるな」

「ああ、おれが昔世話になった人の下でいろいろやっていたことはあるが」

「ヴァイス商会とウォージリスのバート商会の間で、”石”なるものを巡り、不和が生じていると耳にした。このことについて何か心当たりは？」

「”石”？ はて……バート商会なら、たしかに少し前、胡散臭い連中を大勢雇って何やら盛んに動かしていたみたいだが、直接ヴァイス商会とぶつかったという話は聞いてないな」

「では、表面的な衝突はまだ起こっていないのだな？」

「あ、そういや半年ほど前、ヴァイス商会からの依頼で、バート商会と取引しているゴーグのブナンザとかいう機工士の家に探りを入れたことはあったな」

「ゴーグのブナンザ家……？」

「そうだ。その時はバート方と特に怪しい取引は無かったが、あの仕事で、あんたの言う”石”とかいうものに関係していたのかどうかは分かん」

「ふむ……」

「で、何なんだ、その”石”ってのは。お宝か何かか？」

「個人的な興味だ。気にするな」

「そうかい、ま、おれもあまり面倒なことには関わりたくないからな」

厄介事に対する引き際をわきまえているムアンダは、それ以上下手な追及はしない。

「……おれからも、一つ聞いていいか」

と、こんどはムアンダの方から質問する。

「なんだ」

「どうしてまた、あんな小娘に情をかけたんだ？　こちらの女ども

は、どの道ろくな生き方はできねえってのに」

「……………」

この時、ウィーグラフが脳裏に描いたものは何であったか。

豊かな栗毛に白く麗しい頬の横顔。それは、今は互に行方未知らぬ妹、ミルウーダの幼き頃を思わせるものも、あるいはあったかもしれない。

「あの娘には随分と世話になった。それに、あのような鬼畜外道の所業を捨て置くわけにはいかん」

「ははは、所詮あんたも人の子か」

「当然だ。そして人の道を外れた貴様は、その報いを受けるというわけだ」

「どうやら逃れられそうもないしな。……ま、地べたに這いつくばってでも命乞いしてみるさ」

そう言うムアンダの顔には、これから命乞いをする人間とはとても思えぬ不敵な笑みが浮かんでいた。

ウィーグラフと若い騎士たちの乱入で始まった戦闘は、早くも収束に向かいつつあった。

ムアンダの部下たちは一人残らず倒され、斬られたのか、あるいは伸ばされただけなのか、仕合場のあちこちに転がっていた。残る牛鬼だけが、数人の騎士に囲まれながらも、手に持つ鉞を振り回して

いるが、こちらにも相当に弱ってきているらしく、いまひとつ迫力に欠いていた。

そしてついに、渾身の力で振り下ろされた鉞の一撃をかいくぐり、ベイオウーフ・カドモスが素早く突き出した魔法剣によって、牛鬼は耳を聳する断末魔とともに、どうとその巨体を仰向けに倒した。

「まったく、手こずらせやがって」

ベイオウーフは牛鬼の喉首から剣を引き抜き、赤黒い血を払ってから鞆に収める。

「あとは親玉だけか……」

そう言って、櫓の上に置かれた特別観戦席の方を見やった。そちらへは、牛鬼の相手をベイオウーフたちに任せ、さきほど、ラムザ、ディリータ、アルガスの三人が向かったところである。

ベイオウーフがもつとも気に懸けていた花売りの少女エアリスはというと、幸いにも怪我といった怪我はなく、ただ、恐ろしい目に遭ったことでかなり気が参ってしまったらしく、リリアンとローラの手を守られながら、人気の無くなった観戦席に避難し、そこで介抱を受けていた。

——一方、ラムザたちは櫓の真下に来ており、特別観戦席の床下を仰いでいた。

「牡羊どのはムアンダの身を確保できたのだろうか……？」

ラムザが言うと、はなから牡羊のことを疑っているディリータは、

「急ごう」

と一言、さっそく梯子を登っていく。それに続いてラムザが登り、最後にアルガスが登りきる。

屋根付きの特別観戦席の内部は少し薄暗いが、仕合場の方へ開いた窓のそばに、二人の男の姿がみとめられた。一人はもちろん牡羊で、彼の足もとに胡坐を組んで座っている南方系の大男が、ムアンダに違いない。

「遅かったな」

牡羊がラムザの方へ歩み寄り、手に持ったムアンダのクロスリカー

ブを彼の手に預ける。

「ご苦労でした」

それを受け取ったラムザが労いの言葉をかけると、彼は堅い面の口元を少し緩めた。

「この通り、ムアンダは観念している。あとの処置は君たちに任せよう」

ムアンダは、手足こそ縛められてはいないものの、ふてくされたような横面をこちらへ向けている。それでも、逃げ出すつもりはないらしい。

「ムアンダの身柄は、我ら北天騎士団が責任をもって拘束します。私の立場では感謝の言葉をさしあげることしかできませんが……後日、本件に関しての恩賞を求められるのであれば、必ず証言しましょう」

ラムザの慇懃な言葉を、牡羊は自嘲気味に笑って受け流し、

「そんなつもりはない。これはあくまで個人的な用件だ」

そう言って、ちらとムアンダの方へ目をやる。この場でムアンダが、牡羊の正体をばらしてしまうということも考えられたが、今のところそのつもりはないとみえる。いちおう釘を刺しておくこともできたが、牡羊があえてそれをしなかったのは、彼がムアンダの腹づもりをよく理解していたからであろう。

「私はこれからドーターを去るつもりだ。——エアリスにくれぐれも、牡羊が感謝していたと伝えてくれ」

「わかりました」

「またどこかで見えることもあるかもしれん。さらばだ、ベオルブの子よ」

そう言うと、牡羊は観客席に続く梯子を降りていった。

「……………」

三人の中で一人、ディリータだけは、牡羊の去っていった梯子をじっと見つめていた。

「ディリータ、どうかしたか？」

ラムザが聞くと、ディリータは友の問いには答えずに、黙然と座しているムアンダの方へ歩み寄っていった。

「あの剣士と、何を話した？」

ディリータの問いに、ムアンダは両の眉を吊り上げる。

「何を、とは？」

「お前と個人的な話があると、彼は言っていた」

「ん、ああ——それなら」

ムアンダは、どこか含みのある笑みを見せて、

「奴はおれの義兄弟でな。そんで、ドーターでおれが好き勝手やっているのを聞きつけて、今すぐこんな悪行は止めると、むかし兄弟の契りを結んだ者として、おれを諫めにきたわけだ」

「……………」

「さすがのおれも兄弟の忠告を聞いては心を入れ換えずにはおれんでな、こうして大人しくお縄を頂戴しているわけだ」

——もってもらしい話ではある。

たしかに、あれほどの悪逆非道をほしいままにしてきた男にしては、ずいぶんと聞き分けよく捕まってしまった感はある。それも、あの牡羊という剣士が諭したからだというのか。もし牡羊の正体がウィーグラフなのだとしたら、ムアンダとウィーグラフとは、相当深い繋がりがあるということか。その場合、ムアンダがウィーグラフの身をかばうということも当然考えられる。

そもそも、ディリータが牡羊と名乗る剣士をウィーグラフではないかと疑ったのも、幼少時の僅かな——それでいて鮮明な——記憶を抛り所に行っているにすぎない。

しかし、牡羊の面影が、実父の死を告げた男のものと重なったという確かな感触は、今でもディリータの内面を支配している。

「ムアンダ、あなたはこれから、民の面前で裁きを受けることになる。よろしいですね？」

ラムザが前に進み出て、ムアンダに宣告する。ムアンダは、ラムザの碧眼をじっと見据えながら、

「裁きは甘んじて受けるつもりだ。——だが、頭に血がのぼった市民の前に引きずり出されたら最後、このおれを罫り殺しにしなければ、連中は気が済まんだろうなあ。……それは果たして、公正な裁きといえるのかね？」

ムアンダの言い分に、アルガスがつつかかる。

「当然の報いだろう！　ここまでしておきながら、今さら命が惜しいとでもいうのか？」

「惜しいね。連中に非道いことをしたという自覚はあるが、犬畜生のように殺されるのはごめんだ」

ムアンダのあまりにふてぶてしい物言いに、アルガスは言葉を失ってラムザの横顔を仰ぐ。ラムザもアルガスと考えは同じようで、

「お前の罪は、ドーターの民の手で裁くのが道理だ。その上で命を奪われたとしても、文句はいえない」

ラムザの言に、アルガスも大きく頷く。

ムアンダは、今度はディリータの方へ向いて、

「なあ、兄ちゃん。取引しないか」

突然、こう持ちかけるのである。

「取引？」

ディリータは、怪訝に眉をひそめる。

「そう、取引だ。おれが情報を提供する代わりに、おれの身の安全を保証してほしい」

何を馬鹿な、とアルガスが言いだそうとするのを制して、ディリータが次を促す。

「情報とは？」

思惑通り、ディリータが食いつきをみせたので、ムアンダは、したり顔に笑みを浮べる。

「骸旅団の親玉ウィーグラフと、その右腕、ギュスタヴについての情報だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6049h/>

The Zodiac Brave Story-FINAL FANTASY TACTICS-

2011年11月9日00時19分発行